59年6月20日第三種郵便物認可・2023年12月1日発行・毎月1回1日発行・第55巻第18号

ミュージック・マガジン

MUSIC MAGAZINE

12
2023
DECEMBER

特集 日本のヒップホップはここまで来た！2023

特集 なぜ今カントリーなのか

Awich

ボブ・ディラン、カーネーション40周年、スロウコア30選

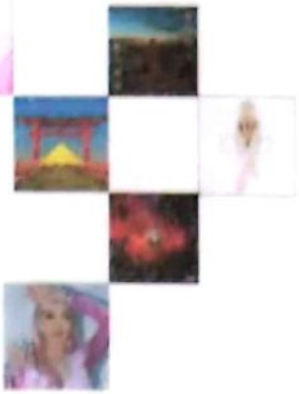
MUSIC MAGAZINE 12 DECEMBER

編集長＝矢川俊介
編集統括＝久保太郎
編集＝伊賀丈晃、渡辺裕也

表紙＝Awich
イラストレイション＝雪下まゆ

28 特集
日本のヒップホップはここまで来た！2023

30 Awichインタヴュー ——
“Queendom”を築いた先にあった、理想の世界を目指す道程　二木信



38 [鼎談]
いろんな価値観がこれまでになくひしめき合っている
つやちゃん×二木信×渡辺志保

44 **近年の重要作品ディスク・ガイド**
韻踏み夫、荏開津広、qxn ryo、高久大輝、高島鈴、つやちゃん、二宮慶介、二木信、MINORI、吉田雅史、伊賀丈晃

76 特集
なぜ今カントリーなのか

76 **新世代が台頭し、少しずつ変化が起きているシーン**
早坂英貴

80 **カントリーの現在が分かる31枚**
選・文＝早坂英貴　文＝赤尾美香、五十嵐正、池上尚志、岡村詩野、柴崎祐二、長谷川町蔵、山口智男、渡辺亨

[楽器略号]
ac＝アコースティック／acc＝アコーディオン／as＝アルト・サックス／b＝ベース／bs＝バリトン・サックス／cl＝クラリネット／ds＝ドラムス
el＝エレクトリック／flh＝フリューゲルホルン／fl＝フルート／g＝ギター／hca＝ハーモニカ／kbd＝キーボード／org＝オルガン／p＝ピアノ
per＝各種打楽器／s＝各種サックス／sg＝スティール・ギター／ss＝ソプラノ・サックス／syn＝シンセサイザー／tb＝トロンボーン
tp＝トランペット／ts＝テナー・サックス／vib＝ヴィブラフォン／vln＝ヴァイオリン／vo＝ヴォーカル

本誌で使っている記号について
*アルバムを示すときは、日本盤が『』、海外盤は“”となります。たとえば『BBCライヴ』とあればそれは日本盤、“BBC Live”であったら海外盤です。
*シングル、曲名の表記は日本盤は「」ですが、インタヴュー記事などで発言のなかに出てくる場合は＜＞となります。海外盤の場合は‘’です。

*記事中に記載されている価格は、特記されている場合を除き税抜き価格です。

CamScannerでスキャン

FRONT LINE

8 民謡クルセイダーズ 松永良平
10 ティルザ 小林祥晴
12 スーパーシャイ 坂本哲哉
14 ドリー・パートン 能地祐子
16 GLIM SPANKY 今井智子
18 QUBIT 小山守
20 細井徳太郎 細田成嗣
22 Rei 宗像明将
24 SHO HENDRIX 川口真紀
26 brainchild's 小松香里

56 ボブ・ディラン —— 1978年の来日公演が再現された『コンプリート武道館』 天辰保文
60 カーネーション —— 結成40周年記念となる"攻め"の新作 土佐有明
64 EMIレコードのアナログ再発 —— 名ディレクター二人が語る 高岡洋詞
70 パンダ・ベア & ソニック・ブーム
—— 共演作をエイドリアン・シャーウッドがダブワイズ 村尾泰郎
106 古謝美佐子 —— 沖縄と日本と世界への思いを歌う15年ぶり新作 松村洋
114 ニュー・スタンダード2020s —— 第47回 スロウコア
選・文＝天井潤之介 文＝岡村詩野、柴崎祐二、清水祐也、行川和彦、村尾泰郎

68 ロイ・ハーグローヴ 原雅明
74 ジョン・バティステ 林剛
86 ヌバイア・ガルシア 原雅明
88 サマラ・ジョイ 落合真理
90 ザ・ナショナル 木津毅
92 トーマス・バートレット 清水祐也
94 キンクス 大鷹俊一
96 アレステッド・ディベロップメント 印南敦史
98 ディラン・チェンバース 佐藤英輔
100 ジョー・マカリンデン 石川真男
102 ナチョ・カサド 五十嵐正
104 カンツォニエーレ・グレカニコ・サレンティーノ 松山晋也
110 あっけらかんず 峯大貴

112 町田康「忘れじの唄」
124 Captured Live
128 Event
130 安田謙一のこれがヒットか!?
130 野沢あぐむの痛快! 艶歌まる齧り
132 近田春夫の帯に短し襷に長し
133 寺尾紗穂の戦前音楽探訪
134 木津毅のLGBTQ+通信
198 海外／国内ニュース
202 萩原健太のコンパクト・ディスカヴァリー
216 Points Of View
218 ランダム・アクセス
224 Feedback／後記

145 アルバム・ピックアップ
Awich / 古謝美佐子
Knower / Teenage Fanclub
Quantic / Ana Frango Eletrico
カーネーション / 曽我部恵一 ほか

204 輸入盤紹介
Joseph Shabason / The Feelies
Birthh / Blaque Dynamite
Joy Denalane / Red Hot Org
Yemen Blues / Pangaea ほか

178 クロス・レヴュー
182 アルバム・レヴュー
196 ヴィデオ・レヴュー

アート・ディレクション＝宮越里子 プリプレス＝柳井健仁

CamScannerでスキャン

スーパーシャイ

トム・ミッシュの新プロジェクトが本格始動
ハウス・ミュージックの可能性を探求したデビュー作

坂本哲哉

トム・ミッシュは時制を自由連想のように往還するミュージシャンだ。それは、クルーナー・ヴォイスを武器に、J・ディラのような調性を無視する浮遊感のあるビートとジョン・メイヤーを彷彿させるブルージーなギターを接続させながら、アシッド・ジャズ、AOR、ディスコ、R&B、ボサノヴァを鮮やかに横断してみせたデビュー作『ジオグラフィー』（18年）や、ジェイムス・ブレイク、ニルヴァーナ、ソランジュなどのカヴァーやブラジリアン・ポップスの巨匠マルコス・ヴァーリとのコラボ・セッションも収録した『クアランティン・セッションズ』（21年）からも感じることができるだろう。そういった、ある意味では攪乱的ともいえる音楽性の中で、かなり控えめながらも存在感を放っていたのがハウスである。例えば、J・ディラ直系のヨレるビートが渦巻く『ビート・テープ2』（15年）で効果的なアクセントになっていたのは「Beautiful Escape」というハウス・トラックだったし、『ジオグラフィー』のメロウ感を支えていた1曲である「Tick Tock」もまたハウスであった。そして彼が、そんなハウス・ミュージックを中心にした新たなプロジェクトを昨年4月に始動させた。それがスーパーシャイだ。

ミッシュがこのスーパーシャイでテーマに掲げたのが、制作プロセスをできるだけ楽しく、ストレスのないものにするということだ。さらに彼はギターを使わないというルールを課した。自身のアイデンティティの一つであり、彼の音楽の柔軟性を担保していたといっても過言ではないギターを使わないという制限は、彼にとって間違いなく挑戦的であるといえるが、彼はそういった枠組みの中でハウス・ミュージックの新たな可能性を探求していく。そうして生まれたのが、このデビュー作『ハッピー・ミュージック』である。

今作はデビューからこれまでに発表してきたシングル群を含めた10曲で構成されているが、彼が「このミックステープには、僕が影響を受けた様々なクラブ・ミュージックの要素が詰め込まれている」と語るように、今作からは多彩な意匠を纏ったハウスが響いてくる。フレンチ・タッチを想起させるフィルターかけまくりのタイトル曲を筆頭に、デトロイト・ハウスの重鎮であるムーディーマンの影響が窺える「In My Life」、彼の音楽の特徴でもあるメロウさに焦点を当てた没入感のあるディープ・ハウス「If You Were My Girl」、奇妙なヴォーカル・フレーズとシンセのアルペジオが心地よいブレイクス「Something On My Mind」など、まさに変幻自在なのだ。とりわけ白眉なのが、ロバータ・フラックの「Feel Like Makin' Love」（74年）のハウス・カヴァーである6曲目で、フラックの官能的なヴォーカルをサンプリングし、キャッチーなシンセのフックと巧みに重ね合わせたこのトラックは、現代版「Music Sound Better With You」（スターダスト）と言いたくなる

CamScannerでスキャン

写真＝Reuben Bastienne-Lewis

ほど完成度が高く、ポップだ。

ミッシュは今まで、グリッドから逸脱するような自由度の高いビートを積極的に作ってきたが、今作で軸としたのは、前述の通り四つ打ちのハウス。そのリズムはある意味で権威的と言うこともできるが、そんな中で彼はギターを弾かないという制限を設け、リズムではなく電子音の音色の豊かさやサウンド・テクスチャーの妙味、あるいはサンプリングの面白さへ自身の意識を向けることで、四つ打ちの権威性を漂白させた。つまり、ハウスにはまだ創造の余白が残っていることを彼は本作で示したのである。それは彼にとって新たなトラック・メイキング／作曲の技法の発見ということができるのではないだろうか。このプロジェクトが継続的なものなのかどうかは彼のみぞ知るところだが、できることならば本名名義の活動と並行して続けていって欲しい。

『ハッピー・ミュージック』
ビート／11月24日発売

CamScannerでスキャン

ドリー・パートン

カントリー界のスーパー・スターが豪華絢爛なロック・アルバム"Rockstar"を発表

能地祐子

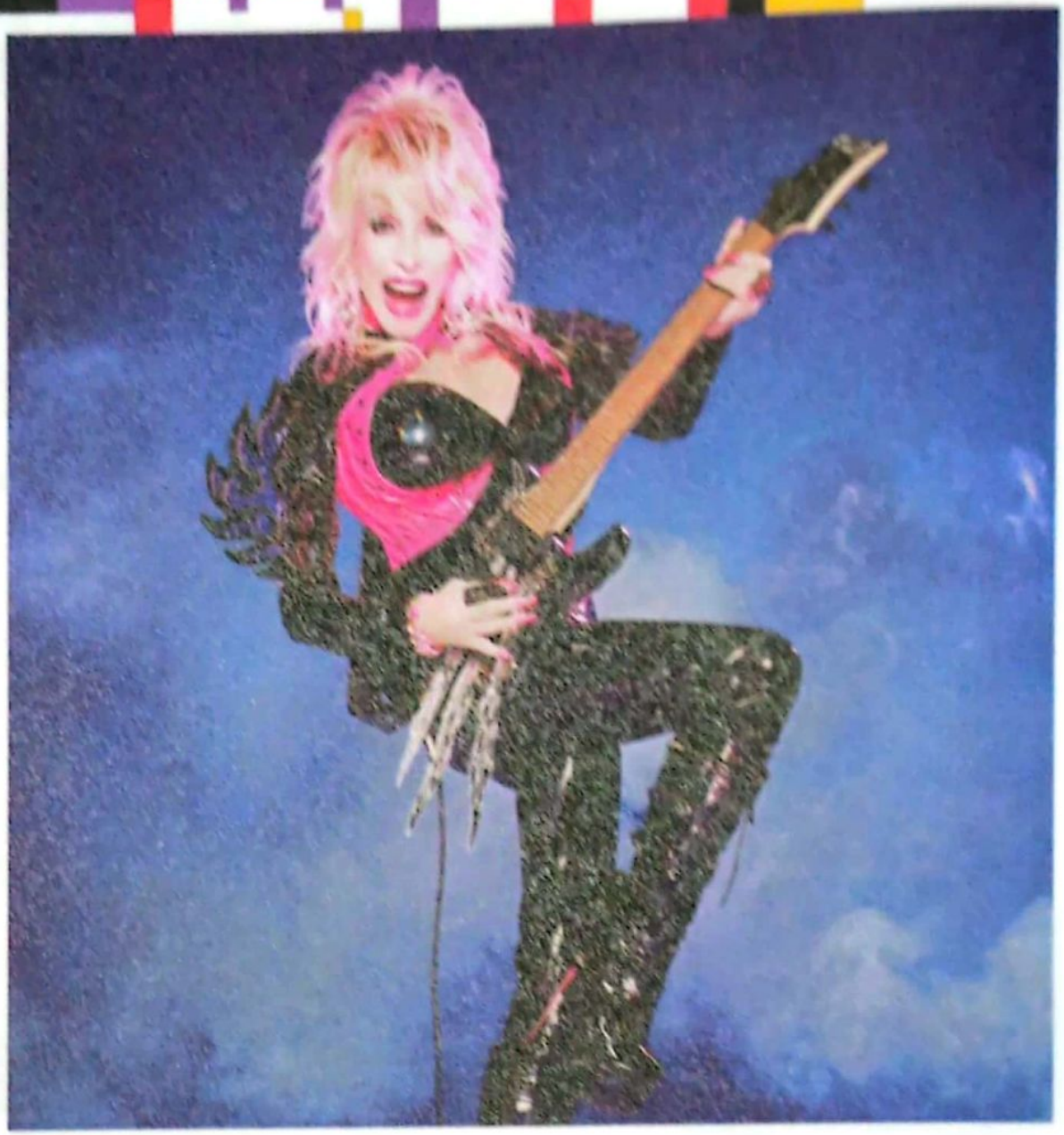
2022年、ドリー・パートンは"ロックの殿堂"の候補者にノミネートされるも、いったんは殿堂入りを固辞。ロックンロールのファンではあるが、これまで音楽家としてロックのアルバムを出したことがない自分が殿堂入りするのは申し訳ない、私ではなく他の相応しい候補者に投票を…とファンに呼びかけた。ロック界の音楽仲間への敬意と、カントリー音楽に人生を捧げてきた自らの矜持。いかにも彼女らしい決断だった。が、あらゆるジャンルを超越し、ロック界にも多大な影響を与えてきたドリー姐さんの殿堂入りを望む声は止まず。結局、なんだかんだで晴れて殿堂入り。そして翌23年1月、この一連の騒動に背中を押される形で、実はひそかに長年の夢だったという初の"ロックンロール・アルバム"の制作を発表した。

それが本作"Rockstar"だ。リッチー・サンボラのギンギンな(死語)ギター・ソロにシビれるばかりのタイトル曲で幕を開け、故ロニー・ヴァン・ザントの歌声とのヴァーチャル・デュエットが熱い10分超のレーナード・スキナード「フリー・バード」のカヴァーまで。オリジナル9曲とポリス「見つめていたい」、ジャーニー「オープン・アームズ」、ハート「マジック・マン」、プリンス「パープル・レイン」、ボブ・シーガー「ナイト・ムーヴズ」、ブロンディ「ハート・オブ・グラス」、REOスピードワゴン「キープ・オン・ラヴィング・ユー」、クイーン「伝説のチャンピオン」など、さながらロック名曲大辞典のようなカヴァー21曲からなる2枚組全30曲。いつにも増して超ド派手なジャケットもまぶしい、豪華絢爛なドリー流ロック絵巻だ。

スティング、アン・ウィルソン、デボラ・ハリーらカヴァー曲のオリジナル・アーティストを中心とする豪華ゲスト陣も大挙参加。極めつけはポール・マッカートニーとリンゴ・スター、そして助っ人としてピーター・フランプトンとミック・フリートウッドまで参加した「レット・イット・ビー」か。エルトン・ジョンとドリーがデュエットする「僕の瞳に小さな太陽」も聴き逃せない。ドリーがロック・アルバムを作るなら、そりゃハンパなく豪華な企画になるんだろうな…と予想はしていたけれど。ここまで豪華とは!

やはり特に興味深いのはカヴァー曲群だ。基本的にはどれも原曲をリスペクトしたアレンジがほどこされながら、単なる"コピー"には終わっていない。すべてが完璧にドリー節。誰もがよく知る曲を演っているというのに、原曲とはまったく違うドリーならではの世界観へと昇華している。もちろん彼女はカントリー・シンガーだ。が、その歌声にはロックンロール、ハード・ロック、グラム・ロック、ブルース、AOR、ソウル、ゴスペル…さまざまなジャンルへとつながるヒミツの扉がある。そして、彼女がこうしてロックの名曲たちを歌う時、その曲の奥底に潜んでい

CamScannerでスキャン



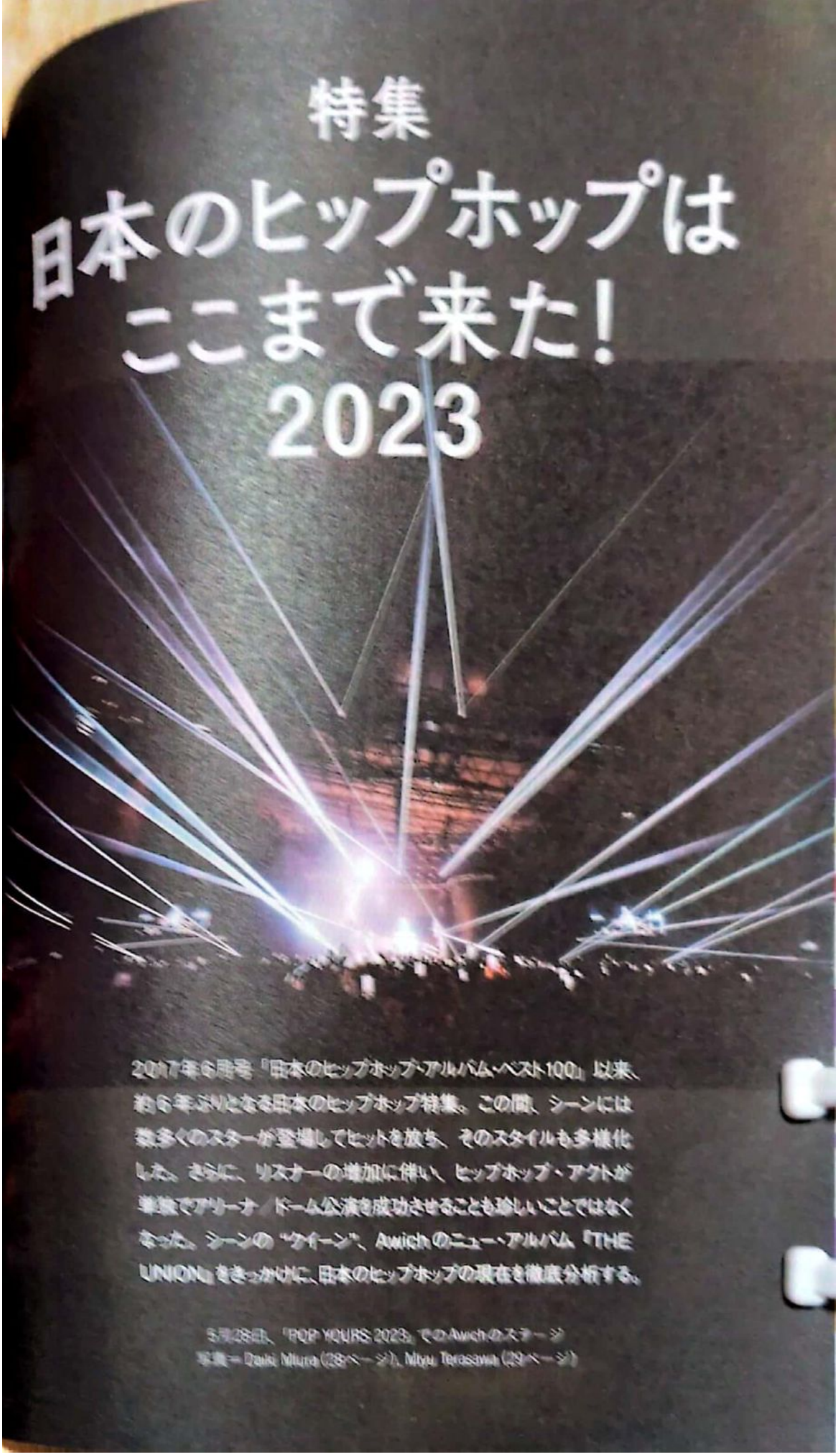
たカントリー由来の細胞が覚醒するのだ。

昨年、ドリーと共にロックの殿堂入りを果たしたバット・ベネター、デュラン・デュランのサイモン・ル・ボン、ジューダス・プリーストのロブ・ハルフォードら、"同期"組も参加。ピンクとブランディ・カーライルと歌う「サティスファクション」、マイリー・サイラス本人との共演による「レッキング・ボール」、リンダ・ペリーと彼女が4ノン・ブロンズ時代に放ったヒットをデュエットする「ホワッツ・アップ」、そしてスティーヴィー・ニックスが書き下ろした新曲など、とりわけ女性アーティストたちとロックする曲がいい。痛快だ。若い世代の女性たちからもメンター的な存在として支持される最近のドリーらしいカッコよさが爆発している。

ドリーもすなるロックンロール・アルバム。それはやっぱり想像どおりであり、同時に想像を超越したひとつの大きな宇宙だった。

"Rockstar"
Butterfly／発売中

CamScannerでスキャン



特集

日本のヒップホップはここまで来た! 2023

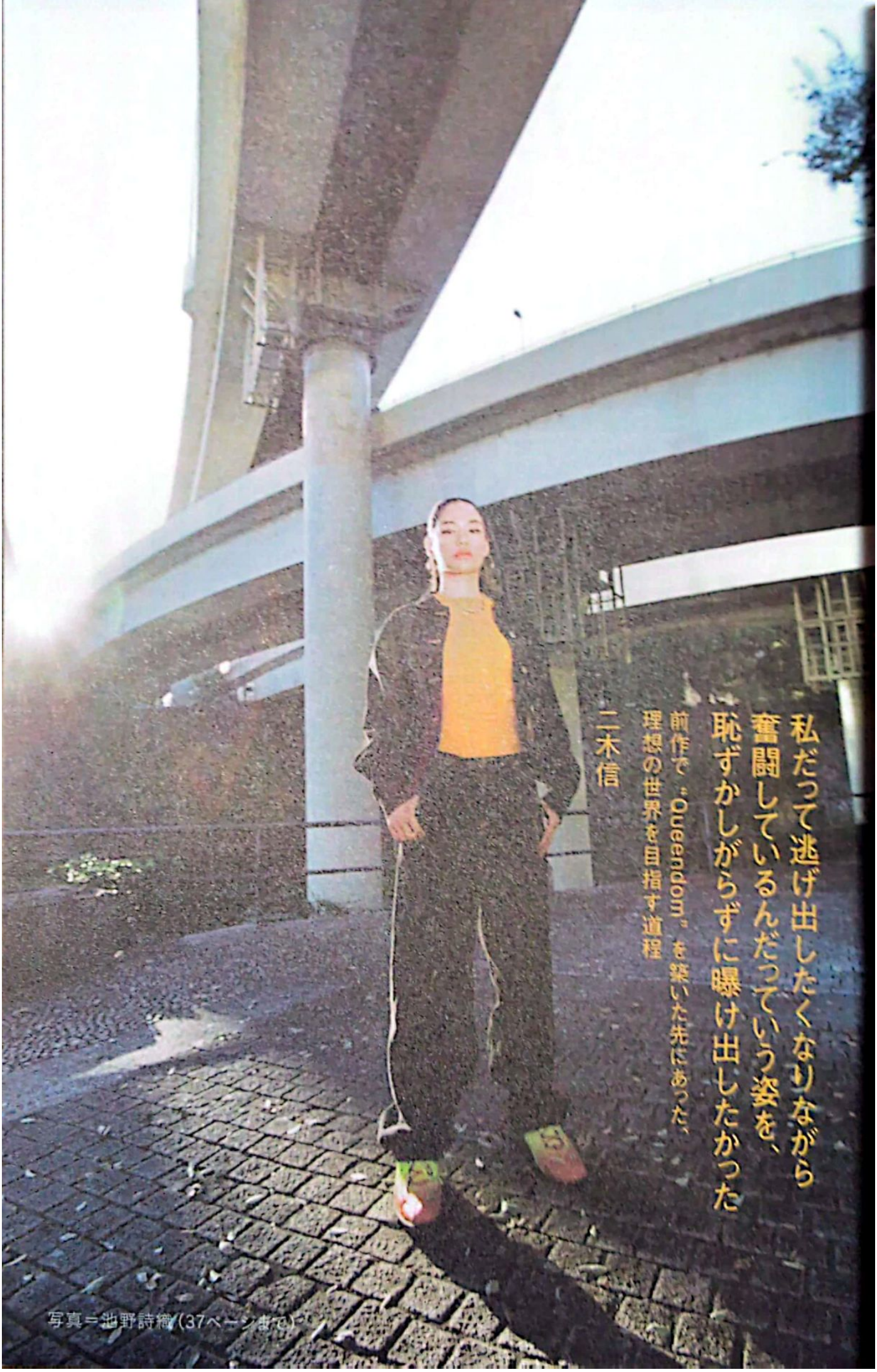
2017年6月号「日本のヒップホップ・アルバム・ベスト100」以来、約6年ぶりとなる日本のヒップホップ特集。この間、シーンには数多くのスターが登場してヒットを放ち、そのスタイルも多様化した。さらに、リスナーの増加に伴い、ヒップホップ・アクトが単独でアリーナ/ドーム公演を成功させることも珍しいことではなくなった。シーンの“クイーン”、Awichのニュー・アルバム『THE UNION』をきっかけに、日本のヒップホップの現在を徹底分析する。

5月28日、「POP YOURS 2023」でのAwichのステージ
写真＝Daiki Miura（28ページ）、Miyu Terasawa（29ページ）

CamScannerでスキャン

Awich
インタヴュー

CamScannerでスキャン



私だって逃げ出したくなりながら奮闘しているんだっていう姿を、恥ずかしがらずに曝け出したかった

前作で〝Queendom〟を築いた先にあった、理想の世界を目指す道程

二木信

写真＝池野詩織（37ページまで）

CamScannerでスキャン

Awichが現在の日本を代表するヒップホップ・アーティストのひとりであることに異論の余地はないだろう。1986年生まれ、沖縄県那覇市出身のAwichこと浦崎亜希子。MCネームは、Asia(亜)With(希)Child(子)という本名の英語読みに由来する。そんな彼女は2007年にファースト・アルバム『Asian With Child』を発表後、10年の沈黙を経て、現在までチームを組み続けるプロデューサー、Chaki Zuluと制作したセカンド・アルバム『8』（2017年）で颯爽と復活を遂げた。それからの6年間、国内のヒップホップ／ラップの景色は以前では考えられないほどのスピードでめまぐるしく変化してきた。そんな移り変わりの激しい時代にひとびとの声を反映したアートを生み出して躍進したのがAwichだ。そして、前作『Queendom』で決定的な評価を獲得してから約1年半ぶりの通算5作目が『THE UNION』。つまり〝連帯〟である。本作は表題曲で沖縄民謡の歌手＝Kunikoが「集えや集えや／歌えや踊れや／心一つに／合わすが如く」と結集を呼びかける力強いヴォーカルから幕を開ける。先日、2万人規模のKアリーナ横浜で行われた3時間に及ぶワンマン・ライヴがアルバム同様に始まり、会場に集ったひとびとが次々に立ち上がる壮観な光景は、彼女の提示するテーマの具現化にみえた。沖縄の土着性と霊性、シスターフッド、海外のアーティストとの出会い、名声との葛藤――Awichはさまざまなことに向き合い、創作を続けている。ワンマン・ライヴの数日前に最新作について話を訊いた。

連帯のストーリー

――めまぐるしい変化の6年間だったのではないでしょうか。

「自分の人生を振り返ったときに、前作の『Queendom』とその後の武道館ライヴ（2022年3月14日に行われた〝Welcome to the Queendom〟）は、大きなターニング・ポイントだったと思います。だからこそ、『THE UNION』は『Queendom』を擦る（反復する）作品にしたくなくて」

――『THE UNION』というタイトルは、連帯や団結という意味になります。

「そうです。『Queendom』で国を築くという世界観を作り上げて提示したあとに何をやるか？ということですよね。その後のストーリーが始まるということです。だけど、この作品を作るのは本当に大変で。いまの私と私のチームの毎日はジェットコースターのように忙しくて。ジェットコースターって怖いじゃないですか。そんな中で曲を作って、アルバムを制作しなければならなかった。だからまず、〈THE UNION〉は、『Queendom』以降の約1年半の活動と、その活動を通して私が思ったことや感じたことを正直に書くことを意識しました。普段からつけている日記を読み直してリリックを書いてラップするだけでも意味があると思ったし、実際、濃い曲ができた」

――〈THE UNION〉には、「増してく Pressure 高くなる Stage／ダメ出しの曲やり直しの Take／削がれる Energy 時間に追われる／歌詞変 赤ペン 失う Myself」というリリックがあります。

「現に毎日が葛藤です。『Queendom』や今年出したEP『United Queens』（フィメール・ラッパーの〝団結〟をコンセプトにした作品）の私はめちゃくちゃ強気なんですよ。もちろん、そういう私の姿を見てインスピレーションを受ける人たちはいっぱいいると思うし、そういう声が聞こえてくるのも嬉しい。でも、そんな強そうな私にも葛藤があるということを見せないと、いま葛藤している人たちや闇にいる人たちのことを救えないと思うんです。私はみん

CamScannerでスキャン

ながら自己理解をして好きなことに一生懸命に取り組める世界が理想だと考えていて。そう考える自分が格好をつけて葛藤を見せないでいたら、そういう理想の世界なんて作れない。この曲に〝追い求めるキャリアの消費期限〟ってリリックがありますけど、そんなこと本当は考えたくもないんです。だけど、私だって転んだり、怪我ついたり、逃げ出したくなりながら奮闘しているんだっていう姿を恥ずかしがらずに曝け出したかった。人々が美しく生活をしているだけが美じゃないじゃないですか。こういう人生のドラマも美しいし、アートだし、この曲ではそのことを伝えたくて」

――またこの曲の「RZAに言われた〝お前の物語にはある人間の叡智〟Like 神の雫か Like 宇宙 Wisdom からもらう Inspire 憧れのレジェンド達の名前も今では並んでいる電話帳」も印象的です。

「RZAがある映画のプロジェクトで沖縄に来たときに、私がいろんな場所を案内しながら夜に沖縄の話をたくさんしたんです。RZAがお酒を飲むと言いながらも全然飲まないから、〝お酒はやめたの？〟って聞いたら、〝昔はやめていたけど、今はまた飲むようになったんだ〟って言われて、〝ちょっと飲みなよ（笑）〟って勧めたりしたんです。そしたら〝飲まないと決めていたけど、君と飲むのは楽しいね〟って言ってくれて。それで〈THE ENDZ〉というNYでRZAの家族を観ていたから、連絡したら、〝Keep shining〟みたいな感じでウータン・クランのWのマークの絵文字付きで即レスが来て（笑）。RZAをはじめ、自分の憧れだった人の名前が電話帳に並んでいっているんです。このヴァースはそのことを歌ってる。エイサップ・ファーグとも出会ったり、コーデーともいつか曲を作りたいねって話したり、ステフロン・ドンとも仲良くなれたり。今度放送される〈ANOTHER SKY〉（日本テレビ系列の紀行番組。11月4日放送回でAwichが登場した）ではアトランタに行ってゼイトーヴェンとセッションしたんですよ」

――おお、それは楽しみです！

「〈THE ENDZ〉はKEIKOっていう沖縄民謡の歌手の友達と作ったんですけど、この曲のような沖縄民謡の声ネタをいつか自分で持っていってゼイトーヴェンに聴かせたらめちゃくちゃ良い反応を返してくれて、そこからすぐ沖縄から時間ができたら沖縄に来てくれるようになりました。ゼイトーヴェンに〝お酒はやめたの？〟って聞いたのが始まりだったりもするし、そうやって長い時間をかけて築いてきた関係性なんです。だから、この曲はRZAがいなかったら絶対に生まれていなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄に通うこともなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄を愛していなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄の音楽を聴いていなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄の人の名前を知っていなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄の人と仲良くなれていなかったし、RZAがいなかったらこんなに沖縄の人に愛されていなかったんです。だけど、名前を出し過ぎてサラッとした軽い感じのラインになってしまうのは良くないので、自分の人生にインパクトを与えてくれて一番深い絆を作れたRZAに4小節を捧げる形にしました」

沖縄の土着性と霊性

――いま沖縄音楽の話になりましたけど、今年Awichさんが監修で沖縄のアーティストを集めた『88RADIO vol.1』というコンピレーションが出ました。そこでMONGOL800（モンパチ）の〈琉球愛歌〉をリミックスしています。なぜ、この曲をカヴァーしようと？

「まず私がモンパチのあの曲が大好きというのがありますし、いっしょに作った〔三十九もあの曲が大好き。あと、沖縄には大事な何かが残されているのかもしれないと思うときがあって。例えば、墓地を観光で家を出ると、私も娘の喪服姿（ママ）もあればあちゃんもみんなが表で会った人たちも自然に合掌して、喪服姿はそのまま海を通って学校に行く。現代の日本ではいまや贅沢かもしれないそういう土着的な温もりが残されていて、私はそれが消えてはしくないし、大切にしたい。〈琉球愛歌〉という曲ではそういう沖縄が歌われていると

思うし、次の世代にも語り、歌い継いでいきたいなって。しかも、沖縄、琉球という具体的なコンセプトの曲があれだけ全国で愛される歌になったのはすごいと思うから。岡本太郎は『沖縄文化論――忘れられた日本』で、日本が忘れてしまった土着的なしたたかさの上にある優しさ、温かさが沖縄にはあるってくり返し書いていて。私は日本全国に住んだわけじゃないから、彼の言葉を借りるしかないんだけど、もしそうだとしたら、日本の人たちにそのことを伝えたいと思ってリミックスを作りましたね」

――唯奇、OZworld、CHICO CARLITOとマイクリレーする〈RASEN in OKINAWA〉でサンプリングされているのは沖縄の古典音楽だそうですね。

「南城市にある斎場御嶽（せーふぁーうたき）に行く途中にある道の駅で上映している、斎場御嶽のPRヴィデオがあるんです。斎場御嶽がどういう場所で、昔そこで何が行われていたのかをCGなんかを使って伝える映像。私はそのヴィデオが大好きで、そこに居座ってずっと観ることがあって。ダイジェスト版はYouTubeにあるんですけど、どうしてもその映像がほしくて、それでまったく無名のときから、その道の駅の事務所に〝あの映像をもらえないですか？〟って何回も問い合わせてたんです。とうぜん最初は〝マジでお前誰？〟みたいな感じで（笑）」

――ははは。

「それが徐々に、〈098TV〉（2015年春からスタートした沖縄の市外局番を冠した番組。Awichは2年間MCを務め、番組制作も手掛けた）の司会をやっていたこともあって、〝この人、観たことあるな？〟から〝音楽やられている方ですか？〟っていう認識になってきたけど、それでもなかなか簡単に映像はくれなくて。で、やっと去年ぐらいに〝音楽だけでもください〟って頼んだら何曲かくれたんです。この前もちょうど行ってきて、〝マジで映像ください〟とさらに頼みこんだら、〝（斎場御嶽のある）南城市に問い合わせてみます〟という返事をもらえて」

――何年にもわたって直談判するというのはかなりの熱意ということですね。そもそも御嶽と斎場御嶽はどのような場所なんでしょうか。

「御嶽は沖縄に数えきれないぐらいある、琉球神道の祭祀を行う、石にも木にも霊が宿っていて自然が神であることを思い知らされる場所ですね。その中でも斎場御嶽は霊感が強くない人でも目で見て神秘を感じると思います。琉球王国の国王の対になる存在で、王国を霊的に守るとされた聞得大君（きこえおおきみ）っていう国王の妹やお姉さんがなる女神の役職があって。その聞得大君の即位式＝御新下（おあらおり）のときに首里城から南城市までいろんなパワフルな御嶽を回るんですけど、その最終地点が斎場御嶽なんです。で、その夜に儀式をして聞得大君はそこで一晩寝て、ニライカナイっていう極楽浄土の入り口で神の島と言われる久高島の方角から昇る太陽の光を浴びて即位できると。斎場御嶽はそういう琉球王国の聖地とされた、かつては男子禁制の場所。久高島に関しては、私は畏れ多くてまだ行ったことがないです。その久高島には600年も続いたイザイホーという女性が巫女になる儀式があって、岡本太郎はその儀式をずっと追っかけていたんです。御嶽は、一神教ではない太陽とか海とか自然の中に魂が宿るという多神教のパワーをいただく場所ですね。で、私はそこの映像を、自分の音楽のインスピレーションのために欲しくて。もらった数曲の中に沖縄の有名な古典音楽を映像用に録音したものがあって、それをプロデューサーのDiego Aveに聴かせたらすごく気に入って。それをサンプリングして作ったのが

CamScannerでスキャン

△RAISE it OKINAWA▽のビートになったんです」

形骸化した常識と闘う

――そういう話を聞くと、あの曲の聴き方がさらに変わりそうです。マイクリレーと言えば、『United Queens』にも収録された、NENE、LANA、MaRI、AI & YURIYAN RETRIEVERとの△Bad Bitch 美学 Remix▽が再収録されています。この曲は元々、Awich、NENE、LANA、MaRIの4人によるものでした。

「△POP YOURS▽（2022年から始まったポップ・カルチャーとしてのヒップホップをテーマにしたフェス。Awichは2023年のヘッドライナーを務めた）の企画でマイクリレーの曲を作ってほしい、さらにアンセムとなるようなコンセプトも考えてほしいって依頼があって。最初にNENEに声をかけたときのタイトルは△Bad Bitch Bible▽だったんです。Bad Bitchの私たちの何か条みたいな感じで教えが書かれている曲にしようと。だから、NENEのヴァースには、〝サンタマリア〟っていうワードが入っているんです。でも途中で、バイブルじゃなくて、美学の方がわかりやすいと思ってタイトルを変えて、私とNENEのヴァースが入った音源をMaRIちゃんとLANAちゃんに渡してラップしてもらいましたね」

――AwichさんにとってNENEというアーティストはどんな存在ですか。

「NENEとはまだ5年ぐらいの付き合いだけど、マジでシスターみたいな濃い関係。私たちのヒップホップの周りってあんまり女の子がいないじゃないですか。だから、NENEと繋がれて楽しくていっつもふざけ合ってます。もちろん仲良くできて楽しいとかだけじゃなく、NENEは自由で恐れがなくて、スキルもあって、いっしょに曲を作っていてもめちゃくちゃ才能を感じる。アーティストとしてちゃんと立っている彼女みたいな友達がいるのは嬉しい。

CamScannerでスキャン

△Bad Bitch 美学 Remix▽で△ミュージックステーション▽に出演してNENEが隣に座っているときに、〝私たちがいまここにいるの意味わかんなくない(笑)？　なんでNENEいんの？〟〝ヤバい、意味わかんない！〟って笑い合ってましたね(笑)。人生って面白いね？って」

――一方、シスターフッドを人によっては〝過激〟とも捉えられる形で表現した△Bad Bitch 美学▽もそうですし、『Queendom』に収録された△口に出して▽や国際女性デーのときに日本経済新聞に掲載された広告など、ここ数年は賛否を呼ぶことも多かったと思います。精神的なプレッシャーはやはり大きいですか。

「当然プレッシャーはあります。私たちはもう枠しか残っていない形骸化したシステムや常識と闘っているから、いろんな人にとってショックは大きいだろうし、そのリフレックスで攻撃されるのは仕方ないと思う。しかも私はその最前線にいるわけだから攻撃される覚悟を持ってやってます。それによっていままで窮屈に生きてきた人たちが解放されるだろうし、いまは反動があるけれど、少し時が経って静まり返ったときに〝あの常識は何だった？〟ってなると思っているので。その最初で攻撃を受けたり、傷ついたりするリスクを誰かが負わなきゃいけないけど、それを誰かがやっているのを横目で見て、〝あいつ、すげえな〟っていう傍観者に私はなりたくなくて。私がやりたい。もちろんやることに関しては、闇雲にやるんじゃなくて、いろんな角度から考えるようにしているし、考えてくれるチームも出来上がっている」

――△Burn Down feat. GADORO▽ではまさにSNSでの攻撃、ヘイト、炎上を主題にしていますし、SNSに依存していく人の内面についてのリリックも書かれています。ちょっと踏み込んだ質問かもしれませんが、自分へのディスやヘイトをSNSとかで目にしちゃうこともありますか。

「全然ありますよ。イライラするし、イ

CamScannerでスキャン

ヤだ(笑)。そういうときは娘や友達に言うようにしています。〝これ見てよ！〟って。そしたら〝はあ!?　そんなこと気にしてる時間ある？〟って言ってくれるから(笑)」

――いい対処法ですね(笑)。信頼できる人に吐き出して解毒すると。

「それでもやっぱり気にしちゃいますよね。有名になることでプライヴァシーがなくなって衆人環視の中で生きる辛さも感じているし、自分のやることの責任もどんどん大きくなっているし、昔のような曲作りもできない。有名になることは私にとって本当に大事なことなのか？と悩みもしました。そういう時期に勝間和代さんの『「有名人になる」ということ』っていう本を見つけて。読んでみると、有名人になることのメリットとデメリットや有名人を扱うビジネスについてとてもわかりやすく書かれていた。その本もヒントになって〈Burn Down〉のヴァースを書きましたね」

――Awichさんはまず自身のアートや表現欲求が先にあって、富や名声はあとから付いてきたという感覚ではないですか。

「もちろん富と名声が目的ではないです。ただ、私にとって富と名声はツールとして必要だと思っています。だけど世の中には、有名になることや、富と名声そのものが目的になっている人たちもいますよね。そのために人を攻撃したり、誹謗中傷したりする投稿で注目を集めようとしたり。ただ、有名になることって後戻りできないんですよ。不可逆なんです。有名だった人にはなれるかもしれないけど、有名じゃない人に戻ることはできない。有名になるってそういう大変な立場になることだから、ヴィジョンや覚悟がなく有名になると病んだり落ちたりしていくだけだと思うんです」

――〈THE UNION〉や〈Burn Down〉には顕著ですけど、たしかに名声や富を得たことをめぐる葛藤が描かれていますね。

「私はアーティストだからこういう葛藤を言えているかもしれないけど、一般的に有名人って有名であることを前提に成り立つ商売だから、〝有名になることなんて邪魔でしかない〟って言ったら、〝お前はそれで飯食ってるだろ！〟って叩かれるじゃないですか(笑)。だけど、私にはさっき話したみたいに自分の理想とする世界や生き方があって、そのことをより多くの人に伝えたくて音楽や表現をやっているから。ある人は自分の理想や生き方を伝えるために学校を作るかもしれないし、ある人はいろんな場所で講演するかもしれないけど、いずれにせよ多くの人の協力が必要なときに富と名声は最強のツールになり得るんです」

――直截的に言えば、Awichさんの願いは多くの人に〝自由〟に生きてほしいということですよね。

「自由は何か？って言ったら、自分がやりたいことをやることだと思うんです。そのためにはまず、本当に自分がやりたいことは何か知るという自己理解が必要で、それがあれば他人と付き合う動機も明確になる。私は、付き合う動機が明確じゃないのに他人と付き合わされるのはめちゃくちゃ不自由で、人にコントロールされることで、それが争いも生むと思う。だから、そうじゃない関係やいろんな団体から社会が構成されていったら、みんなもっと自由に生きられるんじゃないかなって私は思うんです」

〔10月26日　編集部で〕

『THE UNION』
and music

① THE UNION ② RASEN in OKINAWA(Awich, 唾奇, OZworld & CHICO CARLITO) ③ Guerrilla ④ ALI BABA REMIX feat. MFS & ralph ⑤ Bad Bitch 美学 Remix(Awich, NENE, LANA, MaRI, AI & YURIYAN RETRIEVER) ⑥ Call On Me ⑦口に出して 2 ⑧ Interlude ⑨ Burn Down feat. GADORO ⑩かくれんぼ ⑪ Twinkle Stars feat. BIM(Awich & STUTS) ⑫ Wait For Me

CamScannerでスキャン

【鼎談】

いろんな価値観がこれまでになくひしめき合っている

成長と変容が止まらないシーンを語る

つやちゃん×二木信×渡辺志保

「フリースタイルダンジョン」が人気を博し、〝日本語ラップ・ブーム〟と言われたのは6〜7年前だが、それすら一昔前に思えるほどに、目まぐるしい速度でシーンは成長と変容を続けている。日本のヒップホップは若者を中心にすっかり定着したと言ってよく、プレイヤーもリスナーも人口がますます増えた。かつてない規模で拡大を続けているこのシーンの現在地とは。本誌「アルバム・レヴュー」の「ラップ／ヒップホップ［日本］」を長年担当されている二木信さん、日本のフィメール・ラッパーたちを広く論じた『わたしはラップをやることに決めた〜フィメールラッパー批評原論』（2022年、DU BOOKS）も執筆したつやちゃんさん、Blackfilm「INSIDE OUT」[illegible]

などでラジオDJも務めつつ、ここ数年数多くの若手ラッパーたちと取材などで言葉を交わしてきたという渡辺志保さんの3名に、ディスク・ガイド（44ページから）に掲載した作品のリストも見ながら語っていただきました。

（構成：編集部）

コロナ禍を経てひと区切り

二木　特集「日本のヒップホップ・アルバム・ベスト100」が掲載されたのが2017年6月号で、奇しくもAwichが10年ぶりに出した復活作『8』の直前なんです。今回、それ以来の6年を総括するというような意味でこれらの作品が選ばれたと思うんですが、結構思い切った並びではありますよね。

――編集部の意向として、今回は大まかに2017年以降にデビュー、ブレイクした〝フレッシュ〟な面々に絞りました。

渡辺　まず、女性の作品も含まれているというのがちょっと嬉しい。

二木　この時（2017年6月号のランキング）は女性のソロ作品が100位以内に1枚も入ってなかったんですよ！　国内でこれまで以上にヒップホップにおけるジェンダーやフェミニズムについての議論が行われるようになったのもここ数年で、それ

特集「日本のヒップホップ・アルバム・ベスト100」（2017年6月号）

CamScannerでスキャン

にA-wichの活躍は間違いなく深く関わっていると思います。

渡辺　そして、2017年というのを一つの起点にするのであれば、ABEMAで放送されているオーディション番組「ラップスタア誕生」がこの年に始まっているというのが大きいかも。オーガナイザーのRYUZOさんがMCバトル・ブームへのカウンターとして企画した番組ですが、そこから毎回ブレイクするラッパーが出てくるという流れができましたよね。そして、16年にBAD HOPがミックステープ『BAD HOP 1 DAY』を出して、同じ年にKANDYTOWNもメジャー・デビューしてるんです。今年、KANDYTOWNも〝終演〟という形で1回ピリオドを打ち、BAD HOPも解散を発表したという（来年2月の東京ドーム公演で解散）。だから、私は今年いろんなラッパーのライヴを見ながら、一つの区切りだなというのを強く感じたんですよ。

二木　BAD HOPの功績は言うまでもなく大きいですよね。若いヒップホップのクルーやラッパーがこれだけ数多く登場したのは、BAD HOPが全国の少年少女に勇気を与えなければあり得なかったことです。

渡辺　あと、若いラッパーやDJの方とお話をしていて驚くのは、〝コロナ期に始めました〟っていう人が結構多くて。自分が創作をするっていうスイッチが初めてそこで入った、みたいな人は多いんじゃないかなって思います。

BAD HOP（左から＝cherry chill will.）

つや　そもそも前提として、例えばZINEを作ったり、仲間内でポッドキャストをやったり、そういう手作りのDIY文化みたいなものに、いま若者が熱狂してるわけじゃないですか。その中で、コロナ禍において社会からの逃避っていうところでヒップホップを作り始めたっていう人がすごく多かったんじゃないでしょうか。〝タイプ・ビートにラップ乗せればいいだけじゃん〟という風に、今はすごく手軽な自己表現として始められるわけですし。

渡辺　それに、やっぱり若者の貧困みたいなところとも非常に密接なのかなとも思っていて。楽器や機材を購入せずとも、スマホ1台で自分の声だけで何かを作って、どんどん発信できるわけじゃないですか。昔からすると考えられないくらい、それなりに成功しているインディペンデントのアーティストが多いっていうことも、ここ数年すごく感じていて。それも良し悪しだと思うんですけど、すごくピュアなインディペンデンスが担保されてるのはいいなと思います。それは日本のシーンの素晴らしいところだとも思います。

〝見せ方〟の多様化

つや　インディペンデントだからこそ、自分の作品や世界観をコントロールできるというところもありますよね。最近、若いラッパーと話していると〝コンセプト〟とか〝ブランディング〟といった言葉をよく聞くなと思って。いかに独自の世界観を打ち

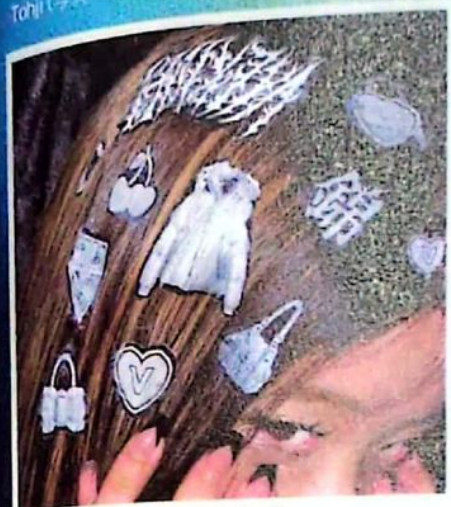
CamScannerでスキャン

出していくかの勝負で、その最たる勝者がTohjiだと思います。CYBER RICHとかも、新人であんなに世界観が完璧に確立された人っていなかったわけじゃないですか。

渡辺　それもやっぱりSNSなんですかね。Hyperpopとか、みんな作り込みがすごいじゃないですか。自分の〝見せ方〟を知っていますよね。ちょっと前までは、作り手側も探り探りやっていたような気がする。それがTikTokやストーリーミング・サービス、SNSの普及によって、リスナーのリアクションを直に受け取ることができるようになったというのも、より大きな土壌に繋がっていったのかなっていうのは感じました。

つや　そういう風に参加するハードルが下がって〝一発逆転〟〝成り上がり〟のためのツールとして飛びつく人がいる一方で、既存のそういうヒップホップの価値観に異を唱える人たちも、valkneeや霊臨を筆頭にこの何年かですごく増えてきたなと感じます。最近のヒップホップの〝金稼ぐ〟みたいなネオリベラリズム的な価値観の限界みたいなものがちょっと見えてきてるのかなという。

渡辺　結局、valkneeの〈私は買えないでつかいダウン〉（「WHITE DOWN JKT」）みたいなリリックの方が共感できるんですよね。



valknee「WHITE DOWN JKT」
もともとは「ラップスタア誕生2023」で披露したラップがベースとなった楽曲

二木　今回の特集がランキングではなくディスク・ガイドとなったのも、いろんな価値観がこれまでになくひしめき合っているから順位をつけないというか、いまの段階ではつけられないということですよね。

つや　多様化という点では、エモ・ラップが非常に大きかったと思っています。ハイパーポップ寄りのサンクラ・ラップにしろ、ロックとのクロスオーヴァーにしろ、オルタナティヴなラップ・ミュージックが増えてきたのは、元を辿るとエモ・ラップの影響ですよね。当時は一過性のムーヴメントだと思ってたんですが、そこを起点にしたジャンル拡大がどんどん起きている。

（sic）boyとかJUBEE、lil soft tennisとか、以前だったら〝ミクスチャー〟ということでロックの方にラベリングされていたものが、サウンド的には実はそんなに大差ないかもしれないけど、ヒップホップの方にラベリングされるという。

二木　多様化という点にもう一つ付け加えると、今回の掲載作品を見ても地域性が顕著ですよね。少なくとも、もはや東京が絶対的な中心ではない。

渡辺　東京VS地方、みたいなムードもあま

CamScannerでスキャン

りないですよね。地方にいても全然稼げちゃう。

つや　地方、あるいはSNSにそれぞれのフッドが根をはっている感じですよね。数が少ない女性のラッパーや地元にコミュニティを持たないラッパーは、SNSを拠りどころとしている印象です。

問題提起の文化

二木　舐達麻はめちゃくちゃ重要ですね。その音楽性や背景、歌詞とかいろいろ語るべきことはありますが、日本の戦後の音楽史を振り返っても、これだけ大麻や大麻文化について主体的に問題提起をして議論を巻き起こしたアーティストは他にいなかったのではないかと。それにはもちろんネットの普及が大きく影響していますが、あの忌野清志郎だってここまで大っぴらじゃなかったですよね。

渡辺　ヒップホップがそういったことについて考えるプラットフォームみたいな役割を果たすのであれば、それはそれで健全なのかなって思います。

つや　ヒップホップを聴いていると、〝既存のルールを思考停止になって受け入れる前にちゃんと自分の頭で考えてね〟と問題提起されるじゃないですか。大麻取締法についても、人種やジェンダーのことについても、あらゆる社会問題に対して問いを投げかけられる。昔からヒップホップってそうだったと思うんですけど、例えば最近のNORIKIYOを聴いているとますますそういった問題提起が有効になってきていると感じる。安易に既存のルールに解を求めちゃいけないなと。

NORIKIYO『犯行声明』
2022年、大麻取締法違反の容疑で逮捕されたNORIKIYOが4か月もの勾留期間中に作詞、保釈期間中に録音した作品。現在彼は3年間の〝長期取材〟中

渡辺　この間、2日間で5〜6組の若手ラッパーにインタヴューするという機会があって。その時も男女比率が2：3で、同じくらいの比率で海外にルーツを持つラッパーもいて、本当に変わってきたんだなと思ったんですよね。それぞれの異なるバックグラウンドがあり、ある種の生きづらさを持った若者たちが、自分たちの表現方法の一つとしてラップを選んだこと自体がめっちゃすごいな、って勝手に感動しました。

クロスオーヴァーとオリジナリティ

二木　音楽的にオルタナティヴを志向するDos Monosのようなグループの活躍もあります。バンドのSMTKと共作して2マン・ツアーもやって、ブラック・ミディとヨーロッパ・ツアーを回りましたよね。

つや　春ねむりも、元々ポエトリー・ラップ寄りのところから出発して近年はハードコア／パンクへと向かいながら海外で大きなファン・ベースを獲得していますね。

二木　ゆるふわギャングの、ありきたりなマーケティングや既成概念とかにとらわれない自由な活動や表現もいいですよね。自分たちでレイヴを開いて、個性的なアートや人物を巻き込みながら一種のコミューンみたいになっているように見えますし。

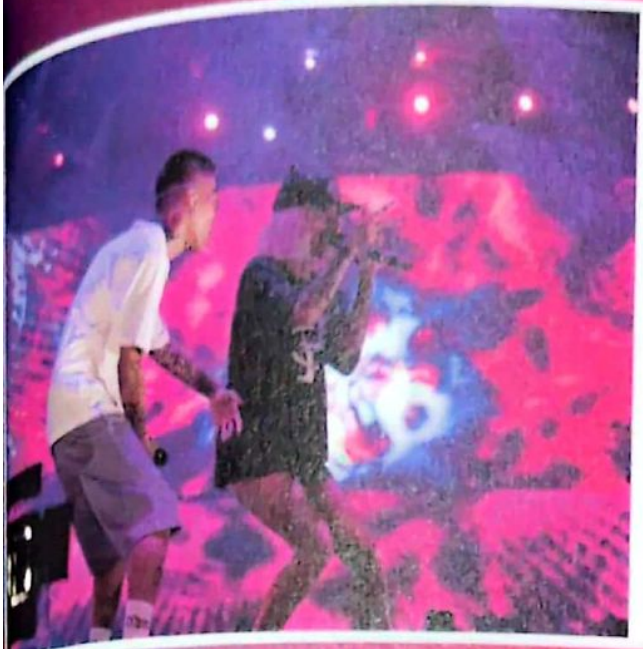
渡辺　コロナの時、若いラッパーの子に〝最近どこで遊んでるの？〟って聞いたら、〝地方のレイヴっすね〟って言っていてびっくりしました。

二木　かなりぼんやりした印象論を承知で言うんですけど、ここ数年の国内のヒップホップ／ラップを取り巻く混沌って、〝日本のヒップホップ・シーン〟というものがまだ確固として成立していない90年前後か

CamScannerでスキャン

ら90年代初頭ぐらいに似ているのかもしれないなと。当時は山塚アイみたいな人がラップしていたわけだし、いろんな背景やルーツを持つ人がヒップホップに可能性を感じて取り組んでいましたから。

渡辺　実際には体験していないですが、80年代後半の下北沢あたりの雰囲気にも似たところがあるのかもしれない。でもJポップをはじめ、日本のポップ・カルチャーの面白いところってそういうミクスチャーなところだなとも思うので、今、その中心になってるのがラップとかヒップホップなのかなと。そこで思うのが、トラップやジャージー・クラブとかドリルというサウンドのトレンドって元は全部USのトレンドだし、向こうの土着のカルチャーや歴史ありきのものなんですよね。そろそろ、日本でできた日本のヒップホップ・サウンドみたいなものが、うまいこと出てきてほしいなっていうのは、個人的に思います。

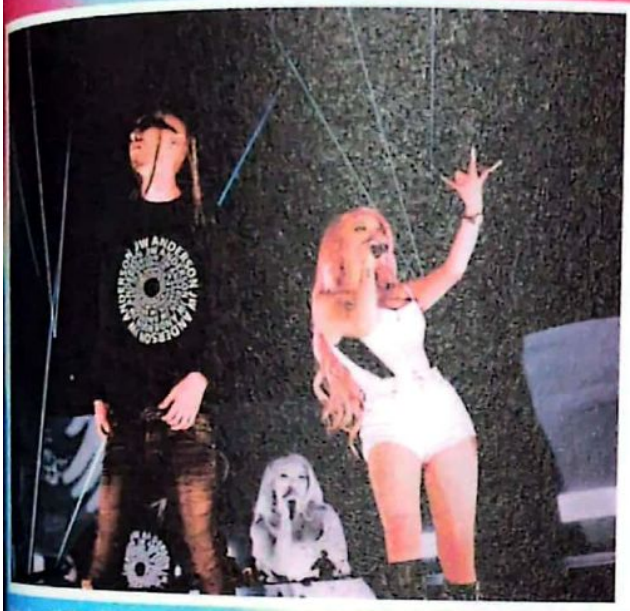


ゆるふわギャング（写真＝Yukitaka Amemiya）

二木　それで言うと、今年リリースされた秋田出身のLuny Loyalの「SHIBUKI BOY」はすごく面白かった。地元の祭囃子をサンプリングしたようなトラックでラップしていました。〝生まれは土崎〟ってラップしているからその地域のものかもしれないですね。また、Awichの「RASEN in OKINAWA」では沖縄の古典音楽がサンプリングされていたり。

渡辺　Awichは以前「NEBUTA」や「UMUI」という曲も発表している。日本のローカルなリズムやビート、ルーツ的な部分と、ヒップホップの面白いところが結びつけばいいなと思います。だから、(sic)boyとKMが一緒にやっているサウンドは、非常にいい意味で、Jポップ的な面白さもあって、いいなと思いますね。

つや　それとは真逆に、USのヒップホップを参照しているんだけれども、なぜかUSの人には出せない独自性を身につける人もいますよね。最近のElle Teresaの作品は、向こうのトラップやギャル文化をめちゃめちゃ研究していった結果、最終的に日本的なオリジナリティを獲得する、といった不思議な境地に突入してきていると思います。



Luv Loyal×Elle Teresa（写真＝Daiki

断絶があることを認める

つや

CamScannerでスキャン

もあってか、「THE HOPE」（50組以上のアクトが出演するヒップホップ・フェス。第2回の今年はお台場で開催された）とかでもいろんなラッパーが〝ヒップホップの歴史を掘り起こす〟といったことをMCで喋っていました。

渡辺　たとえばYellow Buchは、そういった文脈を大事にしてるなと感じます。東海のシーンの先輩たちがやってきた正統派ヒップホップを彼が今、引き継いでやっている。

二木　まさに今年の「THE HOPE」でPUNPEEが日本のヒップホップ・クラシックのヴァースを引用して繋ぎ合わせていくラップをしていましたね。

渡辺　PUNPEEがそこで言っていた「ヴァイオレンスから抜けるためのヒップホップがヴァイオレンスにまた戻ってきてる日本」というのは、今年のパンチラインだったように思います。

二木　同意ですね。遊びに来ている人たちが若いから、おそらく多くの人がPUNPEEの引用する元ネタがわからなくて、あんまり盛り上がっていなくて（笑）。それも含めて、いまを象徴するすごく印象的なライヴだった。

つや　オルタナティヴ寄りのラッパーの話を聞いてると、〝ヒップホップをほとんど聞いてきてません〟みたいな人もいて、RADWIMPSとかの日本のロックやKポップをルーツに挙げるラッパーがすごく増えてきた。

PUNPEE（写真＝Jun Yokoyama）

二木　だから、仮に日本のヒップホップ／ラップ史みたいなものを考えようとするならば、無理やり過去と現在を結び付けようとする前に、まずそういう断絶を前提に出発する必要がある。

渡辺　極端な話、ラッパーであっても、表現方法の一つとしてラップを使っているだけで、ヒップホップのメンタリティとか文脈に共感しているわけではなく、知識もない。結構びっくりするくらい、そういう断絶がある。

二木　ですよね。だから、いろんな作品を紹介する今回みたいな特集も大事だなって思います。

つや　（sic）boyにインタヴューしたときに繰り返し言っていたのが、〝ロックもヒップホップもどっちも好きだ〟ということで。どちらも本当に大好きなのが伝わってくる。好きだから両方やるっていう、今はもはやそれが普通じゃないですか。そこでヒップホップかどうかで無理やり線引きするとか、もっと昔のラップを聞けとか、そういった話はナンセンスに聞こえる時もある。一方で、だからこそいつか必要になった時に〝こういうのもあるよ〟ってメディアや批評の側が情報や文脈を用意しておくこともすごく重要だと思います。

渡辺　興味を持った人が何かしら立ち寄れるようなお店みたいなものが、オープンした状態でいることが大事かなって思います。

〔11月2日　編集部で〕

CamScannerでスキャン

日本のヒップホップはここまで来た！2023 ディスク・ガイド

選＝編集部（協力＝つやちゃん、二木信）
文＝韻踏み夫、荏開津広、qon ryo、高久大輝、高島鈴、つやちゃん、二宮慶介、二木信、MINORI、吉田雅史、伊賀丈晃

＊掲載順は、紹介している各作品のスペースの大きさごとに、発表年順になっています

Dos Monos

Dos City

2019
bpm tokyo / Deathbomb Arc

ここに記録されているのは確かにニュースクール的なヒップホップの最良の形、のように見える。ただしその様子はいささかオカシイ。3MCのリレーは一聴ヒップホップ然としているが、フロウは突然変異的で、言葉遣いもストリートワイズではなく雑多な文化を浴びた者たちのそれだ。荏子田のトラックは、輪郭線の太いマンガのようにドラムもウワモノもリズムを刻み、耳に残るループというヒップホップの快楽原則を全うしつつ、その核心には、ジャジー・ヒップホップとは一線を画す前衛的で野蛮なジャズのユーモアと不穏さが根を張る。低空飛行の弦とマイクリレーが鳥瞰モノの「劇場D」イカれたジャズ大名行列を従えた「BOXX」、身も蓋もないがセンスの塊「アガルタ」。終末感はいつになく（qon）

舐達麻

GODBREATH BUDDHACESS

2019
APHRODITE GANG HOLDINGS

埼玉県熊谷から登場した3人組の最初の衝撃は18年10月にMVが公開された「LIFE STAGE」（本作収録）だった。トタンに描かれたグラフィティ、キャバクラの巨大看板、仲間との集まり。その映像と何の変哲もない北関東の都市で起きるドラッグ・ディールや逮捕に纏わる歌詞は舐達麻の背景に無数の"彼ら"がいることを可視化した。ミックステープ『RIN JOINT LIKE A BULLSHIT』（12年）では既存のヒップホップ・クラシックを用いていたが、ファースト『NORTHERNBLUE1.0.4』（15年）の9分をこえる「契」が決定的だった。その曲で生み出したアイディアを種に本作ではGRIMEやDRILLのメロウなビートで新たな言葉を開花。ジジ・マシンの曲を引用した「FLOATING」まで（二木）

Moment Joon

Passport & Garcon

2020
GROW UP UNDER GROUND

この日本という島は移民を迫害している。明らかにそうだからそう言っている。入管法は改悪が決まり、移民の多い街ではヘイトデモが罷り通っている。そのような場所で、芸術を通じて声を挙げようと試みたラッパーがいた。Moment Joonである。このアルバムは暗い。虚構で塗り固められた明るさではなく、すでにあるのに誰もが見て見ぬふりをしてきた暗がりについて歌っているからだ。リスナーはまずこの暗さを認めなくてはならない。それから自分に何ができるかを真剣に問わねばならない。ひととおり聴いて、ああかっこよかったね、で終わりにしてはいけない。Moment Joonという"移民者ラッパー"が、いったい何と戦っているのか、なぜ戦わねばならなかったのか、それを無視して聴いていいはずがない。（荏開）

■たかしま・りん＝1995年、東京生まれ。ライター、アナーカ・フェミニスト。『布団の中から蜂起せよ』（人文書院）で紀伊國屋じんぶん大賞2023の1位を獲得。

CamScannerでスキャン

ralph
BLACK BANDANA

2020
ralph

2010年代の終わりに頭角を現したralphは、団地育ち、人種のミックスという背景を持つ神奈川出身のラッパー。引っ越しの多かった少年時にANARCHYなど日本のラップに出会い、MACCHO、ANARCHYなどに影響を受ける。「ラップスタア誕生」で2020年に優勝するが、当時は既にネット／リアルのシーンではかなり知られていた。このEPは驚きの出来栄えで、同年のベストのひとつ。優れたという形容では足りない、ダブル・クラッパーズのグライム、UKドリルと称されるサウンドの、例えば各拍子の頭のアクセントを意識してのタイトなラップが多くのフォロワーを生むが、グライム／ドリルを代表するMCではないという本人の弁は〝言葉〟だけではなくカルチャーへの尊敬の念を感じさせる。（荏開津）

BAD HOP
BAD HOP WORLD DELUXE

2021
BAD HOP

「次にヒップホップ・シーンを担う若手の教科書になるような」作品を目指したとメンバーのYZERRが語る川崎のヒップホップ・クルーによる3枚目のアルバム。それまでもUSヒップホップのメインストリームをタイムレスに取り入れつつ、そこに説得力を持たせてきた彼らがシーンの中心に立った自負と自信を滲ませる仕上がりだ。特にTiëstoやSnoop Doggの参加したデラックス版収録の「Suicide - Remix」ではコロナ禍での自死の問題と向き合い、ストリートの物々しさとは別の、ティーンの感覚を切迫した表現で責任感を伴って代弁してみせている。過酷な環境を生き抜き、成り上がった彼らの美学に溢れた「Hood Gospel」なども忘れがたい。BAD HOPの早過ぎる幕引きは近いが、その功績は音と共に残る。（高久）

JP THE WAVY
WAVY TAPE 2

2021
bpm tokyo
/ bpm plus
asia

近年の国内ヒップホップが獲得した新たな技術の一つに〝転がるような軽快なフロウ〟があると思うが、そういった、どこまでも滑っていくようなラップの魅力が最も詰まった作品だ。同系統のLEXが宙に浮きながら跳ねていくようなニュアンスだとしたら、WAVYはもっと低い声で地べたをコロコロ転がっていくイメージか。象徴的な「WAVEBODY」は、それらラップの対比が楽しめる代表曲だ。やけに重心がしっかりしているのは、彼がダンサー出身という背景もあるのだろう。軽やかなリズムを「NAMI」等のタイトルとリリックでまるでサーフィンのように乗りこなしていくスタンスが終始面白く、本作とLEX『LOGIC』によって、日本語のラップにおけるフロウは完全にネクスト・フェーズへと駒を進めた。（つや）

Tohji, Loota & Brodinski
KUUGA

2021
Tohji, Loota
& Brodinski

作品ごとにコンセプトや表現を変えるカメレオン的なTohjiだが、この世界観のベースを担うLootaと組んだ本作は、文学や民謡とのこんな出会い方想像できた？的なリリックや歌唱と、ブロディンスキのダークで無機質なインダストリアル・ビートのマッシュアップという前人未到の境地。ときに双子のように、ときにライバルのように絡み合い対立するふたりのオートチューン声を、リズム楽器やアンビエント装置として屹立させる構成もスゴい。宮沢賢治『よだかの星』サンプリングの「Yodaka」、ふたりきりのクワイアと変則リズムの和風ドリル「Oni」、子音が跳ねるリフレインが中毒的な「Friday」など、アイデア先行の曲作りと全体のコンセプトの両立が見事。Lootaによる『Heheim』も是非。（吉田）

CamScannerでスキャン

LEX
LOGIC

2021
Mary Joy

『LOGIC』（2020年）で華やかな客演陣と共にシーンでの立ち位置を確立したのち、更に進んで自身がシーンの原点回帰であることを示しに掛かった勝負時の4thアルバム。自身の立ち位置が日を追うごとに変わる様への喜びと覚悟が各所に見える内容であり、「GOLD」での決意表明が冒頭に配置されているのはその象徴だろう。そのステージに呼び込む客演陣が、主にかねてからの仲間たちなのも偶然ではない。ヴァイラル・ヒットした「なんでも言っちゃって」が取りざたされがちではあるが、こうした仲間との関係性を再提示してみせたことに加えて、「Without You」や「FAREWELL TILL TOMORROW」で自身の原体験にある70～80年代ポップス／ダンス・クラシックを込んだ展開が組まれていることは特筆に値する。（gss）

Watson
thin gold chain

2021
Watson

BOSSが、SEEDAが、のLEXが、KOHHが現れて日本語ラップを変えたときのような衝撃を、Watsonはシーンにもたらしている。日本語ラップの2020年代はWatsonとともに始まった。Watson以後、ラッパーの歌詞の書き方が変わった。〈No capそれでもかぶってる帽子〉（「18K」）。嘘はつかない（No cap）けど帽子（cap）は被る。クスリと笑わせるユーモアの感覚。勢いは止まらず、22年には代表曲「reoccurring dream」が誕生。とりわけ23年は客演とシングルの発表が途絶えず、満場一致でMVPの活躍。「MJ FREESTYLE」「Get Back」「Makuhari」「高所恐怖症-Remix」「Satsutaba」「TATATA」…。ヒストリー・イン・ザ・メイキング。いま、歴史が作られているところ。（韻）

valknee
VS.

2022
valknee

エモ・ラップとハイパーポップ以降、ヒップホップの価値観は一部で想像を超える拡大を見せている。Eiiiiiiiらの歪み弾けるサウンド・テクスチャにトランシーなビート、アニソンやボカロを経由したようなvalkneeの畳みかけるラップ。今この国に漂う違和感をかき集め、ゴス&ホラーなアートワークと共にごった煮した本作は、がらくたを集めてアートを創り上げたような、猥雑さ極まった果ての崇高さすら感じられる。音楽性はハイパーだが、世の中への怒りが端々から感じられる点でやはり本質はヒップホップ。〈ボロボロになって鍵垢にシュッ〉といったようなフレーズが牙をむいて刺してくる、才気ほとばしる怪盤だ。オルタナティヴの最先端として、この地点から霊臨らが共鳴することで一つのシーンが生まれている。（つや）

¥ellow Bucks
Ride 4 Life

2022
To The
Top Gang

1曲目、ドクター・ドレーのようなループする鍵盤に痺れていると、色気のある低い声でラップが入る。客演は東海シーンの同志を揃え、愛車に着想を得たリリックが紡がれる。完璧だ。ヒップホップを演る上で必要な要素がすべて高いレベルでおさえられており、華もあるし渋さもある。車をテーマにしているだけあって、ビートに乗りながら移り変わる景色をキャプチャしていくかのように、自身のいまの立ち位置が力強いラインとともに描かれていく。伝わってくるのはフッドへの敬意と20年代視点でのウェッサイの再定義――それら各々の小さな物語が〝国内ヒップホップ〟という大きな物語に通じる瞬間、韻は踏まれビートは高揚する。これぞ〝ヤングトウカイティオー〟を名乗るラッパーが作り上げた2作目、文句なしの傑作。（つや）

■ きゅーえっくすえぬ・りょう＝日本のヒップホップを中心とするライター　プロデューサー。海外と日本を行き来しながら、別名義を中心に執筆やメディア出演などを行う。

CamScannerでスキャン

Leon Fanourakis & SANTAWORLDVIEW
XEONWORLDVIEW

2023
1%

Leon FanourakisとSANTA-WORLDVIEW、そしてLA在住の日本人ビートメイカー、Xanseiによる共作EPは、昨今の主要タイトルでは珍しく、全面的に肩の力を抜いた作品に。Xanseiのブーン・バップも経由したハードなサンプリング・ビートに対し、緩み切ったコンセプトのラップがユニークなギャップを生み出している。時に倫理的な危うさまで踏み込み気味だが、それを含めて友達の家で作り上げた空気感がそのままパッケージされた内容と言える。とはいえとにかくビートがタフなので空気が弛緩することは一切なく、表題曲や「ブチ上げ戦隊」あたりできっちりロックする辺りはさすが。ある意味この緩さをバジェットをかけて仕上げ切るということ自体が、現在のシーンの勢いを示しているかも。（qxn ryo）

OZworld
SUN NO KUNI

2023
MS

近年の沖縄のヒップホップを考える上で重要なのが霊的なものとの関わりだが、それはこのOZworldの作品群のイメージによるところが大きいかもしれない。スピリチュアルなリリックと、トラヴィス・スコットあたりとも共振するようなサイケデリック感もある〝畳〟サウンド。それは沖縄という土地に紐づいた表現であると同時に、〝ギャル宇宙人ラッパー〟のPICE3 POPPOとVTuberのピーナッツくんを招いた「META EDEN」では宇宙やサイバー空間、「Gear 5」では漫画『ワンピース』の世界と接続し、その他にも多くの漫画やアニメ、ゲームからの引用が登場するなど、時／空間を超えたアフロフューチャリズム的想像力が作品を貫く。ローカリズムとそこからのトリップが表裏一体のこの感覚は唯一無二。（伊賀）

Elle Teresa
KAWAII BUBBLY LOVELY III

2023
Elle Teresa

地元・沼津で制作しながら海外に目も向けて活動を続け、リル・キードとのコラボレーションも果たしたElle Teresa。『KAWAII BUBBLY LOVELY』シリーズ3作目となる今作も、シンプルなビートの上で個性的なラップを披露。特に注目したいのは目覚ましい進化を遂げているリリックだ。とにかく半径3メートル以内の話を素直な言葉で綴り、それなのにライミングは唯一無二のユニークさで聴くたびにクセになる。「2」では〈他の子に送らないでメールしちゃダメ〉、Choppa Caponeと共作の「LOVE」では〈地元の元カノ鬱陶しい〉などと、ときに弱気に赤裸々に。かと思えば「Come On」では〈金欠の男用ない〉といつもの〝お姫様Vibes〟。その親近感と憧れの二面性が、まさにElle Teresaの持つ魅力と言えよう。（MINORI）

Awich
THE UNION

2023
and music

〈Queendom 第二章の幕開け〉と「THE UNION」でAwichがラップする通り、前作『Queendom』と連続して聴くべき作品である。二つの作品は、どのように自らの存在／バックボーンを世間に浸透させるか、という段階をクリアした後、自らも不完全な人間であることを吐露するという美しい流れで魅せる。非常に冷静な自己分析と大局観、並外れた表現力によって為せる技。本作で彼女の心の柔らかい部分が露呈するたびに、彼女が積み重ねてきたものは輝く。それは手を繋ぐために、まず手を差し出すということ。その差し出し方は、あなたが手を伸ばしたくなるように徹底的に考え抜かれているのだ。これまで彼女の作品につきまとった、資本主義に対して無批判だという指摘を乗り越えうる何かが、本作には宿っている。（高久）

■ みのり＝1997年生まれ。「Rolling Stone Japan」や「TURN」「FNMNL」などのWEBメディアを中心にインタヴューやレヴュー、ライヴ・レポートを執筆。

CamScannerでスキャン

釈迦坊主
HEISEI

2018
Tokio Shaman

2018年に噴出したTohjiなどと並ぶ新世代のラッパーを代表する一人、釈迦坊主はゲームから音楽に開眼、ホストをつとめながらのバンド経験から降神の志人に影響を受けてラッパーへ。ブロウ・アップした「Tanatos」、前述のTohjiなどもフィーチャーした「Black Hole」などが収められた彼の代表作のひとつと目される本作でも、日本語の母音と子音を意図的に混同することがただリリックの英語発音への接近ではなく、自らの音楽を単なるメッセージに減じられることの固辞として反復される。意味の拒否＝豊穣なコミューン（場）への試行錯誤とも思える。（荏開津）

田島ハルコ
kawaiiresist

2019
Harucorium

世界を憎んでいる音楽はいつだって最高なんだけど、田島ハルコは〝奇妙な〟（〝クィア〟の語源は何だったかな？）表現でコミカルに遊びながら世界に中指を突き立てて見せるから、あまりにも愛しい。300円のリップに自己変容の希望を託す「ちふれGANG」、あらゆる姿で〝ただそこにいる〟存在に尊厳があるということを宣言する「人権MAX Princess」、そして飲み込まされた社会構造を血反吐とともに吐き出す表題曲「kawaiiresist」に至るまで、田島ハルコの音楽は〝ヘルジャパン〟の崩壊を祈るための宇宙的経文であり、説得志願者が握りしめる希望の鍵なのだ。（高島）

ACE COOL
GUNJO

2020
EVOEL

ACE COOLという人の人生を丁寧に丁寧に研いで磨いて、一本の刀に仕立てたようなアルバムだ。幼少期から学生時代、広島での工場労働者時代、そして東京進出とその後に至るまで、ACE COOLの半生をなぞる自伝的な構成である。語るだけで人の耳目を集めるようなバックグラウンドは持っていない。はりぼてみたいな中身のない知名度はいらない。それでもただ必死に生き、耐え難い夜を乗り越えてきた人間の人生は必ず詩になるし、その詩が誰かにまた別の苦しい夜を乗り越えさせる。それを信じて〝いい音楽〟を紡ぎ続ける、その姿勢がぴんと伸びた背筋から窺えるのである。（高島）

kZm
DISTORTION

2020
YENTOWN / bpm tokyo

タイトル『DISTORTION』の通り、特徴的な歪んだ声が武器であるkZm。Kenny Beatsをプロデュースに迎えた「GYAKUSOU」や、MonyHorseが参加する「パグり」など、暴力的な割れたサウンドが自身のラップとマッチし、独特のスタイルを築き上げている。また、当時若手ラッパーとして注目されていたTohjiを迎えた「TEENAGE VIBE」は、ライヴやフェスでのアンセムとなった。今年2023年もJUMADIBAと共作の「DOSHABURI」がヴァイラル・ヒットするなど、積極的に新しいサウンドを取り入れ、自分のものにし続けている。（MINOR）

chelmico
MAZE

2020
ワーナー

2010年代の終わり、アイドル・ラップ、フィメール・ラップ双方の才能と繋がりながら、どちらかに区分けされることを二人の個性の表出と確かな技術、演出できるビートが揃って拒否することで、chelmicoは名実共に最も輝く&グローバルに〝らしさ〟が伝わるラップ・デュオとなる。「映像研には手を出すな！」のオープニング・テーマ「Easy Breezy」から始まる本作は、恋の内と外の往復、ハマった状態と読み換えていいが、その心象がビーチや手触りなど具体的な描写になるのはRIP SLYMEの影響か。日常が直接クール／ポップとして受容される2023年の東京。（荏開津）

CamScannerでスキャン

Jin Dogg

3rd High "起死回生"
(mixed by DJ BULLSET)

2020
Hood

美口縛、トリリンガルで通用させる人類のラッパー、Jin Doggの登場はトラップ・ミキシング風味、ステージングで知られていたが、カルチャーへの知識では保証付きのDJ BULLSETのプロデュースで発表された本作では、自分たちの街、人間、そこのサウンドトラックの捉え直しが、ウィードに溺れて横臥される街の物語に、サウンドだけでなく日本のヒップホップのクラシックからの引用なども含め、歴史性が絡められて厚みが増す。冒頭から出自は「きりと鉄いあげる、現実逃避は甘の卑怯だ」と言われた「街風」は日本のヒップ音楽の歴史に残る作。（土佐有明）

Kamui

YC2

2020
Mudelly

神よりも生き急いではあちこちに衝突して火花を散らす無二のラッパー、Kamuiが連れていく最高到達点は、サイバーパンク世界の片隅、さるSF映画のOSで、だ。リスナーはないとわかっている救いを探し求めて彷徨うひとりのコンピューター・カウボーイになって、この街をひた走るよう迫られる。Kamuiの音楽は傷ついた自分の身体を風で増幅化したがっているかのように、速度を希求し続ける。過大にたくさんの忘れものがあるとわかっていて未来しか見ない。そういう孤独な衝動しか酔ましにならない瞬間が人生にはあり、したかって私はそこに救われている。（荏島）

REAL-T

業界

2021
KIM

〈今里新地が育ち、寒そうな奴は俺の友達〉。日本語ラップ屈指のパンチラインをサンプリングした、たったこれだけで"普通じゃない"背景を1曲で見せる表現なラインから幕は開く。組織犯の台頭によって一躍盛り上がりを見せたサグ路線の極北と言っていいだろうが、しかしこれがどうして最高に面白い。当然、犯罪行為をあけすけにラップしているわけだが、隠語を駆使しながら鋭さとユーモアたっぷりな言葉を感情の起伏をほとんど表に出さず淡々と重ねていくその姿に、己の倫理観を問いながらも気づけば耳を奪われ、繰り返し聴いてる自分がいる。恒例のMVでの食べっぷりにも注目。（二宮）

あっこゴリラ

NINGEN GOKAKU

2021
KAMIKAZE
/ ArtLed

「はじめにリズムありき」——ザ・スリッツのアルバム・タイトルの引用から始めたのは、彼女がこのバンドを愛し、またフェミニストを自称しているからだけではない。この9曲入りのミックステープは実際にリズムが面白いのだ。UKファンキーのロスカのバーカッシヴなトラックで大胆にも自慰について歌う「神器 Oh 己」、ダンスホール風の「SAKI-DASU」、ブロディジーの名曲へのオマージュとも聴ける「Sayonara」、元ドラマーの彼女のビートへのアプローチは柔軟で、鋭く、曲芸的な魅力がある。MIAとの共作が聴いてみたい。Monsta Joosとの「DON'T PUSH ME」も収録。（二木）

DADA

Yours

2021
NBL

福岡の地から届けられた、今の日本のリアル。YOUTUBEで1600万回再生（申請時）以上の驚異的なヒットを記録している名曲「主役」School Dropsを収録した、国内エモ・ラップで最も支持を得ている一枚だ。ギターの感傷的な音色とともに鳴り響くのは、DADAが感じる底なしの寂寥感である。目の前の出来事をありのままに綴っていくリアリズム的手法が採られているが、〈愛見えないから体に揚いた〉〈愛してるって言うママが〉といったあまりにも無垢な表現、その一つひとつがメロディアスな旋律とともに歌われるさまは、どこかブルーハーツにも通ずる強度がある。（つや）

CamScannerでスキャン

Power DNA
強宿

2022
aganiski

00年生まれのラッパーの7曲入りのEP（6曲は自身でビートを制作）はINUの頃の町田町蔵の咆哮とカンバニー・フロウ、ワード21との出会いと評したくなる独創性がある。すなわちアブストラクト・ヒップホップとラガ／レゲエの突然変異体であり、グライムのピッチを落として変則的にしたようなビートで〈ただそれだけでいい〉とくり返す冒頭曲も素晴らしい。変革への願望、自己啓発、自問自答のラップと歪なサウンドの組み合わせだ。3曲目では〈アナーキストみたく／ピストルかっさらう〉と彼は歌う。残念ながら、現在少なくとも配信では聴けなくなってしまったようだ。（一木）

Lunv Loyal
SHIBUKI

2022
Lunv Loyal

秋田出身、ハイ・スキル1本を武器にシーンを闊歩する才能の2ndアルバム。多数の客演を経て放たれた本作は、とにかく彼のスキルの振り幅を堪能出来る力作。冒頭の「ヨル」でのフロウの豊かさに驚かされて以降、ゆるふわギャングと世界の拡張を旅情的に描き出す「Outside」、そしてラストのC2 TIGERとの「Trust You」まで、そのスキル・ストックが枯渇することはない。そして本作以降Lunv Loyalの才能は更に成長を続け、2023年には「高所恐怖症（Remix）」や「のTSUKI BOY」など、その年のヒップホップ・シーンを代表する傑作を発表するに至っている。（gxn 20）

春ねむり
春火燎原

2022
TO3S

声が、声だけではない、全身がわなないて震えている。その振動は明らかに〝生きる〟と〝死ぬ〟のはざまにある。このアルバムの特異性は春ねむりが絶対に手放さない、政治的不正義とそれを許し続ける世界への憎悪であり、同時に憤死と蘇生を繰り返すような生命／声明の暴発である。命懸けで作られた音楽というものはどのような形であれ叫びに似てくるのだ、と思わされる表題曲「春火燎原」から、いとも軽やかに今ここで息づく／いずれどこかで滅びるであろういのちを祝福してみせる「生きる」まで、緊張し／切迫し／ひどく追い詰められた場所から届く、実に美しい絶叫であった。（高島）

7
7-11

2022
101

和歌山から粗削りだが類まれなセンスを見せつけた。Homunculusがプロデュース、客演には炒炒。白眉は「SEVEN ELEVEN（freestyle）」。ミシガンに歌謡曲のサンプリング、強烈なマンブル・ラップ。英語圏に拡散した際に向けられたアジアン・ヘイトに「Rice Spice」でアンサー。「ラップスタア誕生2023」でも活躍――〈7777に入れた皆当たりありがとう〉。その後も「Away」でLizaと好相性を見せ、Candee「Unlucky」では感動的なヴァース〈揃わんかったスロット／今乗ってるZOTのビート〉を披露。現在最も将来を渇望される日本語ラップの輝かしい未来。（鎖）

STUTS
Orbit

2022
Atik / SPACE SHOWER

テレビ・ドラマ「大豆田とわ子と三人の元夫」の主題歌を担当、星野源との共演や、武道館ライヴも成功を果たすなど、メジャーな場での活躍も多いSTUTS。前作から4年振りとなるアルバム『Orbit』は、STUTSのやりたいことが贅沢に詰め込まれた、1曲も聴き逃がせない渾身の1枚だ。特に「Expressions」には仙人掌や鎮座DOPENESS、Campanellaなど総勢8名のアーティストが参加し、聴くたびに鳥肌が立つ、迫力あるマイク・リレーを繰り広げている。ここまで様々なカラーを持つアーティストを一つの作品でまとめ上げられるのは、STUTSだけだろう。（MINORI）

CamScannerでスキャン

CYBER RUI
BRAIN RUSH

2022
CYBER RUI

アベマTV「ラップスタア誕生2021」でブレイクを果たしたCYBER RUIの2nd EP。1st EPはそのブレイクを想定せず制作していたので、本作は初めて彼女が脚光を浴びて以降の姿をアートに落とし込んだ作品だ。前作ではあえてタフネスを前面に押し出した作りが目立ったが、今回は痛みや不安もそのまま吐露することで、やはりCYBER RUIは誰かに強さを与える。心音と呼応するような四つ打ちの「Of My Friend」に始まり、一定してダウナーなビート構成で駆け抜ける。ラストの「FEEL THE RAIN」ではralphもそのテーマを汲んでの千両役者ぶりを発揮。（gen ryo）

Candee
Candemic

2023
Self Made

川崎を拠点とするクルー、OGFの一員としても活動していた、川崎で生まれ育った在日韓国人ラッパーによる初のアルバムで、同郷の先輩ラッパー、KOWICHIが立ち上げたレーベル、Self Madeからのリリース。同レーベル所属のNOT on the WAVEとdubby bunnyが手がけるトラップ中心のビートに滑らかなメロディの光るラップを披露しているが、なんと言っても耳に残るのはナンセンスな言葉選びだ。トピックは決して明るいものばかりでないが、それよりも彼の直感的なワード・チョイスは気持ちよくなるのがまず第一だと訴えかける。不思議な余韻を残す怪作。（高久）

Guca Owl
ROBIN HOOD STREET

2023
WILD SIDE /
Mary Joy

いささか時代がかったダンディズムで、"Robin Hood Street"へ誘う。〈ただの反逆とは違う／俺はなるべくユニークにやる〉。学校を追い出され、若くして作業着で働く。人生はこれでいい？だから〈俺が見つけたマイクロフォンは6th corner〉。馴れ合わずにスキルを磨く。〈Be Confident in 1verse〉。成りあがった〈労働育ちの大金持ち〉は〈経済学は習ってない〉。はぐれ者たちのアンセム「Difficult」――〈とっておきの暴言のために、真面目な本を読んだりするんだよ〉。暴言のためには知性が必要。尊大な天邪鬼の反逆者。〈君からすりゃDifficult〉？よろしい、慣れっこだ。（韻）

ちゃんみな
Naked

2023
ワーナー

衝撃的なラスト・シーンのMVが話題になった「美人」、そして横浜アリーナでのワンマンを経た4作目は、前年の韓国本格進出に際して発表されたリード・シングルを筆頭に、自らのルーツへと立ち返ることでこれまで以上に内面をさらけ出した楽曲が並ぶ。なかでも日韓アイデンティティの狭間で過去に他者から受けた言葉の暴力を落し込んだ「RED」は特段印象深い。とは言え国内外のプロデューサーを複数迎え制作されたトラックはヴァラエティに富み、そこに乗る歌唱はもはやヒップホップに留まらない。冒頭からAwichにしか歌えないパンチラインが飛び出す「美人 remix」も必聴。（二宮）

(sic)boy
HOLLOW

2023
ユニバーサル

最初からエモ・ラップというジャンルでは括れなかった(sic)boyが、あらゆるタイプのビートでアーティストの限界を拡張するKMと組んだメジャー・デビュー作。バンド・サウンドとエレクトロニック・サウンドのバランスと曲調の変化で、曲ごとに景色が変わる。Chaki Zuluも合流したどデカいスケール感の「君がいない世界」、KMのベース・ラインが本領発揮の「幽霊船」、RIZEのJESSEを迎えヘヴィなリフとグロウルがアツい「Dark Rose」、ストレートなエモ・チューン「Falling Down」と聴きどころ多く、日本的に言えばミクスチャーの超深化形とも。（吉田）

CamScannerでスキャン

Briza Yavaisz Daze

BRIZA I

2019
ブリーザヤヴァイッスダゼ

日本最大の日系ブラジル人コミュニティがある群馬県大泉町を地元に、後にラッパー発掘番組「ラップスタア誕生」でその名を上げたTaiTo擁するクルーの、現在まで4作出ているシリーズのうちの初作。それぞれにポテンシャルを持ったラッパーが揃うが、やはりドラマチックなビートの上でヴァースが進めば進むほど熱を増していく「トリハダ」でのTaiToの存在は（以下略）

haruru犬love dog天使

lost lost dust dream

2018
Our language

トラップやクラウド・ラップ、あるいはアンビエントなどのエクスペリメンタルなビートの上を、堂々と伸びやかに、ときおり不安定に揺れる歌声。リズミカルなラップ。退廃的で、刹那的で、明確な希望のないこの音楽は、だが、とてつもなくパーソナルでリアルに、"今"を"個"を"孤独"を肯定していく。近頃は活動のペースをかなり落としているが、そのマイペースさも過去の作品に強度を与えているように思う。（高久）

Yokai Jaki

Venom

2020
Yokai Jaki

歪んで割れた腹に来るキックと808のハイハット上で"ボケ！ボケ！死ね！死ね！"と叫び繰り返すだけの「ボケ死ね」は、未知なるウイルスの前になす術がなく沈黙した社会のムードのなかで痛快に響き渡り、若者たちの心を鷲掴みにした。ユース・カルチャーにおいて初期衝動こそ、二度は訪れない最大の武器なり。それを見事に封じ込めた、国内におけるトラップ・メタル（以下略）

LISACHRIS

Akasaka

2019
OILWORKS

YENTOWN発のビートメイカーのOILWORKSからのリリース作。エレクトロDJ出身ゆえか型にハマらないパレットから千差万別の肌触りのサウンドを、リスナーの首筋を裏切るように紡いでいく。不穏な重さと幽玄なハーモニーが奇妙に混じり合う「MYCHY MAUS」から只事でなく、唯一無二のワード・センスがシュールな「poison」、新しいblackを引き出す「サワゴゼ」までとにかく超自由。（吉田）

Playsson

Real Trap

2020
West Homi

ブラジル生まれの愛知県豊田、保見団地をレップするラッパーによるEP。展開されるハスリング・ラップにはストリートの殺伐とした空気が充満している。ときおりマッチョな要素が強すぎるように感じなくもないが、「Gang」を聴けば、この国に蔓延る"普通"に疑問を抱かずにはいられない。「Gang」の〈安倍と絶対写真撮らない〉というラインは、名古屋の著名な（以下略）

MIYACHI

WAKARIMASEN

2019
ソニー

バイリンガル・スタイルで登場したラップ・スキルを持つ。代表曲「WAKARIMASEN」や、ジェイ・パークを招いた「MESSIN」など、ニューヨーク仕込みのスムースなフロウと、言語に異和を差しはさむ技法の衝突。〈英語わかりません〉〈喋り方がわさび〉〈喋り方がキャビア〉。日本語と英語の交通、洗練されたナンセンス感覚。日本語のなかに外国語を突っこと。異物としてのラップ言語学。（鶴）

CamScannerでスキャン

変態紳士CLUB

ZURUMUKE

2021
トイズファクトリー

ラッパーのWILYWNKAとレゲエ・ディージェイのVIGORMAN、プロデューサーのGeGからなるトリオ初のフル・アルバムは、それぞれが持ち寄った要素をJポップの領域で解放した野心作だ。ヴァイラル・ヒットとなった「YOKAZE」をはじめ、キャッチーな楽曲が並ぶが、それぞれのソロ作へとリスナーを引き込むような、良い意味でアクのあるところが肝だろう。繰り返し聴きたくなる。（高久）

dodo

normal

2020
FNT

dodoのひとつひとつ、オーソドックスだが着実に、というかいささか執物に、押韻を重ねていく技法。平熱のフロウとデリバリー。自作のチャーミングなビート。それは日常性のラップであり、〝生活〟としてのラップである。快適としての、〝ちいさな生存〟（ダヴィッド・ラプジャード）としての生活。それをラップが織り上げる。〈1日今日も、こなした労働、つらかったけど本当頑張ったじゃん〉（"era it"）。（額）

YamieZimmer

TEMPLATE

2021
1%

洗練をどこまでも遠ざけるビート・アルチザンのソロ。ダークなトラップ曲はもちろん、メロウなピアノと9DOPEのウェッサイ・フロウの組み合わせが絶妙な「ParisHouse」、ローファイな逆回転リズムが3MCの声の肌理まで響かせる「Hot」、ヒップホップはドラムとベースであることを証明する、鎮座DOPENESSとの「BBOY」、異様なストリングス使いの「The Fall」などすべてが超ドープ。（吉田）

EDWARD（我）

202020

2020
Ourlanguage

SoundCloudを中心に楽曲を発表し続けたのち、その可能性を大きく示して見せたこのソロ1stEPで、彼女はロックを聴いて育った土台をヒップホップの形で鮮やかにアウトプットして見せる。孤独や怒りを伸びやかな歌も交えながら紡ぐ様が、内に閉じこもったリード作「LOSER」と、怒りに身を任せた「X」の対照的な2曲により鮮やかに描き出される。2020年、20歳が生きた心象風景。（qxn ryo）

Charlu

CHARLESS

2021
424

マジでいろんなことがあったんだよね、って声をかけたくなってしまう。MCバトルが流行していた5〜6年前からCharluはギラギラに目立っていたけれど、あのときより今のCharluが断然かっこいい。それだけ人生の苦渋を舐めて這い上がってきた経験がCharluの魂に蓄積されてるってことだ。シングルマザーとしてのハードな現実をホットな身体で乗りこなし、あらゆる枷を引きちぎる腕力に見惚れる。（高島）

Tade Dust & Bonbero

Rule of Groove

2021
Night Cat Fam.

磨き上げられてきたラップ・スキルの歴史の最前線を確認したいなら、夜猫族をレップするこのアルバムを聴くべきだ。BonberoはTade Dustは高速のフロウのなかでグルーヴを産み出す。至上のスキルの応酬。かつてBESはSEEDAとともに言ったものだ。〈どうのこうの言ってもしょうがない／結局ラップが巧すぎてしょうがない〉。彼らも同じことを口にする資格がある。（額）

CamScannerでスキャン

ID

BI

2022
JCCTOKYO /
National hot Line

UKドリルが日本のヒップホップ・シーンを席巻する中、シカゴ・ハウスやUKガラージの大胆な導入で別の視角を示したのが本作だ。制作に2年の歳月をかけた入魂ぶりは「Gangsta Work」の緻密な構成からも窺える。クリエイティヴ・チーム＝National hot Lineと共に作り上げた空気感は、リスナーにヴァーチャルなクラブでの一夜を追想させる。特に「03」と「Distance」の繋ぎは印象的。（ゆっつ）

テークエム

THE TAKES

2021
DaysAfterTheDay

Crossy Neonに続く形で全国区でのブレイクを果たした梅田サイファーの中でも随一のスキルをもつテークエムの1stソロ。全曲BACHLOGICによるビートに乗る彼の鋭利なライムとフローも聴きどころだが、自身の家庭環境を吐露した「Mom(s)」など自身の傷や弱さをさらけ出した曲の数々と、その先にある、〈いいヤツでいる／良き世界をまだ諦めないような〉というラスト曲のリリックが感動的。（伊賀）

霊臨

Baka City

2022
三次元遊戯

世の中を斜めから見た、下手なサグよりよっぽど攻めた皮肉たっぷりのリリックに非凡な才能を感じさせるアップカミングなラッパー、霊臨（TAMARIN）の現時点で聴ける代表作は、〝バカなヤツ以外は全員消えた街〟がテーマ。表向きはふざけることに振り切っているが、その裏にはどこにでもいそうな今を生きる若者の視点から語られた、本質を突いた言葉の選択にハッとさせられる瞬間が多々。（一木）

hyunis1000

NERD SPACE PROGRAM

2022
RCSLUM

90年生まれの神戸出身のラッパー／ビートメイカーのファースト・アルバムの電子音楽、オルタナ・ロック、ダンス・ミュージックを含むユニークなサウンドはネットと街の遊びの往復の中で熟成されたのだろう。彼が最初に作ったのはスキー・マスク・ザ・スランプ・ゴッドのフロウを日本語で独自に再現した曲だった。彼はまたXXXテンタシオンに影響を受け、ビートルズのようなヒップホップが作りたいと語る。（一木）

Peterparker69

deadpool

2023
CHAVURL

二人組のうち特にPeterはヒップホップのリスナーで、しかし本作でアウトプットしたのはポップで捻くれたエレクトロニック曲だった。国境を越えて多くの人と共演し、すでにオルタナ・ラップ・シーンの顔となっている彼らの代表作は、テクスチャを徹底的に追求した1枚。アートワークや歌詞のトロピカルな空気から感じられる通り、コンセプトの作り方が非常に巧い。これが〝POP YOUTH〟でプレイされる時代！（つや）

ピーナッツくん

Walk Through the Stars

2022
PeanutsKun

自主制作アニメの主人公から派生してYouTuberとしても活動、成り上がりのエピソードとして華しい動画配信機材を購入するリリックを書き、しっかりとロウ域の出たトラップ・ビートを鳴らす。ラップ・ゲームとはいわばキャラの戦いでもあるが、ピーナッツくんはおよそヒップホップらしからぬ佇まいながらマインドから切り返す形でヒップホップの必要条件を満たし、その過程でベタついた人間くささすら見せる。（つや）

CamScannerでスキャン

JUMADIBA

nobori - 上り

2023
JUMADIBA

3776、ZMS、JJJなどとの共演もそれぞれ話題となり、今まさに勢いでシーンを駆け上っている最中のJUMADIBA。UKロックが好きというだけあって、本作にはPeggy Gou、Tempalayなどが参加するなど、オルタナティヴな雰囲気も香る。彼も何度か出演している、幡ヶ谷フォレストリミットで開催されるパーティー=ZATTO MASSACREもここ数年のシーンを語る上で重要だ。（伊賀）

LANA

19

2023
LANA

ラップはキャッチーでキレのあるラインを考える天才。こぶしが効いた、力強く高音が混んだ歌声も大きな武器で、その二刀流を19歳にして使いこなしている。LANA。「TURN IT UP」や「PULL UP」などの自身を代表するヒット曲に加え、UP THE WAVYとAwichを迎えた「BASH BACH」など、捨て曲なしの6曲。何もかもが楽しい、キラキラした素直な気持ちを思い出させてくれる名作だ。（MINORI）

Lil Soft Tennis

i have a wing

2023
Lil Soft Tennis

レッドブルマイクのサイファー企画ではスーパーカーを、この最新作の「Fucked Up!!」ではくるりを引用。更に全編を通してドリル、ハイパーポップ、ブレイクコアまでを横断する雑食性を披露する。それでもあくまで「俺の職業はTokyo Cipher」と言い切る潔さがまさに、ジャンルの境界線を無効化するような近年の動きを象徴している。その姿は彼の歌うメロディのように新鮮で、爽やかで、清々しい。（伊賀）

MaRI

PENTHOUSE

2023
8ENTERTAINMENT

「Bad Bitch美学」で一般に名前を知られた岐阜出身、シングルマザーを公言するMaRIの世界は、露骨にセクシャルだと感じられがちだが、ダブル・ミーニングを思わせたりバイリンガルであったり、ミソジニーが露骨な日本で物象化された自らをオブジェクトとして逆さまに世界へ開いていく武器。ライヴも春のラップ・フェス「POP YOURS」で証明したように、大舞台でより映える。捨て曲なし。（荏開津）

Skaai

WE'LL DIE THIS WAY

2023
Mary Joy

心地よいウッド・ベースとドラムのシンプルなビートの上で、Skaaiがスピットする「PRO」から始まる本作。皮肉が効いたハイコンテクストなユーモアと、芯のある正直な言葉が共存するリリックはユニークで、英語と日本語をシームレスに行き来するラップは聴き心地がよい。「WE'LL DIE THIS WAY」ではどこか虚しさを感じる浮遊感のあるビートの上で、パワフルな歌声が響くのが印象的だ。（MINORI）

Henny K

"K"

2023
BRAVURA

ゴーゴー・ダンサーからラッパーに、というユニークなプロフィールを持つHenny K。SEEDAとの共演も記憶に新しい彼女のこの初アルバムでは、「カラカラ」（プロデュースはNOT ON the WAVE）の「私にいらないパパ／自分で稼げよバーカ」のような、強気かつユーモアのある、リリックが光る。MARIAと共作の「YARUDA-KEDASHI」ではSIMI LAB「Uncommon」を引用している。（MINORI）

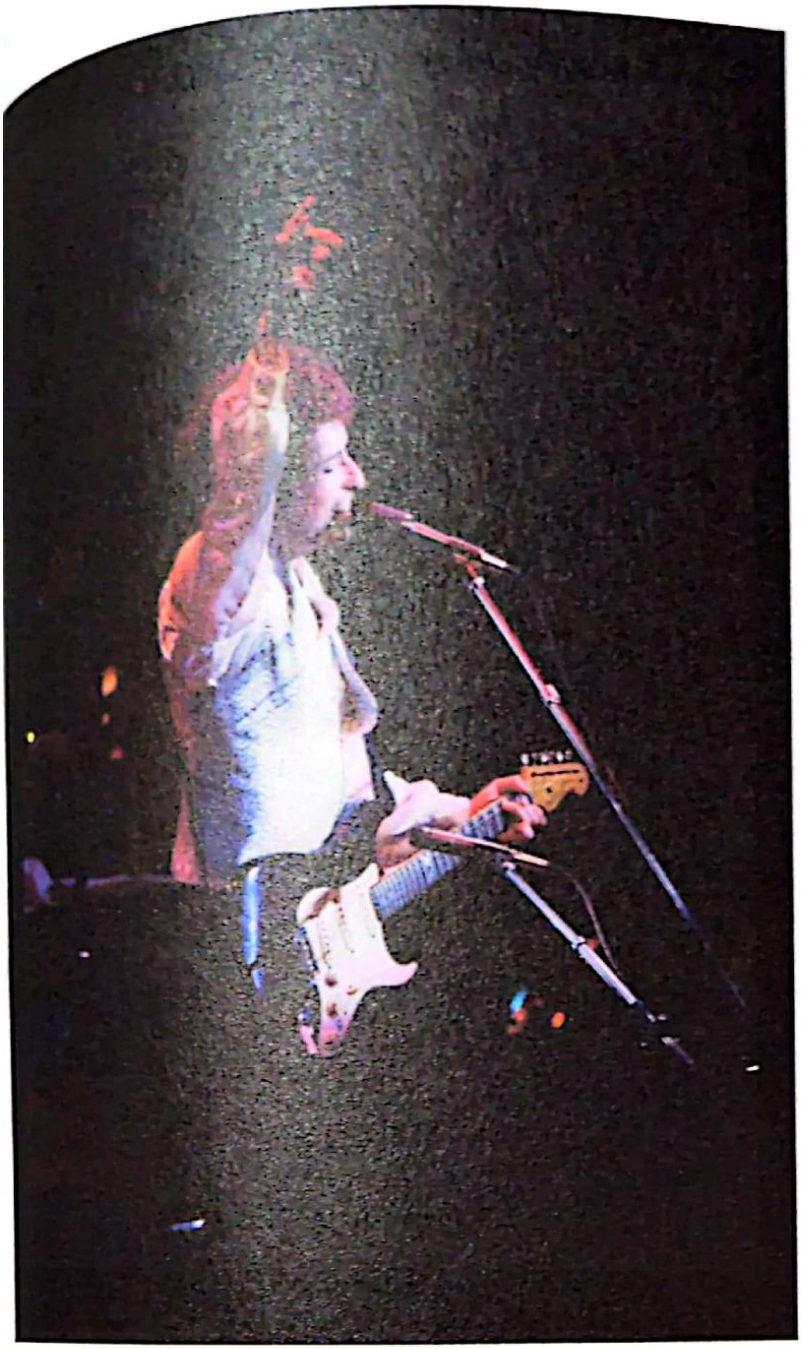
CamScannerでスキャン

ボブ・ディラン

歌は、新しい命を吹き込まれながら、その時代その時代を繋いでいく

初来日公演の2日間の模様が完全再現された『コンプリート武道館』が登場

天辰保文



写真=Joel Bernstein（58ページも）

初めて日本で見るボブ・ディランは、真っ白なスーツ姿で、どんな色だったか失念したが、首にはスカーフを巻いていた。そして、ローリング・サンダー・レヴュー・ツアーのときほどではなかったが、顔は白っぽく、アイラインがくっきりと描かれ、遠目からでも化粧しているのがわかった。

1978年2月20日、場所は日本武道館、ボブ・ディランの初の来日公演は、この日から、それも、テキサスのブルースマン、カーティス・ジョーンズが、1930年代に吹き込んだ「ロンサム・ベッドルーム」という意表を突いた曲で始まった。その後、21日、23日、28日、3月1日、2日、3日、4日の計8日間、東京の日本武道館で、2月24日、25日、26日の3日間、大阪の松下電気体育館で、合計11回の公演をこなした。

この中から、2月28日、3月1日の2日間が録音され、22曲が選ばれ、ライヴ・アルバム『武道館』が発売されたのは、同年11月だ。翌79年には全世界に向けても発売される。その初来日から45年、そのときの両日のライヴの模様がそのままに完全再現という形で発売されるなんて、予想もしなかった。それが、『コンプリート武道館』だ。2月28日、3月1日の2日間が、そのまま各3曲、合計6曲が収録されている。

CamScannerでスキャン

会場にいるような感覚

初日を省いて、翌日からの全公演の幕開けを飾ったのは、「はげしい雨が降る」だった。ただし、インストゥルメンタル・ナンバーとして演奏された。サックス、オルガン、ギター、ヴァイオリンといったように、バンドのメンバー各自がソロ・パートをつなげてバトンを渡していく、メンバーたちの自己紹介のようなものだ。もちろん、バンドのメンバーは、ローリング・サンダー・レヴューにも参加し、このバンドのリーダー格にあたるベースのロブ・ストーナー、同じくローリング・サンダー・レヴューで一緒だったアコースティック・ギターのウィーカルのスティーヴ・ソールズ、リード・ギターのビリー・クロスは、もちろん「ハニー」に出演し、ロブ・ストーナーは一緒にバンドを組んでもあった。キング・クリムゾンにいたこともあるイアン・ウォーレスがドラムス、ジャズ・シーンでも知られるが、サンタナやディー・マーフィなどのセッションもあるアラン・パスクアがキーボードを担当。バグル・スライール、ヴァイオリン、マンドリン、ギター、ドブロと多彩な楽器を操り、ボブ・ディランのお気に入りのデヴィッド・マンスフィールドの活躍も目立った。彼も、ローリング・サンダー・レヴューからの参加だ。その中でも、なんと言っても存在感を放っていたのが、サックスやフルートのスティーヴ・ダグラスだ。フィル・スペクターやブライアン・ウィルソンにも重宝されたレッキング・クルーの一員でもあった、バーカッションのボビー・ホールも、参加作を数えきれないセッション・ミュージシャンだ。そして、3人の女性シンガーたち、デヴィ・ダイ、ジョ・アン・ハリス、ヘレナ・スプリングス、合計11人の大所帯だった。

本編へのプロローグ、あるいは準備運動ともとれるインストゥルメンタル・ナンバーに続くのは、「リボベッション・ブルース」だ。1950年代にビリー・リー・ライリーがメンフィスのサン・レコードに吹き込んだブルースで、ディランはこれを、21日の大阪と26日の東京、2度演奏している。彼のサイトによれば、現在までのツアーを通じてこの曲を演奏したのは、この2度きりだったそうだ。『武道館』にも収録されていない。そんなレアな、今回初めての収録になるので、資料的な価値という点でも取り上げられて、ここになる。何でも取り上げられて、ろくな無しになった男の歌だが、ボブ・ディランは、映画「レナルド・アンド・クララ」で失敗し、離婚もあった。そんな背景をあえるとなかなか意味深に聞こえなくもない。

3月1日は、これが、「ラヴ・ハー・ウィズ・ア・フィーリング」に変わった。1930年代にタンパ・レッドが吹き込み、フレディ・キングからポール・バタフィールド・ブルース・バンドまでのヴァージョンが残されているブルースだ。

そして、軽やかに、賑やかに「ミスター・タンブリン・マン」が続き、全体的には時代をこえて満遍なく選ばれた曲が続いていく。15分程度の休憩を挟んで1部と2部にわかれ、休憩前が「ゴーイング・ゴーイング・ゴーン」、休憩あけは「スーナー・オア・レイター」と、それは全公演で変わらなかった。ただし、この2日間でも、数曲が入れ替わったし、その休憩あけの「スーナー・オア・レイター」をはじめとして、「ラモーナに」「明日は遠く」「アイ・スリー・イット・オール・アウェイ」「アイ・ドント・ビリーヴ・ユウ」「きみはいつなくなる」「北国のルル」などのように、今回初めて耳にする曲もあるし、この女性シンガーたちが、歌ったりしながらのメンバー紹介をしたり、曲間の演出なども含めて、数カ月

初手こそ抑えめだが、その会場にいるような感覚が楽しめる。

「ショウをしに来ただけさ」

当時驚いたのは、曲によっては大きくアレンジが変わり、イントロが始まってもすぐには会場は反応が薄く、しばらくして大きく反応するという瞬間が幾度もあったことだ。ところが、こうやって改めて聴いていると、最近はそれに馴れてしまったせいか余り驚かない。そもそも、オリジナルに忠実である必要はない。歌は、新しい命を吹き込まれながら、その時代その時代を繋いでいくのだ。それでも、「くよくよするなよ」や「天国への扉」のように、レゲエ・アレンジには当時驚いたことを鮮明に思い出させるし、スティーヴ・ダグラスのサックスやフルートがそこに彩りを加え、歌の視界に独特の拡がりをもたらしていく。彼に限らず、このバンドが奏でるサウンドは多彩で、無国籍風なところがあり、時にはエキゾチックでミステリアスな趣さえ醸したので、それも印象に大きく作用したのかもしれない。「ゴーイング・ゴーイング・ゴーン」のように、意図してそうなったのか、歌詞が大きく改められたものもあれば、「アイ・ウォント・ユー」のように、中国服を着て踊る子が登場するオリジナルの最後のブロックがそのまま削除されたのもあったりする。その「アイ・ウォント・ユー」もそうだが、「北国の少女」のように、オルガンが地面を這うように響き、ギターがそこに散る枯葉のような、それ以外はほとんどア・カペラに近い形でディランが言葉を綴っていく様子に接していると、歌が、もっとも効果的に聴き手に届く方法を模索しているようにもみえる。今回、改めて感じたことはそのことだった。歌が、彼に何を求めているのか、そしてそれに応えようと歌い手として真摯な姿が感じられる。

他にも、『コンプリート武道館』で気づいたのは、音がすこぶる鮮明になっていることだ。ディランの歌声も、各楽器の音色も、鋭く贅肉が削ぎ落され、当時抱いた印象とは全く違って聞こえたり、ぼくはいっ

CamScannerでスキャン

たいなにを聴いていたんだろうと、慌てたりさえもする。「イッツ・オールライト・マ」「アイ・スリュー・イット・オール・アウェイ」などでは、胸をかきむしるほどの、激しい歌いっぷりをみせる。かと思えば、同じ曲でも、例えば、『武道館』には3月1日のものが収録されていたのでわからなかったが、28日の「オール・アイ・リアリー・ウォント」のように出だしが調子はずれだったり、歌詞が随分とあちこち飛び散らかったのもある。あまり歌っていなかったのか、1963年に録音した曲だというエクスキューズのようなMCが添えられていたりする。こういうのも、2日間を収録したこの『コンプリート武道館』ならではの楽しみだろう。

「風に吹かれて」は、大袈裟なふるまいを歌が嫌っているのか、ディランは、穏やかに、切々と、言葉一つ一つを丁寧に歌う。彼の中の伝えたい気持ちがあふれんばかりで、しっかりと受け止めたいと、いま改めて思う。その祈りにも聞こえるような歌声を。「アイ・シャル・ビー・リリースト」でも、ディランの歌声が素晴らしい。不必要なものは一切なく、必要なものはすべて揃っている。素直に思いを込めて歌っている。「ライク・ア・ローリング・ストーン」は、楽器が奏でる豊かな音の群れと一緒に、洪水のように襲い掛かってきて、歌の力というのが感じられる。「女の如く」や「アイ・ドント・ビリーヴ・ユウ」では、幾分コントロールされたバランスの良さが歌声から感じられる。「15年前に書き、いまでもぼくにとって大きな意味がある、きみたちにとっても」と前置きして最後に歌ったのは、「時代は変わる」だった。「ゴーイング・ゴーイング・ゴーン」「風に吹かれて」「ザ・マン・イン・ミー」「オー、シスター」「きみは大きな存在」をはじめとして、ディランの宗教観の移行も影響しているのか、全体的に黒人音楽、殊にゴスペルへの接近が強く感じられるのも特徴だ。3人の女性シンガーたちを迎えたのも、そうした意図があってのことだろう。そうやって、ディランの音楽的に重要な季節を封じ込めたドキュメントとしても貴重なものが残ることになった。

45年前、地下鉄の九段下駅から、熱に浮かされるように、毎日、坂を上がって通ったのが思い出される。夢のような8日間だった。少しでもたくさん彼の歌う姿を目に焼きつけておきたかった。少しでも長く彼と同じ空間に身を置いていたかった。ぼくと同じように、何度も通った人たちは少なくなかったと思う。この来日公演の後、世界各地をまわり、10年以上ぶりに大規模なツアーをディランは行なった。その振り出しに、何故日本を選んだのだろう。言葉も文化も歴史も異なるこの日本を。そういえば、羽田空港到着直後に開かれた記者会見で、記者席からの「日本へのメッセージは？」と問われたディランは、こう答えたという。「ショウをしに来ただけさ」と。それも、そっけなく。歌は歌として扱え、それ以上でもなく、それ以下でもない、とでも言っているかのように。いや、そんな思いを噛み締めながら歌と向き合おうとしていたのは、他ならぬディラン本人だったのではないだろうか。

そんなことを思いながら、もう一度、2月28日の最初から聴こうと思う。今度は、全く新しいディランのアルバムを前にしたときのような気分で。

『コンプリート武道館』
ソニー　SICP6540～4(4CD)＊写真、SIJP1100～8(8LP)

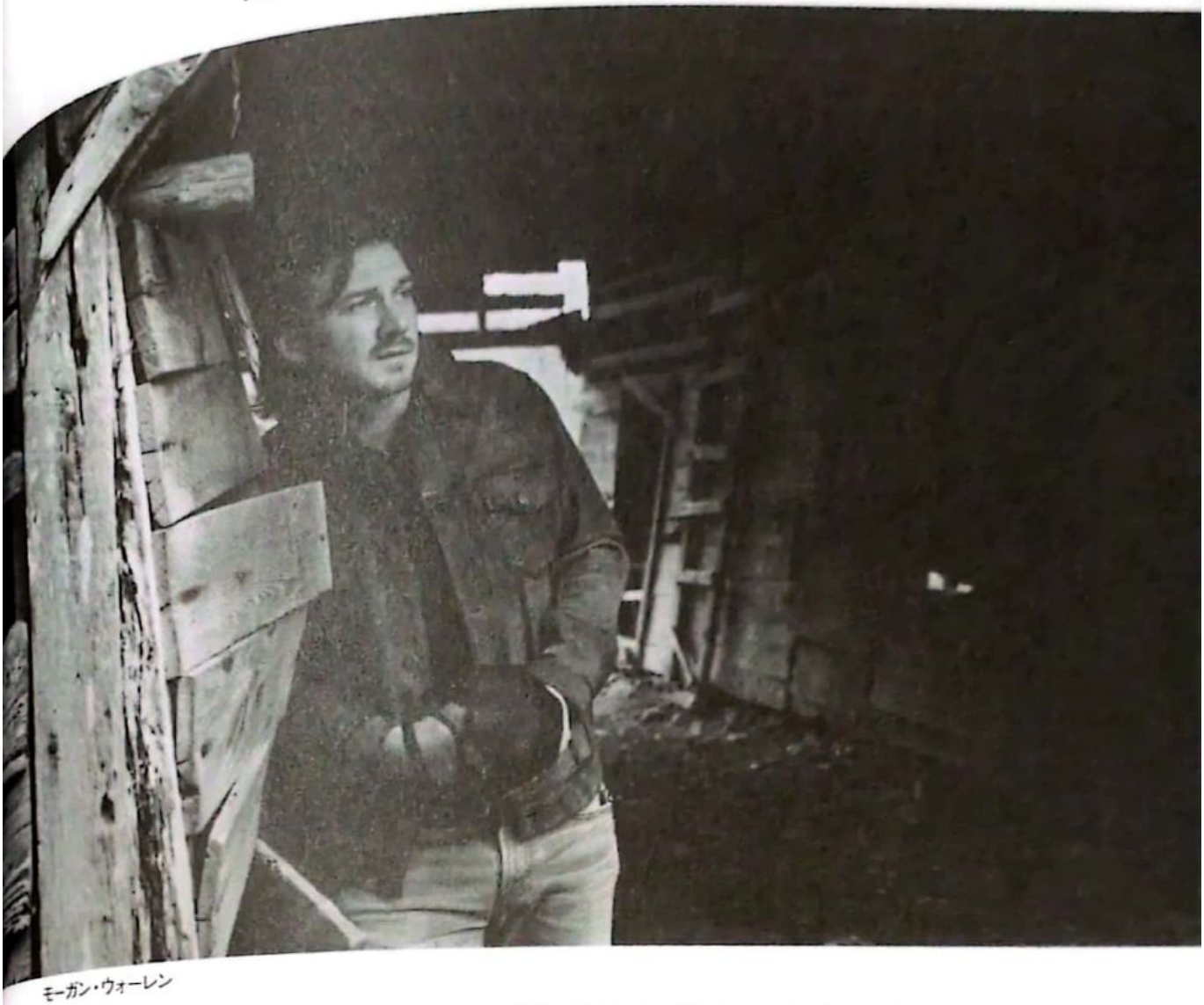
『アナザー武道館』
同　SIJP11009～10(2LP)
オリジナル『武道館』に収録されなかった未発表曲／テイク集

CamScannerでスキャン

特集

なぜ今カントリーなのか

今年、モーガン・ウォーレンがアメリカで大ヒットしたほか、
ケイン・ブラウンやルーク・コムズといった
カントリー系のミュージシャンが活況を呈している。
そこで、リル・ナズ・Xが「オールド・タウン・ロード」を
リリースした2018年ごろを起点に、この現象の背景を探りたい。



モーガン・ウォーレン

SNSなどを活用した情報発信に長けた新世代が台頭し、政治的なスタンスにも少しずつ変化が起きているカントリー・シーン

早坂英貴

CamScannerでスキャン

ストリーミング視聴が右肩上がり

アメリカの音楽シーン、特にチャート上では空前のカントリー・ブームだという。最新の〝ビルボード・ホット100〟の上位を見渡しても、カントリー出身歌手の頂点にそびえるテイラー・スウィフトがいる。続いてザック・ブライアンとケイシー・マスグレイヴスのコラボレーション曲、ルーク・コムズによるトレイシー・チャップマン「ファースト・カー」のカヴァーも長らくチャートの常連だ。そして「まだトップ10にいたのか」というモーガン・ウォーレンの「ラスト・ナイト」を含む2曲。それに次ぐのがカントリー歌手でラッパーのジェリー・ロールとレイニー・ウィルソンのデュエット、新進気鋭のシンガー・ソングライター＝ベイリー・ジマーマンの楽曲と、上位30位だけでもカントリー・シンガーの名前がズラリと名を連ねている。

誤解を恐れずに言うと、カントリー音楽のトレンドは常に時代に〝振り遅れ〟でやってくる。流行の3歩後ろを追いかけながら「私たちはカントリー・ミュージシャンである」というアティテュードだけを残しつつ発展してきた。メインストリームのカントリーは、音を聴いただけだとポップスなのか、ヒップホップなのか、はたまたロック、メタルなのか判定不能な場合も少なくない。

「今なぜカントリーなのかを、2018年を起点に…」というお題を貰ったときに、内心「いやいやアメリカでカントリーが廃れた時期なんて一度もないぞ」というのが正直な感想だった。個人的には、1997年の人混みしか見えなかったNYセントラル・パークのガース・ブルックスの凄まじい人気や、フェスでも日本ではなかなかお目にかかれない大御所カントリー・シンガーたちへの熱狂を目にしてきて、常に太い客がいる不動の人気ジャンルという認識だ。とはいえチャート上では、今年モーガン・ウォーレンの「ラスト・ナイト」が、42年ぶりに男性ソロ・カントリー・アーティストによるチャート首位を獲得。アルバム『ワン・シング・アット・ア・タイム』の収録曲36曲すべてがホット100入りする、まるでドレイクの2017年のアルバム『モア・ライフ』の再現のような現象を起こした。さらに新たなアーティストがどんどん登場し続けている。決して突然変異ではない「アメリカでカントリー・ミュージックが聴かれている理由」。その謎を探っていこうと思う。前提条件として認識しておきたいのは、カントリー・ミュージックの新たな消費トレンドは、Z世代とミレニアル世代のリスニング習慣によって形成されているという事実だ。特にこのジャンルのストリーミングでの視聴は2019年以降右肩上がりで、9億曲再生から今年の下半期約22億曲再生と、実に5年で2・4倍と急増している。

視聴層の割合を細かく分析したカントリー・ミュージック・アソシエーション（CMA）の2019年の調査によると、アメリカの成人の51%がカントリーを聴いており、特に牽引しているミレニアル世代の実に57%がカントリーを聴いているという。さらに若年層のリスナーも増加傾向にあるというのだ。個人的に驚いたのは都市部での人気拡大と、それを支えるリスナーの人種の多様化だ。2014年から18年にかけて、アメリカの上位25の大都市でカントリーのリスナーは12%増加、人口4万人未満の都市では13%の増。アフリカ系アメリカ人のリスナーはこの2014年からの5年間で55%増え、ヒスパニック系は15%増加している。統計的に見ても、もはや地方の白人層だけが聴く音楽ではないことがわかる。このブームの出発点として、カントリー・ミュージックのアーティストと他のジ

ルーク・コムズ

マンルとコラボレーションした「クロスオーヴァーの成功」はきっかけとしては大きい。その最たる例が、2018年の暮れにリリースしたラッパーのリル・ナズ・Xによる「オールド・タウン・ロード」の19週連続1位のメガ・ヒットだろう。ナイン・インチ・ネイルズの「34ゴースツⅣ」のバンジョー部分のフレーズをサンプリングしてトラップを被せたものは、さほど斬新なものではない。とはいえ元ニッキー・ミナージュのファン・アカウントの管理人で、ネット・リテラシーが異常に高いSNSの達人であるリル・ナズ・Xはあるタイミングで「カントリーはバズる」ことに気づいてしまったのだという。

この曲で歌われる「オレはオレの世界を行く」的なヒップホップの価値観と、カントリーを好む層が古くから好むマッチョな世界の親和性。ビックアップ・トラックがポルシェになり、カウボーイ・ハットはグッチのハイ・ブランドとなったが、根の気質は変わらないのだと思う。その後のリミックス・ヴァージョンで、絶大な知名度を誇るヴェテラン・カントリー・シンガー、ビリー・レイ・サイラスを起用したことで、ヒップホップを聴く若年層とカントリーを聴く大人の総取りに成功した。

多様性と昔ながらの価値観

そもそもカントリー界でのジャンルのクロスオーヴァー自体は何ら珍しいものではない。以前にも、ネリーを皮切りに、有名人と共演してシェアを拡大し続けてきたフロリダ・ジョージア・ラインや、ジャスティン・ビーバーとのコラボが大当たりしたダン+シェイなどの存在も大きかったが、カントリーとヒップホップの交配により想定するキャパを遥かに越えた客層を取り込んだ「オールド・タウン・ロード」の大ヒットが昨今のカントリー・ブームを取り巻く環境を語るにあたり非常に説明がしやすい。先にも1980年前半から90年代中期に生まれたミレニアル世代の絶大なカントリー人気について言及したが、2003年にスタートしたオーディション番組「アメリカン・アイドル」の影響も大きいだろう。キャリー・アンダーウッド、スコッティ・マクレアリー、ケリー・クラークソンなど大スターを輩出したが、この伝統的なスター・システムを踏襲し、根強い人気を維持している中堅たち。そこに新たな勢力として加わったのが、ミレニアル世代からZ世代まで幅広い層を取り込んだモーガン・ウォーレン、ルーク・コムズ、ベイリー・ジマーマン、レイニー・ウィルソン、ザック・ブライアン、ジェリー・ロール、ミーガン・モロニーなどの新世代である。SNSなどを活用した情報発信に長け、ファンダムを築くことで今までのカントリー・ミュージシャンとは異なるキャリア・パスで一気にチャートを駆け上がった。

SNSの活用に関して、モーガン・ウォーレンは一時、地獄を見た一人でもある。もともと酒のトラブルや女性問題などで問題児ではあったが、2021年の『デンジャラス：ダブル・アルバム』発売直後にプライヴェートでの人種関連の発言ヴィデオが拡散され、ブラック・ライヴズ・マター運動の真っただ中で、カントリー音楽協会

に除名され、ストリーミングは配信停止に、ラジオなどのメディアは一斉に彼の曲をボイコットし、数々の賞も取り上げられた。

本来であればここでキャリア終了であるが、モーガンは謝罪を繰り返し、人種差別を闘う団体への寄付や、自らのカウンセリング状況などすべて可視化することでキャリアをつなぎ止めた。また過剰なキャンセル・カルチャーへの同情論も巻き起こり、アルバムは大ヒット、その勢いのまま、『ワン・シング・アット・ア・タイム』の空前のヒットで国民的歌手として復活を遂げる。彼の更生プロセスが、コロナ渦で一人の男の物語として消費された面は多かれ少なかれあるだろう。精神的な弱さの吐露など、歌詞などでもスター然としてではなく市井的の人的な親しみやすさや、サブジャンルである〝プロ・カントリー〟の持つチャラさも許容する空気感も、新世代リスナーのツボにハマったように思える。

政治とカントリーというテーマで語るとき、どうしても2000年代初頭、当時のブッシュ大統領の政権やイラク戦争への関与への批判をきっかけに、保守派層リスナーから総スカンになった3人組、ディキシー・チックス（現ザ・チックス）のことを思い出す。当時彼女たちの主張は理解されず「歌手は黙って歌だけ歌ってろ」と、どこかで聞いたフレーズが飛び交った。そんな保守層の音楽のイメージが強いカントリーだが、政治的なスタンスにも少しずつ変化が起きている。

ルーク・コムズのようにドナルド・トランプ前大統領のホワイトハウスでの演奏オファーを蹴ってBLM支持にいち早く声をあげた者もいれば、ミランダ・ランバートのようにトランプ政権下で口籠った先人たちに向かって「カントリー界は、声を上げる必要がある」と主張した者もいる。トランプと全面対決の姿勢を貫いた

トップ・アーティストであるテイラー・スウィフトは、政治や社会問題について近年ますます率直に発言をするようになった。LGBTQの権利、制度的な人種差別に対するスタンス、投票率向上の推進からツアー・スタッフの待遇改善まで取り上げるイシューは多岐に渡る。ケイシー・マスグレイヴスは2013年のデビュー・アルバムというかなり早い時点で収録曲「フォロー・ユア・アロー」でLGBTQへの支持を表明するアンセムを発表している。ザ・チックスは2020年に14年ぶりのアルバム『ガスライター』をリリースする際に、グループ名から南部や白人社会の名残りのある言葉「ディキシー」を取り、再始動した。アルバムでの彼女たちの主張はテイラー・スウィフトとも似た立ち位置だが、やはり闘争により勝ち取った主張はずっしりとした重みを感じる。

と、ここまで語ってきてなんだが、昨今のカントリー・シーンの若返りが、即リベラルな方向性に舵を切ったとも到底思えない。SNSの普及により、ジェイソン・アルディーンのような、昔ながらの南部の価値観、人種問題への眼差し、社会的弱者への批判、銃保有の必要性を訴える振り切ったコンテンツも一部の層に熱烈に支持され、健在なのも事実である。

個人的には、今の男性カントリー歌手が体現しようとしている男性像が、2018年の映画『アリー／スター誕生』で、ブラッドリー・クーパーが演じたジャクソン・メインとダブって見える。酒に溺れ、ピックアップ・トラックに乗る定番の姿は変わらないが、マッチョイズムや男性優位を放棄し、やや罪の意識に苛まれた男性の姿だ。脆さを吐露することに活路を見出した男たちと対照的に、凛とした女性たちによりエンパワーメント・アンセムが鳴り響く現在のカントリー・シーンは、今のアメリカを映し出す鏡のように感じる。

CamScannerでスキャン

カントリーの現在が分かる31枚

構・文＝早坂英貴
文＝赤尾美香、五十嵐正、
池上尚志、岡村詩野、柴崎祐二、
長谷川町蔵、山口智男、渡辺亨

Kylie Minogue
Golden

2018
BMG

カイリー・ミノーグは、80年代後半から英国と豪州のオーストラリアを中心に、ダンス・ポップ系アイコンとして人気を博していた。ところが、このBMG移籍第1弾では新機軸を打ち出した。初のナッシュヴィル録音で、全体的にカントリー・ポップ色が濃い。もっとも、中にはドリー・パートンがダンスフロアに踊り狂ってもよさそうな曲もあり、伝統の響きからもカントリーの枠に縛られていない。（渡辺）

Kacey Musgraves
Golden Hour

2018
MCA

カントリーというよりアメリカーナと呼んだ方がいい新世代アーティストの筆頭のような存在。グラミー賞年間最優秀アルバム賞受賞作でもある本作は、テキサス出身でアリソン・クラウスに憧れる彼女の資質を活かしつつも、エレクトロ、ディスコ、ヨット・ロック系の要素も積極的に取り入れた意欲作で、後にパート・バカラックと共演作を発表するなど、ジャンルを超えた音作りに一役買っている。（岡村）

Jimmie Allen
Mercury Lane

2018
Stoney Creek

ミュージカルのシンガーソングライターからスタートした黒人歌手としては初のACM（アカデミー・オブ・カントリー・ミュージック）新人賞を獲得。生まれも育ちもナッシュヴィル、1曲目のアメリカ讃歌を聴くと歌うように生活のニュースに敏感に反応することで成功した。ひと言でいうと飾り気のない、無難、で安定感大のような作品だが、プロダクションも含め隙なく練っている。現在最高のもつれから裁判係争中でレーベルも解雇、キャリアすべてを失った状態から復活するかも知れないものだ。（岡村）

Miranda Lambert
Wildcard

2019
Vanner

テキサス出身らしいアウトロー・イメージを打ち出している彼女がヒット・チャートの常連という事実は、人々がカントリーに何を求めているのかを教えてくれる。シンセの音色を加え、持ち前のロッキンでファンキーなサウンドをアップデートした7作目。"Way Too Pretty For Prison"のポップな曲調に乗せ、不実な恋人の殺害計画をマレン・モリスと楽々として歌う彼女に、ファンは拍手喝采を贈ったに違いない。（山口）

Lady Gaga & Bradley Cooper
A Star Is Born (Soundtrack)

2018
Interscope

"スター誕生"は4度目の映画化だが、監督／主演のブラッドリー・クーパーはクリス・クリストファーソン主演の70年版を意識したようで、アウトロー・カントリー風味ロックの名手が主人公。クーパーとレディ・ガガが歌う曲を手がけ、ガガは音楽性の幅広さを聞かせるが、大半の共作者／音楽コンサルト／劇中のバンド・リーダーを務めたルーカス・ネルソンが大きな貢献をし、ジェイソン・イズベルも曲を提供。（五十嵐）

CamScannerでスキャン

Florida Georgia Line
Can't Say I Ain't Country
2019
Big Machine

12年のデビュー以来、本国では高い人気を誇るタイラー・ハバードとブライアン・ケリーによるデュオの4作目。ネリーやバックストリート・ボーイズとコラボするなど他スタイルとの融合にも積極的で、本作ではジェイソン・デルーロやハーディをゲストに迎えている。根っこにあるのはカントリーながら、多彩なアプローチの楽曲をすっきりした音作りで聴かせるカントリー色の濃いポップ作といった印象が強い。（赤尾）

Thomas Rhett
Center Point Road
2019
The Valory

現代カントリー界のサラブレッド、トーマス・レットによる4作目。陽性の魅力と非カントリー・ジャンルへの柔軟な対応力が漲る。共同制作者にダン・ハフ、ジェシー・フラシュアらを迎え、ポピュラリティも抜群。一方で平均的米白人青年のノスタルジアを刺激するであろう音楽記号がふんだんに織り込まれており、やたらに「エモ」い。パーティー明け、疲れを引きずりながら仕事に向かう朝のカー・ラジオで聴こう。（柴崎）

Lil Nas X ft. Billy Ray Cyrus
7 EP
2019／Columbia

2019年のメガ・ヒット"Old Town Road"は、様々な意味でソーシャル・メディア時代のクロスオーヴァー現象の幕開けを画した一曲といえるだろう。カントリーとラップを接合した"カントリー・ラップ"は、各ジャンルのコアにしぶとく引き継がれてきた本質主義的な呪縛を転覆したが、リル・ナズ・Xの手法は、さらにある種の"タグ"操作のごとき軽味すら感じさせた。ナイン・インチ・ネイルズの楽曲から孫サンプリングされたバンジョーの響きと、トラップのビートの融合には、"○○というジャンルのサウンドはこうあるべき"という規範意識を吹き飛ばす、ハイパーポップな野心が刻まれていたのだ。カントリー・スター、ビリー・レイ・サイラスもこのムーヴメントに合流し、彼を起用した同曲のリミックス版もヒット。若き黒人クイア・アーティストが、数々のミームを携えて、カントリー・チャートを含めた主流シーンを席巻する。なんと痛快なコンヴァージェンス・カルチャーの勝利であったことか。カーディ・Bとの"Rodeo"も必聴。（柴崎）

Chris Stapleton
Starting Over
2020
Mercury

ケンタッキー出身、15年に37歳でソロ・デビューした遅咲きながら、順調にキャリアを重ねた彼の4作目にして、グラミー賞最優秀カントリー・アルバム受賞作。マイク・キャンベルやベンモント・テンチをサポートに迎え、ガイ・クラークやジョン・フォガティの曲も交えながら、日常を見つめ、自分自身を見つめて歌う歌が体の奥底から湧き上がってくるのを感じる。その深みと渋みの中で妻モーガンとの重唱が映える。（赤尾）

Diplo Presents Thomas Wesley
Chapter 1: Snake Oil
2020
Columbia

ビヨンセやM.I.A.との仕事で知られるアーバン〜ポップ系の売れっ子プロデューサーが、オルター・エゴ＝トーマス・ウェズリー名義で制作したカントリー・アルバム。モーガン・ウォーレンやザック・ブラウン、ビリー・レイ&ノアのサイラス父娘らを招いてポップ・カントリー・ミーツ・EDMとでも形容すべきカラフルなサウンドを展開している。実はテネシー出身の彼にとって、本作こそが本音に近いのかも。（長谷川）

CamScannerでスキャン

The Chicks
Gaslighter

2020
Columbia

ディクシー・チックスが、チックスと改名しての14年ぶりのアルバム。改名は、ブラック・ライヴス・マターを経て、ディクシーという言葉が人種差別をイメージさせるという理由から。リード・シングルの「ガスライター」とは、心理的虐待の一種であるガスライティングをする人の意。個人的なテーマの曲が並ぶが、20年の大統領選を睨みつつ、カントリー界のリベラリズムという思想的多様性を示した一面も。（池上）

Gabby Barrett
Goldmine

2020
Warner

米のリアリティ番組「アメリカン・アイドル」に出演して注目を集めたペンシルヴェニア州出身の23歳。という経歴によってライトに見られがちだが、ティーンの頃から聖歌隊で歌うなどの場数を踏んできた。最高位3位を記録した先行曲"I Love..."（チャーリー・プースとのデュエット・ヴァージョンも）を含むこのデビュー作でも度胸のある堂々たる歌いっぷりが気持ちいい。プロデュースはロス・コッパーマン。（岡村）

Taylor Swift
Red (Taylor's Version)

2021／Republic

いわゆる正統派カントリーの曲はほぼない。だが、軽やかで抜けのいいアコースティック・ギターの音に対して、激しくコンプをかけたアタックの強いドラムが激しくぶつかる「22」や大ヒット曲「私たちは絶対に絶対にヨリを戻したりしない」のような曲が、ウェルメイドで屈強なサウンドを標榜するポップ時代のカントリー音楽の一つの完成形を伝えていることは歴史的にも重要なトピックだろう。そしてそれはもはや様々なジャンル、スタイルの音楽が全方位で交差する時代に、テイラーはカントリーがヒップホップやR&Bのグルーヴにも負けないタフな音楽であることを証明した。少し乾いた自身の柔らかでハスキーなヴォーカルが、マックス・マーティン、シェルバックといったプロデューサーによるシャープなサウンドと拮抗することを自ら知らしめた彼女は、後に原盤権を取り戻すために寸分違わぬ再録をこのアルバムでも実現。カントリーの録音物としての耐久性を試したような本作で、失恋による脆い感情を描く狙いも見事だ。（岡村）

Carrie Underwood
My Savior

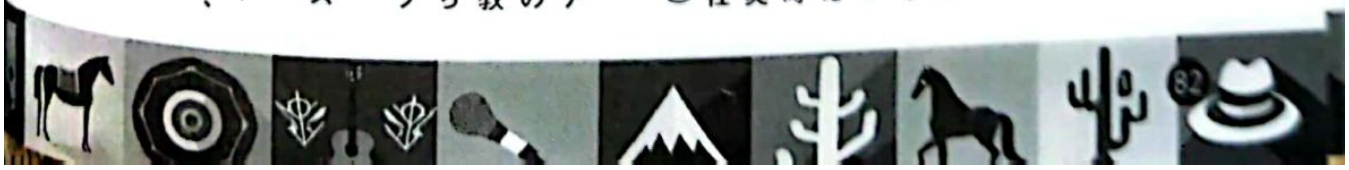
2021
Capitol

TV番組「アメリカン・アイドル」出身者の中で最高の成功者。地元オクラホマの教会出身で、デビュー直後からクリスチャン・ミュージック方面でも人気を博してきた。通算8枚目のこれは初のゴスペルのカヴァー・アルバム。パンデミックの中、ポジティヴな気持ちで制作したといい、伝統的でカントリー的なムードを残しつつも洗練されたアレンジが施され、気持ちの乗ったヴォーカルも含め、非常に完成度が高い。（池上）

Cody Johnson
Human
The Double Album

2021
Cojo

ジョージ・ストレイトやウィリー・ネルソンなどの流れにある新伝統主義のアーティスト。サウンドよりも歌、王道のさらにど真ん中を貫くそのスタイルから、あえて"カントリー歌手"と呼びたい。前職がテキサス州刑事司法省というのも、実に保守的な匂いがする。これはインディーズで6枚のアルバムを出した後のメジャー2枚目。この時代にあえて2枚組。この古臭さが現在にあっては逆に個性として際立つ。（池上）



CamScannerでスキャン

Dan + Shay
Good Things

2021
Warner

ルックスからメキシコ系と間違われがちなこの白人デュオ（ダンには日系の血も）は、それぞれエモ・バンドで活動、T・ペインのレーベルと契約という過去を持つだけあって、クロスオーヴァーな音楽性が持ち味。それが全開となった本作からは、ジャスティン・ビーバーを招いた“10,000 Hours”が総合チャートで最高4位を記録。カントリー・チャートでも史上4番目のチャート在位を記録するロング・ヒットとなった。（長谷川）

Dolly Parton
Run, Rose, Run

2022
Butterfly

カントリーのスーパースター、米国のアイコンであるドリーの22年作。人気作家ジェイムズ・パターソンとの共著による初の小説の挿入歌的な曲集だ。主人公はカントリー界で成功を目指す若いシンガー・ソングライターで、彼女とその指南役の先輩歌手の両者にドリーの人生経験が盛り込まれている。バンジョーとフィドルが高らかなブルーグラス調の4曲を含み、古典的カントリーとポップの均衡をとった内容だ。（五十嵐）

Mickey Guyton
Remember Her Name

2021
Capitol

11年にメジャーと契約、15年にヒットを放つが、幅広い声域の素晴らしい歌手なのに、このアルバムまでにさらに6年かかった。黒人女性だからだ。ブラック・ライヴズ・マター運動の最中に「ブラック・ライク・ミー」でセンセーションを巻き起こすが、それでもカントリー・ラジオの強い抵抗に遭った。テキサスの田舎で育ち、ナッシュヴィルで苦闘してきた、そんな人生を反映した曲が並ぶ（共作者も女性ばかり）。（五十嵐）

Orville Peck
Bronco

2022
Columbia

南アフリカ共和国に生まれ、15歳まで同国で過ごし、20代半ばの時はロンドンで演劇を学んだカナダ人。本来はバンク・バンドのドラマーで、ゲイで、オーヴィル・ペックとしては覆面で顔を隠して活動している。この2作目には、プロフィールがほぼ反映されている。西部劇的ロマンティシズム、カウボーイの孤独、性的マイノリティの愛などが詰め込まれた“ペルソナ”としての作品だ。全体的に薄暗い影を帯びている。（渡辺）

Kane Brown
Different Man

2022
RCA

93年テネシー生まれのブラウンはアフリカ系、欧州系、チェロキー族のミックス。ルックスはまるでR&Bシンガーだが、事実R&Bで身を立てようとしていた時期もあったらしい。その経験はオートチューンを駆使したヒット曲“Buy Me a Boat”にも活かされているが、ヴェテランのダン・ハフらの手によるトラックは意外とオーソドックスで、そのミックス具合が面白い。ブレイク・シェルトンが客演。（長谷川）

Lainey Wilson
Bell Bottom Country

2022
Broken Bow

注目を集めた前作からたたみかけるようにリリースした4作目。ブルース、R&B、ファンクのみならず、シンセを使いながらポップスのエッセンスも吸収した音楽性に加え、タフな女性像を打ち出しているという意味でも現代の主流派カントリーのロール・モデルと言えそうだ。男社会で奮闘する女性のアンセムとして蘇らせた4ノン・ブロンズによる93年のヒット曲“What's Up?”のカヴァーも見事にハマっている。（山口）

CamScannerでスキャン

Noah Cyrus
The Hardest Part
2022 / Columbia

ノア・サイラスの父親は、ヴェテランのカントリー歌手ビリー・レイ・サイラス。7歳上の姉は、歌手で女優としても有名なマイリー・サイラス。父方の祖先はチェロキー族のネイティヴ・アメリカン。こんな血筋をひくノアは、16年からシングルをコンスタントに発表してきた。昨年発表されたこのファースト・アルバムの主要プロデューサーは、マイク・クロッシー。初期のアークティック・モンキーズをはじめ、主にロック・バンドを手掛けてきた人物だ。また、4曲目は、デス・キャブ・フォー・キューティーのベン・ギバードとのデュエット。そして全曲がプロデューサーやソングライターとの共作であるものの、ノアは曲作りにも関わっている。

このような本作は、インディ・ロックの要素を持ち合わせたカントリー・ポップ系シンガー・ソングライターのアルバムといった色合いが濃い。各曲には、まだ20代前半のノアの内面も反映されている。強い意志と同時に心の揺らぎや痛みも伝わってくる感じが、シンガー・ソングライター的だ。（渡辺）

Hardy
The Mockingbird & The Crow
2023
Big Loud

ナッシュヴィルでカントリーのソングライターとしてキャリアをスタートさせたミシシッピ生まれのシンガー・ソングライター。その2作目はロックの影響をダイナミックに打ち出している。空間系の音作りやギターの轟音を取り入れながら、レイニー・ウィルソンとデュエットしたバラードの3曲目を含め、まだカントリー調と言える前半と、もはやオルタナ・メタルとしか言えない後半のギャップは、大胆の一言に尽きる。（山口）

Zach Bryan
American Heartbreak
2022
Warner

ザック・ブライアンは、ストリーミング時代に強固なファンダムを作ることでシーンでの地位を築いた。生きることへのぼんやりとした不安や恐怖を吐露することで若いリスナーの絶大な共感を得た。我を貫いているように見せているが、スタイルはカントリー・ファン志向に意識的に寄せていて戦略的だ。仲間や家族愛など普遍的なテーマに加え元米兵という経歴が潜在的に保守、愛国層に支持されているようにも感じる。（早坂）

Megan Moroney
Lucky
2023
Columbia

カレッジ・フットボール・チームへの忠誠敬愛ぶりを歌う「テネシー・オレンジ」でブレイクしたミーガン・モロニーのデビュー作。ナッシュヴィルの作曲チームとのタッグとSNSでのバズの合わせ技で一躍人気者の仲間入りをした。自ら“エモ・カウガール”と名乗るとおり聴き手が泣ける悲しい曲が多く、楽曲は伝統的なカントリーを忠実に踏襲している。今後のネオ・トラディショナルを牽引する存在になりそうだ。（早坂）

Margo Price
Strays
2023
Loma Vista

イリノイ州アレド出身、現在はナッシュヴィルを拠点にするマーゴ。公私のパートナー、ジェレミー・アイヴィが助力し、ジョナサン・ウィルソンが共同プロデュースした4作目。中絶の権利や薬物乱用、セルフ・イメージなどをテーマにした各曲には、カントリーという枠にとどまらない、ロック、ポップ、サイケ…、時にはミニマルなエレクトリック音も用いて豊かな感情そのままの、豊かなアレンジが施された。（赤尾）

CamScannerでスキャン

Jelly Roll
Whitsitt Chapel

2023
BMG

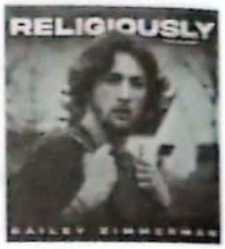
84年テネシー生まれのジェリー・ロールは白人ながらヒップノタイズ・マインズからデビューした純然たるラッパー。しかし徐々にアウトロー・カントリーの精神性に惹かれていき、前作収録の"Son Of A Preacher Man"の大ヒットを経た本作で、カントリー・アーティストに音楽性込みで完全転向した。犯罪とアルコールにまみれたサザン・ゴシック的な歌詞世界に、サウス・ラップとカントリーの共通項を見出せるアルバム。（長谷川）

Shania Twain
Queen Of Me

2023
Republic

カナダ出身のシンガー・ソングライター／女優、シャナイア・トゥエインによる6作目のアルバム。ライム病の発症と喉の手術を経て制作されたカム・バック作で、エレクトロ・ポップへと大幅に接近したサウンドが新鮮だ。もはや「カントリー性」を云々するのを放棄させるほどにハイブリッドな内容だが、一方で、その説得力に満ちた歌声やアコギ、歌詞、そして力強いカバー・アートは、確かに伝統に係留されている。（柴崎）

Bailey Zimmerman
Religiously. The Album.



2023
Warner

00年生まれの期待の若手で、カントリー界でいま最も勢いのあるアーティスト。イリノイ州の小さな町出身の典型的なブルー・カラーだったが、その出自から想像されるマッチョなイメージはない。弱さを隠さず、ざらついた心を歌うトーチ・ソングと、どこかオアシスを思わせる、込み上げるメロディが共感を呼んだのだろう。アルバムはデビュー作にして総合7位、カントリー3位、ストリーミングでも累計7億回に迫る。（池上）

Luke Combs
Gettin' Old

2023
Columbia

学生時代にカントリー・シンガーを志し、ナッシュヴィルへと拠点を移した本格派。ヴィンス・ギルやティム・マッグロウらの影響下にあることがわかるが、暑苦しいまでの熱唱型ヴォーカルでもあるし、この4作目では家族、成長、ヒューマニズムなどをテーマにしているのもあってか、曲によってはブルース・スプリングスティーンを連想させたりもする。トレイシー・チャップマン"Fast Car"のカヴァーが秀逸。（岡村）

Morgan Wallen
One Thing At A Time

2023 Big Loud

正直なところ「ラスト・ナイト」のメガな売れぶりと歌詞を耳にして、どうして21世紀に「復縁を迫る未練たらたらな男と酒」のようなベタな内容が流行るのかと困惑したが、モーガン・ウォーレンは新たなメインストリームを作った存在であり、カントリーの世界ではガース・ブルックス以来の空前のビック・ウェイヴにいることは紛れもない事実だ。

この人がちょっと面白いなと思うのは、数年前にキャンセル・カルチャーの嵐に放り込まれて慈善活動やら謝罪を尽くして世間に許され、見事復活した点である。落とされてから戻ってくる難しさを考えると、完膚なきまで不祥事セレブはぶっ潰すアメリカで、稀有な事象としても興味をそそられる。肝心のアルバムだが打ち込みビートにラップと、保守的なカントリー愛好者には異端だが、ニュートラルな聴き手にとって、楽曲で頻繁に耳にするスライド・ギターのサウンドに象徴される"想像する理想的なカントリー音楽"として現在、最も判りやい形で機能しているのがこのアルバムなのだと思う。（早坂）

CamScannerでスキャン

ヌバイア・ガルシア

その音楽を作ってくれた人々がいたからこそ、自分が今の音楽を作れるんだってことを忘れないこと

ジャズを超えて大きな注目を集めているUKのサックス奏者が初の単独来日

原雅明

10月2日、ブルーノート東京で（写真＝古賀恒雄）

父はカリブ海のトリニダード・トバゴに、母は南米のガイアナ共和国にルーツを持ち、サウス・ロンドンのジャズ・シーンで頭角を現して、アルバム“Source”でワールドワイドにデビューを飾ったヌバイア・ガルシア。テナー・サックスの豪快なブロウと、UKの多様な文化を吸収してきた幅広い音楽性は、ジャズのテリトリーを超えて大きな注目を集めている。

クルアンビンのライヴ・アルバム・シリーズにフィーチャーされ、“Live At Radio City Music Hall”もリリースされたばかりだ。1990年代後半のUKガラージへのオマージュであり、新機軸といえるシングル“Lean In”を発表し、初の単独来日公演を実現した彼女に、ライヴ直前に話を訊いた。

――“Lean In”はUKガラージにインスパイアされたとのことですが、具体的にどのような影響を受けてきたのですか。

「私が10代後半の頃、周りでもすごい人気だった。もちろんアンダーグラウンドな音楽で、メインストリームで人気だったわけではないけど、みんなでクラブに出かけて一緒にダンスをすることを楽しんだの。“Lean In”は、90年代のアットジャズ（マーティン・アイヴァーソン）の感じにちょっと似ていると思う。当時の自分にとっては、すごく大きな部分を占めていた。今回は、即興であいうのをやってみたいって思い浮かんだの。どうやって取り入れるか、すごくいいチャレンジになった」

――あなたのリミックスも手掛けているマーク・ド・クライヴ・ロウは、2000年前後にアットジャズもいたウェスト・ロンドンのブロークンビーツのシーンにいましたね。

「彼もこの間、日本に来てたわよね」

――はい。それで、彼から、当時はピアノを弾きすぎないようにしていた、と聞いたことがあります。DJやプロデューサーが主導したシーンで、ジャズの演奏が目立つと、引かれてしまうからだそうです。しかし、その後に新しいブレ

CamScannerでスキャン

イヤーが台頭してきた結果が、いまのUKジャズのシーンの広がりだと思います。そこには、どんな変化があったのでしょうか。

「確かに、ブロークンビーツの時って、そういう風潮がちょっとあったんじゃないかなと思う。みんなが同じダンス、同じルーティンをやってて、その一部になって楽しむみたいなのがあった。でも、自分たちの世代はもっといろんなタイプのヴェニューで演奏するようになって、それでだんだん受け入れられ始めたんだと思う。特に、〝スティーズ(Steez)〟の影響が大きかった」

――サウス・ロンドンで定期的に開催されていたイヴェントですね。

「そう。自分の周りも含め、そこに足を運ぶ人がどんどん増えていって、いろんな音楽に触れる機会もそこで生まれていったの。ジャズを演奏しても、皆が受け入れてくれるような体制が、スティーズをはじめとした場所でどんどん広がっていったと思う。プロデューサーやDJに出会えることも増えたし、若いクリエイターがみんな交わるようになっていった」

――あなたは学校だけではなく、トゥモロウズ・ウォーリアーズのような組織でも学び、財団などからもサポートを受けて活動してきました。そこで得られたことで、いまも大切に思うことは何でしょうか。

「トゥモロウズ・ウォーリアーズは、自分がいた頃はいろんな人が参加できる、無料で音楽が学べる唯一の場だった。イギリスの中では、やはり白人が大部分を占める機関が多かったの。でも、トゥモロウズ・ウォーリアーズは、ジェンダーも、人種や文化も多様性を保つことを目的としている。それを、自分も常に意識するようになったことは大きいと思う」

――〝Source〟はアメリカのジャズ・レーベル(コンコード)からのリリースでした。アメリカで学んだり、活動拠点を移そうと考えたことはありましたか。

「アメリカのミュージシャンシップや、歴史、文化は素晴らしいと思う。でも、やっぱり自分が住んでる場所とは本当に違うところね。アメリカで学び、素晴らしい経験をしているミュージシャンもたくさんいることは知っているけど、うまくいかなかった時のリスクが高いし、段違いでハードなのも知っている。自分の周りで、馴染めなかった人たちもいる。だから、社会的に自分には合わないと思う」

――〝Source〟は、ルーツ・レゲエ、ナイヤビンギへのアプローチもあれば、クンビアもジャズの即興もある。ガイアナの民謡やカリブ海のカーニヴァル文化からの影響など、多様な文化と音楽が混じってましたが、あなた自身はアルバムで何を発見しましたか。

「曲の作り方、様々な要素の結び付け方といったプロセスは、自分自身も楽しむことができたし、本当に勉強になった。初めてヴォーカルを使った曲を作ったし、ジャズだけではなく、いろんなものを取り込むことの魅力を発見できた」

――クンビアのラ・ペルラとの演奏が特に印象深かったですが、あなたにとって異文化と言える音楽との接点を探る際に、留意していることを教えてください。

「経緯を忘れないこと。そのカルチャーにちゃんと携わってる人と作業をすること。あとは、その音楽を作ってるのが自分じゃないってことを考え、もう既に作ってくれた人々がいたからこそ、その音楽が存在し、自分が今の音楽を作れるんだっていうことを忘れないこと。それを忘れちゃう人ってすごく多いと思う」

――ジャズ・ミュージシャンであることはアイデンティティの拠りどころになっていますか。

「それは、私が決めることではなく、皆さんがどう私を呼ぶかだと思う。でも、私自身はただの〝ミュージシャン〟だと思っている。ジャズは大好きで、ストレートなジャズも、伝統的なものも好きだし、即興も好き。でも、他のスタイルの音楽も好きだし、クラシックも勉強していて、好きなものもある。そのすべてが私だと思う」

〔10月4日　表参道・ブルーノートで〕

'Lean In'
Concord

CamScannerでスキャン

キンクス

単なるヒストリー盤とは違う、大河小説といった趣きの結成60周年記念アンソロジー・シリーズ

大鷹俊一

ロック界きっての険悪兄弟で知られるレイ、デイヴのデイヴィス兄弟が力を合わせたザ・キンクスの新作が出るかも、とのニュースが世界に流れたのは5年前のこと。昔からのキンクス・ファンには慣れっこの話題ではあるものの、年齢や、大病をしたデイヴのことを考えると、いよいよコレはあり得るのかも、と考えたくなったが…その後、旧メンバーが次々と亡くなったりと暗いニュースが続き、逆に気が重くなっていた。そんな中、救いの光となったのが今年3月から始まった結成60周年記念アンソロジー・シリーズで、今後2年間にわたって行われる企画だそうだ。

その第1弾が3月24日に出た"コンプリート・ポール・マッカートニー"

もの。フィジカルはCD（36曲）、LP（30曲）ともに2枚組で、すべてオリジナル音源に最新リマスターが施されてシャープな音で楽しめる。またレイ、デイヴに加え、オリジナル・メンバーであるミック・エイヴォリー（ds）によってコメントが付けられている。

曲順は発表順とか時代を追うのではなく、いろいろと深読みをさせるような四つの枠組みに分けてまとめられ、それぞれ副題が付いているのがミソで、出世作「ユー・リアリー・ガット・ミー」に始まり、シングル「サニー・アフタヌーン」のB面であったデイヴがリード・ヴォーカルを取る「僕はうぬぼれ屋」までの最初期には〝男になること、冒険を求めること、自分らしさを見つけること、そして女の娘についての歌〟と付けられている。

またロンドンを訪れたロック・ファンなら必ず頭で鳴り響きだすはずの名曲「ウォータールー・サンセット」で始まり、「シャングリ・ラ」で終わる最終章には〝新たな出発、新たな愛、しかし君は本当に変わったのか？まだ探求と女の娘に悩まされている〟と付けられている。No.1ヒットを次々と飛ばし、64年頃は間違いなくビートルズに次ぐ人気者であった時代だけに魅力的な曲がどっさりだが、レイのキャッチーなメロディと巧みなフック、

CamScannerでスキャン

ク・ガルサを始め錚々のハリウッド・スターたちに捧げられた楽曲「セルロイド・ヒーローズ」のようなナンバーは永遠に聴かれ続けるだろう。

こうした彼らの初期のナンバーは、契約していたパイ・レコードが経営難になったおかげで、各国でいろいろな形でベスト盤、編集盤が出されたので、アンソロジーと言われても今更なぁ、と思うヴェテラン・ファンも多いのはよーくわかるが、今回のリマスターはそんな人の耳にも新鮮に響くクオリティとなってるのが嬉しい。気合が違います(笑)。

そしてこの11月にリリースされたアンソロジー第2弾が『The Journey - Part 2』で、今度も65年から75年にかけての最初期の音源がCD（34曲）、LP（29曲）、共に2枚組の最新リマスターで収められている。注目の一つがライヴの「エヴリバディズ・スター」を含む6曲に、レイによるリミックスが成されていることで、意欲的な姿勢が心強いし、またデイヴの「クリーピング・ジーン」などがしっかりと彼のリードだとクレジットされているあたりも雪解けムード全開と捉えていいのでは（希望！）。

今回もまた四つのパートに分けられ、65年の「ティル・ジ・エンド・オブ・ザ・デイ」に始まるパート1には、『人生がひっくり返り、ジャーニーマンを取り巻く世界は崩れ始める』と分けられた。自らをジャーニーマン（旅人、渡り職人的なイメージか）とするあたりのレイの皮肉な目線は相変わらずだが、70年代半ばの「プリザヴェイション」など、コンセプチュアルな方向へ傾いていたこともあってか、今回の4パートはすべてジャーニーマンがキーワードで、パート2は『幽霊とダーク・エンジェルに迷わされるジャーニーマン』ときた。このパート、大好きな「ローラ」、そしてヒットした「サニー・アフタヌーン」と続くのだが、ルー・リードの名曲を掲げたヴィム・ヴェンダースの最新映画『PERFECT DAYS』にも「サニー・アフタヌーン」が流れる。主人公が穏やかな日常のルーティンを満足気にこなしていくシーンで、まさにぴったりの曲調なのだが、奥の方から当時の重税に苦しむアーティストや貴族たちの姿が浮かぶナンバーで、

『ダーク・エンジェル』のフレーズに思わずニヤリ。

その後のパート分けは『ジャーニーマンは冥界の亡霊や悪魔に誘惑され、失われた純潔を探し求める』『ジャーニーマンは試練を克服し、絶望が歓喜に変わる』『旅立ちとの再会』と続く。どれもキンクス史と照らし合わせて妄想きたくなるし、裏読みもマニアたちの中で繰り広げられそう。いずれにしてもレイならではのドラマ仕立てが、このアンソロジー・シリーズを単なるベスト盤、ヒストリー盤とは別のものとし、大河小説といった趣きにしている。今後、70年代半ば以降、アリスタに移籍しての『スリープウォーカー』（77年）に始まる時代へ続くのだろうが、ここからアメリカで人気大爆発、ライヴ・バンドとしてもハイ・テンションな活躍を見せるだけに、当然ながら珍しい音源もたっぷり出てくるはずで、これは初期とはまた違った様相となりそうで、ますます楽しみになる。

そしてゴールには30年ぶり（！）の新作があるはず！　待ってます!!

"The Journey - Part 1"
BMG

"The Journey - Part 2"
BMG

CamScannerでスキャン

アレステッド・ディベロップメント

ババ・オジェイの"精神"は生き続けている

"続ける"ことの大切さを示す、アトランタのレジェンド的ヒップホップ・グループが来日

印南敦史

米ジョージア州アトランタから、アレステッド・ディベロップメントというグループが登場したのは1992年のことだ。あれからもう31年も経っているとは驚かされるばかりだが、ともあれデビュー・アルバム"3 Years, 5 Months & 2 Days In The Life Of..."からファースト・シングル"Tennessee"を筆頭に、"People Everyday"、"Mr. Wendal"、"Natural"とヒット・シングルを連発した彼らは"圧倒的異端"だった。そもそも現在とは違い、当時のアトランタはまだヒップホップ・イメージでくくられることの少ない場所だったのだ。

だいいち、あの時代の潮流はといえば、暴力的なイメージを前面に押し出したギャングスタ・ラップである。そんな時期に、「ナチュラル」と歌うようなアプローチをしてみせたのだ。

しかも重要なポイントは、そんな彼らの立ち振る舞いにまったく違和感がなかったことだ。いうまでもなく、グループとしてのコンセプトは"オーガニック"だが、一方、彼らはヒップホップ・ミュージックとしての基本から決して外れなかった。たとえば"3 Years..."の冒頭を飾る"Mama's Always On Stage"がそうであったように、生楽器の質感を活かしたトラックは聴きやすいだけではなく、スクラッチやブレイク・ミックスなどヒップホップの構成要素とも抜群の相性を示していたのである。ギャングスタ・ラップにハマっていた僕が抵抗をまったく感じなかったのも、彼らのサウンドに「新たなヒップホップらしさ」が示されていたからだ。スライ&ザ・ファミリー・ストーンの"Everyday People"を下敷きにして"People Everyday"を生み出すなど先達の功績に敬意を示しつつ、そこに自分たちなりの新しさを盛り込んでいたのである。

そんなサウンドが新鮮でないはずがなく、僕も"3 Years..."を日常的に楽しんでいた。そう、「聴き込んでいた」というよりは「楽

CamScannerでスキャン

しんでいた」というほうが近かったのだ。なにしろ英語に聴けるのに、ヒップホップとしての完成度も備わっていたのだから。

余談だが、"3 Years..."を耳にするといまでも、日産のショボい中古車であちこちを動き回っていた1992年当時のことを思い出す。サラリーマン生活にほとほと疲れ、ストレス解消のために目的もなく片田舎を走ったりしていたあのころ、カーステでよくこのアルバムをかけていたのだ。他のヒップホップとは明らかに異なるアーシーでオーガニックなサウンドは、目の前を通り過ぎていく枯れた景色によく似合っていた。

しかもそれは単に聴きやすいだけでなく、クラブ・プレイにも適していた。事実、"Tennessee"がそうであるように、彼らの12インチ・シングルには各種リミックス・ヴァージョンに加え、"For DJ's Only"と表記されたDJ向けのビートなども収録されていた。リミックス・ヴァージョンはそののち当たり前のものとして浸透していったわけだが、彼らはある意味で、その先駆者であったともいえる。そういう意味においても、生音感を大切にする一方で、彼らは純然たるヒップホップ・グループでもあったのだ。ちなみに僕も、"Tennessee"と94年の"Make My Mind"はいまだによくかけている。早い話が普遍的な彼らのサウンドは使い勝手が非常によいのである。

だから93年に出たライヴ"Unplugged"も、"Make My Mind"を生んだ94年作"Nitty Gritty Dirt Band"もよく聴いた。フロントマンのスピーチが96年にソロ・アルバムを出したあたりからどことなく距離ができてしまったのも事実だが、2004年に出た"Among The Trees"や06年の"Since The Last Time"もなかなか聴きごたえのある作品ではあった。理由は明快だ。彼らの世界観は"3 Years..."の時点ですでに確立されており、以後の作品においても"芯"となる部分のありかたは変わらなかったからだ。だから、結果的には自らのオリジナリティによって時代の波を越えることができたのだ。

しかもその独自性には、押しつけがましさのようなものは皆無だった。だからこそ、20年の"Don't Fight Your Demons"、22年の"For The FKN Love"、今年のミックステープ"On The Cutting Room Floor"も、「いい意味でこの人たちは変わってないな」と安心しながら接することができたのだろうと思う。

別の表現を用いるなら、近年の彼らはその活動を通じ、"続ける"ことの大切さを示していたともいえる。長らくグループにとっての"精神的支柱"だったババ・オジェイは18年に86歳で世を去ったが、その"精神"はまだ生き続けているのだ。

そんな彼らが、年末年始に日本でツアーを開催する。奇しくも横浜と東京での公演はヒップホップ誕生50周年の締めくくりになるし、ビルボードライブ東京での2日目は大晦日である。そればかりか開けた24年1月3日には大阪公演も控えているので、期待するなというほうが無理な話だ。

生楽器を駆使したオーガニックなサウンド、ラップとヴォーカル、そしてダンスをセンスよくミックスさせたライヴ・パフォーマンスはデビュー当時から評価が高かったが、デビューから30年以上が経過した現在、そのステージがどのように成熟しているのか、非常に興味深いところである。

アレステッド・ディベロップメント来日公演

"Celebrating 50th year anniversary of Hip Hop"

- **12月28日(木)** ビルボードライブ横浜
- **12月30日(土)、31日(日)** ビルボードライブ東京
- **2024年1月3日(水)** ビルボードライブ大阪

詳細は
ビルボードライブのサイト
(billboard-live.com)

CamScannerでスキャン

ディラン・チェンバース

R&B／ファンクへの愛着を自らの鏡の間で反射させたような、現代の"ブルー・アイド・ソウル"

佐藤英輔

写真＝Alex Lang

オープナーはファンキーなギター・カッティングから始まる。と、思ったら、その曲にはヴルフペックでの演奏で広く知られるようになった"刻み大王"であるコリー・ウォンが合いの手のギター演奏を加えている。なんか、できすぎじゃん。このイケてる曲「You Gotta Respect Yourself」を聴いて、ぼくは白人バンドであるワイルド・チェリーの76年の全米1位曲「プレイ・ザット・ファンキー・ミュージック」あたりまで、記憶を遡らせてしまった。このLA在住のシンガー／ギタリストであるディラン・チェンバースのデビュー作『イッツ・タイム・フォー・ディラン・チェンバース！』には、これ以外にもご機嫌なファンキー・チューンは複数収められている。

その他はプリンスの影響を窺わせる曲あり、艶やかなメロウ・ソウル曲あり、モータウン調あり、8分の6拍子のレトロ調バラードもあり…。おっ、R&Bは豊かなかなかに巧み。ちょっとしたお洒落なコードの使い方は、チェンバースが生理的に"ギターでモノを考える人"であるとも感じさせるし、管楽器やコーラスやビートの設定も確かだ。なお、MVを見ると彼はオーセンティックなブルースマンのように、ピックを使わずエレクトリック・ギターを弾くようだ。

かような表現を送り出すチェンバースは東海岸ニュージャージー州バルミラに生まれた。母子家庭に育ち、母親は元ブロードウェイ歌手／ヴォイス・トレイナー。彼は4歳から母親から歌を習い、ショウ・チューンやミュージカル曲などを歌う彼女のライヴに子供ながら嬉々として同行したという。その後、チェンバースが9歳のときに母親が再婚し、テキサス州アーリントンに引っ越した。そして、グリーン・デイにハマった彼はギターに興味を持ち、ギターを弾いた父親から手ほどきを受け、中学時代からバンド活動に夢中になる。高校生になると、これぞオイラの生きる道と定め、かなり熱心に音楽に邁進した。

高校卒業後はバークリー音大に合格していたものの学費の面で断念。それでやさぐれた彼だったが、20歳すぎにLAに向かいスターバックスで働きながら、再びミュージシャンになろうとする。その経歴を語る記載にお気に入りのアーティストとしてジミ・ヘンドリックス、アルバート・コリンズ、ジョー・コ

CamScannerでスキャン

ノカー、ジョン・ダイヤー、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ザ・ドアーズなどロックブルースの担い手は出てきても、不思議なことにR&B関連の名前は出てこない。しかし、ほぼロック色のないデビュー作を聴けば、彼がLAに住みギグリストとしての仕事を得ながら、どんどん見聞を広げていったのは間違いないだろう。

彼が2017年に作った「Mystical And Paranoid」はハイ・サウンドのノリで始まる曲で、そこにはG・ラヴが参加し、ハーモニカやラップを入れている。ブルースとヒップホップをメビウスの環のごとく繋ぎ一世を風靡したG・ラヴにはやはり熱中したようだ。

「僕は10代の頃から彼のファンで寝室でギターの弾き方を真似していて、この曲に彼が登場するのはとても特別なことだ」というコメントも、チェンバースのホームページには出ている。両者は2021年の南カルフォニアのフェスで出会い、意気投合したことが共演につながったという。蛇足だが、とっぱいチェンバースの写真を見るとどこかG・ラヴの若いときを思い出さないだろうか。

そうしたチェンバースの表現は、往年のR&B/ファンク語彙の的を射た応用に満ちている。そうした文脈から彼のことをシルク・ソニックやブルーノ・マーズらを頂点に置く現ヴィンテージ・ソウルの流れに置くことも可能かもしれない。だが、それ以上に懐情とポップネスをしなやかに抱えた曲群を聴いていると、ぼくはブルー・アイド・ソウルという言葉を出したくなる。ライチャス・ブラザースやヤング・ラスカルズらの台頭とともに1960年代以降広く使われるようになったその語句は、ブラック・ミュージックに強く影響を受けた白人ミュージシャンの表現を指した。

人種の枠を超えたところで面白い表現が昔から生まれてきており、今や肌の色という物差しで音楽を語るのはナンセンスかもしれない。だが、自らの属性から離れた音楽に対する憧れを自分化した非アフリカン・アメリカンの表現が得難い甘酸っぱさや眩しさや親しみやすさを抱えてきたのは紛れもない事実だ。70年代のボズ・スキャッグスやホール&オーツ、80年代の一連の英国ニュー・ウェイヴ・ビヨンドの担い手たちをはじめ、近年のメイヤー・ソーホーンや先に触れたヴルフペックらのプロダクツなど、我々はソウル憧憬を美味しいひねりとともに表出した得難い非アフリカン・アメリカンの表現を知っている。

そして、往年のR&B/ファンクへの愛着を内にある自らの鏡の間で反射させたようなチェンバースの楽曲群もまたそう。東海岸、南部、西海岸と米国の各地を移動し、母親から受けた歌心あるスタンダード、ギターへのこだわり、そして現在のLAのヴァイブなどが網引きしあう多彩なその表現はブルー・アイド・ソウルの系譜にしっかりと乗るものだ。かつ、彼の、どこか俯瞰する感覚も持ち合わせる聴き味は、外の文化を海を挟んで享受する日本の洋楽リスナーには認めやすいものだろう。

書き遅れたが、この『イッツ・タイム・フォー・ディラン・チェンバース!』はチェンバースが配信でシングル発売した13曲に未発表曲を加え、日本側でまとめられた初フィジカル作品となる。

『イッツ・タイム・フォー・ディラン・チェンバース!』
Pヴァイン
PCD94164(CD)／発売中
PLP7670(LP)／12月13日発売

① You Gotta Respect Yourself! (feat. Cory Wong)
② Let's Keep On Dancing
③ Retro
④ Loving You Is Easy
⑤ Mystical And Paranoid (feat. G.Love & Special Sauce)
⑥ Some Kind Of Happy
⑦ Breakdown
⑧ What Kind Of Fool?
⑨ Ya Feelin' Good?
⑩ Don't Give Up On My Love
⑪ Me Vs. Me
⑫ I Can Do It Myself
⑬ (Your Love Keeps Lifting Me) Higher And Higher
⑭ High (When I'm Low) (feat. Lunch Money Lewis And Dave Koz)
⑮ I Can Never Get Enough

※⑭⑮は日本盤CDのみ収録の未発表曲

CamScannerでスキャン

あっけらかんず

せっかくバンドをやるなら「なにかっぽい」ものにしたくなかった

珍妙なギター・リフと、変わったドラム・セットが織りなすアンサンブル

峯大貴

左から糸カズオ、相馬ソーマ

あっけらかんずという素っ頓狂なバンド名の由来を聞くと「結成前からいいバンド名を書き貯めているメモ帳があって、100くらいの中から合うものを…」とギター&ヴォーカルの相馬ソーマが答えてくれた。このエピソードだけで一風変わった個性の持ち主であることがわかるだろう。

東京の中央線沿線を中心に活動する、相馬とドラムの糸カズオによる二人組。珍妙なギター・リフと、変わったドラム・セットが織りなすアンサンブルは、どの時代、どのジャンルを見回しても隣に並べるものがない。しかし奇を衒っているわけではなく、無性に惹かれるポップ・センスもしっかり持ち合わせた、何者でもなさが魅力なのだ。このたび、Pヴァインからデビュー作『冒険』をリリースするにあたって、二人に結成の経緯から話を聞いた。

相馬　糸さんは大学のバンド・サークルの先輩でした。僕は卒業後、仕事が大変で6年くらい音楽から離れていたんですけど、職場を変えて時間ができたので、またバンドをやろうと。初めは3ピースを組んだんですけど、みんな忙しいから集まれなくて。もうドラムだけでいいんじゃないかと糸さんを誘ったのが2018年ごろですね。

糸　僕もそれまで8年くらいドラムから離れていたし、相馬くんとも会ってなかったんですけど、ある日、長文のLINEがきたんですよ。「ストーンズのAサティスファクションVは60年代がいい。70年代以降ではない」とか、バンドのヴィジョンがずらっと書いてあった。

相馬　最近の音楽はテンポがどんどん速くなっている気がしたので、僕らはむしろノレないくらい遅いものをやりたかった。その内、練習しながら「BPM120以上禁止」「爆音ドラム禁止」「ハイハットをできるだけ使わない」と、このバンドのルールが決まっていきました。

糸　スネアとタムはタオルを置いてミュート。クラッシュやライドも最小限。今までやってきたドラムの引き出しにないので、どう叩くかずっと悩んでいます(笑)。

相馬　ドラムってうるさいし、他の楽器もそこに合わせると、何を

CamScannerでスキャン

歌っているのかわかんない。あと簡単にカッコよくできちゃう。だからデカくてカッコいいものを禁止にして、その代わりにバーカッションを入れたり、実験しながらバランスを見つけていきました。せっかくまたバンドをやるなら「なにかっぽい」ものにしたくなかったんですよね。

――ベースを入れずに二人だけなのも、バンドのよくある編成を避けたかった？

相馬　それもありますが、僕のギターは低音弦がずっと鳴っているフレーズが多くて。昔、グランジが好きでパワー・コードを弾いていた影響から、4～6弦があれば十分で、3弦までたまに弾くくらいです。いっそのことベースなしでもできそうだなと。あと二人だとスタジオにも個人練習の値段で入れる（笑）。

――結成は2018年ですが、本格的な活動開始は昨年8月から、と間が空いていますね。

相馬　二人で曲は作っていたんですけど、ライヴにどう出たらいいのかわからなくて、迷っている内にコロナ禍になったので練習すらしなくなってました。ちゃんとやるようになったのは、友達だったpandagoiiiの白山くんが企画に誘ってくれて初めてライヴをしてからです。今回エンジニアをしていただいた中村宗一郎さんを紹介してくれたのも彼なので、ホントに恩人。

――初作品『冒険』も基本は二人の音だけの潔いサウンドですね。

相馬　ベースをダビングすることも考えましたけど、それだと普通に3ピース・バンドじゃないですか。「シメンソワカ」だけはベースで弾きましたが、基本はギターとドラムだけです。中村さんには、坂本慎太郎さんや、くるりの「花の水鉄砲」とか、リファレンスになる曲を大量に送っていて、最初は弱い低音を何とか際立たせたようなミックスだったんですけど、あえてスカスカのままに戻してもらいました。多少聴きづらくとも、二人でやっていることが伝わるものにしたかった。

――その結果、相馬さんの独特な不穏さが滲む歌も際立っていると思いました。

相馬　ずっと自分の歌い方がよくわからなくて。YouTubeで発声法の動画を見て、"ミックス・ヴォイス"ってあるんだ、とか色々調べながら試していました。確かにミックスキーマウスの声をイメージすると歌いやすいようで、それと自分なりに考える、大きな声を楽に出している人と言えば電車の車掌さん。そしてその二つが混ざっているのが"目玉の親父"の声だと気づいたんです。それからすごく歌いやすくなったんですよね。

――独自の方程式ですね（笑）。

「おばけの中嶋」を筆頭に、歌詞も不思議なものが多いですが、どんなことを書きたいと考えていますか。

相馬　簡単な言葉で難しいところまで手が届くようなことを書きたいとは思っているのですが、自分が怠惰な性格なので、全曲通じて「ニートがんばれ」みたいな曲になってしまいますよね。

糸　「おばけの中嶋」はバンドを組んで初めて聴かせてもらった曲。昔の相馬くんはもっと捻くれた曲をやっていた印象だったので、ずいぶんポップになったと思います。

相馬　坂本慎太郎さんのような、演奏にも見えるのに最終的にカッコいい音楽に憧れがあるので、独自ではありつつ最終的にはポップでありたい。「おばけの中嶋」はバンドやっている人自体、あの世とこの世の中間にいるなと思っていて。なのに一度離れてもまたやりだしてる。そんな亡霊化した自分というイメージで作りました。

――今後も今まで課してきたルールは継続していくのでしょうか。

相馬　変わらずいこうと思っていますが、飽きたらまた別のルールにするかもしれません。もしかしたら「BPM120以下禁止」とか「オーヴァー・ドライヴ使用禁止」とかにするかもしれない。

糸　自分としては「これからはツー・バスで」と言われてもやってみる覚悟です（笑）。

［10月29日　ルノアール吉祥寺店で］

『冒険』
トラットライン　PCD22446
1. おばけの中嶋
2. 段々ダンジョン
3. 鼻歌島
4. うめぼしかめ
5. シメンソワカ
6. ぼんやり

ニュー・スタンダード

New Standards 2020s

いま注目されるシーンに至る歴史的な流れを現在の視点から辿るディスク・ガイド

第47回

スロウコア

選=天井潤之介

キャロライン（写真＝Tom Whitson）

「スロウコア」というタームをあらためて意識するようになったのは、最近の英国の若手アーティストの作品に触れるなかでのことだった。ここ数年来の「ポスト・パンク」勢とは異なるニュアンスや志向を伝える音楽が、その存在を静かに主張し始めている――具体的にはデスクラッシュやキャロライン、あるいは（初期の）ブラック・カントリー・ニュー・ロードなどがそれにあたり、そのサウンドはもちろん、実際にかれらがスリントやダスターといったスロウコアを代表するグループの影響や参照について言及するのを目にして、認識を新たにしたことが大きい。

後に「スロウコア」と呼ばれることになる音楽は、80年代の終わりから90年代にかけてその背景となる気運がアメリカで醸成された。アメリカン・ミュージック・クラブやレッド・ハウス・ペインターズと共にスロウコアの黎明期を飾ったギャラクシー500のディーン・ウェアハムは、自らのサウンドについて「よりゆっくり、より内省的」と説明している。ダウン・ビートのメロディ、スロウ・テンポ、ミニマルなアレンジ、反復、空間を演出するリヴァービーな音響、あるいはニック・ドレイクやレナード・コーエンのようなシンガー・ソングライターに連なるフォークやカントリーの音色を汲み上げ、その源流が拓

CamScannerでスキャン

かれたスロウコアだが、同時にそれは当時のアンダーグラウンドなロック・シーンへの反動――すなわちハードコア・パンクやプログレのラウドで過剰主義的なスタイルに対する〝クワイエット〟な音楽として形作られた流れがあることを押さえておきたい。また、そこにはマチズモへのアンチという側面もあり、数年前後して「エモ」が産声をあげた経緯とも重なる点は重要だ。

一方、スロウコアはその実、かなり曖昧な〝ジャンル〟といえる。ドリーム・ポップやシューゲイザー、チェンバー・ポップ、はたまた〝ローファイ〟と隣接し、特にポスト・ロックとは包摂し合う関係を見せるなど、ベッドヘッドやコデインら先駆的なグループが築いた原型を起点としてスロウコアは、その像や解釈の余地をゆるやかに押し広げてきた。なかでも結成から30年を通じて創造性のピークを更新し続けるロウの歩みは特筆に値する。また、ポスト・ハードコアの流れを汲むスリント～デヴィッド・パホやジューン・オブ・41の地元＝ルイヴィルを始め、アメリカーナやルーツ音楽の影響を強く受けたカリフォルニア、ジャズやポスト・ロックと距離が近いシカゴなどローカル独自のカラーも窺えるスロウコアだが、その〝シーン〟として広がる過程において、90年代をへて00年代に入って浸透し、定着した英国やアイスランド～北欧圏の動向も無視できない。とりわけアラブ・ストラップやモグワイを輩出したグラスゴーのケミカル・アンダーグラウンド周り、エレクトロニカやアンビエントとクロスオーヴァーしたフッドの諸作は目を見張るものがある。

併せてスロウコアは、そうした深化や拡大と並行して、個人的な告白や内省と寄り添う〝クワイエット〟な音楽として表現の度合いを深めてきた。キャット・パワーやニーナ・ナスタシアをそうした系譜の先頭に置くとするなら、その後尾にはラナ・デル・レイやエイドリアン・レンカー（ビッグ・シーフ）、エセル・ケインが続く。実際、アレックス・GやMJ・レンダーマン（ウェンズデイ）、フローリストなど、昨今の実り多きシンガー・ソングライターの作品にはスロウコアの反響を印象づけるものが少なくない。そして、ジュリアン・ベイカーの静謐なインディ・フォークはエモとスロウコアの連帯――エリオット・スミスの面影に思いを巡らせてくれる。

近年のスロウコアの再評価の要因の一つには、ダスターやコデイン、カラテといったレジェンドの相次ぐ再結成が挙げられる（関連してヌメロ・グループからはリイシューや編集盤のリリースが続いた）。さらに加えて言えば、ここ数年の英国の若い世代の間で高まる、伝統音楽やフォーク・ミュージックを捉え直そうとする動きを遠因として指摘できるかもしれない。（ルコデインやシカゴ音響派の顔ぶれが集ったレックス同様に）アパラチアン・ミュージックをルーツに置くキャロラインを始め、そのメンバーやソーリーやモダン・ウーマンといったバンドのメンバーも参加するブロードサイド・ハックス、最新作でブリティッシュ・フォークの遺産に触れたスクイッド然り、英国のインディ・シーンの中心でアコースティックでミニマルなサウンドへの関心が現象化していることはスロウコアとの親和性において無縁ではないように思える。なお、同様の気運を見せる隣国アイルランドでもランカムのようなグループにスロウコアとの符丁を聴き取ることができる。

スロウコアがジャンルとして支持を得て久しいが、一方でそれはシューゲイザーやエモやアンビエントの〝サブジャンル〟として、新しい世代の流動的で折衷的なサウンドを構成する触媒になっている。ディスク・ガイドからは外したが、スピリット・オブ・ザ・ビーハイヴやフィーブル・リトル・ホース、ホットライン・TNTらはその好例だろう。そして、マーク・リンカスの死後13年をへて新作が今年リリースされたスパークルホース。同じく今は亡きジェイソン・モリーナ（ソングス・オハイア）やヴィック・チェスナットの音楽は、これからもスロウコアのカノンとして聴き継がれていくにちがいない。（天井）

CamScannerでスキャン

Galaxie 500
On Fire

1989
Rough Trade

米国のトリオのセカンド。サイケデリックなファースト、ポピュラリティ高い最終作の間のアルバムなだけではの趣で、分裂以降に生まれたダーモン&ナオミとルナの魅力がバランス良くブレンドされている。夢心地のフィロディや音をちりばめながら、アシッド・フォークの深遠な味わいも内包。シングルなのにドラマチックな曲作りも合わせ、のびやかなエレクトリック・ギター・ソロに痺れる。このバンドではヴォーカリストとして魅力だが、ナオミ・ヤンニの歌声が全体を引き締めたのもまた事実。ジョージ・ハリスンの"All Things Must Pass"のカヴァーも選曲している。（石川）

Codeine
Frigid Stars LP

1990
Glitterhouse / Sub Pop

グランジのイメージが付いていたサブ・ポップから出した、ニューヨーク・シティのトリオのファースト。じわじわと高まってさりげなく劇的な楽曲が、はかなげなヴォーカルによるデリケイトな歌唱で哀しみの旋律とともに導き出される。レーベル・メイトだったサニー・デイ・リアル・エスティトあたりのエモ感覚も漂わせつつ、"Second Coming"をはじめ、ブラック・メタルに感電したドゥーム・ロックみたいなスロー・リフに痺れる。ヘヴィ・ロック進化形バンドのケイヴ・インが、10年後に"Codeine"をカヴァーしたことも本作の立ち位置を象徴。埋もれた名盤と断言する。（石川）

Slint
Spiderland

1991
Touch And Go

ハードコア・パンク由来のマス・ロック系音楽の聖地の一つ、ケンタッキー州ルイヴィル。中でも、デヴィッド・パホらを擁するこのバンドが解散後に年々評価を高めていることで、彼の地も一層注目を集めることとなった。スティーヴ・アルビニが関わった初作と比べると、この2作目はソリッドな音質はそのままに、ロング・トーンを生かしたギター、朗読のようなヴォーカル、重心を低くしたアンサンブル全体が不穏なムードを余韻として残す。フォロワーは多数だが、ワシントンDCのバストロと共に、この時代にロックの枠組みを底辺から不気味に揺るがした点で他の追随を許さない。（岡村）

Talk Talk
Laughing Stock

1991
Polydor

パーク・サイコシスと並んでトーク・トークの影響を語るスロウコアの関係者は少なくない。特に後期の作品には、ポスト・ロックとしての先駆性と共にスロウコアとの同時代性が端々に感じられる。マーク・ホリスとリー・ハリスのデュオとなったこの5作目ではニュー・ウェイヴ色がさらに後退・消失し、即興演奏を軸としたミニマルでムーディな演奏が前景化。多彩な楽器と客演を交えたアンサンブルはジャズやクラシック、アンビエントの周りを巡りながらも滑らかで、合奏のダイナミクス以上に静寂や余白を際立たせるようなプロダクションも素晴らしい。同年、グループは解散した。（大井）

CamScannerでスキャン

New 1120s Standards

Red House Painters
Down Colorful Hill

1992
4AD

スロウコアのイメージを作り上げたバンドのひとつ、レッド・ハウス・ペインターズのファースト・アルバム。アルバムを貫くスロウなテンポ。バンドのソングライター、マーク・コズレックが紡ぎ出すメランコリックなメロディーなど、彼ら独自のスタイルは早くも完成されている。印象的なのは、本作がコクトー・ツインズやデッド・カン・ダンスなど耽美的なバンドを擁した4ADからリリースされたこと。後年、コズレックは本作でリヴァーブをかけたことを後悔したそうだが、ダークなロマンティシズムも感じさせる本作は、アメリカン・ゴシックとスロウコアの中間点といえるかも。（村尾）

Bedhead
Whatfunlifewas

1994
Trance Syndicate

スロウコア再評価のきっかけとなったのは、ソウルやフォーク系のレア盤発掘で知られるヌメロが、コデインに続いてこのバンドのボックス・セットをリリースしたことだった。若くして父親を脳腫瘍で失ったマットとブッバのケディン兄弟がテキサスで結成したベッドヘッドは、〝寝癖頭〟を意味するバンド名通り、気怠げなトリプル・ギターのアンサンブルを聴かせてくれる。スティーヴ・アルビニ録音のサード・アルバムを最後に解散すると、兄弟はコディンのドラマーだったクリス・ブロカウと合流し、ベッドヘッドの音楽性の延長線上にあるバンド、ザ・ニュー・イヤーを結成した。（清水）

Karate
Karate

1995
Southern

ボストンのポスト・ハードコア・バンド、カラテのファースト。ディスコード系列に連なる激情型のギターやヴォーカルがところどころに顔を覗かせつつも、空間を活かしたそのサウンドは、既に枯淡の美の境地に達している。ギターの音の生々しさもいいし、シンプルなようでいて、実は巧みなアンサンブルも素晴らしい。彼ら特有のジャズ・ロック的な要素も早くもこの時点から萌芽しており、数年後に本格的な盛り上がりを迎えるポスト・ロック系のアーティスト群を先取りしているようでもある。21年、先鋭的なリイシューを手掛けてきたことで知られる米ヌメロから再発売された。（柴崎）

Rex
C

1996
Southern

コデインの元ドラマー、ダグ・シャリンが結成したバンド。当時、ダグはヒムやジューン・オブ・44といったバンドでも活動していたが、なかでもレックスは歌の存在が大きかった。カントリーやフォークなどのルーツ・ミュージックを吸収した哀愁を帯びたメロディーと、リード・シンガー、カーティス・ハーヴェイのエモーショナルな歌声。それを骨太で緻密なバンド・アンサンブルが支えて、ヴァイオリンの音色が効果的に使われている。静と動をダイナミックに行き交う演奏は叙情的だが乾いていて、ハードコア・パンクとクラシックが融合したようなポスト・ロック的味わいもある。（村尾）

CamScannerでスキャン

Hood
Rustic Houses, Forlorn Valleys

1998
Domino

クリス&リチャード・アダムス兄弟を中心とした英リーズのコレクティヴによる3作目。管楽器が彩るポスト・ロックな前作とも、IDMに寄った後の作品とも異なる。インストゥルメンタルは緊密さと冗長の境を揺れ動き、まばらな空間にアンビエントな気配や淡いノイズが重ね込める。テープ・ループやサンプルも使用した反復は催眠的で、吹きを変えたヴォーカルは儚くて気高い。12分超の最終曲はスロウコアとシューゲイザーが切り結ぶハイライトだ。プロデュースはサード・アイ・ファウンデーションのマット・エリオット。全員がエリオットのソロ作もスロウコアな名盤が多い。（天井）

Duster
Stratosphere

1998
Up

スロウコアの慎ましい歴史にあって、これほどまでに大々的な再評価に浴した作品は稀だろう。

ダスターは、カリフォルニア州サンノゼで、クレイ・バートン、カナン・ダヴ・アンバーによって始動したバンドだ（後にドラマーのジェイソン・アルバーティーニが加入）。共同プロデューサーにフィル・イークを迎え、主に4トラックのカセット・レコーダーを使ってこのファースト・アルバムを制作した。リリース当時はほぼ話題にならず、一部のファンに支持されたのみだったが、後にネット上を中心にじわじわと人気を高め、ガールプールやスネイル・メイルといった後の世代のアーティストからもリスペクトを集めるに至った。19年には、本作を含む諸作を網羅したボックス・セットが米ヌメロからリリースされた。

一聴してまず耳を奪われるのが、奥行きと広がりをともなった豊かなバンド・アンサンブルだ。当然ながらシンプルなサウンドではあるのだが、音の間に張り巡らされた空気がしなやかに伸び縮みするような有機的な感触に満ちている。ごくナチュラルに楽器の音や歌声が存在するような必然めいた感覚と、だからこそかえって浮かびあがる、演奏というコミュニケーションの尊き偶然性。それらの背反するダイナミズムが、静かだが激しい情動の中に同居する。間に挟まれるインスト曲の美しさにも注目してほしい。（柴崎）

Arap Strap
Philophobia

1998
Chemikal Underground

チープなリズム。ボックスとギターのサウンドに乗せて、大きなイチモツを持った男の性愛を歌い、時に語るエイダン・モファットとマルコム・ミドルトンのふたりは、まさに“スコットランドのどぶろっく”と呼んでも過言ではないだろう。本作では後にサンズ&ドーターズを結成するアデル・ベセルがエイダンとデュエットを聴かせるほか、スチュワート・マードック以下ベル&セバスチャンのメンバーが参加しており、同年リリースされたベルセバのアルバム“The Boy With The Arab Strap”の由来にもなった。06年に解散するも10年後に再結成し、現在も活動を続けている。（清水）

CamScannerでスキャン

Cat Power
Moon Pix

1998
Matador

この人のエモーショナルな表現の原点はアトランタ出身であることが大きい。マタドールから出たこの4作目も、スロウコアというより、ブルーズやサザン・ロックなどからの影響が濃く渦巻いたアルバムだ。加えて、農家での幻覚的な体験に基づいて曲が作られていることもあり、アメリカーナ的感触があるのも特徴で(1曲目のタイトルは"Peace And Piece"だ)、オーストラリアのダーティー・スリーの面々が参加したメルボルン録音ながら、同時代に出たボニー・プリンス・ビリー『アイ・シー・ア・ダークネス』と並ぶゴシック・マーダー・ブルーズのような作品に仕上がっている。(岡村)

The For Carnation
The For Carnation

2000
Touch And Go

スリントのギタリストだったブライアン・マクマハンが結成したバンドで、本作は彼らが発表した唯一のアルバム。ストリングスやエレクトロニクスを導入して、ジャズ、クラシック、現代音楽など様々な音楽性をロックに融合。トータスのジョン・マッケンタイアがミキサーで参加して、演奏とスタジオ・ワークを融合させた実験的な音作りはポスト・ロック色が強い。なかでも、スロウさが重要な要素になっていて、ゆっくりと忍び寄るように刻まれるビート、そして、映像的なサウンドで曲に流れる時間を歪ませ、加速に向かうパンクとは逆のアプローチで音楽に深みと強度を与えている。(村尾)

Sparklehorse
It's A Wonderful Life

2001
Capitol

マーク・リンカスのルーツの一つはスキップ・スペンスやシド・バレット。なのだが、時々ビートルズ的な人懐こさが顔を出すのもチャーミングだし、トム・ウェイツやPJハーヴェイらが参加したこの3作目に至っては、オルタナの時代を生き抜いてきたハードなタフネスも音から感じ取れる。いや、生き抜いたとはいえなかったから、10年にリンカスは自死してしまうのだが、内面と外部との整合がうまくいかないその激しいストラグルをもってして〝素晴らしき哉人生!〟と叫ぶ本作こそは、スロウコアの原点——嬉しさと哀しみが混在した感情を見事に表現しているのではないだろうか。(岡村)

Hope Sandoval & The Warm Inventions
Bavarian Fruit Bread

2001
Sanctuary / Rough Trade

カリフォルニアのマジー・スターの歌姫が00年代初頭に始めたバンドのファースト。ザ・ジーザス・アンド・メリー・チェインの"Drop"のカヴァーをはじめ、耽美な音にドリーム・ポップのテイストを残すが、弾き語りから曲を発展させていったようなアルバムだ。そういう作りに貢献したのが、マイ・ブラッディ・ヴァレンタインのドラマーだったコルム・オキーソーグで、サンドヴァルとともに様々な楽器を手掛けている。たそがれて時に官能的かつ蠱惑的でコケティッシュなウィスパー・ヴォイスを含む歌唱に、アンビエント・サウンドの溶け込んだパートは、特にスロウコア色が強い。(行川)

CamScannerでスキャン

Songs: Ohia
Didn't It Rain

2002
Secretly Canadian

ジェイソン・モリーナによるソロ・プロジェクト。ルーツ・ミュージックに根ざした歌はオルタナ・カントリーとして紹介されることもあるが、本作にはブルーグラス・バンドのジム&ジェニー&ザ・パイントップスのメンバーが参加して、スタジオでライヴ録音された。カントリー・ゴスペル風の楽曲が並んでいて、無駄な音を削ぎ落とした演奏は一音一音が生々しい。そして、祈りを捧げるようなジェイソンの美声。当初、ジェイソンは本作でソングス・オハイアとしての活動を終えるつもりだったらしく、そうした決意の現れなのか、シリアスで厳かな雰囲気がアルバム全体を包み込んでいる。（村尾）

Nina Nastasia
Run To Ruin

2003
Touch And Go

ところによってはニコやジョニ・ミッチェルを想起させるもオルタナティヴ・ロックの流れをくむ、米国のシンガー・ソングライターのサード。スティーヴ・アルビニの録音で潔癖な音に仕上り、まっすぐで悠然とした佇まいのヴォーカルを中心にシリアスな趣だ。弾き語りを核にしつつ、ヴァイオリンやヴィオラ、チェロ、アコーディオンのドローンの力でまさにスロウコア。当時スザンヌ・ヴェガやアヴリル・ラヴィーン、デイヴィッド・ボウイの作品で演奏したジェリー・レナードが、ハンマー・ダルシマーとバンジョーで、ダーティ・スリーのジム・ホワイトがドラムで参加している。（行川）

Mount Eerie
Wind's Poem

2009
P.W. Elverum & Sun

溢れ出てくるノイズの洪水に冒頭から度肝を抜かれる。それはさながらスラッジやブラック・メタルのようなサウンドだ。けれど、ふとした中に静寂が垣間見える、まるで台風の目の中に入ったような瞬間があるのが魅力で、それでこそタイトルに〝風の詩〟とつけただけはある。マイクロフォンズ名義でも活動するフィル・エルヴラムの硬軟あわせ持つ知性が詰め込まれた1枚で、スロウコアというより激情型アンビエント・フォークといったところ。日本盤にのみ収録されたビート・ハプニングのカヴァーは、ルーツの一端に人懐こいインディー・ロックもあることを教えてくれる。（岡村）

Giles Corey
Giles Corey

2011
Enemies List Home

スワンズやシスターズ・オブ・マーシーとも比せられたコネチカットのデュオ、ハヴ・ア・ナイス・ライフの片割れによるソロ。フォークやカントリーに傾倒した生楽器の演奏を軸としつつ、前身を受け継ぐドゥーミーでゴシックなムードがそのサウンドと歌声を美しく悲劇的に演出している。端正な弾き語りやゴスペル風の有機的な曲の一方、ピアノやホーンを交えた音色の重なりは重厚で、陰鬱なアコースティック・バラードからノイズも伴って威嚇的なオーケストラへと膨れ上がる場面はまるで〝The Drift〟の頃のスコット・ウォーカーのよう。御年に自殺を図るも一命をとりとめる。（天井）

CamScannerでスキャン

Alex G
Trick

2013
Haze Tapes

Lana Del Rey
Ultraviolence

2014
Interscope / Polydor

Grouper
Ruins

2014
Kranky

Julien Baker
Sprained Ankle

2015
6131

CamScannerでスキャン

Cigarettes After Sex
Cigarettes After Sex

2017
Partisan

12年に配信されたEPが動画サイトのアルゴリズムでヴァイラル・ヒットを記録した謎のバンドが、満を持してリリースしたファースト・アルバム。思わずクリックせずにはいられないEPのジャケットワークとバンド名が再生回数を増やす要因になったことは間違いないが、その歌名負けの高いレベルの楽曲群にはいい意味で裏切られた。ドリーム・ポップ風のサウンドで、中性的なヴォーカルも、聴き手の想像を膨らませるのに一役買っていることは間違いない。作曲家の清水一登がフェスの中継でも彼らの演奏中にヘロ映像をモノクロにするなど美意識の高さが窺えたが、メンバーの見た目はオマケでしかない。（清水）

Low
Double Negative

2018
Sub Pop

アラン・スパーホーク(左のミミ・パーカーと中心にした3人組。メディアからスロウコアを代表するバンドとして評価されながら、彼らはその言葉に反発してきた。スロウコアという言葉に好感を感じていたらしいが、ロウの曲が持つ重量感や引き算に触れれば、彼らの気持ちもよくわかる。ボン・イヴ・ールのコラボレーター、BJ・バートンをプロデューサーに招いた本作では、エレクトロニックな要素を取り入れた大胆なスタジオ・ワークを通して、これまでのロウの印象のサウンドを生み出した。グリッチ・ノイズの中から浮かび上がるアランとミミの美しいハーモニーは神々しくもある。（荏花）

Bar Italia
Bedhead

2021
World

表情に関しては乏しい若きロンドンの3人組。25分前後の曲がミックステープのように並ぶ初期の作品において、この2作目ではアブストラクトな音作りに映えるデコースティックの音色が際立つ。ガレージ・ロックやドリーム・ポップに振れつつも、ミニマルなギターのアルペジオやリフが誘う演奏の手触りはスロウでメランコリック。ポスト・パンクはマジー・スターとキング・クルールの共演も思わせて美しく退廃的だ。残響の効いた独特な声のくぐもりは、ローファイというより、かれらの後見人的なディーン・ブラントのヒプナジック・ポップに近い。ミカ・レヴィとの共演曲も収録。（荏花）

Deathcrash
Return

2022
Untitled (Recs)

ソーリーの初期メンバーが在籍し、ブラック・カントリー・ニュー・ロードにも多大な影響をもたらしたというロンドンの4人組。まばらなギター・サウンドに乗せて、呟くような歌声やドノヴァンの「サンシャイン・スーパーマン」のフィンチについてのラジオDJの会話、スパークルホースの故マーク・リンカスが朗読を告白するインタヴュー音声などが被せられ、雲が低く垂れ込めるような、灰色の風景を描き出していく。ジョン・ケージ、ヤニス・クセナキス、といった曲で聴かせる静寂と轟音の対比は初期のモグワイを思わせ、時代がひと回りしたことを感じずにはいられない。（清水）

CamScannerでスキャン

Caroline

元は二人組でポスト・パンク的な音楽をやっていたキャロライン。それが現在のようなサウンドになった経緯には、当時の片割れと直後に加入したギタリストが以前にアパラチアン・ミュージックのグループで活動していたことが関係していた。当該メンバーは並行して民謡や伝統音楽の探求を目的としたプロジェクトのブロードサイド・ハックスに参加するなど、やがて8人組のコレクティヴとなったキャロライン。〝フォーク〟が前景化したミニマルでアコースティックなサウンドへと洗練を遂げていく。曲作りには即興が積極的に持ち込まれ、合奏が醸し出すコミュニーナルなフィーリングはかれらの音楽の持ち味といっていい。

スリント風のギター・パターンにリヴァーブで包んだヴァイオリンを重ねる〝Dark Blue〟。〝Good Morning (Red)〟ではチェンバー・ミュージックと静寂が攪拌され、ティム・バックリーやサイモン・フィンも思わせるアシッド・フォークな〝IWR〟が続く。そうしたスロウコアのセオリーやルーツを窺わせる一方、このデビュー作では録音素材と実際の演奏を組み合わせたコラージュ的な手法も用いられるなど、ライヴ志向と編集感覚が共存したスタイルはけっして従来の型に留まるものではない。具体音やアンビエントの作品も制作しているかれらは、この先スロウコアの射程を押し広げて延伸させる存在となるかもしれない。（天井）

Ethel Cain

Preacher's Daughter

2022
Daughters Of Cain

10年代後半から精力的な音源発表を行なってきた、フロリダ生まれの奇才シンガー・ソングライターによる現時点での唯一のフル・レングス。アルバム・タイトルに近い環境での人生を受け入れた表現が、約76分の計13曲の隅々にまで刻まれている。ギターだけに留まらない様々な弦楽器を弾き語りながら、鍵盤楽器や打楽器等を重ねたように聞こえる。アンビエント・サウンドが作り出す荘厳なムードはキリスト教の音楽からの影響も大だが、アップ・テンポのキャッチーな曲やインダストリアル・ロックのテイストの曲など、ヴァラエティ豊かだ。演出的な発声を排したナマの歌声も絶品。（行川）

King Krule

Space Heavy

2023
XL / Matador

このアルバムがリリースされた際、本作で初めてキング・クルールの存在を知ったというあるリスナーが、戸張大輔の音楽を感じさせる、とネット上で発言しているのを見かけ、そうか、そうだったのか……と膝を打った。天才的なシンガー・ソングライターとしての一面が華々しくクローズアップされながらも、実存のゆらぎに真っ向から立ち向かい、ときにその揺らぎを増幅させてしまう真摯なひと、アーチー・マーシャル。父になり、パンデミックの中で彷徨する心身の寄る辺なさを、どこへも落ち着くことのないメロディーへと託し、静かに内面を晒す。あまりに現代的な〝スロウコア〟作。（柴崎）

CamScannerでスキャン

ALBUM PICKUP

アルバム・ピックアップ

A
あっけらかんず→173
Ana Frango Eletrico→162
Awich→146
アヤコレット→175

B
Bad Bunny→163
Balming Tiger→164
Thomas Bartlett→149
betcover!!→173
Black Pumas→161

C
カーネーション→166

D
Helena Deland→152
Drake→160

E
Enemy→159

G
GLIM SPANKY→170

H
HARIKUYAMAKU→147
Jolie Holland→151
細井徳太郎→172
Holly Humberstone→152

I
igloo→165

J
ジャックス→176

K
Stacey Kent→159
Knower→148
小日向由衣→175
古謝美佐子→147
Koma Saxo→158
小坂忠→176
空気公団→169

L
L'Rain→149
Lamp→168
Lost Girls→155

M
Joe McAlinden→154
Mike→161
民謡クルセイダーズ→164
Mndsgn→156

N
The National→150
Negarit Band→163

O
odol→171
Offset→160
OMSB→165

P
Panda Bear & Sonic Boom→150
Dolly Parton→151

Q
Quantic→157
QUBIT→171

R
Rei→172
Resavoir→158
ROTH BART BARON→169

S
Salamanda→157
SHO HENDRIX→174
Troye Sivan→155
曽我部恵一→167
Supershy→153

T
Teenage Fanclub→154
Tirzah→153
Frida Touray→156

U
UNICORN→167

V
ビッケブランカ→168

Y
吉田哲人→174

Z
在日ファンク→170

イラストレイション＝シマ・シンヤ

●掲載作品は品番の後にDVD、LPなどと記した場合を除きすべてCDです。価格は税抜き定価。なお、筆者には主に試聴用のCD-R、DVD-R等で評を依頼しています。

CamScannerでスキャン

23年の音楽として極めて有効に機能している新作アルバム

Awich
『THE UNION』
アンド・ミュージック（配信）
10・25発売

Awichによる沖縄のアーティストのコンピレーション『098RADIO Vol.1 Hosted by Awich』を“アルバム・ピックアップ”でレヴューしたときに、「これは沖縄民謡ファンも聴いたほうがいい作品だ」と書いたが、Awichの新作についても同じことが言える。これは沖縄民謡ファンも聴いたほうがいい作品だ。

この原稿が掲載される頃には、Kアリーナ横浜での公演を終えているAwich。この原稿を執筆しているのは開催前だが、キャパシティ2万人の会場のチケットはすでにソールド・アウトしている。その公演の名は“Queendom -THE UNION-”であり、この新作のアルバム・タイトルも冠している形だ。

そのタイトル・ナンバーである「THE UNION」は、いきなり沖縄民謡のコブシが挿入されているのが驚きだ。リリックの「自由ねならん」というウチナーグチは、沖縄民謡の「白雲節」の一節でもある。さらに、この楽曲のMVに登場しているのは、踊り飛琉～宮城恵子琉舞道場のメンバーたち。それでいて、Chaki Zuluのプロデュースによるトラックは、ピアノを主体にしたものであり、軽い混乱すらもたらす。そしてリリックは、22年の日本武道館公演以降のAwichの歩みを描いたもの。Kアリーナ横浜までの自身のストーリー、特にブレイクと葛藤の日々をリアリティとともに描きだす。

唾奇、OZworld、CHICO CARLITOとの「RASEN in OKINAWA」は、前述の『098RADIO vol.1 Hosted by Awich』にも収録。沖縄民謡のコブシと三線がサンプリングされ、さらにリリックにはTHE BOOMの「島唄」や、夏川りみのヒットで知られる「涙そうそう」まで織り込まれる。MVには首里城が登場。OZworldによるMVには沖縄民謡を踏襲したフロウは革新的ですらある。

シンガーのAIやお笑いタレントのゆりやんレトリィバァらが参加した「Bad Bitch 美学 Remix」は「ミュージックステーション」でもパフォーマンスされた楽曲。Awichにポピュラリティをもたらしたが、楽曲はヒップホップ以外の何物でもない。アルバム後半でメロウな展開になる構成は手堅いが、内容の新鮮さが斜に構えることを許さない。「口に出して2」は、性愛の歌に見せかけて、愛情の言葉を求めるスウィートなナンバー。「Burn Down feat. GADORO」は、SNSに触れていく精神の摩耗の解像度が、二人とも実に高い。「かくれんぼ」はラウ・ソングだろうが、主人公は“僕”、そして相手も“僕”である。愛娘を描いた「Wait For Me」はエレクトリック・ピアノとコーラスがゴスペルのように響き、R&Bなホーンとともにアルバムの幕を閉じる。冒頭と終幕で、まるで音楽性が異なるのだ。

音楽的に沖縄民謡色が濃いのは「THE UNION」「RASEN in OKINAWA」のみだが、「THE UNION」だけでも聴く価値はある。アルバムを通して描かれるのは、沖縄の伝統と戦後、フェミニズム、おそらくはLGBTQ+。そして、マクロとミクロ、つまり社会と個への視点が常にあるのも特徴だ。だからこそ、このアルバムは23年の音楽として極めて有効に機能している。 **宗像明将**

CamScannerでスキャン

World Music

古謝美佐子

『平和星☆願い歌』

ディスク・ミルク DMC12
¥3000／11・26発売
●問合せ先＝
bomba-records.music.coocan.jp
（ボンバ）

円熟の境地というよりも凄まじい
過去2作とは違った強度のアルバム

モンゴル800のキヨサクをラッパーとして曲後半に起用し、50年代から72年まで沖縄本島に1300個もの米国の核爆弾が配置されていたことを歌った冒頭曲から、ただならぬ作品であると確信させる。その後も、琉球王国滅亡から沖縄戦までの苦難の歴史を民謡の名曲で時代順に辿るメドレー、中国～日本～米国と支配者が推移してきたことを歌った嘉手苅林昌「時代の流れ」など。周辺国に翻弄されてきた沖縄の歴史を濃密に紡ぐ一方で、台湾と韓国の名曲メドレーやハワイ移民の民謡も取り上げながら、汎アジア的なスケールで〝平和〟の実現を願った本作は、円熟の境地というよりも凄まじい。

坂田明のサックス、カルロス・ヌニェスの笛、姜小青の古箏などを曲ごとに効果的に配した雄大なサウンド、親交が深かった坂本龍一の楽曲をサンプル使用したオリジナル曲も聴きものだが、時に絞り出すようなエモーショナルさすらみせる古謝本人の歌声が何より圧巻。レコード・デビュー60周年の節目に届けられた15年ぶりのソロ3作目だが、過去2作とは違った強度を伴い、ウクライナやパレスチナで悲劇が続く今、聴く者に突き刺さってくる。**吉本秀純**

World Music

HARIKUYAMAKU

『MYSTIC ISLANDS DUB』

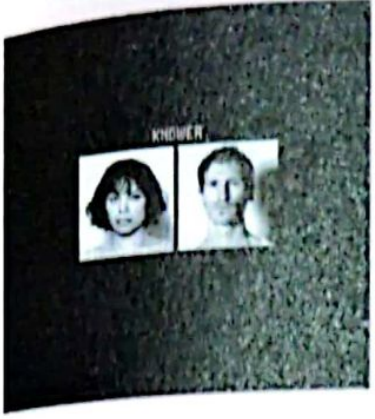
コロムビア
COCP42082
¥3000／11・3発売
COJA9481（LP）
¥3800／11・3発売

沖縄の本土復帰前の貴重な音源を
ドープなダブヘブラッシュ・アップ

沖縄音楽好きでもなかなか耳にすることがなかった『沖縄音楽総攬』。65年にLP16枚組で発売された史料価値の高いものだが、CD化されたとはいえ高価なボックス・セットだけに手にした人は少ないだろう。本土復帰前の貴重な音源が満載で再評価されるべきものだが、まさかこういう形で日の目を浴びるとは驚きだ。

沖縄市コザを拠点に活動するサウンド・クリエイターが、この音楽遺産をダブ・ミックスしたアルバムが本作である。同志のエクスペリメンタル・ダブ・バンド、銀天団のメンバーなどがミ[illegible]ルな民謡がドープなダブへとブラッシュ・アップされている。こういったリミックス企画はスタイリッシュな方向に行きがちだが、本作では原曲のプリミティヴなエッセンスを最大限に生かし、沖縄音楽が本来持っていた土着性を浮き彫りにしていく。「海のチンボーラー」のようにそこそこ知られている曲もあるが、基本的には『沖縄音楽総攬』でしか聴くことができなかった楽曲ばかりなので非常に新鮮。時おり、どこの国の音楽を聴いているのかわからなくなるくらい幻惑的な[illegible]

CamScannerでスキャン



Knower

『ノウワー・フォーエバー』

ノウワー

ノウワー(ビート) BRC748
¥2400／12・8発売
(原題 "Knower Forever")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

各々のソロ及びユニットを引っ括めた集大成とも言うべき作品

問答無用の〝超人〟ルイス・コールと、その相棒として絶大なる信頼を得るジェネヴィーヴ・アルターディによるデュオ、ノウワー。ユニットとしては約6年ぶりとなる新作。これは今年6月に自主制作で限定配信されていたものだが、このたび日本でCD発売されることとなった。

ジャズ・ドラマーとして各方面で活躍しつつも、自身の頭の中で思い描くポップを内省的な筆致で描き出すソロ作をリリースし、やがて生楽器で肉感的なファンクを鳴らし始め、さらにはビッグ・バンドを率いて重厚なジャズを奏でるなど、多彩な活動を行なってきたコール。ポスト・パンク的なムードを帯びた不可思議なサウンドを奏でる一方で、ブラジル音楽のハーモニーを織り交ぜた独特の抒情性をその歌に滲ませてきたアルターディ。そして、二人が手を組むノウワーでは、レトロなシンセ・ポップやエッジーなEDMなど煌びやかなダンス・ミュージックを展開。各々のソロ、そしてユニットでそのサウンドに棲み分けがなされていた感があった。

そしてこの新作。なんとその〝棲み分け〟がなくなっている印象なのだ。いわば各々のソロ及びユニットを引っ括めた集大成とも言うべき作品。さらに言うならば、多様な手法と多彩な楽曲を詰め込んだコールの最新作『クオリティー・オーヴァー・オピニオン』の続編のようなのだ。

ここまで読んで「なんだ、あのノウワーじゃないのか」「『クオリティー…』をもう1枚作っちゃったのか」とお嘆きの向きもあるかもしれない。いやいや、それがものすごい傑作となっているのだ。

冒頭から荘厳な管弦楽が聞こえてくる。これまでのノウワーであれば大仰な電子音から始まることが多かったが、今回は『クオリティー…』を連想させるような荘厳な立ち上がりだ。続く「I'm The President」への入り方も実にコールっぽい。軽妙なブラスやストリングスと共に、アルターディがか細い声でトランプ前大統領への揶揄も交えつつ「私が大統領」と名乗りを上げる。

多彩な音楽要素が詰め込まれた本作には、聴き手の音楽遍歴によってその聞こえ方が変わるだろう。筆者にはウェザー・リポートやプリンスやポスト・パンクなど様々な音が聞こえてくる。例えば「Do Not Get Like Crabs?」などまるでプログレ・バンドのブルーフォード。アダム・ラトナーによる流麗なギター・ソロはまさにアラン・ホールズワースだ。また、サム・ゲンデルがスリリングなサックス・ソロを聴かせる「It Will Get Real」からはケルト民謡のような旋律も聞こえ、本編を締める「Crash The Car」などはひたすら美しい子守唄のよう。とにかくメロディが、リズムが、ハーモニーが研ぎ澄まされているのだ。

とはいえ、コールにしてはこれといった新機軸はなく、いずれの手法もこれまでに見せてきたもの。それでも様々な工夫とセンス、そして勢いと気概でこれだけの名曲群を作り上げてしまう。それこそがコールの凄さだろう。ともかくもコールの超人ぶりが遺憾なく発揮され、アルターディとの相性の良さが改めて浮き彫りとなる傑作である。 石川真男

CamScannerでスキャン

Thomas Bartlett

"Standards Vol. 1"

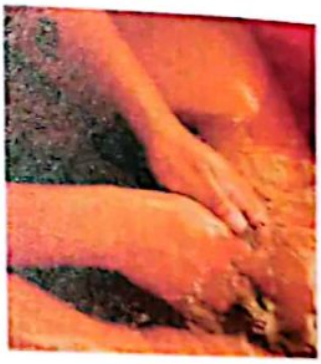
Modern [Germany]
12・8発売

余計な装飾音を徹底的に排除した アメリカン・スタンダード集

昨年はバッハの「フランス組曲」に取り組んでいたトーマス・バートレットの新作は、アメリカン・スタンダード・カヴァー集となった。曲目は「煙が目にしみる」「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」「スマイル」などのポピュラー・チューンばかり。ただしテンポは極端に落とされ、余計な装飾音を徹底的に排除したミニマルなプレイによって、通常とは全く異なった音楽として仕上げている。聴いていると、次第にアンビエント・ミュージックを聴いている時のような瞑想状態に陥ってくるのだ。おそらく自宅録音なのだろう、外部の空気音やペダルを踏むノイズをマイクが拾ってしまっているのだが、それがかえってインティメイトな雰囲気を漂わせているのも印象的だ。

少々気になったのは、こうした20世紀スタンダード・ナンバーのバックボーンである黒人音楽の要素も薄められてしまっていること。もっともこれはバートレットがプロデュースやアレンジで関わってきたザ・ナショナルやスフィアン・スティーヴンス、セイント・ヴィンセントといった米インディ・ロック界のエリートたちの音楽にも共通する問題なのだが。

長谷川町蔵



L'Rain

"I Killed Your Dog"

Mexican Summer [US]
10・13発売

意表を突くアレンジで聴き手を翻弄するNYの実験的ポップ

NYブルックリン拠点のエクスペリメンタル・ポップ・ミュージシャンであるラ・レインことタジャ・チークによる3枚目。ソウルやR&B、ジャズ、ドリーム・ポップ、フォーク、インディ・ロックといった広範な音楽性を繊細なエレクトロニクスとともにミックスする手腕は、高く評価された前2作を発展させた印象だが、より大胆なアプローチを本作では見せている。インディ・ロックのギター・サウンドをパロディしたような"Pet Rock"や、ノイズ・ロックをソウルの歌唱とねっとりと混ぜ合わせる"Uncertainty Principle"など、意表を突くアレンジで聴き手を翻弄する。かと思えば厚いコーラスでうっとりさせるエレクトロニカ・ポップ"Knead Bee"がアルバムのハイライトになっており、奔放な広がりが感じられるアルバムだ。

"わたしはお前の犬を殺した"との強烈なタイトルもまた一種のユーモアとして仕込まれている。コントロールできない感情を演劇的に表現することで、異化しているのである。本作ではダークな内面や非倫理的な感情こそを解放するために多彩なアレンジが導入されており、そこに彼女の怜悧さが表れている。

木津毅

CamScannerでスキャン

Rock [US]

The National

『ラフ・トラック』

ザ・ナショナル

4AD(ビート) 4AD0679CDJP
¥2400／11・17発売
(原題 "Laugh Track")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

前作と同時期に作られた楽曲をツアー後のタフさを加えて録音

今年4月に発表された『ファースト・ツー・ベイシズ・オブ・フランケンシュクイン』と同時期に作られた楽曲を収録した姉妹アルバムのような新作。と言っても、『ファースト…』後にツアーに出てよりタフになり、披露した新曲などをプロデューサーのクッカー・マーティンのスタジオで即興録音した。つまり、前作と本作とは根本的にフィジカルさにおいて違うということだ。

それを象徴するのが最後の、6月のライヴ時のサウンド・チェックでの音源で、後半に向かい徐々に演奏のヴォルテージが上がっていくことが伝わる、この数カ月のバンドの加速を象徴したような「Smoke Detector」。成功したバンドらしい貫禄はあるし、他の曲にはフィービー・ブリジャーズ、ボン・イヴェール、さらにロザンヌ・キャッシュも参加して全体的には華やかだが、ドラムが暴走しギターが轟くこの最終曲での止まらぬ激昂具合は、オハイオ出身の彼らのインディー・ロックとしての誇りを感じさせるし、何より楽しそうだ。だから"Rough"ではなく"Laugh"、しかも"Tough"。粗い演奏であるがゆえに伝わる原点さながらの逞しさが眩しい。岡村詩野

Rock [US]

Panda Bear & Sonic Boom

『リセット・イン・ダブ』

パンダ・ベア&ソニック・ブーム

ドミノ(ビート) BRWG538
¥2000／12・8発売
(原題 "Reset In Dub")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

いい案配の湯加減に仕上がった昨年夏のアルバムのリミックス

昨年夏に発表されたアニマル・コレクティヴのパンダ・ベアと、元スペースメン3のソニック・ブームのデュオ・アルバム『リセット』をオンUサウンドの総帥エイドリアン・シャーウッドがリミックスした作品。

両者のイメージからして、とんでもなくドープでサイケデリックなものになるかと思いきや、50～60年代のドゥーワップ、サーフ・ポップなどにインスパイアされたゆるーいサウンドでニヤリとさせられた『リセット』を、さらにUKきっての過激なダブ・マスターに委ねるという企画。『リセット』に影響を与えた重要な要素のひとつがジャマイカのロックステディで、それをトロピカルなルーツに戻すというのは面白いアイデアだと思った」とはソニック・ブームのコメントだ。ビーチ・ボーイズをカリビアン化してダブ・ミックスしたようなサウンドは、オリジナルのポップさをしっかり残しながらも、エイドリアンらしいメタリックでカッティング・エッジなダブワイズがいいアクセントになって、実にいい案配の湯加減に仕上がっている。音像としても新鮮だし、オリジナル・アルバム以上と言えるかもしれない。

小野島大

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Dolly Parton

"Rockstar"

Butterfly [US]
11・17発売

77歳とは思えないくらい力強い ロックの有名曲のカヴァー集

22年に"ロックの殿堂"入りするにあたって、それならロック・アルバムを作らなきゃと考えた彼女の元に豪華ゲストが集結したという作品のバックグラウンドが振るっている。オリジナル9曲に加え、ロックの有名曲のカヴァー21曲を収録した2枚組超大作。ボール&リンゴを迎えた「レット・イット・ビー」をはじめ、カヴァーの大半が本人との共演というところにアメリカのショウビズ界におけるパートンの存在の大きさを改めて感じずにいられない。

"サティスファクション"を一緒に歌ったケランディ・カーライルなど、現代のアイコン的な女性アーティストを多数迎える一方で、バド・ライトの一件で悪名を高めたキッド・ロックや、ロックの男性中心主義を象徴するメタル界隈からもゲストを迎えている。80年代の王道ロックを踏襲したサウンド、懐かしい曲を掘り起こしながら、メドレーで収録した「伝説のチャンピオン」「ウィ・ウィル・ロック・ユー」を含むベタな選曲ともにロックのステレオタイプを演じているようにも思えるが、ある意味、そんな懐の深さもパートンなのだろう。その歌声は77歳とは思えないくらい力強い。 **山口智男**

Rock [US]

Jolie Holland

"Haunted Mountain"

Cinquefoil [US]
10・6発売

楽器の入れ方とアレンジが 素晴らしい米国の自作自演歌手

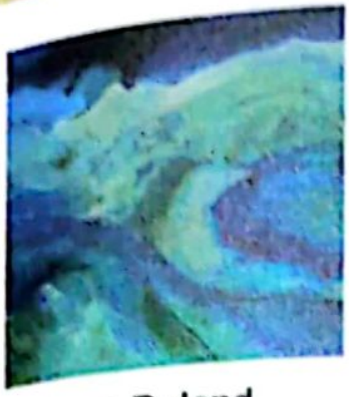
米国出身のフォーク／カントリー・ミュージック系のシンガー・ソングライターが、ソロ・アルバム・デビュー20年目の年に放った7作目。伝統を踏まえながら多彩なアプローチで"進化"を試みた快作である。

アコースティック・ギター弾き語りを軸にしつつ、3人のミュージシャンとの"ロック・バンド体勢"で作られている。とにかく楽器の入れ方とアレンジが素晴らしい。ジョリーが演奏するヴァイオリンやピアノをはじめ、シンセサイザー、ペダル・スティール、バーカッション、クラリネットなどを適材適所で使い、豊かな曲の表情に一役買っているのだ。程良い田舎風味で全体的にまったりしているとはいえ、曲によっては生々しくブルージーなエレクトリック・ギターがうなり、打ち込みにも聞こえる原始的なリズムのビートがリードし、レッド・ツェッペリンの「天国への階段」を想起する曲も。

ビッグ・シーフのバック・ミークとのデュエット曲も聴きどころ。本作と同タイトルのソロ・アルバムに彼が収めたジョリーとの共作曲"Haunted Mountain"が、彼女のヴァージョンでリメイクされていることも記しておく。 **行川和彦**

CamScannerでスキャン

Rock [Canada]



Helena Deland

"Goodnight Summerland"

Chivi Chivi [Canada]
10・13発売

聴く者の琴線をふるわせるモントリオールの自作自演歌手

拠点はカナダのモントリオール。ジェイペグマフィアやクレア・ルーセイとコラボレートもしているシンガー・ソングライターが、エレクトロニック・ユニット＝ヒルデガルトでの同名デビュー作（21年）を挟んで発表したソロ2作目。シンセやドローン、ディストーションなども用いて控えめなビート感が心地よいインディ・ポップを聴かせた前作から、フォーキーなアプローチに舵を切った。

ピアノが奏でる静謐なオープニングから、親密なアコースティック・ギターの音とファルセットのハーモニーが柔らかく重なる「Saying Something」、そして有機的なバンド・サウンドが静かに躍動する「Spring Bug」へと続いていく。21年夏に亡くした母との別れが背景にはあり、「Who I Sound Like」には悲痛なまでの思いが溢れるが、どの曲も美しいのだ。どこまでも。ここで彼女が綴るメランコリックなメロディは、自身の喪失感を埋めるだけではなく、聴く者の琴線をふるわせるポイントを心憎く突いてくる。柔らかくフォーキーな音や、甘く繊細な彼女の歌の印象が、妙にヴィヴィッドなのも面白い。

赤尾美香

Rock [UK]

Holly Humberstone

"Paint My Bedroom Black"

Polydor [UK]
10・13発売

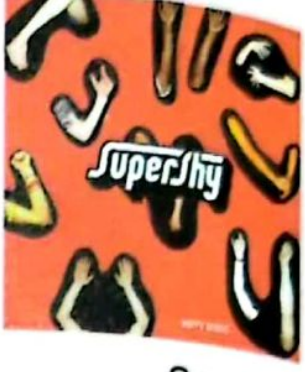
負の感情を曝け出して共有する23歳の女性自作自演歌手

デビューから3年9か月。その間、オリヴィア・ロドリゴのツアーでオープニング・アクトを務めたり、ボンベイ・バイシクル・クラブのアルバムに参加したりと、さまざまな経験を積んできた23歳の女性シンガー・ソングライターが満を持してフル・アルバムをリリースした。

ソウルの影響を80年代風のアナログ・シンセが鳴る空間系の音像に落とし込んだ全13曲。モータウン・リズムを使ったアップ・テンポのポップスがあったり、17歳の男性シンガー、デイヴィッドをフィーチャーしたブルース・ロックがあったり、トリップ・ホップがあったり、ドラムンベースがあったり、アコギで爪弾くフォーキーなバラードがあったり。シンセ・オリエンテッドと思わせ、それだけにとどまらない曲調の変化も聴きどころだが、そんな曲の振り幅を一つに繋げているのが、アルバム・タイトルで「Black」と表現した強烈なメランコリー。彼女は内なる負の感情を曝け出してリスナーと共有したいと考えているそうだ。ビリー・アイリッシュも擁する彼女の所属レーベルは、もちろんアイリッシュに続くアーティストに育てたいと考えているに違いない。

山口智男

CamScannerでスキャン



トム・ミッシュの別名ユニットによる ハヴ・ファンの感覚に富む1枚

Supershy

『ハッピー・ミュージック』

スーパーシャイ

ビヨンド・ザ・グルーヴ(ビート)
BRC709
¥2400／11・24発売
(原題 "Happy Music")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

スーパーシャイはトム・ミッシュがダンス・ミュージックに焦点を絞った別名ユニット。そう聞いて思い出したのは、遂にロイヤル・アルバート・ホール公演が決まったジョーダン・ラカイがダン・キーの名前で発表した20年のアルバム "Dan Moments" のことだ。あれもジョーダンがダンス・ミュージックに注力した作品で、2LPはクラブ向けのプロモ盤みたいなホワイト・レーベルのデザインもカッコ良かった。

なんてことを思いながら本作を聴いていくと、ラストの1曲前でトムとジョーダンの共演が披露される。ほんとに仲良しというか、切磋琢磨というか。

そもそもはロックダウンの時期に制作を始めたとのことで、タイトル曲にはグロリア・ベアの80年代ディスコをサンプリング。「フィール・ライク・メイキン・ラヴ」ではロバータ・フラックとボブ・ジェイムス、両者のヴァージョンを合体させたカヴァーを聴かせる。3年前のブルーノート盤は、しっかりとプロデュースされたシリアス寄りな作風。対して今回は、ハヴ・ファンの感覚に富むラフな1枚。その振れ幅もトムの魅力と思い知らされる。

宮子和眞

今のイギリスに多層性をもたらす アーティストの3作目のアルバム

Tirzah

『Trip9love...???』

ティルザ

ドミノ(ビート) WIGCD514
¥2000／11・17発売
(原題 "Trip9love...???")
●問合せ先＝03・5768・1277
(ビート)

現在のUKが抜群に面白いのは疑いようのない事実で、デビューから10年を迎えたこのティルザも今のイギリスに多層性をもたらしている重要人物の一人だ。今年素晴らしい新作を出したスピーカーズ・コーナー・カルテットやサンファら南ロンドンのシーンとも関わる彼女は、高く評価されたセカンド "Colourgrade" からわずか2年で、リミックス盤、そしてこの新作と立て続けにリリースした。しかも、今作ではまた新たな扉が開かれている。

今回もミカ・レヴィがプロデュースだが、二人の自宅スタジオを中心に1年かけて録音された。よりアブストラクトさが強調されてはいるものの、明らかに歌もの作品になっていて、エヴリシング・バット・ザ・ガールやコクトー・ツインズの系譜上に置いても自然なほど。ひんやりとしたビートに絡ませたピアノやギターの音は確かにクラシカルだが、リヴァーブがかかっていること、それら生楽器の音がループさせていることもあり、ヴォーカルに必要以上の感情、叙情性を持たせていないのが興味深い。まるで強く風が打ちつける森の闇から聞こえる静かな遠吠えのような作品だ。

岡村詩野

CamScannerでスキャン

Teenage Fanclub

『ナッシング・ラスツ・フォーエヴァー』

ティーンエイジ・ファンクラブ

ベア MUSIC/ビクター
¥2730／10・25発売
(原題 "Nothing Lasts Forever")

好き嫌いを超えて歳となるスコットランドのバンドの12作目

[illegible]好き嫌いを超えて、いつのまにか歳となる。ビートルズとバーズの前期のブレンドにヴェルヴェット・アンダーグラウンドの後期が混入したみたいで、穏やかに快走する"ギター・ポップ・ロックンロール"だ。ガレージ・サイケっぽいベースもタイトすぎないドラムもいい味を出しており、鍵盤楽器のウェイトも高い。ほとんどのパートがデュエットに関こえる多重ヴォーカルも、絶妙である。ほとんどが3分台のパワフルな曲が続いたあと、ラスト・ナンバーが7分強の静かな曲という構成も心憎いアルバムだ。

行川和彦

Joe McAlinden

『ウエアー・ザ・クラウズ・ゴウ・スイミング』

ジョー・マカリンデン

サ・ヴァ?(ハヤブサランディングス)
HYCA8057
¥2400／10・18発売
(原題 "Where The Clouds Go Swimming")
●問合せ先＝03・5809・0637
(ハヤブサランディングス)

スコティッシュ・シーンで活躍した音楽家が闘病の末に発表した復活作

第1次スコティッシュ・ブームとも言うべき80年代の、グラスゴーやエディンバラを中心に、パステルズを始め、ティーンエイジ・ファンクラブ、ヴァセリンズといったグループたちの活躍と成果は目覚ましいものがあった。そんな中でソングライターおよびソロ・プロジェクト＝スーパースターとして活躍したジョー・マカリンデンの復活だ。00年代以降、病気とも闘っていたそうで活動はかなりペース・ダウンしていたため久しぶりにしっかりと聴くことになったのだが、1曲目(全8曲)が流れ出したとたんにあの頃の感触が戻ってくる。それは穏やかで緩の落ち着いたポップ感覚に満ちた曲調であり、余計な演出なしにそれを訥々と歌う姿だ。

スーパースター時代の曲の再演「Sparkle」のような思い入れたっぷりのヴァージョンは長年のファンには大歓迎だろうし、ここらのシーンの煌めきに出会った新しい聞き手には、改めて純度の高いポップス・ワールドの魅力と映るだろう。記憶障害という病をまだ抱えているそうで、そのせいか、ちょっと重い仕上がりになっているのだが、さらなる復調を期待したい。

大鷹俊一

CamScannerでスキャン

Troye Sivan
"Something To Give Each Other"

(ダブル・プラチナム)

イ・ポップ・アイコンとしての
センスの洗練を図った3作目

オープニングはこの夏のゲイ・アンセムになった『Bloom』。ハウス・プロデューサー陣による楽曲は下世話になりすぎず、柔らかな音色を生かした跳ねる低音のシンプルなダンス・ビートとバラードになりがちなメロディラインは、ダンスフロアの快楽主義と直結的なゲイ賛歌を歌うことで、現在のトロイ・シヴァンのモードを明確に提示している。つまりオープンに自身のセクシュアリティを表現することで、初期のインナーなイメージを脱ぎ捨てることにも成功し、理想を描きながらクィアの性の冒険を実践してみせるのだ。

そうしたエロティックな表現がこのうち何曲には過ちを犯しているが、ス

Lost Girls
"Selvastasten"

(シングル・ゴールド)

身体性が色濃さを増して感じられる
ノルウェーの男女デュオの2作目

ソロでも活動するジェニー・ヴァルと、多ジャンルのボーヴァル・ウォルテンによるデュオ、デビュー作はスポークン・ワードとエレクトロニクスが絶妙に合うアッパーなグンス・レコードだったが、この2作目は"ソングライティング"を意識させる曲作りや曲構成が際立つ点がポイントといえるかもしれない。

ミニマルな電子音のビートやハウシーなダンス・フィール、アンビエントのテクスチャーといった前作の要素が失われたわけではないが、トランスを誘うリンドストローム風のも曲目は本作の白眉だが、しかしとり

わけ注目すべきは、2曲目や7曲目に顕著な"インディ・ロック的"ともいうべきアプローチだろう。あるいはレナード・コーエンの影響を明かす2曲目においても、ピッチや音色をグラデーションさせながら催眠的な効果を演出するギター・リフが印象的だ。そしてそうした変化と呼応するように、ヴァルのヴォーカルも多様的な表情を帯びて表現の幅を広げている。タイトルは「自分自身を感じようとする人」的な意味だそうだが、音楽家としての二人の身体性みたいなものが色濃さを増して感じられる作品だ。

天谷薫ンガ

マルチカルチュラルな魅力をもった ロンドン在住の自作自演歌手

Frida Touray

『メンティング』

フリーダ・トゥレイ

コアポート　2022年10月
CD1,111・22発売
(原題 Mending)
●黒合セキ＝042・328・2165
(コアポート)

ガンビア人の父とスウェーデン人の母の元、スウェーデンに生まれたフリーダ・トゥレイは現在ロンドン在住。リアン・ラ・ハヴァスのバック・ヴォーカルを務めて注目され、新世代ソウル・グループと目されるネイティヴ・ダンサーのリード・ヴォーカルも担う才媛だ。

今作は22年に配信で発表された彼女の初EPに、スタジオと教会で収録されたライヴ音源をプラスして編まれた本邦限定のデビュー・アルバム。アンビエントR&B的に残響と空間をゆったりと生かしたサウンドを使い、時にはそれに溶け込むように、フリーダはセンシュアルな歌声を余裕たっぷりに響かせる。表現力とコントロールという点では彼女が影響を公言するビヨンセやアリシア・キーズを彷彿させるスケール感を早くも獲得しているのは頼もしい。シルキーでジャジーな質感を内包するフリーダの特性を踏まえ、的確なプロダクションを施したクリス・ハイソンにも刮目したい。サウンドの属性をすり抜けていくような、マルチカルチュラルな魅力をもったシンガー・ソングライターの登場だ。UKジャズを牽引するレーベル、エディションからのリリース。　**廣川裕**

LA拠点のプロデューサーによる 異なる音楽が交差する瞬間の輝き

Mndsgn

"Snaxxx"

Stones Throw [US]
10・6発売

マインドデザインはLAを拠点とするプロデューサー／シンガー・ソングライター＝リンゴ・アンチェタのプロジェクト。2014年にストーンズ・スロウから"Yawn Zen"でデビュー以来、歌えるビートメイカーとして独自のポジションを確立。ヒップホップ、ジャズ、ファンク、R&B、フュージョンを柔らかな感性でまとめ上げる手腕が高く評価されてきた。21年リリースのサード・アルバム"Rare Pleasure"では、カルロス・ニーニョやキーファーなどストーンズ・スロウのスターが結集、初のバンド編成によるレコーディングが実現した。

本作は"Snax"(18年)、"Snaxx"(19年)に続くシリーズ第3弾。フル・アルバムよりリラックスしたムードのビート・アルバムだが、彼らしい様々な要素が詰まった濃密な内容だ。デヴィン・モリソン参加のアーバンなR&Bやアンナ・ワイズ、リヴが歌うメロウでドリーミーなナンバー、70～80年代ジャズ／フュージョン色濃厚なゴージャスでスペイシーなトラックなど、短い曲が次々に移り変わっていく変化の軽やかさ、異なる音楽が交差する瞬間の輝きが素晴らしい。　**かこいゆみこ**

CamScannerでスキャン

Quantic
『ダンシング・ホワイル・フォーリング』
クァンティク
PIAS(ビック・インディペンデント)
PIASR143CD
¥2800／11・15発売
(原題 "Dancing While Falling")
●問合せ先＝Import Net
(ビック・インディペンデント)

ディスコの源をあらためて
紐解いたような多幸感に満ちた作品

英バーミンガム近郊のウスクーンシャー出身で、現在はニューヨークを拠点に活動しているクァンティクことウィル・ホランド。クンビアをはじめとする中南米音楽に傾倒し、ファンクやソウル、ヒップホップ、レゲエの要素を織り交ぜながら、作品ごとに異なるテーマの音楽をモダンなプロダクションと共に提示してきた。近年はストリングスをより重視する傾向が見られ、この3年ぶりの新作ではハミルトン・ボハノンやアリー・レヴァンの影響を公言しており、ディスコの源であるラテンとアフロ・カリビアンのリズムとソウル・ミュージックをあらためて紐解いたような作品となっている。

しかし、ダンスフロアでの機能性を念頭に置いたというよりは、コロンビアに住んでまで音楽を探求する彼の興味が赴くままにディスコというジャンルを俯瞰し、長年のキャリアで培ってきた経験と共に彼なりのディスコを演奏してみせている。艶やかで麗しいサウンドの上を心躍るリズムが反復し、豊かな声量の女性ヴォーカルがそれらを従えて音場に繰り出すというような多幸感に満ちた作品。ロンドンの新星、コニー・コンスタンスも参加。

油納将志

Salamanda
『In Parallel』
サラマンダ
ブランチャ ARTPL208
¥2200／11・3発売
(原題 "In Parallel")
●問合せ先＝03・3710・8049
(ブリッジ)

最前線に浮かび上がった韓国の
エレクトロニック・ミュージック

韓国のアンダーグラウンドなクラブ・パーティーや配信番組で彼女たちの名を見るようになったのは20年から21年にかけてのことだっただろうか。イギリスのメトロンやニューヨークのヒューマン・ピッチといった海外レーベルからリリースを重ねるなど、2段飛ばしで階段を駆け上がるような飛躍を続け、気づいたらレフトフィールドなエレクトロニック・ミュージックの世界で熱い注目を集める存在となっていた。

新作は現行ダンス・ミュージック最前線を切り開くロンドンのウィズダム・ティースから。ニューエイジ～環境音楽のニュアンスも濃いエレクトロニック・ミュージックという軸足はそのままに、「Formation」では自身の声をループさせてポップな音の風景を描き出すなど、曲調が大幅に広がった。決してオクぐならず、ふたりで音遊びをしているような楽しさが全曲に貫かれている点は前作から変わらないが、音遊びの延長上にエレクトロニック・ミュージック最前線がふわりと浮かび上がるところに本作のおもしろさはある。楽曲構成の巧みさ、印象的なメロディーにも音楽的センスの高さが窺える。

大石始

CamScannerでスキャン

Resavoir

『Resavoir (Second Album)』

レザヴォア

リングス（ディスクユニオン） RINC113
¥2700／11・22発売
（原題 "Resavoir"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

ジャーマン・ロック的な構成美を感じさせるシカゴのコレクティヴ

美しいアルバムだ。地域性がはっきり刻まれたサウンドではないし、ジャンルも中間的だから、ぼんやりしていると何を聴いてたのか忘れてしまう。でも、そこが良い。

シカゴのミュージシャン、ウィル・ミラー率いるジャズ・コレクティヴの2作目だというが、ジャズはそれほど感じない。というか、ジャズ的に発展しない曲の方が面白い。ミラーは鍵盤楽器と管楽器を演奏するようだが、一番印象的なのはシンセサイザーのシークエンスやレイヤーの作り方。そこに70年代後半のジャーマン・ロック的な構成美を感じるのは、ジャケットがイーノ・メビウス・ローデリウス&プランクの『[illegible]』に似ているからだけではないだろう。シンセだけの『[illegible]』から『[illegible]』のミニマル・オリエンタル的な生演奏に移っていくあたりの美しさは格別だ。

インストの音楽を聴いていて、これは演奏者は楽しいのだろうか？と思うことがあるのだが、それが悪い意味ではなくて、リスナーには好ましい抑制感として捉えられるアルバムだ。柔らかなヴォーカル入りの3曲目には大好きなホイットニーの二人が参加していた。　高橋健太郎

Koma Saxo

『ポスト・コマ』

コマ・サクソ

リングス（ディスクユニオン） RINC115
¥2600／11・22発売
（原題 "Post Koma"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

疾走感や爆発力ある演奏を聴かせるスウェーデンの7人組

スウェーデンのベーシスト、プロデューサー、ペッター・エルドが率いる7人組がコマ・サクソ。過去作の強靭でアタックの強いプレイも鮮烈だったが、本作もまた凄腕プレイヤーたちによる血気盛んな競演、共演が展開されている。まず、J・デイラ的というかクリス・デイヴ以降というか、不規則でつんのめるようなビートが実に独創的。アンサンブルの鍵を握るのはドラムだろう。エルドはエリック・ハーランドやリチャード・スペイヴンを迎え、ドラムにフォーカスした作品も制作しており、本作はビート・ミュージック的なニュアンスも含む。

さらに、3人のサックス奏者が互いの太さや熱量を競い合うように吹きまくる。豪快で肉体的な、エルドのルーツであるスウェーデンの民謡からの影響もあるという本作だが、それ以上に、音響派やエレクトロニカ、ヒップホップからの照射が見受けられる。かと思いきや、オーネット・コールマンを参照したような曲もあったりと、フリー・ジャズの伝統も踏まえている。演奏の疾走感や爆発力、濃厚なエナジーは北欧のアトミックを凌駕する勢いに満ちている。渾身の一作だ。　土佐有明

CamScannerでスキャン

ピアノ・トリオの領域にまだまだ可能性があることを示した力作

Enemy
『ザ・ビトレイアル』

エネミー
リングス（ディスクユニオン） RINC14
¥2600／11・22発売
（原題 "The Betrayal"）
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

22年にECMからリリースされたアルバム『ヴァーミリオン』を本誌でも紹介した英国人ピアニスト、キット・ダウンズ。同作でも組んでいたベッター・エルド(b)、ジェームズ・マドレン(ds)とのピアノ・トリオ＝エネミー名義による新作を発表した。18年から組む同トリオとしては3枚目となるアルバム。

〝意図的な矛盾と脱皮〟がテーマといい、どちらかというと室内楽的に静謐なアンビエント感を醸成していた『ヴァーミリオン』と比較すると、全体的な構造はより自由で闊達。つまりトリオならではの3者による互いの触発と衝突、さらにリズムの冒険が果敢に試みられている。前作にはジミ・ヘンドリクス「砂のお城」のカヴァーが収められていたが、本作収録曲はすべてダウンズとエルドによるオリジナル。よってカラーはより統一され、3人のエナジーが一点に集中する様がビンビン伝わってくる。教会音楽やトラッドなど多彩なバックグラウンドをもつダウンズらしい変化に富む主題の提示に即時に反応しながらインプロヴァイズするリズム隊も素晴らしい。ピアノ・トリオの領域にまだまだ可能性があることを示した力作。

廣川裕

今もコケティッシュな響きに満ちているライヴでの愛唱歌集

Stacey Kent
『サマー・ミー、ウィンター・ミー』

ステイシー・ケント
ナイーヴ（キング） KKJ229
¥2727／11・7発売
（原題 "Summer Me, Winter Me"）

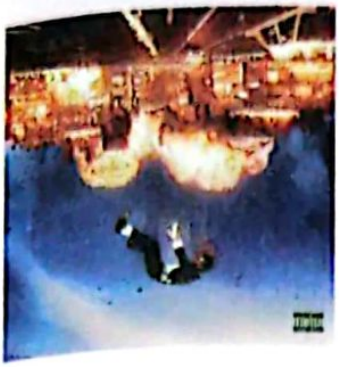
ステイシー・ケントの新作は、ライヴではよく歌うけれど過去のアルバムには収められていない、そういうナンバーをスタジオ録音したコレクション。聴き進むほどに、この曲は今までのアルバムに入ってなかったっけ、というちょっとした驚きが頭をもたげる11曲になっている。

アントニオ・カルロス・ジョビンの「コルコヴァード」はもはやライヴの定番だし、ユベール・ジローのシャンソン「アンダー・パリス・スカイズ」も同様。少なくともこの10年は彼女の東京公演に皆勤しているので、英語と仏語の2ヴァージョンが収められている「行かないで」や、「ハッピー・トーク」など、聴き覚えのあるレパートリーが少なくない。

バックは、夫君であるサックスのジム・トムリンソン、ピアノのアート・ヒラハラと、前作から引き続いてのふたりに加え、ベース、ドラムス、弦楽四重奏が、曲ごとにオーガニックに重なる。そして、声量やパンチではなく、巧みなヴォイス・コントロールや子音の発音の美しさで聴かせる、ステイシーのヴォーカル。円熟ではなく、今もってコケティッシュな響きに満ちている点に、敬意を表せずにはいられない。

宮子和眞

CamScannerでスキャン



Rap/Hip Hop

Offset

"Set It Off"

Motown [US]
10・13発売

ミーゴスからもレーベルからも離れ一本立ちで活動していく姿勢

オフセットのセカンドは、名前をもじりつつ〝始動させる〟と宣言したタイトルに意図が凝縮されている。トリオだったミーゴスのテイクオフが亡くなり、クエイヴォおよび支払いで揉めているクオリティ・コントロールからも離れ、モータウンへ移籍。一本立ちで活動していくつもりなのは、前作でも示した〝トラップ以外もできるからね〟から〝トラップを土台に広げていくね〟と姿勢を強化したことからも見てとれる。

ドン・トリヴァーとのシングル〝Worth It〟は、U-ロイの名フレーズから始めて、バスタ・ライムズの名曲と同じビートを敷いてみたり。妻カーディー・Bとの〝Jealousy〟でスリー6マフィアをサンプリングし、フローを取り入れたり。気合は買うが、ボーイ・ワンダ作〝ヨヨ〟がドレイク風味なのはやりすぎかも。ヤング・サグ、フューチャーなどファミリーのほか、ラトーやヤング・ヌーディなどを後押しする姿勢もいい。ミーゴスおよびトラップ勢の特徴である、煌びやかなライフスタイルと金持ち自慢に偏りがちなのは少々物足りない。〝3人が恋しくないと言えば嘘になる〟というリリックにはグッとくる。

池城美菜子

Rap/Hip Hop

Drake

"For All The Dogs"

OVO [US]
10・18発売

ワーカホリックなラッパーとしての自己像を徹底している8作目

22年の彼は四つ打ちダンス・アルバムや21サヴェージとの共作で新しい表現を開拓したように見えたが、大量の作品群のなか、失恋に悩むプレイボーイのリリックとキャラもマンネリ化し、ネタ切れ感を指摘されることもしばしば。そんな中で大ヴォリュームの通算8枚目となる本作をリリースし、元カノたちや同業ラッパーたちをディスり続ける37歳の大人としてあるまじきスタンスは、ワーカホリックなラッパーとしての自己像を徹底している印でもある。

ぶっきらぼうなキックとハットによるリズム・アプローチが新鮮な21サヴェージを迎えた3曲目、ハードなトラップ・ビートにボーステインングが冴える4曲目、J・コールを迎えた効果かドレイクのヴァースもタイトな6曲目、イートをフィーチャーしたレイジ的な7曲目と前半は総じて高印象。推し曲は息子のアドニスを起用したMVも話題のジャジーなピアノとヴォーカルをサンプリングしたブーン・バップの17曲目で、ビートがドレイクのワード・プレイを引き立てる。彼の場合、サウンド面の変化球とポップさは両立するのだから、まだ見ぬ組み合わせの妙をもっと聴きたくなる。

吉田雅史

CamScannerでスキャン

Black Pumas

『クロニクルズ・オブ・ア・ダイアモンド』

ブラック・プーマス

ATO(ビッグ・ナッシング) AT0065-400
¥2500／10・27発売
(原題 "Chronicles Of A Diamond")
●混合せき＝bignothing.net
(ビッグ・ナッシング)

編曲の創意工夫が見てとれるサイケデリック・ソウルの二人組

米テキサス州オースティン出身の二人組、ブラック・プーマズ。グラミー最優秀アルバム賞を受賞した19年の同名ファーストに続く2枚目。

シンガー&ソングライターでもあるエリック・バートンのタフで表情豊かなソウル歌唱を軸に、かつてはグルーポ・ファンタズマに在籍していたプロデューサー、エイドリアン・ケサダの70年代ロック風ギターが色を添える、という構図は前作同様。ギターの音色が、サイケデリック・ソウル・バンドと呼ばれる所以だろうが、「ジェミニ・サン」の中期ビートルズ風アレンジなど、たしかにサイケな要素も根づいている。「アイス・クリーム（ベイ・フォーン）」のブレイクビーツ風リズムなど曲ごとに編曲の創意工夫が見てとれる。

冒頭を飾る「モア・ザン・ア・ラヴ・ソング」はバンドのカラーを活かしつつ、見事にバランスよくポップ・ソングとして成立している。歌手名を知らずにラジオで耳にしたら、アイズレー・ブラザーズにこんな曲あったっけ、と興奮しただろう。

もう少しハミ出した（あるいは欠けた）ところがあっても、と思わなくもないが、〝歌〟を素直に求める彼らの気持ちはよくわかる。**安田謙一**

Mike

"Burning Desire"

10k [US]
10・13発売

ナイジェリアの文化やサウンドを積極的に入れたNYのラッパー

「これからもっと名前を聞くようになる才能」と2021年の"Do Co"で書いた予言が当たった。ロンドンを含めて転々とした背景が、グライムやレゲエまで取り入れるマイクの骨子ではある。いまではNYブルックリンのジャンルを縦断するオルタナ・シーンを代表ラッパーだ。プロデューサーのアルケミストや先輩アール・スウェットシャツと近しく、ここにニューヨークのラッパー、ウィキも入ってお互いの作品に客演したり、丸ごとコラボ・アルバムを作ったり。理解者を得てさらにパワー・アップした本作は、大きく路線は変えず、深めてきた印象。

特筆すべきは、母の祖国、ナイジェリアの文化やサウンドを積極的に入れたこと。別名義、DJブラックパワーとして2曲以外をプロデュースした、ほぼ自作自演アルバムであり、全体がストーリーのように流れて気持ちいい。コラージュのようなサンプリングの上に、スポークン・ワードのようなラップに、今回は生演奏の要素を加えて生身の温もりの度合が上がっている。今年、来日を果たしたリヴのコーラスにヴェンナのサックスが入る8曲目がとくに素晴らしい。**池城美菜子**

CamScannerでスキャン

Ana Frango Eletrico

『ミ・シャマ・ヂ・ガト・キ・エウ・ソウ・スア』

アナ・フランゴ・エレトリコ

シンク!(ディスクユニオン)
THCD634
¥2300／10・25発売
THLP635(LP)
¥4000／11・1発売
(原題"Me Chama De Gato Que Eu Sou Sua")
●問合せ先＝03・3511・9944
(ディスクユニオン)

ブラジル音楽の伝統も音楽的旨味として滲み出したポップ

97年にリオ・デ・ジャネイロで生まれたロシア系ブラジル人、芸名"アナ・フランゴ・エレトリコ(電子鶏のアナ)"。これは、19年のセカンド・アルバム『リトル・エレクトリック・チキン・ハート』以来の新作だ。

アナはこの約4年間に、チアゴ・ナシーフ、グス・レヴィ、アントニオ・ネヴィス、ブルーノ・ベルリ、フーベルなど、ほぼ同世代のブラジルのミュージシャンのアルバムにヴォーカルで参加。また、彼女が20年に発表したシングル"Mulher Homem Bicho"は、この新作に繋がるディスコ調だった。なお、ミスター・ボンゴから今春リリースされたコンピレーション"Hidden Waters: Strange And Sublime Sounds Of Rio De Janeiro"の1曲目は、アナの前作から選ばれた"Saudade"。さらに同作には、アナがフィーチャーされたヴォヴォ・ベベの音源や、彼女がプロデューサーとして関わったバラ・デセージョやドラ・モレレンバウムの音源も収録されている。よってアナ周辺の、最近のリオの音楽シーンを素早く把握するためのサンプラーとしても、お薦めだ。

前作発表時のアナの音楽は、ブラジルでは"ボサ・ポップ・ロック"とも形容されていた。すなわち彼女は、現代の欧米のオルタナティヴ・ポップやインディ・ロックのミュージシャンたちと同じ空気を呼吸し、同じ地平に立っているシンガー・ソングライターだ。彼女の音楽には、60年代後期のトロピカリスタをはじめ、新旧の多彩なブラジル音楽からの影響が見え隠れしている。また、本作の最後の曲は、オルケストラ・インペリアルの一員でもあるルビーニョ・ジャコビーナが、ジョナス・サーと共作した曲のカヴァーだ。ただし、本作に先立って配信リリースされた1曲目の"Electric Fish"は、近年世界的に再評価が著しいブギー調の曲。無論、これは70年代後半から80年代前半にかけてのブラジリアン・ブギー再評価の流れを受けた曲でもあるが、歌詞は英語である。この華やかな1曲目が象徴しているように、本作は前作に比べて、ダンス性が強く、ファンキー度は5割以上増しといったところだろうか。同じく英語詞の5曲目"Boy Of Stranger Things"は、複数の管楽器が快活に鳴り響き、女性コーラスが盛り立て、オートチューンが使用されているファンク風。この曲に限ったことではないが、アルベルト・コンチネンチーノのベースがよく動いている。一方、またもや英語詞の8曲目"Let's Go Before Again"は、キュートな電子音と淡い女性コーラスが交錯する曲で、前作にも影を落としていたステレオラブを思い起こさせる。

アナのヴォーカルは小悪魔的に可愛らしく、サウンドは生楽器主体なので、まろやか。映画音楽的なストリングスがあしらわれたバラードも含めて、全10曲は簡潔に、ポップにまとめられている。この"ポップ"の中には、ブラジル音楽の伝統も音楽的旨味として滲み出ているが、繰り返すと、アナはクィアネスに対する目配りを含めて、現代のカリオカ。この新作は明らかに同時代の、全世界に向けられている。

渡辺亨

CamScannerでスキャン

Bad Bunny
"Nadie Sabe Lo Que Va A Pasar Mañana"

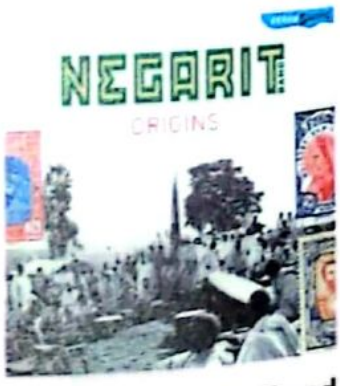
Rimas [US]
10・13発売

手堅さと実験精神のバランスが絶妙なプエルトリコ出身の男性歌手

スポティファイによると、20年以降の世界で最も聴かれているアーティストはバッド・バニーなのだそう。ほかにもプエルトリコ出身の男性歌手は大勢いるのに、なぜ彼が圧倒的な支持を得ているのだろうか。本作を聴けば何となく理由がわかる。タイニーを中心としたプロダクション・チームの手によるトラックは、王道ラテン・トラップのほか、ジャージー・クラブのビートを導入した"Where She Goes"、ドリル、ウイスキー「響」に捧げたハウス・チューン"El Clí"、そしてマドンナ「ヴォーグ」をトラップに改変した"Ké Le Dan Duro"など、アイデアに溢れたもの。手堅さと実験精神のバランスがドレイクのチーム並に取れているのだ。

そしてひょっとするとリリシストとしてのバッド・バニーもドレイクをお手本にしているのではないだろうか。「巨万の富を持ちながら恋愛では失敗続き」というキャラ設定が彼と被っているからだ。もっともサルサを育んだ国の出身だけに、その恋愛描写はもっと血なまぐさくて切ない。すくなくともドレイクは自分のアルバムに「誰も私の心の中のあなたを殺すことはできない」なんて名付けないだろう。

長谷川町蔵



Negarit Band
『オリジンズ』

ネガリット・バンド
ライス（オフィス・サンビーニャ）
BDR3123
¥3000／11・5発売
（原題"Origins"）
●問合せ先＝048・814・0830
（オフィス・サンビーニャ）

洗練されたタッチだが侮れないエチオピア人ドラマー率いるバンド

エチオピア音楽に斬新かつ現代的なアプローチで迫った音楽家に焦点を当て、ユーカンダンツなどを輩出してきた"エチオソニック"シリーズの久々の新作は、複数のバンドを率いて活動してきたエチオピア人ドラマーが12年に結成した"土着ジャズ・プロジェクト"の初作。70年代後半のウェザー・リポートや初期のリチャード・ボナあたりに通じる音楽性は、ジャズというよりはフュージョン色が強く、鋭角的な作品が多い当シリーズではやや おとなしめな印象も受けるが、緻密に織り込まれたプロダクションと曲調の多彩さで飽きさせない意欲作となっている。

インストが主体だが女性コーラス4人組などの歌をフィーチャーした楽曲も多く、エチオ・ジャズらしい管楽器アンサンブルやラテン色の強い打楽器を効かせた曲もあって、切り口は多様。また、曲ごとにエチオピア各地の部族の音楽のエッセンスを意識的に取り入れ、旋律もリズムもヴァリエーションに富んだものとなっており、その違いを明確に叩き分けているリーダーのドラミングも見事だ。エチオピア特有の変拍子もスムースに血肉化した音は、洗練されたタッチだが侮れない。

吉本秀純

CamScannerでスキャン

East Asia

Balming Tiger

"January Never Dies"

Awal [Korea]
10・19発売

奔放な創造性が光る曲で溢れる韓国のクリエイティヴ集団の初作

バーミング・タイガーは、18年に韓国で誕生したクリエイティヴ集団。シンガー・ソングライター、ラッパー、映像作家といったさまざまなクリエイターによって構成されている。20年の韓国ヒップホップ・アワードでMVが賞を獲得するなど、デビュー当初から注目を集めてきた。彼らは多国籍でオルタナティヴなK-POPバンドを自称し、定型にとらわれない音を鳴らしてきた。グループとしての在り方と同じように、サウンドも1曲の中で多くの表情を見せる流動性が際立つ。その勢いは留まるところを知らない。

そんな彼らがファースト・アルバム『ジャニュアリー・ネヴァー・ダイズ』を完成させた。本作は奔放な創造性が光る曲で溢れている。スロウタイとムラ・マサが組んだ「ドアマン」を想起させるパンキッシュなヒップホップの9曲めなど、UKラップの匂いを随所で漂わせるのがおもしろい。ド直球のサーフ・ロックを鳴らす10曲めを筆頭に、ロック要素が色濃いのも特徴だ。8曲めにはBTSのRMが参加というところも目を引くが、そうしたトピックに頼らずとも飛躍できるだけの才気を迸らせる作品だ。

近藤真弥

Rock [Japan]

民謡クルセイダーズ

『日本民謡珍道中』

ユニバーサル　UCCJ9248
¥3000／11・24発売

果敢な冒険心を随所で込めつついっそうストロングになった2作目

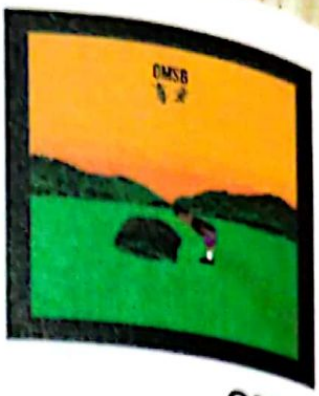
日本民謡をラテン系やアフロなどのグルーヴィーなサウンドとくっつけて聴かせるバンドの、約6年ぶりのセカンド。日本民謡旅行というテーマを掲げ、今回も各地の民謡と多様なビートとの融合を試みているのだが、以前よりもエグい実験性やヒネリが目立つようになった。特に冒頭の「佐渡おけさ」では、音を抜きまくったリミックスみたいなビートがゆったりと転がり、そこに突如としてサンバ・グルーヴが加わってきて、二つのビートが同時に突き進むというマッシュアップ的試みをやっている。彼らのDJ的センスが冴えまくった曲といえるだろう。「ハイヤ節」ではギターを変容させたストレンジな音をフィーチャーしていたり、「木曽節」をスローなアンビエント的アレンジで解釈しているのも引きつけられる。そうした果敢な冒険心を随所で込めつつ、歌、コーラス、グルーヴという基本要素は、いっそうストロングになった感が強い。

最初にアイデアありきのグループなだけに続けていくのが難しいと思うのだが、そこを鮮やかに乗り越えているし、さらなる発展形を示しているのがすごい。ますます無二の存在になりつつある傑作だ。

小山守

CamScannerでスキャン

Rap, Hip Hop [Japan]



OMSB
『喜哀』
サミット（配信）
10・11発売

ストーリーテラーとしての素晴らしさの由来を少し明かす作品

『喜哀』はデジタルでリリースとなったミニ・アルバムだが、相当に聴き応えがある。そう感じた理由の一つは、この作品が2000年代前後の日本のアンダーグラウンド・ヒップホップが描いていたものをあぶり出しているからだ。Olive Oilがプロデュースした「喜哀」はブルー・ハーブのリリックが引用されているだけでなく、あの頃の不穏な空気がレイドバックしたトラックの中にも鮮やかに現れる。エゴさがプロデュースした「Ego Ego」はカリンバとビートのみのトラックに言葉を重ねていくOMSBと、後半から登場する志人が辛うじて韻を踏んで一気に牙を剥くように物語を加速させる対比が圧巻だ。また、ラストの「Memento Mori Again」では、志人／玉兎名義のアルバム『Heaven's 恋文』のインスト・トラックがOMSBによってリアレンジされている。ストーリーテラーとしてのOMSBの素晴らしさは『ALONE』に表れていたが、『喜哀』はその由来を少しだけ明かしているのかもしれない。もちろん、これは懐古的な作品ではなく、圧倒的に現在の表現なのだが、そこに向かうために何が必要なのか示そうとしている。**原雅明**

Rock [Japan]

igloo
『Synapse Confusion』
グランド・フィッシュ／ラブ（ディスクユニオン）GFL1215
¥2273／11・22発売
●問合せ先＝03・3511・9944（ディスクユニオン）

雑食的かつテクニカルな作風の4人編成のインスト・グループ

THE FOOLS、ZZZooのメンバーとしての活動に加え、NHK連続テレビ小説「舞いあがれ！」の音楽にも参加してきた84年生まれのサックス奏者、若林一也を中心に昨年結成された4人編成のインスト・グループが、今年3月に発表したデビュー・アルバムに続くセカンド。

前作は若林が長年書き溜めた曲の集大成だったのに対し、本作はこのバンドで演奏することを前提に全曲彼が書き下ろしている。大学時代にクラシックを学び、ロック、ジャズに接近していった人物だけに、その作風はかなり雑食的かつテクニカルだ。幕開けの「So Extra」は、キング・クリムゾンの「偉大なる詐欺師」をファンキーに変換したような趣で、「Hello,Dawn,Unknown」では、骨太なベース・ラインでダブ～ポスト・パンク的なサウンドを打ち出す。かと思えば「STRANGER IN THE ROOM」「Hatsujyo」などは、ガレージ・ロックばりのラウドでスピーディなビート・ナンバーといった按配。印象的なリフを活かしたミニマルな構成の楽曲で、ダンサブルな高揚を生み出していく。若林とギターの田島拓の掛け合いで盛り上がるライヴも要チェック！**志田歩**

CamScannerでスキャン

カーネーション
『Carousel Circle』

ポニーキャニオン
PCD-20597～8（2CD）
¥3,000／11・29発売
PCBP-20595～6（限定2CD+ブルーレイ）
¥7,778／11・29発売

職人芸が存分に発揮されて楽しんで作っていることが伝わる40周年作

今年でバンド結成40周年を迎えたカーネーション。半世紀近くを転がり続けて、現在のメンバーは直枝政広と大田譲の二人で、結成時から在籍しているのは直枝のみ。崖っぷちの二人編成になってから10年以上の時が流れたが、作品を出すごとにバンドとして揺るぎない存在感が増していることに驚かされる。そのしぶとさ、生命力が、バンドが生み出す強靭なグルーヴに直結しているが、そんな彼らが辿り着いた今の境地が新作『Carousel Circle』に刻み込まれている。

高揚感に満ちたロック・ナンバー「ここから - Into the Light」で幕を開けるところはいつものカーネーション。続く「カルーセル」のイントロでシャレたキーボードの音色が聞こえてきて、おやっと思わされる。ジャズの要素も入ったモダン・ポップな香り。最近のカーネーションには珍しいタイプの曲だ。かと思ったら、4曲目「ペインター」はアコースティックな編成でチェロを入れたバロック・ポップな趣。

近年の彼らのアルバムは、曲に導かれて一本道を突き進むうちに視界が広がっていくような大胆な筆致とダイナミズムが魅力だった。それに対して今作は、一幕ごとに趣向が凝らされたカーネーション劇場を観ているようだ。「ソングライター」から「光放つもの」へと組曲のように繋がるあたりは、彼らの円熟したポップ・センスや独創的なアレンジが楽しめるし、久し振りに大田が曲を書いて歌った「深ミドリ」は、シタールが鳴り響いて60年代の香りがするサイケなナンバー。こういう曲をポンと放り込むところも本作ならではだ。続く「ora La La」ではホーンを入れたファンキーなロックで攻めたりとヴァラエティ豊かな曲が並んでいて、その多彩さが彼らの長いバンド遍歴を物語っている。

もともとカーネーションはマニアックで技巧的な音楽性を持つバンド。近年はフィジカルな躍動感を前面に押し出してきたが、本作では彼らの職人芸が存分に発揮されて楽しんで作っていることが伝わってくる。"楽しさ"は本作のエッセンスだ。バンドは自分達の豊かな音楽性を存分に引き出すために3人のドラマー（北山ゆう子、張替智広、鈴木さえ子）を起用。そのほか、多数のミュージシャンが参加しているが、田中ヤコブ、谷口雄といった才能ある若手が参加しているのも頼もしい。直枝と大田を中心にして、その都度、音楽が生まれる"場"が今のカーネーションなのだ。

「ここから - Into the Light」から始まってアルバムは光のイメージに貫かれてるが、ラスト・ナンバー「Sunlight」で直枝は「物語は終わるけれど その先を僕は見ていたいんだ」と歌う。遠くに輝く光に導かれて走り続けてきたカーネーション。"Carousel"とは回転木馬のことで、木馬から見る風景のように、あっという間に過ぎ去っていく人生の比喩なのかもしれない。さらに回転する円（Circle）のイメージは、直枝が愛してやまないレコードに通じる。針が上がるまで回り続けるカーネーションのバンド人生。そこから見える素晴らしい風景を、本作は鮮やかに描き出している。

村尾泰郎

CamScannerでスキャン

曽我部恵一
『ハザードオブラブ』

ローズ
ROSE317
¥2000／11・29発売
ROSE317X(LP)
¥3000／11・29発売
●問合せ先＝03・3710・8049
(ブリッジ)

約を取っ払った現在進行形の ップス／ロックを素直に表現

ソロとしてはインストのアンビエ
ト作品『Memories & Reme-
ies』(22年)以来だが、歌入りのオ
リジナル・アルバムとしては『Love
ies Love』(21年)以来。その間に
サントラ盤やライヴ盤、もちろんサ
ニーデイ・サービスとしてもアルバ
ムを多数発表している。その精力的
な創作活動には脱帽するしかない。
曽我部恵一BANDのオータコー
ジなどゆかりの音楽家が多く参加し
た。打ち込みによる内省的な作品も
多い人だが、ここでは比較的ストレ
ートなバンド色が濃い楽曲が多く収
められている。シンプルな3ピース
のサニーデイよりもアレンジや使用
楽器や音色面で多彩で自在な曲調が
多く、ギター弾き語りの曲も含め、
制約を取っ払った曽我部の現在進行
形のポップス／ロックを素直に表現
した作品と言えるだろう。平易な言
葉で今のさまざまな情況と叙情を切
り取った歌詞も曽我部らしいものだ。
アルバム・タイトルはアン・ブリ
ッグスの63年のデビューEPからと
った。ブリッグスの清冽で孤高なア
カペラ作品は、音楽的な影響という
より、表現することへの純粋で曇り
のない衝動のようなものに繋がって
いるのかもしれない。

小野島大

UNICORN
『クロスロード』

キューン(ソニー)
KSCL3472
¥3000／11・15発売
KSCL3470～1(限定CD+ブルーレイ)
¥5400／11・15発売

AIを取り入れた配信EPを経て 生身のヴォーカルが心地よく響く

コンピュータを取り入れることによって音楽の世界では数多くの新しいジャンルの楽曲が生み出されてきた。そういう意味では音楽にAIを活用するのは必然的な流れではあるけれど、まだ故人のヴォーカルを復元するなど、過渡期といえるだろう。そんな中、ユニコーンはいち早くAIを取り入れた配信EP『ええ愛のメモリ』をリリースした。若手の頃のメンバーの歌声を学習させたAIに対し、5人それぞれが「あの頃、作っていたような楽曲」を制作し、自らの手で自らの声を蘇らせたのだ。このフットワークの軽さ、新しいものを取り入れる感性は彼らしい。

本アルバムでは上記EPでAIが歌っていた楽曲を現在の彼らが歌った曲も収録されている。キャリアを積んで自然体で歌う生身のヴォーカルはAIとは明らかに違うし、心地よく堪能できる。メンバー全員が曲を書くスタイルということもあり、楽曲によって色が違う歪さもユニコーン健在と思わせてくれる。数年経ったら、AIはもっと精巧な音楽を生み出せるようになるだろう。それでも彼らは、おもしろがって作品を作るだろう。それがクリエイティヴなんだと思い知らされた。

西澤裕郎

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

Lamp

『一夜のペーソス』

ボタニカル・ハウス （配信）
10・10発売
●問合せ先＝ botanicalhouse.net
（ボタニカル・ハウス）

海外での人気が高まったバンドの充実度は文句なしの5年ぶり9作目

知る人ぞ知る良質なポップ・ユニット。そんなイメージだったLampだが、昨今はアジアや中南米といった海外での人気が非常に高いという。実際ゆらぎの再生回数を見ても、過去作「ゆめうつつ」が5000万回以上再生されており、YouTubeチャンネルのコメント欄は英語やスペイン語、ポルトガル語などで溢れかえっている。5年ぶりのフル・アルバムである本作が配信のみというのも、この状況を頷みれば納得だ。

そして、20曲収録で74分というサイズで届けられたこの9作目の充実度は文句なし。ソフト・ロック、フォーク・ロック、ドリーム・ポップ、MPBと音楽性のキーワードを拾い上げるといくらでもあるが、不思議と散漫にならず一定のトーンで耳に心地好く入ってくる。ひとえに榊原香保里の声の魅力によるものだろう。もちろん永井祐介と染谷太陽による楽曲構築力もさすがで、和音階のような奇妙な旋律の「曖昧で憂鬱な僕たちの」や、随所に琴やハープが入る緻密な編曲などに彼らの矜持を感じるのだ。夕暮れ時で始まり夜明けで終わる構成の中に、どこか淡く切ない情景が浮かび上がる。何度もリピートしたくなる傑作だ。

栗本斉

Rock [Japan]

ビッケブランカ

『Worldfly』

エイベックス・トラックス
AVCD63512
¥2500／10・25発売
AVCD63509～11B
（限定3CD+ブルーレイ）
¥8000／10・25発売
AVCD63506～8B（限定3CD+DVD）
¥8000／10・25発売

世界中のステージを飛び回り各地で受けた刺激をもとにしたEP

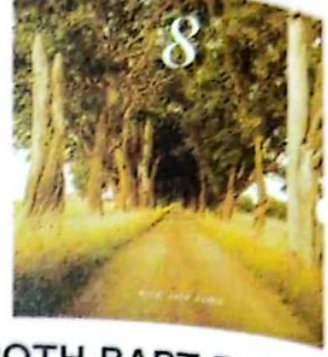
スケールが大きい。こういう健全なスケールの大きさというのは、現在の国内メインストリーム・ポップの世界では珍しいのではないか。

ビッケブランカは、エルトン・ジョンやミーカ等のシンガー・ソングライターの系譜を継ぐアーティストで、これまでも完成度の高いポップスをコンスタントに送り出してきた。本作は、近年世界中のステージを飛び回る彼が、各地で受けた刺激をもとに制作したEPだ。本誌的な視点から何よりも注目すべきは、サウジアラビアでの体験を下敷きにした「Sad In Saudi Arabia」だろう。世界のチャートを席巻するグローカル・ポップの波と同化するように、レゲトン風のビートと、アラブ音楽風のフレーズが折り重なる曲で、興味を引かれる。一転、続く「Luca」は、イタリアでの体験が元になった曲で、"Off Sicilia"というキャッチーなコーラスが利いている。

真正面からポジティヴなメッセージを訴える「革命」も、少しの衒いや韜晦とも無縁の堂々たるスケール。ストレートな8ビートとプログレッシヴな展開も、とにかく〝大きい〟。適宜挿入される本人による各曲のラジオ風解説も楽しい。

柴崎祐二

CamScannerでスキャン



Rock [Japan]

ROTH BART BARON

『8』

スペースシャワー PEJF91049(LP)
¥4000／10・18発売
●問合せ先＝03・5766・1321
（スペースシャワーネットワーク）

ベルリンと東京と往復しながら軽やかな躍動感を生んだ原点回帰作

昨年からベルリンと東京と往復しながら活動している、ROTH BART BARONこと三船雅也。なぜベルリンに？と私が訊いた時には「ロンドンは島国の中で東京と変わらないが、ベルリンは欧州大陸の中心に位置するから面白い」と言っていた。その選択は間違っていなかったようで、この新作で新風を吹き込んだ。

在京時は10人を超える大所帯で制作していたものが、単身渡ったベルリンでは自身の楽器を中心に曲作りをすることで、いい意味で換骨奪胎した楽曲／サウンドになった。もちろんリモートで録音できるから以前から交流のあるメンバーの協力は得ているが、軽やかな躍動感といったものが本作には生まれている。それが原点回帰、言い換えれば初心に還ることになったのだろうか。本作のテーマは「ジュブナイル」。

以前から交流のあるタイのバンド、セイフプラネットと共演した「BLOW」を始め、アジア風味がある曲が多いのもベルリン滞在で再発見したものかもしれない。同時にベルリンで知り合ったタンジェリン・ドリームの一員である山根星子の参加を得るなど新たな歩みもあり、目が離せない存在になってきた。**今井智子**

Rock [Japan]

空気公団

『景色一空』

フワリスタジオ／ヴァージンLAS（ユニバーサル） KKFS03
¥3000／10・18発売

全方位的に高品質な素晴らしいポップ・アルバム

ヴォーカルの山崎ゆかりを中心としたプロジェクト、空気公団の最新アルバム『景色一空』がリリースされた。本作もこれまでの作品群にあった魅力を放っている。どこか懐かしみを抱かせながら、平易な言葉で複層的な情景を描いていく叙情的な歌詞は滋味を極め、ひとつひとつの音を丁寧に重ねたプロダクションは聴きごたえ十分。多彩なアレンジとメロディーは耳に潤いをあたえ、上質なブランケットに包まれた時のような心地よさをもたらしてくれる。全方位的に高品質な素晴らしいポップ・アルバムだ。

お気に入りの曲を挙げるなら、4曲めになるだろうか。〝あなたがいなくなる　見えなくなるだけ〟というフレーズから始まるこの曲を聴いて、現世にいない者への情愛を感じとり、心の目が涙を流した。人の機微を表現するのが巧みな空気公団の特徴が顕著な名曲だと思う。

続く5曲目も好きだ。シンプルなビートに、たおやかなシンセとギターが重なるイントロで瞬く間に引きこまれた。一度聴いたらすぐに口ずさめるメロディーもグッド。冬の寒さが滲む風を受けながら辻堂海岸で聴いたら、全身が躍った。**近藤真弥**

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

GLIM SPANKY

『The Goldmine』

ヴァージン〔ユニバーサル〕
TYCT60219
¥2800／11・15発売
TYCT69288 (CD+DVD)
¥4800／11・15発売

音楽を通して人と人が結びつく良曲ばかりのニュー・アルバム

本アルバムを聴いていて、6曲目「Summer Letter」の途中で冷や汗をかいた。曲の途中で一瞬強烈なノイズが乗るのだ。僕は以前、音楽配信サイトで働いていたことがあって、データの送信エラーなどでまれにノイズが入ってしまうことがあり、気づかず配信してしまってクレームになることがあった。最後まで聴くと、このノイズは楽曲の演出であることがわかるのだけど、そうと思わせないくらい思い切りノイズを乗せるところに脱帽するとともに、何度聴いてもドキっとしてしまう。

「全てが主役級の楽曲たちの中からリスナーそれぞれがお気に入りの〝宝〟を発掘してほしい」という思いから『The Goldmine』と名付けられた本アルバム。クラシック・ロックを思わせるような渋い楽曲でも、松尾レミのハスキーで真っ直ぐなヴォーカルと親しみやすいメロディが乗ることで大衆性を獲得しているのがGLIM SPANKYのすごいところだが、本作品はどれをとっても良曲ばかり。四つ打ち調の「Innocent Eyes」はライヴでシンガロングする光景が浮かぶ。音楽を通して人と人が結びつく、そんなことを想起させる作品だ。

西澤裕郎

Rock [Japan]

在日ファンク

『在ライフ』

カクバリズム DDCK1078
¥3000／11・1発売
●問合せ先＝03・5766・1321
（スペースシャワーネットワーク）

バンドの力量がどんどん上がっていることがわかる5年ぶり6枚目

5年ぶり6枚目となるニュー・アルバム。コロナ禍の中でも新曲のリリースを続けていた在日ファンクだが、20年の夏に、ヴォーカル&トロンボーンの浜野謙太が椎骨動脈乖離という首の病気で入院。バンドは活動停止に入った。21年の3月にようやく医師のOKが出て活動再開。それからはライヴを中心に活動を続け、復活から2年半経って、ようやくのニュー・アルバム発売となった。

音楽的には大きな変化があるわけではないが、演奏の安定度や間の取り方の余裕が違うし、キャリアを重ねることにバンドの力量がどんどん上がっていることがわかる。JBマナーをベースにしていることはこれまで通りだが、そこに乗るメロディーの感覚や展開部には揺るぎのないオリジナリティがある。オープニング曲の「今から本気」は、活動再開に際して新たに固めた決意を歌ったと思われるが、サウンドとグルーヴはアフロビート的で、これは新機軸だろう。七尾旅人をフィーチャーした「平和」やSANABAGUNの高岩遼がラップする「滞ってる」などの縦ノリ・ミディアムのグルーヴは、実はほかのファンク・バンドにはあまりない個性だ。

池上尚志

CamScannerでスキャン

QUBIT

「QBIT」

Daokoを中心にそれぞれの色を加えて現代性を打ち出す5人組バンド

Daokoのライヴでのサポートから発展して結成された5人組によるデビュー作のアルバム。メンバーそれぞれこれまでの活動歴や世代は異なり、楽曲制作は近しい成り立ちの東京事変を連想したりもしたが、バンドの結成を提案したという木井智一をはじめ、YMOのクラウト・テルトレン、的な顔触れというイメージの方がしっくりきた。メインのコンポーズを担う細野晃平がニュー・ウェイヴ、ジャズ、アンビエントといった幅広い要素をポップスに昇華しつつ、鈴木正人がラテン、大井一彌がビート・ミュージックと、それぞれの色を加えているのはMETAFIVEのようだし、生演奏とプログラミングを組み合わせつつ、よりフィジカルを重視した作風は木井もメンバーとして名を連ねるTESTSETにも近い。

とはいえ中心はやはりDaokoで、ネット出身の彼女らしい、キュートとクールを行き来する歌唱とラップ、現代社会の息苦しさを創作のパワーに転換させるようなリリックが、このバンドの現代性を決定づけている。となると一番近いのはMETAFIVEでもTESTSETでもなく、原田知世がヴォーカルを務めたtoeだと言うべきかもしれない。 **金子厚武**

odol

「DISTANCES」

終わりのない思索があるのみの静かに時を刻むような音楽

14年に結成し、現在は3人で活動するバンドの5作目。近年の彼らはどんどんミニマルなポップスに寄っているが、本作はさらに端正な歌が並んでいる。多くの楽曲でアンサンブルの要となるのが、作曲を担う森山公稀のピアノ。シンプルなフレーズを静かに繰り返し、そこに少なめの音数を丹念に重ね、内省的な歌を紡いでいく。それは淡々としているようで、耳をすますと多彩な楽器の音色や凝ったハーモニーが聞こえてくる。岡田拓郎、細井徳太郎らギターの名手やストリング隊などゲストも多く参加し、適材適所で豊かな色を加えている。

歌詞を手掛けるのはヴォーカルのミゾベリョウ。アルバム名の通り"距離"をテーマにしながら、自分と他者との境界線や死生観など、抽象的なイメージをつづっている。そこに明確な結論はなく、終わりのない思索があるのみ。なかでも「今日も僕らは忙しい」で歌われる"ちゃんと考えたいんだけど 何も無い日が無いんだよな"のフレーズには、そうなんだよなぁと深くうなずいた。静かに時を刻むようなodolの音楽は、忙しない日々の中で置き去りにした思いに気付かせてくれる。 **廿楽玲子**

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]

Rei

『VOICE』

レイニー（ユニバーサル）
UCCJ2231
¥2300／11・29発売
UCCJ9247（限定CD+DVD）
¥4618／11・29発売

ヴォーカルを前面に押し出した新しい扉を開いた歌モノ作品

5枚目となるミニ・アルバム。ソロ作品としては、20年に出たフル・アルバム『HONEY』以来だが、様々なアーティストとのコラボ・プロジェクト、QUIETのアルバムが22年に出ているので、なかなかのハイ・ペースで作品を重ねていることになる。

Reといえばスライドなどを交えたブルージーなギター・プレイがトレードマークだったが、今作ではギターにも楽曲にもブルージーな要素は少なく、アルバム・タイトルに読み取れるように、ヴォーカルを前面に押し出した歌モノ作品となった。

1曲目「Love is Beautiful」は、西海岸の日本大好きユニット、ジンジャー・ルートとの共同プロデュースで、シティ・ポップ経由で渋谷系にアプローチしたようなポップ曲。m-flo MOTOと作った「Sunflower」も、90年代なポップ感を持ったファンキー・チューン。ストリング・カルテットをフィーチャーした「Call My Name」からは、60年代の西海岸的フォーキーを感じる。アルバム全体に通じるこの60年代西海岸＝渋谷系なムードが偶然なのか狙ったものなのかは分からないが、新しい扉を開いたのは間違いない。**池上尚志**

Rock [Japan]

細井徳太郎

『魚＿魚』

スペースシャワー PECF3281
¥3000／10・4発売
●問合せ先＝03・5766・1321
（スペースシャワーネットワーク）

自信に満ちていて、歌も力強いギタリストによる初フル・アルバム

細井徳太郎という痩身の若者に出会ったのは、石若駿、松丸契、マーティ・ホロベックと結成したSMTKのライヴだった。新世代ジャズ・ギターというより、ジャンルレスな魅力があり、もし彼が歌うならどんな感じだろうと想像した。その妄想はあながち間違いではないと、21年にリリースされたファーストEP『スカートになって』で知った。歌声は、とても若くてみずみずしく、くるりやサニーデイ・サービスの影響も感じるものだった。

待望のフル・アルバムは、この2年の活動を経て、すべてがより自信に満ちていて、歌も力強い。石若や君島大空らを筆頭にした若いミュージシャンたちの鮮烈な演奏に加え、大友良英や七尾旅人の客演も、力を借りるというより、細井徳太郎というミュージシャンへの興味から成立した自然なコラボレーションだと感じる。「晴れたらいいのに」など、近年サポートで参加している本日休演の影響も感じるロック・ナンバーも素晴らしい。

ナイーヴな歌ものから激烈なインプロまで、細井の才能に誰もが圧倒されるはずだが、そこに同時に青春も感じるのだ。**松永良平**

CamScannerでスキャン

あっけらかんず

『冒険』

Pヴァイン PCD22446
¥2200／11・2発売
●問合せ先＝03・5784・1253
（Pヴァイン）

ターとドラムの二人組による
全かなメロディーと突き刺さる歌詞

ジャギジャギのギターとスカスカのドラム、この奇天烈なキャッチー・コピーに誘われて聞き始めた。エレクトリック・ギターと、ハイハットを出来るだけ使わないドラムの二人組のグループ。どう考えても、およそ面白い音楽になるわけがない楽器の組み合わせだが、これが思いもかけず引き込まれてしまう。

ライヴ映像を見たが、眼鏡をかけた弱っちい風体のギタリストが、楽しいことなんてこれっぽっちもないような顔でマイクに向かう。まるでギミックもエゴも承認欲求もないままにステージが進んでいく。それでいて、リズムを刻むだけのギターが意外なほど豊かなメロディーを奏で、路肩の小石のようなシンプルな歌詞が、思いのほか心の奥底にまで突き刺さってくる。

彼らには、BPM120以上禁止というルールがあるそうだ。世界をスロー・ダウンさせることで新たな視点を獲得していく手法は、90年代にアメリカで活動したソウルド・アメリカンと共通している。あえて無理を言おう。これからの日本語のロックは君たちの肩にかかっているかもしれない。荷は重いだろうが、是非とも頑張って欲しい。

小川真一

betcover!!

『馬』

ベットカバー（配信）
10・16発売

アウトサイダー・ミュージック
としてのロックンロールを鳴らす

あの傑作『卵』から1年を置かずして、早くも柳瀬二郎＝betcover!!から新作が届いた。いかにも昭和の仁侠映画に出てきそうなチンピラ風情がすっかり板についた柳瀬は、初っ端から突然こう怒鳴りつけてくる。「馬鹿野郎！」。なんてガラが悪いんだ。同時に、彼のドスが効いた巻き舌を耳にした俺はこうも思う。そもそもロックンロールってこういうやつがやる音楽だったよなと。つまり不良、アウトロー…言い方はなんでもいいが、とにかく柳瀬がここで鳴らしているのは、アウトサイダー・ミュージックとしてのロックンロールなのだ。

モダン・ジャズや日本の70年代フォークなどを参照した前作を経て、betcover!!は今いちど粗暴なパンク・サウンドへと回帰した。全8曲で30分にも満たない収録時間。出音でぶっ飛ばしたら、あとは一気に最後まで駆け抜けて、後腐れなく去っていく。ここ2作でメロディーの音域を全体的に低くしたのもあってか、柳瀬のヴォーカルは彼がまだ20代前半であることを忘れそうになるほどの濃厚な色気を漂わせるようになった。これが令和のチンピラ音楽。かっこよすぎる。

渡辺裕也

CamScannerでスキャン

名義を変えて意欲作を発表した EXILEのメンバー

R&B

SHO HENDRIX

『DOZEN ROSES』

エイベックス・トラックス（配信）
11・15発売

EXILEやTHE SECONDのメンバーとして活躍するSHOKICHIが今年7月、SHO HENDRIXに名義を変更してソロ活動を再始動させた。第1弾配信楽曲はティアンジェロの「Boss of Me」をモチーフに制作された「草花と火山の物語」。伸びやかで艶やかな歌声がアダルティなネオ・ソウルと高い親和性を発揮していた。

名義変更後初のアルバムは、東京のプライベート・スタジオとロサンゼルスで制作した楽曲を収録。「Better Than Me」はジョナス・ブラザーズとTOMMORROW X TOGETHERのコラボ曲「Do It Like That」に参加したコールトン・ルビンや、ブライソン・ティラーからNCT 127までを手がけるイアン・ジェフリー・トーマス等と共作した楽曲で、歯切れよくバウンスする英語と日本語が混在したラップ調のヴォーカリゼーションが独特。スムースなR&B調のトラックと絶妙なマッチングを見せる。〝音楽好きの大人〟をターゲットにしているといい、彼が愛するソウル、R&B、ヒップホップ、フォークといったサウンドに時流を取り入れ、自分なりに成熟させた意欲作だ。

小松香里

アイドルに楽曲提供してきた ポップ・アルチザンのソロ2作品

J-Pop

吉田哲人

『The Summing Up』

なりすコンパクト・ディスク
〔ハヤブサランディングス〕 HYCA8060
¥2500／11・22発売

『The World Won't Listen』

同 HYCA8061 (2CD)
¥2700／11・22発売
●問合せ先＝03・5809・0637
（ハヤブサランディングス）

ソロ名義でのアルバムをずっと待っていた。私立恵比寿中学、チームしゃちほこ、Negiccoといったアイドルに提供してきた楽曲があまりにも素晴らしかったからだ。00年代初頭から小西康陽の専属マニピュレーターを務めた吉田哲人の、正に待望というべき初のソロ作が『The Summing Up』だ。渋谷系の残り香を漂わせつつも、郷愁と哀愁を湛えたグッド・メロディが詰まっており、ポップ・アルチザンとしての彼の個性と力量を再確認させられる。

コーラスの多重録音を活かしたアレンジも巧妙で、曲調は王道のJポップからソフト・ロック風、ネオアコ調など様々だが、いずれも普遍的な輝きを有する。訥々としたヴォーカルはやや生硬だが、それが深い味わいになっていると思う。

また、08年から制作していたものの完成に至らずに手つかずだったという、興をそそるエピソード付きの『The World Won't Listen』も発売。こちらはアシッド・ハウスやテクノに振り切った作風で、アンビエントから硬質なイーヴン・キックまで、遅れてきたセカンド・サマー・オブ・ラヴといった趣。納得かつ満足の2枚だ。

土佐有明

CamScannerでスキャン

小日向由衣

『恋愛ハラスメント』

こっこっこ（ハヤブサランディング）

KOKKO[illegible]

¥2727／3・27発売

●問合せ先＝03・5804・[illegible]

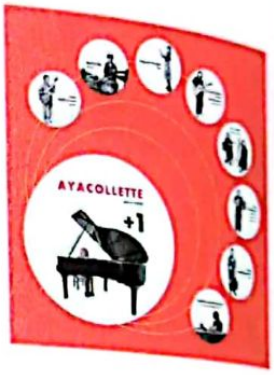
（ハヤブサランディング）

明るい作品を目指しても振り切れないのが彼女のおもしろさ

数多の失敗談や奇天烈な言語センスなどの特異な個性をもつシンガー・ソングライターで、前作『世界が泣いてる』は自身の内面をさらけ出した相当にダークな作風だったが、以来約2年ぶりとなる今回は、反動で明るい作品にしたかったらしい。実際、冒頭からキャッチーなメロディーをキュートに歌う曲が続くし、歌詞もほぼ全曲が恋愛ものだし、前作に比べれば格段にポップな仕上がりだ。といっても突き抜けてスウィートというわけでもなく、沈んでいたりせつなげだったり、毒が込められていたりと、明るいだけではない表情も随所で見せている。中でも「電話」では、ポエトリー・リーディングによる日常の何気ない会話から逸脱していってどんどん意地の悪さが出てしまうあたり、彼女らしい毒気たっぷりなセンスが冴えている。

結局、明るい作品を目指してもそっちに振り切れないのが、彼女のおもしろさだと思えるのだ。それだけではなく、リリカルでセンチメンタルなメロディーのキレや、多彩なサウンドとヴォーカルの噛み合わせの良さなどが以前よりも際立っていて、確実に成長が感じられる。やはり中毒性をもたらす才女だ。

小山守



アヤコレット

『アヤコレットプラスワン』

TRYU

TRYU0005

¥2273／11・3発売

TRYU0005（LP）

¥2800／11・3発売

飛び跳ねるような自由さを宿したアレンジと歌声によるカヴァー集

これまでも日本、アメリカ、フランス、ドイツ、中国といった様々な国の楽曲を奏でてきた愛知県今治市出身のピアニスト／シンガーによるカヴァー・アルバム。植野隆司（テニスコーツ）や伊藤大地、塚本功、岸野雄一、塚本真一といったアーティストが参加。日本とフランスを往来しながら活動するアヤコレットならではの作品になっている。

冒頭のフレンチ・ポップ「Les yeux noirs（黒い瞳）」のカヴァーで、軽快で流麗なピアノ演奏とともに、フランス語と日本語を混在させた歌で聴き手を引き込む。他にも、ジャズのスタンダード・ナンバー「My one and only love」、細野晴臣の「終わりの季節」、ゲンスブールやゴダールの映画の挿入歌のカヴァーもあり。ピアノを軸にした飛び跳ねるような自由さを宿したアレンジと呼応するように、アヤコレットの歌声もとても奔放だ。時にささやくように、時に優しく話しかけるように、時におどけるように、多面的な表情を見せる。最後は「Sukiyaki」を丁寧にデュエットしたかと思ったら、ノイズ混じりの「亡き王女のためのパヴァーヌ」の深遠なポエトリーで幕を閉じる。

小松香里

CamScannerでスキャン

2009 [JAPAN]

歌声の説得力、迫力、存在感が伝わる貴重な録音が追悼リリース

小坂忠

『THE LAST SESSION with Chu's Friends』

ハピネット・ディスク[コロムビア]
COZB2538～9(CD+DVD)
¥5500／10・25発売

シリアスな年4月、食道がんによる肺ガンを発表した小坂忠。日本のロックポップス史に大きな足跡を残したシンガーによる貴重な録音が、追悼盤としてリリースされた。

これは全7曲、約1時間半で発売されたという42年前制作のスタジオ盤「ありがとう」から、ボブ・ディラン、ジョー・クリスのカヴァーなど、2010年代から20年にかけて録音されたトラックが収録。フォークからロック、ゴスペルまで幅広い音楽を愛した小坂のアーティストとしての矜持がにじむ、胸の熱くなるパフォーマンスばかりだ。改めて思わされるのが、その歌声の説得力、迫力、存在感だ。長年に亘るゴスペルへの取り組みが、いかに彼の声と精神を絶え間なく鍛え、そのパフォーマンスに輝きを与えてきたのかがわかる。他、鬼気迫るラストの歌う新録曲「ムスビ」「ありがとう」も実に感動的だし、ボーナス・トラックとして名曲「どろんこまつり」のライヴ・テイクが聴けるのも嬉しい。DVDには、逝去前年に行われた最後のメンバーとのステージとTOWA氏のMCの全貌が収録されており、映像からも氏を偲ぶことができる。

柴崎祐二

2009 [JAPAN]

69年の発掘ライヴ音源が収められた奇跡のバンドの強烈な爪痕

ジャックス

『LAST STAGE』

スーパー・ファジ(ディスクユニオン)
FJSP489(2CD)
¥3360／10・25発売
●問合せ先:03・3511・9944
(ディスクユニオン)

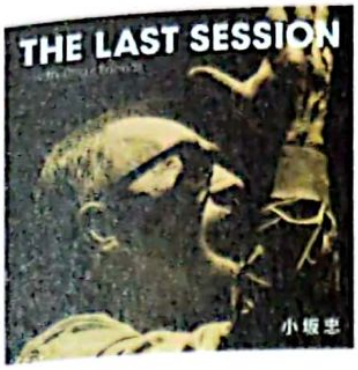
初めて観た瞬間が永遠に忘れられないバンドの一つ、ジャックス。登校直前のTV「ヤング720」から流れ出した音の衝撃は今思い出しても生々しいのだが、そんなことを思い出させてくれる発掘ライヴ2枚組だ。ライヴ後に早川義夫から解散宣言がされたという自ら主催の〝ジャックス・ショウ〟と名付けられたものの第5回目、護国寺の天風会館で69年7月25日に行われた全10曲のパフォーマンスが聴けるのがディスク2で、その後、名古屋の労音コンサートに出て8月10日に岐阜県、中津川で行われた第1回全日本フォークジャンボリーに出演したラスト・ライヴ(午前4時頃だったという)の様子がディスク1に収められている。

いずれも貴重この上ない音源であることは言うまでもないが(ディスク2の音質はかなり厳しい)、始まると聞き手を固まらせる磁場は今もまったく薄れることなく持続しているのを確認できる。「ロールオーバーゆらの助」「ラブ・ジェネレーション」のような研ぎ澄まされた刃と、「遠い海へ旅に出た私の恋人」や「マリアンヌ」などのロマンチシズムがもつれ合いながら進んだ奇跡のバンドの強烈な爪痕だ。

大鷹俊一

CamScannerでスキャン

Rock [Japan]



小坂忠

『THE LAST SESSION with Chu's Friends』

ベター・デイズ（コロムビア）
COZB2038～9（CD+DVD）
¥5500／10・25発売

歌声の説得力、迫力、存在感が伝わる貴重な録音が追悼リリース

2022年4月、全身がんによる肺不全で死去した小坂忠。日本のロック～ポップス史に大きな足跡を残した小坂による貴重な録音が、追悼作品としてリリースされた。

CDは全7曲。故・佐藤博宅で発見されたという02年制作の未発表音源「T.M.Y.」から、ボブ・ディラン、ジミー・クリフのカヴァーなど、2010年代～20年にかけて録音されたトラックが並ぶ。フォークからロック、R&Bまで幅広い音楽を愛した小坂のアーティストとしての矜持がにじむ、胸の熱くなるパフォーマンスばかりだ。改めて思わされるのが、その歌声の説得力、迫力、存在感だ。長年に亘るゴスペルへの取り組みが、いかに彼の喉と精神を絶え間なく鍛え、そのパフォーマンスに輝きを与えてきたのかがわかる。他、息女Aoiの歌う新録曲「Just Like You」も実に感動的だし、ボーナス・トラックとして名曲「どろんこまつり」のライヴ・テイクが聴けるのも嬉しい。DVDには、逝去前年に行われた豪華メンバーとのステージ"OTONA SESSIONS 3 at B.Y.G."の様子やインタヴューが収録されており、映像からも氏を偲ぶことができる。

柴崎祐二

Rock [Japan]

ジャックス

『LAST STAGE』

スーパー・フジ（ディスクユニオン）
FJSP489（2CD）
¥3360／10・25発売
●問合せ先＝03・3511・9944
（ディスクユニオン）

69年の発掘ライヴ音源が収められた奇跡のバンドの強烈な爪痕

初めて観た瞬間が永遠に忘れられないバンドの一つ、ジャックス。登校直前のTV「ヤング720」から流れ出した音の衝撃は今思い出しても生々しいのだが、そんなことを思い出させてくれる発掘ライヴ2枚組だ。ライヴ後に早川義夫から解散宣言がされたという自ら主催の"ジャックス・ショウ"と名付けられたものの第5回目、護国寺の天風会館で69年7月25日に行われた全10曲のパフォーマンスが聴けるのがディスク2で、その後、名古屋の労音コンサートに出て8月10日に岐阜県、中津川で行われた第1回全日本フォークジャンボリーに出演したラスト・ライヴ（午前4時頃だったという）の様子がディスク1に収められている。

いずれも貴重この上ない音源であることは言うまでもないが（ディスク2の音質はかなり厳しい）、始まると聞き手を固まらせる磁場は今もまったく薄れることなく持続しているのを確認できる。「ロールオーバーゆらの助」「ラブ・ジェネレーション」のような研ぎ澄まされた刃と、「遠い海へ旅に出た私の恋人」や「マリアンヌ」などのロマンチシズムがもつれ合いながら進んだ奇跡のバンドの強烈な爪痕だ。

大鷹俊一

CamScannerでスキャン

クロス・レヴュー

CROSS REVIEWS

大鷹俊一

前半のダンスものなどを聞き流していると原点回帰と言われるのもわかるが、アルバム全体としてとらえると、そういう要素を含めて奥行きが深い。エレクトロニクス、シンセを大胆に駆使するにしてもセッション的なニュアンスをうみに取り入れているし、音像へのこだわりも、ナチュラルに複雑化していてスケール感が付いてきてていいのだが、全体に過剰感があって聴き疲れしてくる。 [6]

小林祥晴

"こんなに生き生きとしたジェイムス・ブレイクは聴いたことがない。「極上の歌を書く」という自身に課してきたハードルをアルバム単位では初めて撤廃し、一番得意とするビート・メイキングに振り切ったことで、純粋に楽しみながらアルバムを作れたことが伝わってくる。唸るモジュラー、大胆なサンプリングとカットアップ。皆が聴きたかった異形のプロデューサーとしての彼がここにいる。 [6]

小松香里

2年ぶりの2枚目のアルバム。ジェイムス・ブレイクの代名詞であるローなビートが効いた不穏なグリッチ・ミュージックも、魂が震えるようなヴォーカリゼーションで美しいメロディを歌う楽曲も収められている。一方で、例えば1曲目、アナログな手触りのピコピコしたテクノに野性味あふれるラップが乗るような実験性ある楽曲もあり、方向性は様々。無邪気な開放感に溢れている。 [7]

矢川俊介(本誌編集部)

彼のライヴを観るたびに、ラディカルな音の選択とビートのセンス、そこから浮かび上がってくる歌声や生音の共存に打ちのめされ、"こういうポップ・アルバムを作って欲しい"と願う。先行で"Life Around Me"を聴いて、今作にその期待が高まったものの、全体としては模索の途中にある、実験的なビートへの回帰/接近のように思った。その探求の先にたどり着く景色を見届けたい。 [6]

CamScannerでスキャン

"The Drama Years"

エヴ・モッタ
"ヒドゥン・ザ・ティーク
ロアルバム

どういう作品かというと、ちょっとしたきっかけでブラジルのミュージシャンとともにレコーディングすることになったのだが、基本的には彼らのサポート・ミュージシャンのサンバ・ロック・タイプのポップ・サウンドが全面展開するわけだから変わらず。軽い感のトラウマからの反動を課題としたアプローチなので甘酸っぱいメロディとの親和性は極めて高いが、さて、それだけでアルバム一枚のサイズを楽しませられているかという疑問は残る。 [7]

今回はジャケットの威圧感が凄い、ブラジル発のAOR愛好家。濃密なスティーリー・ダン愛はいつもどおり。だが本作は、4、10曲目などでミュージカル音楽にも造詣が深いことを披露。7曲目はカントリー・ブルーズの小品。他にも気になる参照点を挙げるとキリがない。無類のレコード収集家であるモッタの果てしないうき出しの多さと緻密な音の作り込みには、ジャケ同様の凄みを感じる。 [7]

ブラジリアン・グルーヴ・マスターの5年ぶりの新作。ブラハのフィルハーモニック・オーケストラによる華やかなストリングス・ナンバーから始まり、荘厳なピアノ・ナンバーまで。これまでの楽曲にあった軽やかなアシッド・ジャズやノリの良いファンクといった要素はなくなり、とにかくリッチでゴージャスで丹念に作られた印象を受ける。敬愛するスティーリー・ダンにますます接近。 [8]

どんなに画面が動いても構図が乱れないウェス・アンダーソンの映画のように、どこを切っても完璧な演奏とアレンジ。重ねられるストリングスやコーラス、各楽器のプレイやリズムの精密さ、ミックスへの異常なこだわり。この音楽がどれほどの完成度であるか、聴くほどに思い知る。しかし、私はウェスの映画が得意ではないのだ。この音楽の構図の向こうにあるものを聴き取れたとは言い難い。 [6]

どういう作品かというと、ちょっとしたきっかけでブラジルのミュージシャンとともにレコーディングすることになったのだが、基本的には彼らのサポート・ミュージシャンのサンバ・ロック・タイプのポップ・サウンドが全面展開するわけだから変わらず。軽い感のトラウマからの反動を課題としたアプローチなので甘酸っぱいメロディとの親和性は極めて高いが、さて、それだけでアルバム一枚のサイズを楽しませられているかという疑問は残る。 [7]

今回はジャケットの威圧感が凄い、ブラジル発のAOR愛好家。濃密なスティーリー・ダン愛はいつもどおり。だが本作は、4、10曲目などでミュージカル音楽にも造詣が深いことを披露。7曲目はカントリー・ブルーズの小品。他にも気になる参照点を挙げるとキリがない。無類のレコード収集家であるモッタの果てしないうき出しの多さと緻密な音の作り込みには、ジャケ同様の凄みを感じる。 [7]

ブラジリアン・グルーヴ・マスターの5年ぶりの新作。ブラハのフィルハーモニック・オーケストラによる華やかなストリングス・ナンバーから始まり、荘厳なピアノ・ナンバーまで。これまでの楽曲にあった軽やかなアシッド・ジャズやノリの良いファンクといった要素はなくなり、とにかくリッチでゴージャスで丹念に作られた印象を受ける。敬愛するスティーリー・ダンにますます接近。 [8]

どんなに画面が動いても構図が乱れないウェス・アンダーソンの映画のように、どこを切っても完璧な演奏とアレンジ。重ねられるストリングスやコーラス、各楽器のプレイやリズムの精密さ、ミックスへの異常なこだわり。この音楽がどれほどの完成度であるか、聴くほどに思い知る。しかし、私はウェスの映画が得意ではないのだ。この音楽の構図の向こうにあるものを聴き取れたとは言い難い。 [6]

CamScannerでスキャン

大比良瑞希
『HOWLING LOVE』
RED(ソニー) UXCL30
8

ポニーのヒサミツ
『ほうむめいど・かうぼうい』
テトラ(配信)

大鷹俊一

カラッとした歌声と爪弾くエレキ・ギターのアンサンブルが極めて心地よいし、スカートの澤部渡やカーネーションの直枝政広を始めとしたアーティストたちとのコラボもじつに滑らかでスイスイと聴き進められる。とはいえこれだけ多彩な人たちが集まっているわりには広がりという点で物足りなさも感じ、一色のイメージしか浮かんでこない。アルバムとしての展開をもっと作れたのでは。 7

自家製カウボーイによる旅日記というわけか。「さよなら感染対策」で始まるあたり、この時代ならではだが音楽性ははっぴいえんどに始まりカントリー・ロックやスワンプ風味が穏やかに香り、メロディも親しみやすいものばかりなので聴き心地は好い。旅がすべて思いのままではないのは誰もが体験済みだけに、そこらの不安定な要素や戸惑い、迷いみたいなものがもっと浮かんできてほしかった。 6

小林祥晴

3曲目ではトラップが顔を出し、6曲目ではUKガラージのビートが敷かれている。洒脱なシティ・ポップとJポップの隙間を縫うサウンドを得意とする大比良は、今作で多彩な共作者とともに意欲的な音の冒険をしている。愛がテーマという歌詞は、揺れ動く恋愛感情から自尊心や家族愛にまで広がる。歌とギターには既に何でも乗りこなす個性と実力がある。言葉がもう一歩踏み込めると面白い。 6

本作から何より伝わるのは、大好きな音楽への真っ直ぐな愛情。カントリーやスワンプ・ロックを和気藹々と鳴らし、敬愛する細野晴臣とはっぴいえんどの引用も躊躇なくやってのける。西東京のインディ人脈に支えられた演奏は豊潤。そして「ほうむめいど」感のある素朴な音質は、小さな日常を歌う歌詞の世界に符合する。コロナに対する人々のリアルな距離感を定着させた一曲目の歌詞が見事。 7

小松香里

澤部渡(スカート)、CICO CARLITO、butaji、直枝政広(カーネーション)等が参加し、一気に引き出しを広げた。特に中村泰輔プロデュースの楽曲は大比良のスモーキーでビターな歌声の艶やかさがより発揮されていてハッとさせられる。1曲1曲新たな表情が芽吹いているが、だからこそアコースティック・ギターと大比良の歌だけで構成されたラスト曲のまっさらさが余計、響く。 7

みずからの根本である『風街ろまん』と『EOSOZOEOSOM』と向き合って全編リモートで制作。サウンドだけでなく、歌詞にもはっぴいえんどの影響が色濃い。同時に「さよなら感染対策」という曲名をはじめ、時事ネタがナチュラルに盛り込まれ、何度もニヤリとさせられる。カントリーとスワンプ・ロックの黄金律もふんだんに聞こえ、リスペクトとオリジナリティが絶妙に両立している。 7

矢川俊介(本誌編集部)

コラボの多様さや豪華さが特筆される新作だが、それらを完全に自分の表現として昇華する彼女の個の強さにこそ驚く。それは発するだけで切なさと説得力を放つ歌声の力も大きいだろう。そこから聞こえてくる個人としての彼女の言葉には誰もが自身を投影してしまうような部分があって、それを尖鋭性と、ポピュラリティを両立させながら響かせる。ポップスとしての最良の形のひとつ。 9

本人が作品ごとにテーマを公言するほど、音の参照元は明らかだし、類似点を指摘しておもしろがったりすることも楽しみの一つなのだが、1曲ごとのアレンジのアイデアは実に豊かで、メロディも人懐っこくて完成度が高い。だが一方で、演奏やピッチの時折の不安定さも含めたこの手づくり感にこそ、本人の奥ゆかしさと不器用さがにじみ出ていて、音楽としての愛おしさを感じる。 8

CamScannerでスキャン

オリヴィア・ロドリゴ『ガッツ』

ユニバーサル　UICF1137

これだけの普遍性と同時代の音楽が持った諸要素をみごとに収めていることに圧倒される。テイラー・スウィフトの影もあればロード、アヴリル・ラヴィーンといった人たちの姿が一瞬浮かんできたりもするが、そんなものはすぐに消えていく。自身が表現したい世界が猛然とした勢いで奥底から吹き上がってくるからで、多くのロック的なモードが自然な味付けとなっているところも凄い。 9

こんなにギターがガンガン鳴るアルバムが大ヒットするなんて一体いつぶりなのだろうか？　ロックが求心力を失い、ラップとポップが全盛となってから久しいが、彼女はそこに地殻変動を起こし得る存在だ。前作よりさらにロック濃度は高め。影響源はエモとポップ・パンクに留まらず、オルタナやフォークの語彙も多用されるようになった。ここでは新しい世代による新しい時代の音が鳴っている。 9

グランジ、インディー・ロック、ポップ・ロック、ロック・オペラ、パンク・ロック、ラップ・ロック……ここまで多彩で機微のあるロック・アルバムを生み出すとは。どの曲からもロドリゴの感情が鮮明に伝わる。それはつまり、音と歌詞が完璧にマッチしている上に類まれなる表現力があるからだ。酸いも甘いもそのままとじこめてエモーショナルに放たれ、『ガッツ』の名に相応しい生命力だ。 10

実直は私からするとキャッチー。詞を読み込むと、繊細さと大胆さ、若さにたちまち引き込まれる。彼女のルックスやファッションも含めて、これが世界的な現象となっていること自体が今の時代を映してくれる。と同時に、聴き込むほどに、あまりのそのリアルさ、眩しさからはるか遠くにいる客観的な自分、言わば"All-Japanese middle-aged man"である自分を突きつけられることになる。 7

サンファ『ラハイ』

ヤング（ビート）　YO312C

DJP

祖父から譲られたというミドル・ネームをタイトルに冠したのにふさわしく多面的かつスピリチュアルなアルバムだ。超越性を追求したそうで、母や子供たちなど、何世代の間のつながりや思いを描くスケール感はよく表れているし、プロデューサーのエル・ギンチョを始めとして多彩な共演者たちとの柔軟なミクスチャーにより細かくサウンドの変化を付けていく手際もすべて整っている。 8

前作では自身のルーツである西アフリカのポリリズムを取り入れたが、本作で耳を引くのは英国発祥のドラムンベースを意識したビート。だが、ただ流行に乗ったのではない。英国に暮らす移民2世の彼は、西アフリカ音楽の要素を内包するビートとしてドラムンベースを導入。つまり、二つの国にまたがる自分の出自をビートで繋いでいる。その発想力、視野の広さ、音の作り込み、どれも卓越している。 8

「超越性」を追求したというセカンド。ピアノを軸に、ジャズ、R&B、ソウル、ジャングル、ヒップホップ、エレクロ、ルーツである西アフリカの音楽等を混在させた静謐なサウンドは印象的なフックが増え、キャッチーになった。まるで永遠に救済を求めるかのような問いが、ループするビートと共にリピートされる。それは自らだけでなく母と娘にも向かい、ラスト曲で家族の連帯に収束する。 8

大成功した1stから6年ぶりの、どうやっても注目が集まる2nd。ループするピアノにドラムンベース的な細かい生ドラムが絡んでくる1曲目で、新しいサウンドへの明確な意思を感じ、もう背筋が伸びる。虚飾をできる限り排した抑制されたアレンジはより研ぎ澄まされ、細部まで気高く響く。しかしあくまで中心にあるのはこの繊細な歌声であることがアルバムを揺るぎないものにしている。 9

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

アルバム・レヴュー

イラストレイション＝ norahi

＊各アルバムを10点満点で評価しています。それぞれの評文についた□の数字が点数です。
＊筆者には主に試聴用のCD-R等で評を依頼しています。
＊Ⓟマークのついているものは今月の"アルバム・ピックアップ"（145ページから）で取り上げています。
＊アルバムやDVDのデータ部分にある略号および各メーカーへの問合せ先については197ページをご参照ください。

ロック

アメリカ／カナダ　渡辺亨

Ⓟ Thomas Bartlett "Standards Vol.1"
Modern

前作同様、トーマス・バートレットのソロ・ピアノ作。ただし、今回はスタンダード集だ。古い家屋の、祖父母が住んでいた部屋から聞こえてくるような懐かしく親密な響きにあふれていて、ペダルが軋む音も録音されている。いわゆるジャズではなく、よりシンプルでプライヴェートなソロ・ピアノだが、普遍的な物語を喚起する。 9

◆ ウィリアム・エグルストン『512』
シークレトリー・カナディアン／bg
SC386JCD

有名な写真家の2作目。前作と趣を変え、今回は自身の素朴なピアノに、サム・アミドンとレオ・エイブラハムスが即興的な演奏を加えた曲、さらにサックスやベース、ドラムスが付く曲を含む。6曲中、4曲はスタンダード。チャールズ・アイヴズを意識したとのことだが、ある意味で過去と未来を透視したかのようなアメリカーナだ。 8

Ⓟ Jolie Holland "Haunted Mountain"
Cinquefoil

今夏発表されたバック・ミークのソロ作で、約半数の曲を共作していたジョリー・ホランドの新作。ミークが共作し、かつ一緒に歌っている曲が1曲ある。ホランドは、もともとフォーキーでありつつ、エクスペリメンタルな魅力を持つ作風で知られてきたが、本作にもノイズ混じりの曲があり、しかも独特の妖気が漂っている。 8

Ⓟ ラ・レイン『アイ・キルド・ユア・ドッグ』
メキシカン・サマー／bg ME X3461

エクスペリメンタル・ポップ系シンガー・ソングライターでマルチ楽器奏者、タジャ・チークのプロジェクトの新作。R&Bやジャズ、フォーク、ノイズなど多彩な要素が複雑に絡み合い、ある種サイケデリア的な音世界を現出。悲しみや倦怠感が漂うヴォーカルも耳に引っかかる。 9

Ⓟ ノウワー『ノウワー・フォーエバー』
ノウワー／bt　BRC748

ルイス・コールとジェネヴィーヴ・アルターディによるデュオが限定配信していた最新作に、ボーナス・トラックを1曲追加。ストリングスや管楽器が入った曲から、コールが一人で作ったインストまで、編成は多彩だ。一時期のティグラン・ハマシアンに通じる曲もあるが、それでいてノウワー独自のスタイルが確立されている。 8

CamScannerでスキャン

ALBUM REVIEWS

●バンダ・ベア&ソニック・ブーム『リセット・イン・ダブ』 ドミノ／bt BRWCD38

バンダ・ベアとソニック・ブームが昨年発表した共演作を、エイドリアン・シャーウッドが再構築。無論、レゲエ／ダブ・サウンドで調理されているが、もともと含まれていた50年代の音楽の風味も生かされている。 8

Ⓟザ・ナショナル『ラフ・トラック』 4AD／bt 4AD0679CD

今春リリースされた新作と同じセッションで制作された12曲を収録。ボン・イヴェールとのコラボレーションを1曲、フィービー・ブリジャーズとロザンヌ・キャッシュがそれぞれ客演した曲を1曲ずつ含む。バラード主体だが、84分間にわたる最後の曲では、バンドのエネルギーが炸裂。もし前記の新作との2枚組としてリリースされたとしたら、9点を付けた。 8

●オービティング・ヒューマン・サーカス『カルテット・プラス・トゥー』 マージ／bt MRG833

ニュートラル・ミルク・ホテル等での活動で知られるジュリアン・コスタを中心としたウルテットのデビュー作。歌と演奏はおおむねジャジーで、スタンダードも含む。ただし、ピアノ・トリオにミュージカル・ソーを加えた曲が多く、古い幻灯機で映した映像のようにノスタルジックで、なおかつ幻想的な浮遊感にあふれている。 8

◆ロビー・ロバートソン『キラーズ・オブ・ザ・フラワームーン：オリジナル・サウンドトラック』 ソニー 番号なし

マーティン・スコセッシ監督の新作のサントラ。常連のロビー・ロバートソンによるスコアが主体で、1曲は本人のヴォーカル入り。ネイティヴ・アメリカンをめぐる物語だけに、彼らの音楽のリズムやコーラス等を含む曲が目につく。よってロバートソン最後のサントラ仕事として、ふさわしい。 7

ⓅDolly Parton "Rockstar" Butterfly／Big Machine

基本的にはロック系の名曲のカヴァー集。しかもオリジナルのヴォーカリスト等をフィーチャーしたものが多く、たとえばビートルズの「レット・イット・ビー」にはポール・マッカートニーとリンゴ・スター、ピーター・フランプトン、ミック・フリートウッドが参加。表題そのままの華やかなロックスターぶりを伝える曲が30曲もてんこ盛り。よってかなり胃もたれする。 7

◆ラーキン・ポー『アコースティック・コンパニオン』 ソニー 番号なし

レベッカ&メーガン姉妹によるデジタルEP。全4曲は既発曲のアコースティック・ヴァージョン。スライド奏法による生ギターも含まれていて、既発ヴァージョンより良いくらいだ。 7

◆マリアBC『スパイク・フィールド』 セイクレッド・ボーンズ／bg SBR327JCD

サンフランシスコのベイエリアを拠点に活動しているシンガー・ソングライターの2作目。もの静かで繊細なヴォーカルによるインディ・フォーク系。が、ドローンや調律が怪しげなピアノが、アメリカン・ゴシック的な幽玄な気を醸し出していて、ジャケットから受けるイメージを裏切らない。 8

ⓅHelena Deland "Goodnight Summerland" Chivi Chivi

カナダはオタワ出身のシンガー・ソングライターの新作。基本的にはギターやピアノの弾き語りを基調としたシンプルな演奏だが、管楽器が挿入されている曲もある。ヴォーカルは牧歌的でありつつ、深い森の中から聞こえてくるような神秘性を宿している。 8

◆ブルース・トラヴェラー『トラヴェラーズ・ソウル』 BSMF BSMFB075

ハーモニカ奏者のジョン・ポッパー率いるバンドの新作。南部系のR&Bの名曲を中心に、ディー・ライトの曲も含むカヴァー集。ヴァレリー・ジューンやライアン・ショウ等が客演しているので、歌ものとして楽しめる。 7

◆LANY『ア・ビューティフル・フラー』 ユニバーサル UICO1322

LAのエレクトロ・ポップ系トリオの新作。感傷は薄れたものの、ヴォーカルがやけに切々としている点は変わっていないので、単調と感じる。 6

◆イーライ・ペーパーボーイ・リード『ピッツ・アンド・ミッシーズ：ザ・シングルズ』 BSMF BSMF2646

モーターヘッドからラティモアまで多彩なカヴァーを中心に、自作曲のリマスターを含む新作。スティーリー・ダン「ドウ・イット・アゲイン」のアレンジがちょっと変わっていて面白いが、全体的には無難な出来映えだ。 6

ウィリアム・エグルストン『ホーム』

オービティング・ヒューマン・サーカス『カルテット・プラス・トゥー』

ロビー・ロバートソン『キラーズ・オブ・ザ・フラワームーン：オリジナル・サウンドトラック』

CamScannerでスキャン

ロック
イギリス／オーストラリア　油納将志

Troye Sivan "Something To Give Each Other" EMI

とかくアイドル視されがちだが、ヴォーカルもサウンドも非常にクオリティが高く、5年ぶりとなる本3作目は海外の音楽メディアも手放しで褒めそやしている。軽やかなポップ・フィーリングをまとったハウスやR&Bに溶け込んでいく定評のあるバリトン・ヴォイスもより繊細に美しく聴かせる。特にアンビエントなR&Bとの相性がすばらしく、インディ・ポップのリスナーも大いに気に入るはず。もはや、オーストラリアを代表するシンガーのひとりになったと言っていい。 8

Holly Humberstone "Paint My Bedroom Black" Polydor／Darkroom／Geffen

イングランド東部リンカシャー出身の女性シンガー・ソングライターによるデビュー作。すでに2度来日しており、来年1月にも再来日公演が決まっているなど、大きな注目を集める絶賛売り出し中の新人だが派手さはない。ロードとハイムをミックスしたようなダークなトーンの現代的なポップ、ロックだが、根本にあるのはフォークやアコースティック・ロックだということが聴いていくと明らかになっていく。大きな成功を収めたサム・フェンダーに通じるところもあり、今後さらに英国で頭角を現すことが想像できる。 8

ティーンエイジ・ファンクラブ『ナッシング・ラスツ・フォーエヴァー』 ペマ／bg　PEMA20CDJ

ジェラルド・ラヴがバンドを去ってからの2枚目で、約2年半ぶりとなる12作目。19年に加入した元ゴーキーズ・ザイゴティック・マンキのユーロス・チャイルズは作曲に携わらず、これまで通りにノーマン・ブレイクとレイモンド・マッギンリーが半数ずつ曲を書いている。だが、この二人の曲はテイストが似通っており、ジェラルドの曲があったからこそ互いの曲を引き立て合ってこのバンドしかない魅力を築き上げてきた。その点で新たなソングライターを迎え入れるタイミングだと思う。渋みを増したフォーク・ロックも悪くないが、やはりあの胸を締め付けるギター・ポップが聴きたい。 8

ティーンエイジ・ファンクラブ『ナッシング・ラスツ・フォーエヴァー』

ジョー・マカリンデン『ホエア・ザ・クラウズ・ゴー・スウィミング』

ロル・トルハースト×バッジー×ジャックナイフ・リー『ロサンゼルス』

ジョー・マカリンデン『ホエア・ザ・クラウズ・ゴウ・スイミング』 サ・ヴァ?／ハヤブサランディングス　HYCA8057

80年代からティーンエイジ・ファンクラブと密接に関わってきた元スーパースターの中心人物による、本人名義としては初となるアルバム。10年代にリンデンと名乗って活動していた際はグラスゴーらしいキャッチーなギター・ポップを聴かせていたが、20年代に入ってソロ名義になってからは後期トーク・トーク～マーク・ホリスを思い出させるようなアンビエント色も加わり、この8曲入りもギターではなくピアノ主体となっている。ちょっと意外な作品だったが、トーンを落とした声とサウンドの相性も良く、どう発展していくか見守りたい。ちなみに彼の来年の目標は来日公演だそうだ。 7

スーパーシャイ『ハッピー・ミュージック』 ビヨンド・ザ・グルーヴ／btBRC708

トム・ミッシュによるダンス・ミュージック・プロジェクトのデビュー作。ダフト・パンクやスターダストに夢中になった時期があったんだろうなと思わせる、フレンチ・ハウスやイタロ・ディスコをベースにした作風で趣味全開とも言えるが、そこはキャリアも積んできただけあって単なる遊びには終わっていない。ロバータ・フラックをフィーチャーして「愛のためいき」をカヴァーした大ネタをはじめ、楽曲ごとにしっかりと作り込んでいて、とにかく楽しく聴ける。今後もソロ名義の作品の合間に続けていってほしい。 7

◆ロル・トルハースト×バッジー×ジャックナイフ・リー『ロサンゼルス』 PIAS／bg　PIASR1440CDJ

ザ・キュアーのロルに、スージー・アンド・ザ・バンシーズのバッジー、そして英国を代表するプロデューサーのひとりであるジャックナイフ・リーによるコラボレーション作品。ふたりのバンドに共通するダークなトーンをうまくアップデートさせ、ボビー・ギレスピーやジェイムス・マーフィー、ジ・エッジ、スタークローラーのアロウ・デ・ワイルド、アイドルズのマーク・ボーウェンらを迎えて、ヴェテランとゲストの持ち味をうまく引き出したプロダクションが光っている。 7

CamScannerでスキャン

ロック

ヨーロッパほか　村尾泰郎

Lost Girls "Selvutsletter" *Smalltown Supersound*

ノルウェーのシンガー・ソングライター、ジェニー・ヴァルと、マルチ奏者のホヴァルド・ヴォルデンのユニットによる2作目。ビートが洗練されてダンス・ミュージックに接近。アンビエントな要素も取り入れた実験的なサウンドにはオルタナティヴな音楽性が息づいていて、ヴァルの歌声は自作以上にエモーショナルに聞こえる。[8]

Pフリーダ・トゥレイ『メンディング』 コアポート　RPOZ10090

スウェーデン出身で現在はロンドンを拠点に活動しているシンガー。本作はファーストEPにライヴ音源4曲を加えた日本独自の企画盤で、R&Bやジャズが溶け込んだ歌はソウルフルでナチュラル。アコースティックな楽器にエレクトロニックな要素を織り交ぜて、空間を大切にした透明感があるサウンドが、柔らかく伸びやかな歌声の魅力を引き出している。[7]

◆モヒニ・デイ『モヒニ・デイ』 Pヴァイン　PCD25374

インド出身のベース奏者によるデビュー・アルバム。ロン・サール、ガスリー・ゴーヴァン、ナラダ・マイケル・ウォルデンなど、トップ・プレイヤーたちが参加。ロック、ジャズ、ファンク、インド音楽など様々な要素をごった煮にしたような熱気溢れるセッションを繰り広げて、テクニカルでエネルギッシュなプレイは圧巻だ。[8]

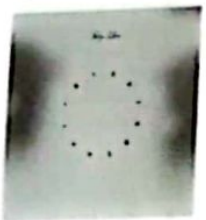
◆バビック・プレゼンツ・シー・ブリーズ『ウェストコースト・ランデヴー』 同　PCD26104

イタリアのプロデューサー、ネリオ・ポッジのソロ・プロジェクト。70～80年代のウェスト・コースト・サウンドやAORにオマージュを捧げたプロジェクトで、ツボを押さえてはいるけれど、彼ら独自のアプローチやこだわりをもっと出して欲しい。[6]

◆Sign Libra『Hidden Beauty』 ブランチャ　ARTPL206

ラトヴィアのミュージシャン、アガタ・メルニコヴァのソロ・ユニット。エコーをたっぷり効かせた空間にシンセの音色をちりばめて、アガタの歌声がふわふわと浮遊する、幻想的なエレクトロニック・ポップ。音のパレットを使って思いつくままに絵を描いているようで、直感的でありながら独自のポップ・センスを感じさせる。[7]

モヒニ・デイ『モヒニ・デイ』



Sign Libra『Hidden Beauty』

ガリア・ヴォルト『シャウト・シスター・シャウト!』

◆ブラインド・ドロン『メタモルフォーゼ』 VEYL/d　RTMCD1597

フランスのバンド。パンクやヘヴィ・メタルを通過した攻撃的なロックとひんやりとしたシンセの音色を融合。ニュー・ウェイヴ～エレクトロニック・ボディ・ミュージックといった80年代のエレクトロニックなロックやホラー映画のサントラを思わせるところもあり、不穏な空気を漂わせたダークな世界を生み出している。[7]

◆ガリア・ヴォルト『シャウト・シスター・シャウト!』 BSMF　BSMF2847

ベルギー出身のギタリスト。アメリカのヨシュア・ツリーのスタジオでアメリカの名うてのミュージシャンたちと録音した新作は豪快なブルース・ロック。ケレン味たっぷりのパワフルな演奏やハスキーな歌声など、ブルースへの愛情が詰まっている。[7]

◆ジェルーシック『フォロー・ザ・ブラインド・マン』 ワード　GQCS91403

ホワイトスネイクに在籍していたクロアチア出身のシンガー、ディノ・ジェルーシックが結成したバンドによるデビュー・アルバム。タイトに引き締まったメタル・サウンドを従えて、80年代ハード・ロック直系のパワフルな歌声と見事な歌唱力で歌い上げる。[7]

◆グレイヴヤード『6』 同　GQCS91400

スウェーデン出身のロック・バンド。ブルース色が濃いギターをたっぷり聞かせる荒々しい演奏。どんよりとしたサイケデリックなサウンドには60～70年代ロックからの影響を感じさせると同時に、ストーナー・ロックやグランジの匂いも漂っている。[7]

◆ディグリース・オブ・トゥルース『アルケミスツ』 同　GQCS91405

イタリアのヘヴィ・メタル・バンド。エレクトロニックやオーケストラ・サウンドも加えた、ドラマティックなメタル・サウンドを展開。新加入した女性シンガーの歌声は澄んだ歌声で時にはオペラティックに歌い上げて、何でもありの強引さが逞しい。[7]

CamScannerでスキャン

ロック
日本　岡村詩野／小山守

Ⓟカーネーション『Carousel Circle』
パナム／ひ　CRCP20597～8
田中ヤコブのギターが炸裂したかと思えば、鈴木さえ子がドラムを叩く曲が3曲もあったり、谷口雄が各種鍵盤で活躍…とゲスト勢も光る19作目。ベースの大田譲が作詞作曲、ヴォーカルをとったバンド史上初の曲も聴ける。何より直枝政広が自身のソングライティングに新たな風きを加えていることがわかるのがポイントで、優しさが滲み出た「ペインター」、アグレッシヴな「光放つもの」が出色。

Ⓟ空気公団『景色ノ空』フワリ／ヴァージンLAS／u　KKFS03
2年半ぶりのオリジナル作。山崎ゆかりのソングライティングと優雅なヴォーカルの瑞々しさは変わらずで、もう20年以上のキャリアを持っていることに驚かされる。ノーナ・リーヴスの奥田健介、千ヶ崎学らに加え、古川麦、厚海義朗の参加が新鮮で、音のグラデーションでポップ・ソングを表現するこのユニットに新たな仲間が加わったことを告げている。[8]

Ⓟ民謡クルセイダーズ『日本民謡珍道中』
ユニバーサル　UCCJ-9246
ドキュメント映画も好評の最中、6年ぶりのニュー・アルバムも到着。コンセプトは〝旅〟。コロナ禍以降に展開させた海外ツアーをこなしつつ、改めて「佐渡おけさ」から「ソーラン節」までお馴染みの日本民謡をとりあげて、〝世界の音楽〟として他国のフォークロアとシームレスに合流させるエネルギッシュな姿勢に心も体もアガる。[9]

Ⓟ小坂忠『THE LAST SESSION～with Chu's Friends』ベクター・デイズ／co　COZB2038～9
生前のライヴ音源や未発表曲などを集めたCDとDVDとの2枚組。娘であるAsiaとのデュエットや、そのAsiaが小坂の死後に公開した追悼曲などにしんみりしつつも、佐藤博の自宅から発見されたという「F.W.Y.」はソウル、ゴスペルを歌ってきた小坂のヒューマンな味わいが堪能できるし、ボブ・ディラン「フォーエヴァー・ヤング」の弾き語りからは素朴に歌を慈しむ横顔を感じ取れる。何より亡くなる3年前のライヴ・テイクでジミー・クリフ「Many Rivers to Cross」のカヴァーがとにかく素晴らしい。[8]

◆コトリンゴ『小鳥百景 Kotringo Works』同　COCB54363
コトリンゴの職人的な側面が楽しめる25曲入りの作品集。映画やCMの曲など、聴いたら一発で思い出すものばかり。一つ一つはどれも愛くるしく、ちょっと切なく、お茶目だったりするが、普段彼女の曲や声を日常生活の中で自然と耳にしていることの贅沢さに気付かされる。その音楽性とスキルゆえ少し敷居が高く感じる人も、これは大滝詠一のCMソング集のように、カジュアルに聴けるはず。[8]

ⓅRei『VOICE』レイニー／u　UCCJ2231
ギタリストとしての腕が高く評価されているReiの7曲入り。ジンジャー・ルート、ハマ・オカモト、エズミ・モリ、石若駿、マーティー・ホロベックらが参加、現代的で洒落たメロディ・チューンを自らの歌で聴かせる。できればもっと振り切ってほしい気もするが、一聴すると普通のポップス、でもよく聴けばアレンジや音質が凝っているという作品になっている。[7]

Ⓟユニコーン『クロスロード』キューン／sr　KSCL3472
2年ぶりの新作。〝岐路〟というタイトルはメンバー中2人が60代になったことを示唆しているようにも思えるが、それぞれが曲を持ち寄った11曲からは相変わらずやんちゃに曲を作って演奏している溌剌とした姿しか伝わってこなくて痛快。奥田民生が作ったのは、グッドタイム・ミュージック風と、古典的なハード・ロック・タイプの極端な2曲で相変わらずやりたい放題。[7]

ⓅGLIM SPANKY『The Goldmine』ヴァージン／u　TYCT60219
通算7作目。基本的にはやはりキャッチーなリフやフレーズがどの曲にもあるし、現代的なキレのある音作りになっているが、先行曲「Glitter Illusion」のようにちょっとマリアッチ風味を取り入れたり、アコースティック・ギターの音色を強調した「光の車輪」のようにオーガニックでルーツ色を無理なく取り入れた曲がいつも以上に存在感を放っている。[7]

Ⓟビッケブランカ『Wordaffy』エイベックス・トラックス／av　AVCD63512
ライヴ・アルバムと同時にリリースされた6曲入りEP。今年の春から夏にかけて行われた海外ライヴからインスピレーションを受けて制作した曲が中心で、サウジアラビア公演での手応えから作ったアラビック調の曲、イタリアはシチリア島での思い出が反映されたという曲など多様。EDM系の耐久性ある音作りながら、メロディは人懐こいという特徴も活きている。[7]

（以上、岡村詩野）

CamScannerでスキャン

Ⓟ SOTA ART NARROW 『s/t』 ソータ・アート・ナロー　P-VINE PCD-23249

三船雅也のソロ・プロジェクトによる初作品。三船らしい重厚さや鋭さを保ちつつも明るく開放感のある曲が目立ち、演奏も軽やかに躍動していて、とてもオープンな仕上がりだ。中でも「Circle」「MOON JUMPER」でのエレクトロなグルーヴ・ミュージック的アプローチがすこぶる新鮮。3部作が終わり、三船がドイツと日本を拠点とする新環境になったのが大きいのだろうが、新たな段階を感じさせる。 [9]

Ⓟ曽我部恵一『ハザードオブラブ』 ロケッツ　ROSE317

ソロとしては約1年半ぶりのアルバム。オータコージ、加藤雄一郎、神保貴行らが参加。宅録を基本に生楽器を加えた音作りで、彼らしいリリカルなメロディーとメロウなサウンドの楽曲が並ぶ。その中で、オルタナ的ロック・サウンドとヒップホップがくっついたような曲、かもめ児童合唱団をフィーチャーしたファンキーな曲、それに全編ファルセットで歌う曲など、冒険心あふれる試みが興味深い。 [8]

Ⓟ細井徳太郎『魚』 スペースシャワー　PECF-3228

多方面で活躍するギタリストのファースト・ソロ。君島大空、石若駿、七尾旅人らが参加している。ポカロ的ヴォイスのラップとダイナミックな演奏がスリリングに拮抗するタイトル曲をはじめ、本人のウィスパー・ヴォイスとジャズ的なセッション色の強い演奏からなる、軽やかな歌ものがメイン。中でも大友良英のノイズ・ギターをフィーチャーした魅魅魅暗黒セッションがすごい。カオスでストレンジな音像に仕立てたミックスも特筆すべきだろう。ギタリストのソロとしては、新たな在り方を示してみせた力作。 [9]

Ⓟodol『DISTANCES』 UKプロジェクト　UKCD-1224

東京で活動する3人組バンドの5枚目で、岡田拓郎、西田修大、細井徳太郎など敏腕揃いのゲストが参加。やわらかなハイ・トーン・ヴォイスと、とても繊細に構築された透明感あふれるサウンドが、美しく厳かな空間を生み出す。彼らの美意識を徹底して追求し、隅々まで練り上げたような傑作。 [8]

◆中川理沙『動物の庭』 ひやおろしディスク　HYOS001

コトリンゴ『小鳥百景 Kotringo Works』

中川理沙『動物の庭』

Ogawa & Tokoro『Mutual Mutation』

ザ・なつやすみバンドやユカリサなどで活動してきたシンガーの、初のソロ・アルバム。MC.sirafu、山崎ゆかり、ボニーのヒサミツらが参加しており、繊細なアコースティック・アンサンブルを軸としつつ柔軟性に富んだ演奏に乗せて、彼女がナチュラルな歌声を聴かせている。とても穏やかな佇まいで、つぶやくようにポツポツと歌うヴォーカルは独自の存在感があり、弦の響きとの相性も抜群にいい。 [8]

Ⓟ Lamp『一夜のベーソス』 ポタニカル・ハウス　番号なし

男女混合3人組バンドの9枚目で、全20曲約75分収録の大作。無駄を排除しまくったような簡素なバンド・サウンドで全編を通し、女性ヴォーカルのはかなくスウィートな歌声をフィーチャーした歌もの、ユルいビートのグルーヴィーなシティ・ポップ、アコースティックもの、厳かなバラードなど、緩やかに変化しながらじっくり聴かせる。都会的な洗練と夢幻のムードが秀逸な、良質のポップ・アルバム。 [7]

◆藤井洋平『mixtape』 カクバリズム　SPKAKU-173

これが約10年ぶりのサード・アルバムとなるシンガーで、ceroの荒内佑が共同プロデュース。ナルシシスティックな匂いが漂う巻き舌のなまめかしいセクシー・ヴォイスが躍動し、シンセ主体のグルーヴィーで遊び心にも富んだサウンドとともに示してみせた、グラマラスでラジカルなファンク・ミュージック。こういうスター性をもった人は今の時代だと希有かも。 [7]

Ⓟ在日ファンク『在ライフ』 同　DDCK1078

浜野謙太率いる7人組ファンク・バンドの6枚目。JB的ファンクに日本語詞をのっける、という基本スタイルを保持しつつ、シティ・ポップっぽい洗練された曲があったり、ラップをフィーチャーしていたりと、多様なアイデアで飽きさせない。七尾旅人や高岩遼らゲストの参加も効果的。 [7]

◆Ogawa & Tokoro『Mutual Mutation』 同　KAKU-184

二人組宅録ユニットのセカンド。全編バレアリック～アンビエント的サウンドで、シンセやギターなどの装飾系が空間を彩り、強靭なリズム・セクションによるゆったりしたグルーヴが揺れていき、映像的センスに長けたドリ

CamScannerでスキャン

ーミーな音像を構築している。[8]

Ⓟgroove3『風』ベストカバー　番号なし

柳瀬二郎によるプロジェクトの、バンド形態になってから3枚目。やわらかいキッシュなオルタナ・ロック的演奏が突っ走り、やさぐれた声で言葉を発射していくヴォーカルとともに、デンジャラスな匂いをまき散らしながら一気に聴かせる。町田康あたりに通じる柳瀬のアジテーションぶりが圧巻で、イッちゃってる突き抜け感が痛快。[8]

Ⓟアヤコレット『アヤコレットブラスワン』鳥生　TRYU0005

プロデュースの植野隆司をはじめ、伊藤大地、塚本功、中村としまるらが参加し、フレンチ・ポップ中心の全曲カヴァー作。即興性を多分に取り入れた攻撃的な演奏と、ポエトリー・リーディングを交えて妖しげに歌いまくるヴォーカルとが合致して、エレガントでありつつラジカルな仕上がり。[8]

Ⓟあっけらかんず『冒険』Pヴァイン　PCD22446

ギター&ヴォーカルとドラムスの二人組バンドで、BPM120以上禁止とか爆音ドラム禁止などの制約を設けたロックをやっている。オルタナ感のあるジャキジャキなギターとゆったりしたビートが絶妙なアンサンブルにヌーボーッとしたヴォーカルがのっかって、腰砕に腕押し的な脱力感がたまらない味わい。ポスト・ロックの在り方としては、有効な手法といえるかも。[8]

◆ギリシャラブ『無・無・無・無・無』都市国家／dw　TKDU1002

京都出身の3人組で、約1年ぶりのEP。バンド・サウンドにエレクトロ要素を大胆に投入し、硬質さを削ぎ落としたようなぐにゃりとした音作りと、なまめかしい声で意味不明な言葉を連呼するヴォーカルが織りなす、ストレンジでシュールな軟体動物っぽいアメーバ・ロック。摩訶不思議な味わいにいっそう磨きがかかっている。[8]

Ⓘigloo『Synapse Confusion』グランド・フィッシュラボ／dw　GFL12-15

サックス奏者の若林一也率いる4人組インストゥルメンタル・バンド。力強いサックスが先導して、全員がテンション高めの演奏で緊迫感を保ったまま疾走するガチンコ的セッション。スローなサイケデリックやフィールド・レコーディングのアンビエンスも含め、全体のトリップ感がすごい。[8]

ギリシャラブ『無・無・無・無・無』

Guiba『Guiba』

トリオラ『スケープゴート』

◆Guiba『Guiba』ギバ　番号なし

South Penguinのアカツカら4人が新たに組んだバンド。ハイ・トーンのやわらかな歌声と爽快感のあるメロディーを、軽快に転がっていくグルーヴィーなバンド・サウンドとともに聴かせる、ドリーミーでちょっとエグいシティ・ポップをやっている。[7]

◆トリオラ『スケープゴート』コンストラクティヴ／ip　AMIP0342

波多野敦子率いるストリングス・プロジェクト。石橋英子、山本達久、千葉広樹らが参加。〝架空のオペラ〟をテーマとして、弦楽アンサンブルを中心に、曲によってビート主体だったりフィジカルなセッションだったり、フィールド・レコーディングやポエトリー・リーディングも含め多彩な音作りで、起伏のある流れを生んでいる。[7]

◆ULTRA『到底及ばない』フレイク／br　FLAKES277

壷坂恵(acd.)と宮本菜津子(MASS OF THE FERMENTING DREGS)を中心とする4人組新バンド。真摯に歌い上げるツイン・ヴォーカルと、重量感たっぷりなオルタナ的バンド・サウンドが一体化して疾走していく、ヒリヒリしたストイックなロック。[7]

◆Clute『Loomie』同　FLAKES275

現役のタオル工場でレコーディングされ、ミキシングまですべてバンド自身で行なったというインスト作品。トータスあたりを思わせる音響系っぽいジャム的演奏が中心で、淡々としたりズムの穏やかな曲が多く、そのナチュラルで日常っぽい面持ちが心地いい。電子音を駆使したエクスペリメンタルな曲もあり、可能性を感じさせる。[7]

Ⓟジャックス『LAST STAGE』スーパーフジ／dw　FJSP489

69年8月のラスト・ライヴと、その2週間前のワンマン・ライヴを収録した2枚組。どちらも充実の演奏を生々しく捉えており、前者は後半部分における角田ひろのダイナミックなドラミングが圧巻だし、後者はまるでバンク・バンドといえそうなノイジーでヴァイオレントな「堕天使ロック」や早川義夫の激しいシャウトが聴ける「裏切りの季節」あたりが白眉。[7]

(以上、小山守)

CamScannerでスキャン

Jポップ／歌謡曲

原田和典

●岡田奈々『Asymmetry』エイベックス・トラックス／av AVCD63530

元AKB48メンバーのソロ・デビュー作。全作詞を手掛けているが、気取ったレトリックなど用いず、知っている範囲の言葉で、まっすぐ気持ちを伝える風なのがいい。1曲目「裏切りの優等生」は、まさしく思いをフルに吐露した感じだ。歌唱にダイナミクスが加われば、さらに大成しよう。[7]

●GANG PARADE『The Night Park EP』ワーナー WPCL-13520

2022年から13人編成で活動するアイドル・グループの初EP。唸るシンセ・ベース、固く張った音色のスネアに、切り貼りされたような歌声が乗る「ゾムニウム」が頭一つ抜きんでているか。次はフル・アルバムを望む。[7]

●RAY『Camellia』ロングホープ 2022

あわせて最高的な音楽に取り組んでいる5人組アイドル・グループの3枚目フル・アルバム。女子的な歌詞を表現するにはロックがもっともクールでまっすぐだ、という信念のもと、硬派なリズム・ギターはエッジが立ちまくっていて、その音の塊を浴びた者はスリルと幻想の間でさまようことになる。作家陣には青木ロビン、管代、Mayなどの名も。「KAMONE」と「読書日記」をとくにお勧めしたい。[9]

●SHO HENDRIX『DOZEN ROSES』エイベックス 番号なし

去る7月にアーティスト名義をEXILE SHOKICHIからSHO HENDRIXに変更。音楽もスペースを生かしたものになり、冒頭「Cloud 8」における空間に声をそっと置いていくようなアプローチ、"体温の低いインコグニート"という感じの「Dinner Time Jazz」に新生面をみた思い。[8]

●小日向由衣『恋愛ハラスメント』ことっこ／なりすKOKK0004

2年ぶりとなるフル・アルバム。ハビネスと物悲しさが同居した歌詞の世界、サビに向かってゆくときのメロディ・ラインの高揚は、心憎いまでの職人性を感じさせる。業者2のアレンジも実にソリッドだ。最終曲「虹のははえみ」は、次元のあったPANTAの作品。[8]

●Kyrie『DEBUT』エイベックス・トラックス／av AVCD63529

岩井俊二監督映画『キリエのうた』で主演を務めるアイナ・ジ・エンドがKyrie（キリエ）名義でアルバムを発表。力強いハスキー・ヴォイスの持ち主だが、ここでは「押し」より「引き」に重きをおいた歌唱でじっくりと聴かせる。サウンド・プロデュースは小林武史が担当。[7]

●QUBIT『QUBIT』ベター・デイズ／ユニバーサル UCCB5436

22年から始まったオールスター・ユニットの第1作。永井聖一、網守将平、鈴木正人、大井一彌が生み出す強烈なうねりの上で、Daokoが自在なウィーカリゼーションを繰り広げる。肉声＋伴奏という形ではなく、全員が生きていて、相互に刺激しあっている感じ。なのにしっかり"ウタモノ"としてのポップネスは確保されていて、「かっこいいなぁ、鮮やかだなぁ」と感服させられるばかり。このアルバムを耳にできてよかった。[10]

●青野りえ『TOKYO magic』フライハイ／ビクター VSCF-7278

現行シティ・ポップを代表するシンガーの第3弾。The Dhesiesの面々が全作曲・編曲・ギター演奏・プロデュースを担当、自ら作詞した都会の物語を歌い綴る言葉遊びの妙は健在すら感じさせる。フルート、ハープ、エレクトリック・ピアノがインターな感触を添う「ぴぴぴ」が特に秀逸。[8]

●ITZY『RINGO』ワーナー WPCL-13600

2PM、TWICEと同じくJYPエンターテインメントに所属、19年にデビューした6人組グループが、遂に日本仕様第1弾アルバムを発表した。柔らかな歌声の持ち主が集まってバランスよい音世界を作っている感じ。表題曲のようなソリッドなダンス・ナンバーよりも、ギター・カッティングに乗せたメロウな「ゆらゆら」や「Boys」を何度も楽しんだ。[7]

●Scenes of Scenes『michikake』ARCHIVE／ソニー SCHUWA012

鮮明かつ広がりのある音場が実に魅力的だ。渡邊光平と柚世界子によるユニットが、1年半ぶりにEPを発表。メロディの展開からキックの重低の選択に至るまで「聞き飽かれた」としかいいようのない表現の数々に引きつけられるばかりだ。"緑になる薬指"という箇所での緑のねじれが官能的な「Scenes of Scenes」は、インスタルのプロデューサーリンヨイヤーのリミックスも収録。[8]

●Andy『Friend』

む歌唱、日本語と英語の巧みな使い分けは、まさに実力派の証。この歌声と拮抗し、時に挑むようなバック・トラックが用意されたとき、さらに趣向に富んだアルバムが仕上がるはずだ。[6]

◆**大橋ちっぽけ『character』** ユニバーサル TYCT60216

19年にデビュー、私立恵比寿中学やWESTにも楽曲を提供するシンガー・ソングライターのフル・アルバム第2弾。地声とファルセットの間のあまりにも滑らかな行き来、声へのエフェクトのかけ方、〝真実も嘘も愛も憎悪も／すべてがグラデーションだからたちが悪いわ〟という箇所をはじめとする鮮烈な言葉遣いの数々に、豊かな才能が反映されている。[8]

◆**吉澤嘉代子『若草』** ビクター VICL65892

来年でメジャー・デビュー10周年を迎えるシンガー・ソングライターが、「青春」をテーマにしたEPを発表。一筆書きのようにシンプルな楽曲から、学生時代に一度もギャルになれなかったくすぶりを今、妙にキャッチーかつ凝った音像に乗せて表現するかのごとき「ギャルになりたい」まで、色とりどりのプログラムで楽しませる。[7]

Ⓟ**吉田哲人『The Summing Up』** なりす／ハヤブサランディングス HYCA8060

Ⓟ**同『The World Won't Listen』** 同 HYCA8061

私立恵比寿中学、Negicco、竹達彩奈、WHY@DOLLなどへの楽曲提供でも知られるメロディ・メーカーが、ソロ・アルバムを2作同時発売。前者はよりポップでオーガニックな面に側面を当てた仕上がりで、軽やかな歌声が、スキャット・ナンバー「キーファー・サザーランドみたいな奴」、WHY@DOLLが創唱した「ふたりで生きてゆければ」等に映える。

後者は08年にアルバム化を考えていたというアシッド・テクノ系楽曲をディスク1に、大学生の頃に作ったナンバーをディスク2に収めた2枚組。アイドル・ポップスの作家であり、ジャズ・ファンクに造詣の深いDJでもあり…といった吉田哲人像を小気味よく揺さぶるナンバーが続く。ガムランとハウスが出会った感じの「It's Gonna Rain」にときめいた。[8][8]

◆**Grey October Sound『Lo-Fi Anime』** Pヴァイン PCD94180

ジブリ関連ナンバーや、「プラスティック・ラブ」などの楽曲をローファイ・ヒップホップ化したプロデュース・チームの新機軸。「魂のルフラン」「ムーンライト伝説」「空色デイズ」などが次々と奏でられてゆく。一聴、淡々としつつも、曲の哀感をあぶりだすようなアプローチが興味深い。[7]

◆**『みんなのさだ』** カラフル／v VICL65891

10月に活動満50周年を迎えたシンガー・ソングライターの楽曲群を、ゆず、折坂悠太、上白石萌音、T字路ズ、MISIAらが伸び伸びとカヴァー。さだソングスの持っているメロディの美しさ、歌詞の男臭さを再認した。「償い」にインスパイアされたというMOROHAの「新約〝償い〟」がまた、実に歯切れよく、ユニークだ。[7]

◆**『スタジオジブリ トリビュートアルバム「ジブリをうたう」』** ビクター VICL65894

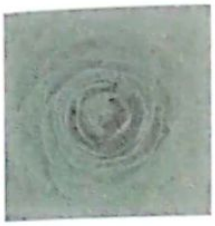
武部聡志プロデュースによる、ジブリ作品関連曲のカヴァー集。〝原典〟を尊重したパフォーマンスに、音楽家たちのジブリへの敬意がうかがえる。参加者の男女比は半々といった感じだろうが、槇田りら「いのちの名前」、満島ひかり「ひとりぼっちはやめた」など、女性歌手の快唱が耳に残った。[7]

◆**『niigata song book』** ノアノア NOANOA001

新潟県を拠点とする音楽家が、同地の民謡や子守唄を解釈した一作。ボサ・ノヴァ、ブルース、インド音楽などのスパイスが利いた興味深いアレンジもある中、太鼓・声・笛で真正面から臨んだ感のある「八海よいやさ」(Blood Culture Japan×八海太鼓)が殊にすがすがしい。[7]

◆**『踊れ!ブギウギ〜蔵出し戦後ジャズ歌謡1948-55』** ユニバーサル UICZ8230

40年代後半〜50年代前半に流行した和製ブギウギといえば日本コロムビアと日本ビクターの独壇場、という印象が個人的にはあるのだが、本作はポリドール音源がふんだんに使われているのがとにかく貴重。ラテン調やR&B調もある。しかも歌手陣に川田義雄、榎本健一、古川緑波らもいるのだから、お笑い好きにも垂涎ものといえるはずだ。企画・構成は保利透。[9]



RAY『Camellia』

Schuwa Schuwa『michikake』

『踊れ!ブギウギ〜蔵出し戦後ジャズ歌謡1948-55』

CamScannerでスキャン

ジャズ
村井康司

Ⓟレザヴォア『レザヴォア（セカンド・アルバム）』リングス／dw　RINC113

シカゴの作曲家ウィル・ミラーが中心のプロジェクト。ミラーのキーボード群にギター、ヴォイス、ホーンズなどが絡んだドリーミーなサウンドはフュージョン的とも言えるが、音の選択やメロディに後期ウェザー・リポートの影響を感じさせたりもする。[8]

Ⓟエネミー『ザ・ビトレイアル』同　RINC114

イギリスのピアニスト、キット・ダウンズを中心としたトリオがエネミー。ダウンズのECM作の余韻を重視したサウンドとはうって変わった、ドライでアグレッシヴでもある質感に驚いたが、ある種ぶっきらぼうでパンクなこの雰囲気も実にいい。生演奏と人工的処理をうまく組み合わせた脱臼するようなズレが魅力的だ。[9]

Ⓟコマ・サクソ『ポスト・コマ』同　RINC115

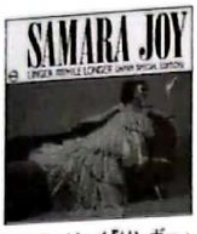
エネミーのベーシスト、ペッター・エルドが率いるアンサンブル。サックス3本、ヴォーカル、ベース、ドラムスという編成で、ジャズをベースにクラシック、エレクトロニカなど幅広い音楽の要素がおおらかに融合されている。カーラ・ブレイの70～80年代の音楽を現代に継承するサウンドだ。[9]

Ⓟステイシー・ケント『サマー・ミー、ウィンター・ミー』ナイーヴ／k　KKJ229

アメリカ出身でイギリスを本拠としつつフランスとも縁が深いステイシーの新作は、ミシェル・ルグランの曲を英語で歌うタイトル曲や、おなじみのシャンソン「パリの空の下」、さらには英語とフランス語の2ヴァージョンを収録した「行かないで」と、フランスゆかりの曲が多い。柔らかで控えめだがしみじみと思いが伝わる歌いっぷりはますます磨きがかかっている。[8]

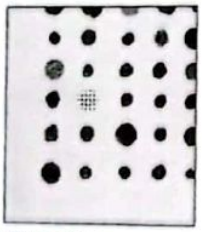
◆サマラ・ジョイ『リンガー・アワイル・ロンガー・ジャパン・スペシャル・エディション』ヴァーヴ／u　UCCV1198

プロモーション来日時にテレビで歌ったことで日本でも大売れのサマラ。グラミー受賞作『リンガー・アワイル』録音時の未発表曲や、収録曲の新ヴァージョンなどを集めたこのCDでも、若さに似合わない貫禄と風格に溢れた歌唱が聴ける。特に素晴らしいのはジェラルド・クレイトンのピアノとのデュオによる3曲。脱帽です。[9]



サマラ・ジョイ『リンガー・アワイル・ロンガー・ジャパン・スペシャル・エディション』

メアリー・ルー・ウィリアムス『ゾディアック・スウィート』


西山瞳『ドット』

◆ジョアン・パウロ・エステベス・ダ・シウバ・トリオ『ザ・リヴァー』アルジュナミュージック／cl　RTMCD1593

ポルトガルのピアニストによるトリオ作。音数の少ない陰影でもあるピアノと、アルコ奏法も登場するベース、ブラッシュを多用して余韻を響かせるドラムスによるアンサンブルは、典型的な現代ヨーロッパのピアノ・トリオと言える。派手なところはないが、じっくり聴き込みたい佳作。[8]

◆メアリー・ルー・ウィリアムス『ゾディアック・スウィート』ライス／osFLR3129

近年再評価されている黒人女性ピアニストの1945年録音の初リーダー作。トリオ編成で、12曲中5曲がピアノ・トリオで、5曲にサックス（またはフルート）、クラリネット、ヴァイオリンによるアンサンブルが加わる。タイトル曲は「ドット」のように8分音符を連打するピアノに、前半はアルコ奏法のベース、後半はアンサンブルが絡む大作。総じて西山瞳の作編曲力が光っている。エアーをたっぷり含んだ録音もいい。[9]

◆鈴木央紹『Stars & Smiles, Vol.2 (Songs)』T5ジャズ／vs　T5J1023

鈴木央紹(ts、ss)、荻原亮(g)、若井俊也(b)のトリオによるスタンダード集のパート2。7月に出た1作目はジャズメン・オリジナルを選曲していたが今回は「歌モノ」をセレクト。たおやかな音色で息の長いフレーズを歌うテナーが美しく、荻原のギターもタッチの優しさが際立つ。[8]

◆西山瞳『ドット』ミーントーン　MT12

10曲中5曲がピアノ・トリオで、5曲にサックス（またはフルート）、クラリネット、ヴァイオリンによるアンサンブルが加わる。タイトル曲は「ドット」のように8分音符を連打するピアノに、前半はアルコ奏法のベース、後半はアンサンブルが絡む大作。総じて西山瞳の作編曲力が光っている。エアーをたっぷり含んだ録音もいい。[9]

CamScannerでスキャン

ラップ／ヒップホップ
日本　二木信

◆仙人掌 & S-kaine『82 - 01』ドッグイアー／ウェスト・メイク・イラー　番号なし

82年東京生まれの仙人掌と01年生で大阪・西成育ちのS-kaineの共作は、初期DJシャドウを思わせる不穏なピアノと騒々しいビートの4曲目の〈瞬発力がモノ言うアート〉というリリックを体現する。ハードでソウルフルなビートに食い込み、耳と心を抉る鋭利なリズムのヴァースを躍る。混ざり物なしのビートとラップの美学。 8

Ⓟ◆Awich『THE UNION』アンド・ミュージック　番号なし

巻頭の彼女のインタヴューを読んでほしいが、私は現在の国内シーンのトップを走るヒップホップ・アーティストが〝連帯〟を掲げ、厳格なフェミニストからすれば完璧ではないとしてもシスターフッドを提示し、沖縄の土着性と霊性、そして内省に厳しく向き合って前進を試みる作品を作った事実をより多くの人が知り、聴き、考えてほしいと願う。時代は変わる。 8

◆OLIVE OIL『No.00』オイルワークス　OI-LREC.CCD034

常に定型やセオリーから逸脱してきた唯一無二のビートメイカーは通算5作目のソロでも、自身の楽曲を独創的にリアレンジし、ピッチを変えたソウル・ヴォーカルを奇妙なタイミングで挿入し、正統派のブレイクビーツに独自のアクセントを加えて我々の耳を楽しませる。インストだけでなく、生前のFEBBとの曲、紅桜のリミックス曲等、ラッパーとの共作も含む。 7

◆SIRCORE『Journey』UG-47　番号なし

長尺曲が並ぶビートのトリップまたは絵巻物。ラッパーがマイクを繋ぎ、DJがノリエガやコモンの言葉をスクラッチ、ビートは様々に表情を変える。一時はデトロイト・テクノにも傾倒した求道的なビートメイカーの11年ぶりの新作にはブリストル・サウンドやダブに近いディープな快楽がある。 7

◆J.COLUMBUS & MASS-HOLE『On The Groove, In The City』WDサウンズ　番号なし

冒頭曲はダーク・アンビエントとラップの混合または00年代後半に勃興したクラウド・ラップに連なる。3曲目ではビートメイカー／DJのMASS-HOLEの和モノのセンスが光る。彼とWDサウンズのオーナー／ラッパーが組んだ本作は、〈マーダーライムまるでポール・オースター〉と〈コーナー〉の押韻に象徴される路上の詩情とメロウネスの奇妙な融合の世界。 7

◆BYORA『The Screw Tapes (Side B)』スクリュー・オブジェクト・ダート／5ウィンドウズ・フリーク　番号なし

東京・北千住から登場した20代前半の3MCは可能性に満ちている。グループ名はネジの鋲螺に由来。ヘッド・バンギングしたくなる3曲目、トリッキーなビートでMC達が跳ねる4曲目、大ネタの5曲目や6曲目のヴォーカル・ループ。このミックステープでは、彼らの音楽と志の芯が聴ける。 7

◆HAIIRO DE ROSSI『hallelujah』フォルテ　FRTCD26

〝ジャズとラップ〟を主題としてきたラッパーはPigeonsと制作した通算10作目で、音楽と人生には欲望より大事なものがあるのだと歌う。〝ジャズとラップの融合〟をスキルで見せつける「MMM」はケンドリック・ラマーの「フォー・フリー？」を彷彿させる。が、語るようにゆったりラップする曲は本人が取材で語るジェイ・Zの貫禄のフロウにも確かに通じる。 7

◆ANARCHY『My Mind』ランド・ミュージック　番号なし

地位に胡坐をかかず精力的に創作を続けるシーンの顔役が、現在の再評価以前からブーム・バップのスタイルを堅持してきたスタティック・セレクターと組んだ4曲。キャリアを振り返れば、本作はMUROとの共作『Digging Anarchy』に連なる作風と言える。40代に入っても息を巻くラップには同世代として滾るものがある。 7

Ⓟ◆OMSB『喜哀』サミット　番号なし

冒頭曲でシャウトするDJ TY-KOHはキッド・カプリだ。ウータン・クラン愛があり、MAAHIのビートはデフ・ジャックスの全盛期を想起させる。志人との共作やZoltNのビートの曲はタグ付けできない人生の尊い個別性への賛歌だ。ラストはOMSB流の山下達郎「蒼茫」か。説明不要のラッパー／ビートメイカーぶり。 7

仙人掌 & S-kaine『82_01』

SIRCORE『Journey』

ANARCHY『My Mind』

CamScannerでスキャン

R&B／ソウル／フルース
林剛

Ⓟブラック・ブーマズ『クロニクルズ・オブ・ア・ダイアモンド』 ATO／big AT0065420DJ

4年前のデビュー作などでグラミー賞にノミネートされた米オースティンのデュオが、エイドリアン・ケサダの初ソロ作を挟んで発表した2作目。フアンクやゴスペル、チカーノ・ソウル、ロックなどを呑み込んでサイケでアーシーな音像を描く基本線は不変だが、前作よりビートが太くエッジが効いている。雑にならない雑食性、レトロで終わらない芯のある表現力は見事。[8]

・カートゥーンズ『サタデイ・ナイト』 BSMF REDN0046

ベースを含めマルチに楽器を操るベン・カーによるプロジェクト。新作としては1年半ぶりだが、土曜の朝と題した20年作と対をなす作品だろう。ヒップホップ由来の洒脱なトラックに乗って、トパーズ・ジョーンズ、レイ・カリル、ジェイ・プリンスなど米英の気鋭シンガーやラッパーが各々の表現で楽曲に溶け込んでいく。ルーベン・ジェイムズらが歌うスウィート・ソウル風バラードの美しさにも心酔。[8]

maigoishi『HOUSE PARKING』

キン・レオン『ミラー・イン・ザ・グリーム』

インコグニート『イントゥ・ユー』

ラップ／ヒップホップ
海外 長谷川町蔵

Ⓟ Drake "For All The Dogs" OVO／Republic

実験的な前作よりもラップに注力した21サヴェージとのコラボ作がウケたことを踏まえて、本来の「真実の愛を探しもとめているのに失恋し続ける俺」路線に立ち返った第8作。トラックに新味はないものの、J・コールや元カノであるSZAとの共演曲、リアーナへの恨み節など、バズりそうな楽曲を随所に配して、シーンの王座に留まり続けようと試みる。そしてそれはまたしても成功に終わっている。[9]

Ⓟ Offset "Set It Off" Motown

ミーゴスの活動停止後の沈黙を破って発表した久々のソロ作。グループの暖簾を受け継いだ感じになっている元僚友のクエイヴォと比べて、軽いフットワークで旬のビートを集めることが出来たようで、それがアルバムの活力

Ⓟ Mndsgn "Snaxxx" Stones Throw

タイラー・ザ・クリエイターやダニー・ブラウンとの仕事で知られるプロデューサーによるビート集"Snax"シリーズ第3弾。自ら手がけるカラフルなアートワークに象徴されるように、DIY感覚に溢れながら、全体の印象は彼が拠点とするLAの太陽のように明るい。フュージョン的なハーモニー感覚（ちなみに坂本龍一の大ファンらしい）を含めて、いかにもストーンズ・スロウらしいアルバムといえる。ゲストはリヴやアンナ・ワイズら。[8]

Ⓟ Mike "Burning Desire" 10k

エクスペリメンタル・ヒップホップの雄による新作。ジャズやオールド・ソウルのひしゃげたサンプリングを中核とした独特のトラックメイキング術は健在で、思わずその世界に引き込まれる。本作にもリヴが客演しているのは偶然だけど、マイントナーサインの作品による工藤祐介の暮らし空ジンドなどの雰囲気ほかに盟友アール・スウェットシャーツやラリー・ジューンも参加。[8]

エレクトロニック・ミュージック
坂本哲哉

Ⓟクアンティック『ダンシング・ホワイル・フォーリング』 PIAS／big PIASR1435CDJ

クアンティック名義では4年ぶりの新作。これまでの作品に比べると、ストリングスやホーンなどの装飾的な要素は抑制気味だが、アフロ・カリビアンといったラテン音楽のリズムとディスコの快楽性を巧みに融合させ、前作以上にダンサブルな作品に仕上げている。彼の旧友のアンドレヤ・トリアナのソウルフルな歌声も本作に彩りを添えている。[8]

Ⓟ Salamanda『In Parallel』 ブランチャ／br ARTPL208

韓国ソウルを拠点とするアンビエント・デュオの新作。これまで通り、マレットの音色を生かしたスティーヴ・ライヒ的ミニマリズムが軸にはなっているが、イーヴン・キックの律動を巧妙に前景化し、静かにダンスフロアに接近しているのが印象的だ。ピッチ・

CamScannerでスキャン

シフトしたヴォーカルと管楽器の絡みが異様な雰囲気を漂わせる「Home, Sweet Home」があまりにもポップで心地よい。 9

◆フェイキア『タリスマン』ナウアディズ/d RTMCD1595
フランス北西部カーン出身の新鋭プロデューサーの新作。電子音と生楽器を自然に融合させる様はポノポを想起させるが、明確にダンスを意識させる楽曲が多いところが彼の強み。ヒンドゥスターニー音楽をアシッド・テクノで脱構築したような陶酔感がある「Nadishi」を筆頭に個性的なダンス・トラックが多いが、アルバムとしてはやや統一感に欠ける。 7

◆maigoishi『HOUSE PARKING』インテンス・ラボ/br ILCA1034
ジャズ/フュージョンとクラブ音楽のブレンドを特徴とする日本人プロデューサーの4作目。本作の軸になっているのはUKガラージやダブステップのビートで、いささかノスタルジーに浸っているようにも感じるが、その上を軽やかに横断する上モノの流動性は極めて現代的だと思う。 7

◆キン・レオン『ミラー・イン・ザ・グリーム』キッチン/lp AMIP0343
シンガポール出身のサウンド・アーティストの2作目。浮遊感のあるオーガニックなシンセ・ドローンに粒子のような電子音、繊細なピアノの余韻、流麗なビートを溶け込ませ、幻惑的なサウンドスケープを描いていく。その親密感のある音世界はきっとあなたの心を落ち着かせるだろう。 8

ポップ
久保太郎

Ⓟ**Bad Bunny "Nadie Sabe Lo Que Va A Pasar Mañana"** Rimas
2016年にデビューしたプエルトリコ出身のラテン・トラップのトップ・スターによる7作目のスタジオ・アルバム。ゲストを適度に入れながら、ラテン・トラップだけでなくハウスなどのリズムを導入して変化をつけていくが、基本それほど明るくないトラックにオートチューンのかかったラップがずっと続くので、さすがに22曲1時間20分は長かった。半分くらいに絞っても良かったのでは。 7

イリアーヌ・イリアス『クァイエトゥード』

ファデラ『マハラリ・ノウム』

サンギット『オーロー』

◆インコグニート『イントゥ・ユー』スペースシャワー PECF3282
英国アシッド・ジャズの老舗グループによる19枚目のアルバム。この間、リーダーのブルーイはジャイルズ・ピーターソンとのブリット・ファンク・リヴァイヴァル・ユニット=ストラータの作品で評価を高めたが、その分、本家はスムースなフュージョン・ポップに特化した感じで、心地よいけど役割としてはBGMか。 7

ブラジル
栗本斉

Ⓟ**アナ・フランゴ・エレトリコ『ミ・シャマ・ヂ・ガト・キ・エウ・ソウ・スア』**シンク!/dw THCD634
リオで最も先鋭的なアーティストといっていいシンガー・ソングライターの新作は、クィアの愛をテーマに往年のファンクやディスコのサウンドを前面に押し出したエモーショナルな作品。傑作だった前作のグルーヴを進化させ、少々箱庭感のあったインディーズ風情も取っ払ったことで、さらにワン・ランク上に進んだ。生楽器と打ち込みのバランスも絶妙で、結果的にしっかりと歌が耳に残るのが素晴らしい。 9

◆**イリアーヌ・イリアス『ミラー・ミラー』**BSMF BSMF5123

◆**同『クァイエトゥード』**同 BSMF5124
もはやブラジルというくくりで紹介するのも不思議な感じがするが、国際的に活躍するピアニスト兼シンガーによる対照的な2作品。前者はチック・コリア、チューチョ・バルデスというベテランとの共演を交互に並べた21年作。インプロヴィゼーションのスリリングな面白さもありつつ、ラテン音楽を知り尽くした面々ならではの情緒的なフレージングに心を掴まれる。グラミーとラテン・グラミーのダブル受賞作。
後者は打って変わってお得意のヴォーカルを聴かせる22年作。カルロス・リラやドリヴァル・カイミなどのスタンダードを中心に歌う安定の心地好さ。亡きオスカル・カストロ・ネヴィスやルーラ・ガルヴァオンも参加している。目新しさはないかもしれないが穏やかな空気感が詰め込まれ、あらためて彼女の声の魅力に気付く。 8 8

CamScannerでスキャン

ワールド・ミュージック
原田尊志

●古謝美佐子『平和星☆願い歌』ディスク・ミルク　DM012
デビューは9歳、それから60年目の15年ぶり新作。表題曲はじめ、坂本龍一追悼曲など、制作&作曲編曲の佐原一哉オリジナル曲から、ハワイのホレホレ節、アリラン、ガリシア民謡も並ぶ前半、そして「時代の流れ」や「PW無情」など、往年の沖縄島唄を歌い綴る後半という全15曲。坂田明やカルロス・ヌニェス、よなは徹ほか多彩なゲストを招き、多くはゆったりとした曲想と過不足ない伴奏において、島唄の内側で60年培った歌の魅力を、今に響かせる努力が実った作かと。9

●HARIKUYAMAKU『MYSTIC ISLANDS DUB』コロムビア　COCP42082
沖縄コザを拠点に活動するハリクヤマクが、65年発売16枚組LP『沖縄音楽総攬』の音源に、やはりコザのバンド、銀天団の演奏をダブ・ミックスした作。こちら作法は全く別だが、60年前の三線弾き語りを今に響かせる手際は鮮やか、と言わざるを得ない。8

●ネガリット・バンド『オリジンズ』ライス／OS　BDR33-1223
エチオピア最古、撥弦、製琴に全音3本を備す現地インスト・ユニット初作。演奏力もあり編成として魅力あり。ややドラムスやギター、ベース、鍵盤は、欧米ジャズ・マナーに染まっている風だが、曲により爆発力もあり。7

◆ファデラ『マハラリ・ノウム』同　EMR33012
アルジェリアのライ女声、シェブ・サハラウィと夫婦デュオとして欧州でも人気を得るが、90年代に離婚、本作は06年ソロ復帰作。当時として標準的な打ち込み系ライだが、一歩引いた、憂いのある歌声には魅力あり。8

◆サンギット『オーロー』同　WNR3121
イスラエルの打楽器奏者3作目。瓢箪(ひょうたん)カラバッシュはじめ、弦ンゴニ、木琴、ギター・バンド等を加えたバックにおいて、象牙海岸のドベ・ニャオレやマリのサディオ・シディベら8人の女声を招いた作。女声達の魅力に寄りかかる形だが、アフロ・ベースのバッキングはポップかつ幻を感じたもの。8

レンハルト・テープス『デンズ』

JEON SOMI『GAME PLAN』

ジョウエムバーバー『セント』

ヨーロッパ
松山晋也

◆レンハルト・テープス『デンズ』ライス／OS　INR3245
小型カセット・テレコ数台を駆使したサンプリング&ミクスチャーによってセルビアやスロヴァキアなどの伝統音楽に新たな血を注ぎこむベオグラードの（自称）「エスノ＝ノイズ」音楽家ウラジミール・レンハルトのソロ・プロジェクト、新作。音の感触やビートの組み立て方などは80年代ニュー・ウェイヴ、特にインダストリアル系と地続き。古臭いようで妙に新鮮だ。8

東アジア
関谷元子

●Balming Tiger "January Never Dies" Balming Tiger
軟膏タイガーバームから名前を取ったという音楽集団。あらゆる音が会のように押し寄せ、アジア風味もあり、見事な構成のメリハリ効いた演奏は全く飽きない。ラップも泥臭くてクスっとしちゃうし。BTSのRM参加曲になるとメジャー感が出てくるのも面白い。とにかくセンス最高。9

◆JEON SOMI『GAME PLAN』YGYP0330
カナダ生まれソウル育ち、1.0.1の元メンバー、チョン・ソミがYG傘下のTEDDYが設立したレーベルから出した5曲入りEP。彼女のキュートで甘いヴォーカルを以前よりスピードを上げたサウンドで歯切れよく、さすがの制作力。後半のデジタルでメロウな曲になるとグっとくるし、MVも圧倒的な美しさで見ていて飽きない。8

◆ジョウエムバーバー『セント』Pヴァイン　PCD94171
台湾で今最も才能ある自作自演のネオ・ソウル／ジャズ歌手。本作では最初と最後の自作曲以外、台湾と香港の有名アーティストが曲を書き彼女が歌うという趣向。雰囲気ある大人の味のアコースティック・ジャズから始まり、昔のアメリカ映画みたいなふくよかな音から、泥臭めの台湾語曲だったりと、個性がはっきり分かれる曲を彼女のヴォーカルでまとめあげる力。9

CamScannerでスキャン

VIDEO REVIEWS

ヴィデオ・レヴュー 大鷹俊一

イラストレイション＝norahi

以前にアップされていたのだが取り上げそこなっていたもの。今年3月にウッドストックのベアーズヴィル・シアターで約500人の観客を前にして行なった約1時間半のライヴをモノクロ画像処理。おっさん然としたマット・バーニンガー(vo)だけに絵面的に面白みはないのだが、それが逆にグイグイと熟くなっていくのをリアルに感じさせて見ものだし、アーロン、ブライスのデスナー兄弟のギターも多彩で変化に富み、ホーンも加わった編成でじつにハイ・クオリティなライヴとなっている。素晴らしい新作アルバムたちが出来上がったのも納得。 9

◆**Jacob Collier "Live In Lisbon 2022 [Full Show]"** YouTube

天才の名前をほしいままにしているジェイコブ・コリアーが、昨年の日本公演直前となる22年7月にリスボンで行なった約2時間のライヴ。キーボード、ギター、パーカッションなどのマルチ・プレイヤーでグラミー賞を幾つも獲得している才人ながら、とにかく音、楽器と遊ぶのが好きでたまらないという若者の素顔をここでも思う存分繰り広げる。オーディエンスを巻き込んで盛り上げていくものから、しっとりとした弾き語りなど、どれも見事に流れていき、優れたプロデューサー感覚も確認させてくれる。 8

◆**Nile Rodgers & Chic "Tiny Desk Concert"** YouTube

これまたびっくりの一本で、ナイル・ロジャース&シックがタイニー・デスクでノリノリのファンクを繰り広げてくれる。約30分、「おしゃれフリーク」に始まり、ダイアナ・ロスに提供した「アイム・カミング・アウト」からシスター・スレッジの「ウィ・アー・ファミリー」へとつなげ、ダフト・パンクの「ゲット・ラッキー」で喜ばせたかと思うとデヴィッド・ボウイの「レッツ・ダンス」で締めくくるという豪華版。相変わらずナイルの切れ味良いギター・カッティングには酔わされる。 9

◆**Sam Smith "Tiny Desk Concert"** YouTube

11人のコーラス隊とピアノ、ギターをバックにサム・スミスがおいしいレパートリーを聴かせるタイニー・デスク・ライヴ。美しい声で強烈な印象を残した「ステイ・ウィズ・ミー」をはじめ、デュエットで話題となった「レイ・ミー・ダウン」などを含む全4曲、20分ほどのパフォーマンスながら歌の巧さ、独特な表現力は見るものを釘付けにしてしまう。 8

◆**The Drums "Full Performance (Live On KEXP)"** YouTube

ジョニー・ピアースのソロ・プロジェクトであるザ・ドラムスがこの8月に新作"Jonny"のプロモーションでKEXPに出演。約20分にわたって同アルバムからのナンバーを聴かせるが、しっかりとしたバンドはタイトなサウンドで自己の内側に向かう曲をシャープに聴かせるのに貢献しているものの、同じトーンのナンバーが多い。 7

◆**"Pitchfork Music Festival 2023"** YouTube

ラップ、エレクトロニクス、インディ系のアーティストを主に扱っている米メディア＝ピッチフォークが今年7月21～23日シカゴのユニオン・パークで開催したフェスの模様がいろいろとアップされている。各日のトリがザ・スマイル、ビッグ・シーフ、ボン・イヴェールとなっており、まず注目はザ・スマイルだろうが、強力なベース・ラインで磁場を変えてしまう"The Smoke"や陶酔的なライティングで異空間を作り出す"We Don't Know What Tomorrow Brings"など素晴らしい。同じく高い完成度だったのがボン・イヴェールで、あの美しい音楽性とは違う強圧的な肉体だが、それがバンドの音とみごとに混ざり合い、世界を広げる。 8

◆**Smokey Robinson "Tiny Desk Concert"** YouTube

これは本当にびっくり。あの激狭なNPRのタイニー・デスクのオフィスにスモーキー・ロビンソンが来て歌っているのだ。新作"Gasms"のプロモーションということなのだろうが、5人編成のバンドにストリングス、ホーン、コーラスも加えての豪華セットで新曲はもちろんだが「涙のクラウン」なんてのまで披露してくれるのだから、この場にいたら昇天ものだろうし、少しもエラぶるところもない彼の姿勢も素晴らしい。 9

◆**The National "Live At Bearsville Theater (Woodstock, NY) - Full Concert"** YouTube

CamScannerでスキャン

萩原健太のコンパクトディスカヴァリー

再発シーン、目下最大の話題はやはりビートルズか。1973年に編まれた定番ベスト、〝赤盤〟こと『ザ・ビートルズ1962年〜1966年』の2023年版（ユニバーサルUICY16200〜1）、〝青盤〟こと『ザ・ビートルズ1967年〜1970年』の23年版（同 UICY16202〜3）が50年を経て新たに編み直された。〝赤盤〟に12曲、〝青盤〟に9曲、計21曲を追加した全75曲。どの曲も何らかの形でリミックスがほどこされた新ステレオ・ヴァージョンでの収録だ。15年の『1』、17年の『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』、18年の〝ホワイト・アルバム〟、19年の『アビー・ロード』、21年の『レット・イット・ビー』、22年の『リボルバー』などリミックス・プロジェクトで既出の音源はその際の新ミックスで、それ以外はすべて23年ステレオ・リミックスでの収録。なので既出ものが多く含まれる〝青盤〟のほうは「アイ・アム・ザ・ウォルラス」「フール・オン・ザ・ヒル」「マジカル・ミステリー・ツアー」「ヘイ・ブルドッグ」など、まだリミックスされていないアルバム関連曲、あるいは「レボリューション」「オールド・ブラウン・シュー」などシングルB面曲だけが23年リミックスなのだが。〝赤盤〟は23年ものだらけ。2CD版のCD2後半にだだーっと並ぶ『リボルバー』関連8曲以外、なんと30曲が23年新ステレオ・リミックスだ。初期ビートルズ特有の、楽器や声がずいぶんと乱暴に左右に泣き別れた妙な定位の曲に関しても、今回は去年の『リボルバー（スペシャル・エディション）』のとき同様、最新のデミックス技術を駆使して各音源を切り分けたうえでのリミックスになっている。これまでは左右どちらかに寄せられがちだったドラム、ベース、ヴォーカルなどの定位が基本的にセンターへ。オリジナル・ヴァージョンとはひと味違うグルーヴを届けてくれるようになった。「ヘルプ」とか「マジカル・ミステリー・ツアー」とか、今なおドラムが片側に寄った仕上がりのものもあり、さて、これが最善と判断されたものなのか、技術的な制限からくるものなのか、よくわからないのだが。そのあたりあれこれ思いをめぐらせつつ楽しむのも悪くない。ビートルズっていい演奏していたんだな、と改めて。〝赤盤〟〝青盤〟とも2CDエディションを基本に、それぞれの3LP版、両者を抱き合わせた4CDおよび6LP版など、いろいろあり。このまま初期アルバム群のリミックス・プロジェクトが順次始まっていくのかなぁ。我々の散財は続くのかなぁ…。

ビートルズに負けず話題なのがボブ・ディラン『コンプリート武道館』（ソニー SICP6540〜4）。こちらは天辰保文さんによる記事も別掲されているようだし、ぼくも『レコード・コレクターズ』誌で詳細に内容紹介させていただいたので、ぜひそれらをご参照ください。78年2月から3月にかけて行なわれたディラン初来日ツアーを記録した2枚組ライヴ『武道館』の素材として収録された2月28日と3月1日のライヴ音源すべてを盛り込んだ豪華箱だ。こちらも4CD版に加えて8LP版もあり。CD版を基本に話を進めると、CD1に2月28日の第1部、CD2に2部、CD3に3月1日の1部、CD4に2部、それぞれのセットを当夜の曲順通りにまるごと収録。なので、もちろん両日で曲のダブりはあるけれど、トラック数としては

CamScannerでスキャン

ザ・ビートルズ『ザ・ビートルズ 1962年～1966年』

ボブ・ディラン『コンプリート武道館』

プリンス『ダイアモンズ・アンド・パールズ：スーパー・デラックス・エディション』

プリンスの別名義の最高傑作『ダイアモンズ・アンド・パールズ：スーパー・デラックス・エディション』（ワーナー WPZR30982～9）もすごい。『ラヴセクシー』以降打ち出した〝ニュー・パワー・ジェネレーション〟というコンセプトをついにバンド名に冠してみせたあの傑作をめぐる様々な音源を詰め込んだ7CD＋1ブルーレイの豪華箱だ。CD1がオリジナル・アルバムの最新リマスター。CD2が別ミックスやシングル・エディット集。CD3～5が発掘未発表音源集。CD6と7が92年1月の未発表ライヴ。ブルーレイはライヴやヴィデオ・クリップを含む関連映像集だ。全75曲＋映像3時間のうち未発表音源47曲＋未発表映像2時間超。多彩な音楽の要素を貪欲に取り込み、アナーキーに攪拌した〝ポップな混沌〟がたまらない。

ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンス

ニー・ミッチェルのマルチ・レコーダー[illegible]ラックスおよびマクダウンがはじめられた。この[illegible]、ぼくもちろん大いに興奮しながら体験したわけだが、それまで聴きなれてきた『偉大なる復活』や『激しい雨』のようなライヴ盤が届けてくれたハード・エッジな音とはがらりと印象の違う、どこかアーバンでアダルトな味すら漂うラージ・アンサンブルには正直ちょっと面食らった。そのせいでぼくは78年版『武道館』に対しあまり素直に接してこれなかった。が、今回のリミックスや未発表音源群によってこのときのバック・バンドの充実ぶりや、何よりもディランの楽曲そのものが持つポップな魅力などを再確認できた。ありがたい。SNSなどなかった当時、本誌に掲載された小倉エージさんによる全公演レポートは何度も何度も読み返したものだ。

ジェレミー・スペンサー

（ビッグ・ピンク／ヴィヴィド VSCD6166）は21世紀に入ってから何度かCD化されているけれど、またまた改めて出ました。初期マック人脈がこぞってバックアップしていることも含め、ブルースの文脈で語られることも多い1枚だが、これ、音楽的には全然ブルースじゃなく、むしろオールディーズ。ジョニー・レスティヴォ、フェビアン、チャーリー・リッチらのカヴァーをはじめ、パディ・ホリーもの、ボ・ディドリーもの、エルヴィス・プレスリーの60年代もの、サーフィン／ホットロッドものなど、マニアックな持ち味を炸裂させている。マック時代のステージにエルヴィスの扮装で登場したこともあるというジェレミーの本性が露わになったごきげんな仕上がりです。

CamScannerでスキャン

輸入盤紹介

イラストレイション＝玉川裕

INDEX

A Afro Siam→214
B Barry Can't Swim→215
Birthh→207
Johnathan Blake→208
Blaque Dynamite→209
Blood Ceremony→206
C Collie Buddz→212
D Joy Denalane→210
F Flavia K→213
The Feelers→205
G Lee Gamble→215
I Iluha→208
J Jay Worthy, Kamaiyah And Harry Fraud→211
L Dylan LeBlanc→205
The Legendary Tigerman→207
M Ruth Mascelli→214
Meemaa→206
Buddy & Julie Miller→206
N Meribeli Neddermann→207
Jalen Ngonda→209
P Pangaea→215
Paul Wall & Termanology→211
R Red Hot Org→212
S Joseph Shabason→204
Naomi Sharon→210
T Azu Tiwaline→214
2Skint3all→211
V Vedo→210
Ray Vega & Thomas Marriott→209
Mali Velasquez→205
Y Yemen Blues→213
Yungwebster→212
Z John Zorn→206

various artists(v.a.)
"The Soul Of Congo - Treasures Of The Ngoma Label (1948-1963)"→213

Rock [Canada]

Joseph Shabason

トロント・インディの重要人物のスケートをテーマにした新作

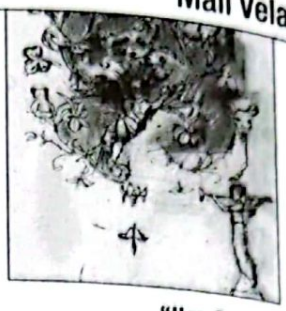
"Welcome To Hell"
Western Vinyl [US]

プログレッシヴなアンビエント・サウンドで注目を集めているトロントのサックス奏者、ジョセフ・シャバソン。近年はニコラス・ケルゴヴィッチやアンドレ・イーシアーといった同郷のシンガー・ソングライターとユニットを結成するなど、活発に活動しているトロントのインディー・シーンのキーパーソンだ。新作はスケートボードのドキュメタリー映画にインスパイアされたもの。ユニークなアプローチでアンビエントなサウンドを生み出すのがシャバソンの特徴で、本作では変拍子を取り入れたフュージョン的ナンバーもあれば、アフリカ音楽やヒップホップを取り入れたものもあり。そのミニマルなグルーヴが、スケートのスポーティーな動きやストリート性を表現。スケートのチルアウト的とも言えるマインドを、独自のアンビエント・サウンドで引き出している面白い。レコードのみのリリースだが、カセットで聴きたくなる範囲的スケート・ミュージック。村尾泰郎

CamScannerでスキャン

Mali Velasquez

自身のジレンマを表出する米インディー今年随一の逸材

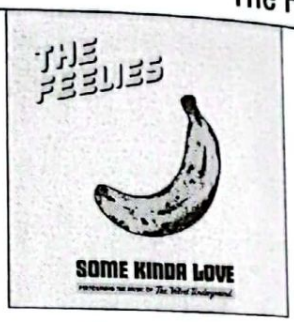


"I'm Green"
Acrophase [US]

これはポスト・ビッグ・シーフ大本命。というより、エイドリアン・レンカー超えを狙える逸材だ。米ナッシュヴィル拠点のシンガー・ソングライターのデビュー作。基本はフォーキーだが、内在する情熱をところ構わず吐き出していこうとする本能とのせめぎ合いが刺激的で、言ってみればインディー・フォークとオルタナティヴ・ロックとの境界をシームレスにしようと苦慮しているかのようだ。ただそれはサウンド面だけではなく自身と他者との関係を綴った歌詞にも置き換えられそうで、例えば7曲目の"Medicine"では相手の立場を考えずに自己主張することの罪悪感を歌っている。フォーク歌手であり激しいロッカーにもなりえる彼女自身のジレンマと自己破壊の表出……それをして"私はグリーン"と宣言するタイトルが清々し

The Feelies

ストレートなプレイを聴かせるヴェルヴェットのカヴァー集



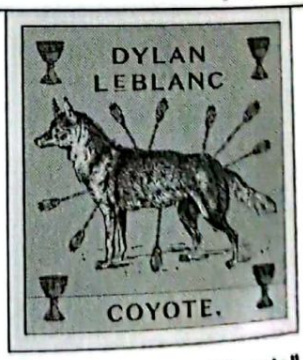
"Some Kinda Love: Performing The Music Of The Velvet Underground"
Bar/None [US]

ヴィム・ヴェンダース監督のみごとな新作映画『PERFECT DAYS』のせいでルー・リード・モードに入っていたところにずばりコレがはまった。80年の『クレイジー・リズム』でインディ系バンドたちに衝撃を与えたフィーリーズは90年代初頭に解散、08年に再結成してコンスタントに活動を続けているが、デビュー当時からヴェルヴェット・アンダーグラウンド、ルーの影響を広言していた彼らしいカヴァー集で、18年ニュージャージーで開催された展覧会「ザ・ヴェルヴェット・アンダーグラウンド・エクスペリエンス」でのライヴ音源。

全18曲、VUファンであれば誰もが知るナンバーが取り上げられているが、それだけに「ヘロイン」や「ペール・ブルー・アイズ」あたりが抜け

Dylan LeBlanc

コンセプトや歌唱の振れ幅に成長を感じる通算5作目



"Coyote"
ATO [US]

米ルイジアナ州シュリーヴポート出身、マッスル・ショールズのソングライター兼プレイヤーを父に持ち、アラバマ・シェイクスのメンバーらとも交流のあるルブランの通算5作目。

オルタナ・カントリー色濃いデビュー時から徐々に音楽性に幅を持たせ、前作ではかなりポップなアプローチを試みた。そして、そこにあった端正な演奏や音の洗練味、耳に馴染むメロディのポップネスは踏襲しつつ、過去の悲痛な経験を含む自伝的な要素と、〝コヨーテ〟を名乗る逃亡中の男の物語を融合したこのコンセプト作では、地に足をめり込ませ、自身の心と真っ向から対峙し、陰影に富んだ感情を探っては掴み、丁寧に描いている。ゆえに重苦しさを感じさせる時も

CamScannerでスキャン

Rock [US]

Buddy & Julie Miller

苦しみの渦中の痛みをアメリカーナ音楽へと昇華

"In The Throes"
New West [US]

バディ&ジュリー・ミラーの夫妻名義では
[illegible] 以来、4年ぶりの新作。痛々しいジャケットの絵画とタイトルは、いつもの病を併発して、長くて苦しみの渦中にあるジュリーの現況を意味しているはずだ。それでも全曲が彼女の作品。多くのリード・ヴォーカルをバディに譲っている一方、歌をふり絞るように歌うジュリーのヴォーカル・トラックは力強ではないものの、聴き手の胸にグサリと突き刺さるよう。しかし、その痛みを魅力的なアメリカーナ音楽に仕上げてしまうバディの手腕には敬服するしかない。夫妻ともにゴスペル・コミュニティ出身ゆえ、祈りにも似た重量級の魂の歌が並ぶが、その絶唱はさすがだ。バディの歌とギターは文句なし、エミルー・ハリスや、ラリー・キャンベルをテレサ・ウィリアムズ夫妻、スチュアート・ダンカンらが助演、やはりツアー開始は無理なろうなぁ。

宇田和弘

Rock [US]

Meernaa

緻密なアレンジが持ち味のLAの音楽家率いるプロジェクト

"So Far So Good"
Kooled Scales [US]

米ロサンゼルスのシンガー・ソングライター、カーリー・ボンドによるソロ・プロジェクトが、トウェイン、サン・ジューンを擁するテキサス州オースティンのブティック・レーベルからリリースした2nd アルバム。ラテン・ジャズのエッセンスを取り入れながら、チェンバー・ポップの香りに彩られた楽曲。コードの使い方によるところが大きい。日本で言うところのシティ・ポップ感をボサノヴァのリズムに乗せながら、トラッド・フォーキーに聴かせる楽曲。11曲をバックボーンに持ちながら、重厚的で緻密なアレンジで彩りを付ける彼女達の魅力は、その2曲に顕著に表れているが、作品全体の印象はメランコリックでダークというところにインディ・ロックならではのエッジを感じたりも。曲の前面で鳴るのは多彩なキーボード類の音色だが、セッション・プレイヤーとしても活躍しているボンドがその裏で奏でる控えめなギター・プレイも捨てがたい。

山口智男

Rock [Canada]

Blood Ceremony

フック十分で優雅さもあるカナダのドゥーム・ロック・バンド

"The Old Ways Remain"
Rise Above [UK]

フルートを吹く女性ヴォーカリストを擁するカナダの"サイケデリック・ドゥーム・ロック・バンド"が、約7年ぶりにリリースした3作目。カーヴド・エアーやルネッサンスあたりのプログレに通じる抒情性と変則的なリズムを含むとはいえ、曲をコンパクトにまとめ、5分を超える2曲も長さを感じさせないフック十分の作りが素晴らしい。ハード・ロックとも言えるクールなギター・リフで進めてベースの音もよく歌い、エレクトリック・ピアノやオルガン、モーグ・シンセサイザーも適度に使ったアレンジ・ワークが絶妙なのだ。簡潔なソロ演奏もいいアクセントで、曲によってサックスやフィドルを加えて聴かせどころを設けている。ドゥーミーな雰囲気であっても優雅なのはポップな感覚を内包した歌声によるところも大きい。クイートかつわらかい音の仕上がりも特筆すべきだろう。16ページのブックレット封入でスリップケース付の約41分10曲入り。

[illegible]

CamScannerでスキャン

Rock [Europe]

Birthh

声の良さに輝れるイタリア出身の宅録派シンガー

"Moonlanded"
Carosello [Italia]

バースは本名をアリス・ビシという伊トスカーナ出身のシンガー・ソングライター。16年、19歳で"Born In The Woods"というアルバムを発表し、注目を浴びた。曲は当初から英語。20年の米国旅行中にCOVID-19の影響で帰国できなくなり、そのまま米ブルックリンに滞在、これが渡米後、2作目のアルバムになる。

ともかく声が良くて、コリーヌ・ベイリー・レイやシャルロット・ドス・サントスのように僕の耳をくすぐる。ギターやピアノの弾き語りだけでも十分に魅力的に思えるが、彼女は根っからの宅録派で、曲中にいろいろ風変わりな音も仕込む。トラックは低音もかなりヘヴィーだ。

本作は米国で触れたヒップホップなどの影響も反映し、リズムやオーケストレーションも、よりこみいった実験性が高くなっている。ドリーミーかつストレンジな聴取体験。でも、一番痺れるのはシンプルな曲での声の良さかもしれない。

高橋健太郎

Rock [Europe]

Meritxell Neddermann

カタルーニャ出身の歌手による品を感じるポップ作品

"Suelta"
Halley [Spain]

スペイン・カタルーニャ出身のシンガー・ソングライター、メリチェイ・ネッデルマンは、昨年発表されたホルヘ・ドレクスレルの新作"Tinta Y Tiempo"および彼のツアーにキーボード奏者として参加した。このソロ2作目は、ドレクスレルの側近＝カルレス・カンピ・カンポンとの共同制作だ。バークリー音楽大学へ留学した経験を持つメリチェイは、妹のジュディットより英米のエレクトロニカ系ポップやインディ・ロック志向が強いが、表題曲はトム・ヨークに触発されたという。また、本作にはギタリスト、ベーシスト、ドラマーも参加しているが、プログラミングやオートチューンが使用された曲もあり、全体的にエレクトロニック色が濃い。ただし、今回英語曲は1曲のみだし、音楽的にもポップな方向に過剰に弾けているわけではなく、ある種の品が感じられる。本作は、キーボードの弾き語りを基調とした曲でしっとり幕を閉じる。こんな点も、彼女らしい。

渡辺亨

Rock [Europe]

The Legendary Tigerman

長いキャリアを持つポルトガルのブルースマン

"Zeitgeist"
Tigre Branco [Portugal]

ポルトガル出身のヨーロピアン・ブルースマン、パウロ・フルタードのソロ・プロジェクトの7作目。伊女優アーシア・アルジェント、サヴェージズのジェニー・ベス、メトロノミーのアンナ・プリオールなど、彼が長年交流してきた国内外からのゲスト陣が参加。伝説的パンク・バンド脱退後、02年のソロ・デビューから起算してもそのキャリアは20年以上になり、完全ワンマン・バンド・スタイルの初期、4名編成バンド期を経て、今作ではパンデミック期間に彼が没入したというシンセサイザーを多用。映画音楽やガス・ヴァン・サントのミュージカル作品の劇伴を手掛けた影響もあってか、暗く張り詰めた雰囲気が全面に漂う。ジャケット同様、彼の内面をさらけ出すかのような独白が耳に残り、疾走感あるガレージ・パンクだった前作とも異なる雰囲気だ。新たな挑戦を続けながらも、芯はロックンロールであることを貫き続ける彼の姿はひたすらに格好いい。

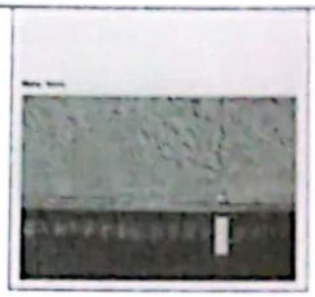
山口詩織

CamScannerでスキャン

Jazz

Illuha

タイムレスな魅力のある電子音楽家二人とドラマーの共演



"Tobira"
12k [US]

ブラジル生まれで医師でもある伊達伯欽と、アメリカ生まれ日本育ちのコリー・フラー。共に電子音楽家である二人のユニット、イルハに、ドラマーの山本達久が加わってリリースされたアルバム。ドラムのアプローチが素晴らしく、その有機的なサウンドにまず惹かれる。静かな質感を捉えるために、マイクに近づけて、とても軽いタッチでドラムを叩いているとインフォで解説されていたが、エレクトロニクスと同等の繊細な質感が表現されている。それに呼応するように、ローズやピアノ、あるいはベースがシンプルでミニマルなメロディラインを作るのも印象的だ。2回のセッションと数回のオーヴァー・ダブを経て作られていて、録音作品としての完成度も高い。オーレン・アンバーチの"Grapes From The Estate"を彷彿させるタイムレスな魅力を感じるアルバムだ。テイラー・デュプリーのマスタリングで、彼のレーベル=12kからのリリース。

原雅明

Jazz

John Zorn

3人の特徴的な演奏が光るジョン・ゾーン楽曲集

"Nothing Is As Real As Nothing"
Tzadik [US]

いま最も注目を集めるジャズ・ギタリスト、ジュリアン・ラージと、巨匠ビル・フリゼール、テリー・ライリーの息子でもあるギアン・ライリーという3人のギタリストによる、アコースティック・ギター・トリオの新作。17年にリリースされたジュリアンとギアンのデュオに端を発するこのトリオの作品も今作で6枚目となる。今作も演奏するのはジョン・ゾーンによる楽曲。文豪サミュエル・ベケットに捧げられたという楽曲は、美しくて柔らかく、ちょっと物悲しい響きが続く。指板を縦横無尽に行き来して伸びやかなフレージングをみせるジュリアン、ミニマルで美しいアルペジオを聴かせるギアン、ハーモニクスも駆使してアンサンブルにスパイスを加えるビルと、音色に大きな違いはないものの、3本のギターがそれぞれ誰かわかるほど、各人のプレイは特徴的だ。ツァディクの作品がサブスク解禁されたこのタイミングで、過去作もあわせてぜひチェックして欲しい。

花木洸

Jazz

Johnathan Blake

パワフルなプレイに圧倒されるドラマー／作曲家のリーダー作

"Passage"
Blue Note [US]

ケニー・バロン・トリオで来日したばかりのドラマー／作曲家のリーダー作。2021年の"Homeward Bound"同様、ブルーノートからのリリースだ。イマニュエル・ウィルキンス(as)、ジョエル・ロス(vib)、ダヴィ・ヴィレージェス(p)、デズロン・ダグラス(b)という豪華布陣で、かつての新主流派を今様にアップデートしたような演奏を聴かせる。なお、ジョナサンがジャズ・ヴァイオリニストであった父との思い出を振り返った作品とのこと。やや陰りを帯びた曲があるのはそのせいか。曲は半分がジョナサンのオリジナル。ドラムの師匠でもあるラルフ・ピーターソンJr.の作品も収録されている。それにしても、背後から煽るように叩くジョナサンのプレイには圧倒される。既に自分のスタイルが確立している印象ではあるが、あえて引きあいに出すなら、アントニオ・サンチェスやエリック・ハーランドばりのパワフルなドラムだ。

土佐有明

CamScannerでスキャン

Ray Vega & Thomas Marriott

NYラテンをバックボーンに持つ二人による正統派ジャズ作品

"East West Trumpet Summit: Coast To Coast"
Origin [US]

Jazz

オールドスクールなファンキー～ハード・バップである。このセッションで50～60年代のジャズから何が進化しているのか?と問われれば、特にないと思う。でも、テーマがあって、各々アドリブがあるという明快な構成、柔らかなトランペットのトーン、小粋なフレイジング。エヴァーグリーンという手垢のついた形容でしか、このジャズを語れないジレンマがある。

編成は2トランペット+ピアノ・トリオ。レイ・ベガはニューヨリカンで、キャリア初期はモンゴ・サンタマリーアのバンドに参加し、ザ・ブロンクス・ホーンズの一角をなした。トーマス・マリオットはシアトル出身、コンペ優勝を機にニューヨークに進出、ティト・プエンテらのNYラテン・オーケストラにも参加するなどして04年にシアトルに戻り、第一線で活躍中だ。そんな二人のコラボの第3弾が本作。ラテンはなく、自作とチャールズ・ミンガス作 "Goodbye Pork Pie Hat" などキャッチーに構成。 **山本幸洋**

Blaque Dynamite

アクの強い演奏とポップさが両立するドラマーのソロ作

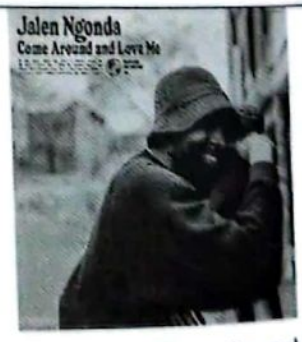
"Stop Calling Me"
Dolfin [US]

Jazz

グレッグ・スピーロ率いるジャズ・グループのスピリット・フィンガーズや〝メタル・ジャズ〟のキャメロン・グレイヴス、そして大御所ではスタンリー・クラークと各所で活躍するドラマー、マイク・ミッシェルのソロ・プロジェクトの3作目。圧倒的な手数が特徴のドラミング、というと人力ドラムンベースやゴスペル、最近ではJDベックを中心とする弱音を絡めたアプローチが思い浮かぶかもしれないが、どれとも異なる独自の演奏感が魅力。リスナーを振り落とすかのような高速かつカオティックなリズムは、まるでバグや音飛びのようで、エクスペリメンタルやフリー・ジャズやノイズ、あるいはハイパーポップの圧縮感に近いかもしれない。そのアクの強い演奏の上で今作は作曲/アレンジやミックスが素晴らしく、本人のポップな歌唱を中心にし、演奏の過剰な激しさをローファイ的文脈と結びつけることで、意外なほど人懐っこい作品にまとまっている。 **高橋アフィ**

Jalen Ngonda

モータウンの音楽を現代に瑞々しく蘇らせるシンガー



"Come Around And Love Me"
Daptone [US]

R&B/Soul [US]

米ワシントンDCで生まれ育ち、現在はUK在住のシンガーによるデビュー・アルバム。リリース元のダップトーンといえば、シャロン・ジョーンズやチャールズ・ブラッドリーといったシンガーを輩出し、長きにわたってインディのソウル/ファンク・シーンを支えてきたレーベルだ。ここ数年は、傘下のペンローズを中心に、ジ・セイクリッド・ソウルズなどの作品を世に放ち、ゆったりとしたスウィート・ソウルを特に盛り上げている印象が強かった。しかし、本作は、そうした近年の流れとも一線を画す内容になっている。パーカッションと煌びやかなストリングスにハイトーンな歌声が乗ったミッド・テンポの冒頭曲や2曲目は、マーヴィン・ゲイの70年代前半作を思い起こさせる。他にも、スモーキー・ロビンソン的な7曲目など、アルバム全体にわたってモータウンのソウル・ミュージックを感じさせながら、それらを瑞々しく現代に蘇らせているのが素晴らしい。 **島晃一**

CamScannerでスキャン

R&B/Soul

Joy Denalane

ヒップホップ以後の感覚で70年代ソウルのムードを表現

"Willpower"
Lesedi [US]

ドイツ語と英語それぞれの言語で歌ってきた独ベルリン出身のソングストレスが3年前のモータウン盤に続いて出す英語詞の新作。メインの制作は、続投のロベルト・ディ・ジョイアと、一度離婚して復縁したマックス・ヘーレだ。メアリー・J・ブライジに憧れる彼女は、ヒップホップのフィルターを通して70年代ソウルのグルーヴやムードを楽曲に持ち込んでいるのだが、メロウな"Hideaway"を含め今作はその傾向が一層強まった。なにしろ"Can't We Smile"はジョニー・ハモンドがマイゼル・ブラザーズと組んだ75年の同名曲にオリジナルの歌詞を付けたリメイク。その解釈は90年代的でもある。06年作ではレイクウォンを招いていたが、ゴスペル的な厳かさもある"Happy"では同じウータン・クランのゴーストフェイス・キラーを招聘。父の故郷である南アフリカのソウェトに関する曲の収録も初期作を思わせ、自身の肌にそのルーツが刻まれていることを謳う。

林剛

R&B/Soul

Naomi Sharon

シャーデーを想起させる歌声を持つ新人シンガー

"Obsidian"
OVO [Canada]

ドレイクのOVOサウンド発、カリブ系オランダ人シンガーのデビュー作。ドレイクからはインスタグラムのDMを通して契約のオファーがあったそうだが（最初彼女は嘘だと思ったらしい。そりゃそうだ）、彼を魅了したのも納得の、神秘的で深みのある歌声の持ち主である。

1曲目の第一声を聴いただけで、誰しもがシャーデーを思い浮かべることだろう。浮遊感溢れるサウンドの上を揺蕩う歌声がとにかく気持ち良いが、そのサウンドもカリブ風なものから、ジャージー・クラブ風ビート、アマピアノ、四つ打ちなど、今のシーンをしっかりと見据えた作り。しかしどのサウンドもひたすら上品で控えめ。エッジが効いているけれど、しかし派手な主張はせずに、主役である彼女の歌声をしっかりと支えているといった趣だ。そんなサウンドに包まれて歌う彼女の歌声の尊さと言ったら！　まさに「黒曜石」を意味するタイトルの如き漆黒の輝きを放っている。

川口真紀

R&B/Soul

Vedo

意欲的な活動が続くシンガーの今年2作目となるアルバム

"7"
New Wav / Empire [US]

生まれは米ミシガン州、現在の拠点はアトランタの新進気鋭のシンガー／ソングライターによる、今年2作目の通算7作目。インディーながら、前作"Mood Swings"ではゲストにクリス・ブラウンやティンクを迎え、22年にはプロデューサーのOG・パーカーとのコラボEPを出すなど意欲的で、モチベーションも高まっていると見え、前作のツアーが始まるより先に本作の発表となった。ざっくり言うと本作は愛の讃歌集だそうで、実際に耳にも心にも優しいゆったりした曲が満載。決定的なフックとなるような派手な起伏はないが、静かで感じのいいメロディーを柔らかな美声で丁寧に歌い紡ぐので、気持ちよく聴いていられる。引っ掛かりがあるとすれば、折に触れて多重コーラスを含めた歌のうまさに「おー」となることくらいだ。そんな中で控えめながら異彩を放つのが"Good Woman"で、本人いわくディアンジェロを意識したとのこと。確かに。

河地依子

CamScannerでスキャン

Jay Worthy, Kamaiyah And Harry Fraud

3人が見事に調和した良質なコラボレーション作品

"The Am3rican Dream"
GDF / Keep It Lit / SRFSCHL [US]

Rap/Hip Hop

ジェイ・ワーシー、カマイヤー、ハリー・フロードの3人がコラボレーション・アルバムを発表した。DRAM、バディ、グワップダッド・4000等がゲスト参加。ピンプ兼作家のアイスバーグ・スリムが描かれたアルバム・カヴァーが象徴するように、ピンプやハスラーをテーマにストリートの物語を綴った内容だ。長年に亘って共演しているジェイ・ワーシーとハリー・フロードの二人に、カマイヤーが加わるという意外なコラボだが、ジャズやソウルのサンプリングを基調としたレイドバックしたサウンドに、ジェイ・ワーシーの威勢のいいラップとカマイヤーのメロディアスなラップや歌が見事に調和している。マックス・Bを迎えた'Good Shit'、タイ・ダラー・サインが参加した'Pull Up'、カマイヤーがソロで挑んだ'Entrepreneur'など、まるで現代版にリメイクした70年代のブラックスプロイテーション映画を観ているような気分にさせる良質作品！

上神彰子

Paul Wall & Termanology

活発にリリースを続けるテキサスのベテラン・ラッパー

"Start, Finish, Repeat"
Perfect Time [US]

Rap/Hip Hop

メーガン・ザ・スタリオンが大成功しながら、復興までには至っていないのが少々残念な米テキサスのラップ・シーン。ただしゼロ年代の黄金時代を支えたベテランたちはそれぞれ自然体で活動を続けているようだ。特に活発なのはポール・ウォールで、20年代に入ってからコラボ作を含めて7枚ものアルバムを発表している。

本作は、ボストンを拠点とするネオ・ブーン・バップ系MC、ターマノロジーとの共演第2弾。トラックメイカーはスタティック・セレクタ、ラージ・プロフェッサー、ダイアモンド・Dという渋いメンツで、これにCLスムーズ、AZ、シーク・ローチ、バンB、ビッグKRIT、といったつわものたちがゲストとして花を添えるのだから、出来が悪いわけがない。今年が何年なのか分からなくなるのが難だけど。ラッパーとしてのポール・ウォールとブーン・バップ・ビートの意外なまでの相性の良さも相まって、一気に聴き通せる楽しい作品だ。

長谷川町蔵

2Sdxrt3all

不穏さが様々にクセになるインパクト大の新人

"Fuck School"
2solid [US]

Rap/Hip Hop

一見、まずもって名前が意味不明である。トゥー・ソリッド（Too Solid）ということで、トゥー・S・ダートボールと読むのが正しいっぽいです。米アトランタ出身の17歳。今年、この'Fuck School'を含めて4枚のミックステープをリリースし、話題を集めている。

一聴して耳につくのは情緒不安定にも聞こえる彼のアドリブ（合いの手）である。先行するラインを怒鳴るような、なげやりにも聞こえる声で反復するのだが、その荒唐無稽さ、翻って不条理さが彼の精神世界の表れだとすると、なんだか切実なものを感じざるを得ない。そしてなにより、聞いているうちに中毒性を増す。

全編ワイセグ（WhyCeg）というプロデューサーによるビートだが、浮遊感とアンビエンスに満ちた不穏なトラップ〜ブラグ（Phonk）サウンドで主役のラップを引き立てる。今年随一のインパクトを持った怪作。

伊賀大晃

CamScannerでスキャン

Electronic Music

Yungwebster

DJスクリューにも通じるアンビエントなラップ作品

"Yungwebster"
Sferic [UK]

ここまでやれば爽快。アンビエントなサウンドに確かにシンクロしているラップ作品。米ニューヨークを拠点とする人のデビュー作。過去2年ほどに制作した8曲を収録。DJスクリューへのリスペクトを表明する。曲によっては同じ曲の再生速度を落としたトラックも続けて収録している。どんよりとした低音重視のリズムは全編ほぼ同じように遅く、電子変容した声が、ささやいたりつぶやいたり重なり合ったりしていく。トラヴィス・スコット、フューチャー、ヤング・サグなどから影響を受けたという。背景でシンセサイザーがたなびくカーテンのように鳴り続ける。電子音楽の現在形の一つ。実験的に聞こえるのは耳が古い証拠というものだろう。ポエトリー・リーディングに感じられないのは、スローなビートのことごとくから決して逸脱しないから。曲によっては歌ってもいる。夢の中で時間感覚が混乱している場面を思い出させる。色彩はモノクローム。

湯浅学

Reggae

Collie Buddz

真のポジティヴさと含蓄のある人生賛歌を歌うシンガジェイ

"Take It Easy"
Harper Digital [UK]

バミューダ系米人シンガジェイ。〝大麻の花芽〟4枚目のフル・サイズ作。盟友ジェイスン〝J〟ヴァイブ〟ファーマーと組んだセルフ・プロデュース曲が大半を占めるが、レゲエのディープさと、ダンスホールやレゲエ〜ヒップホップ・フュージョンのストリート臭を活かしながらメインストリーム感を演出する作風に他の類似品はない。その上でエモい歌メロとスムースな節回しが利いた、より一層こなれたストーリーテリングが生き生きと展開される。社会の邪悪な力と仕組まれた罠、挫折。カリー・バッズはそうした憂悶の人生をポジティヴに歩むコツを随所にちりばめている。軽量級がんばろうソングとは一線を画す、真正のポジティヴ・ヴァイブスと含蓄のある人生讃歌。ある種、衝撃的なお気楽表題とジャケットは、そうして灰色の世界に極彩色の風景を現出させた図だ。サイプレス・ヒルのBリアルやバウンティ・キラーのいかつい客演も絶妙に座りがよい。

鈴木孝弥

Brazil

Red Hot Org

ブラジルらしい音からサン・ラが浮き立つトリビュート作

"Red Hot & Ra : Solar - Sun Ra In Brasil"
Red Hot Org [US]

90年代から数多くの名企画盤を制作し続けるレッド・ホットは今年に入ってサン・ラを題材とした作品に取り組んできたが、本作はそのブラジル編。サン・ラ自身の音声を随所に引用しながら、リニケルらのバックも務める大所帯楽団のオルケストラ・アフロシンフォニカ、尖った音楽性でサンパウロの現行シーンの顔役となってきたメタ・メタ、未来派ネオ・ソウルを極めた新作も素晴らしかったシェニア・フランサといった地元勢に、ジャズメイア・ホーン、ミシェル・ンデゲオチェロらの米国組も加わり、このシリーズらしい多角的なノリのトリビュート作に仕上がっている。全体を統括しているのは、ブラジルの数多くのTV番組や映画の音楽も手がけるシューシャ・レヴィ。やや意外な人選といえるバンドリン奏者のハミルトン・ジ・オランダが弾きまくる楽曲あたりも良く、最近のブラジルらしい音の中からサン・ラ特有の旋律がしっかりと浮き立ってくる。

吉本秀純

CamScannerでスキャン

Flavia K

“ポジティヴ・ソウル”シンガーによる1作目を超える新作

“Universo Suspenso”
Flavia K [Brazil]

Brazil

19年にリリースした前作が国内盤も発売されたブラジルのネオ・ソウル系シンガー・ソングライターの、フル・アルバムとしては2枚目の作品。“中断された世界”と題されたタイトルが示すように、コロナ禍の陰鬱とした空気を打破するため、前向きなメッセージを歌で発信しようと考えたことが作品制作の契機になったそうだ。彼女自身“ポジティヴ・ソウル”なる姿勢を標榜している。R&B～ネオ・ソウル・マナーなアレンジと音作りは前作同様だが、一方でメロディとハーモニーにおいてはブラジル音楽からの影響がより色濃く出た作品に。またブレインフィーダー的なテクニカルかつフューチャリスティックなトレンドもしっかりと取り入れており、前作からのアップデートも忘れない。ラッパーのハシッヂ、優れたハーモニー感覚でブラジルの中でも独特な存在感を発揮するフィロー・マシャードなどゲストもハマっており、間違いなく前作を超える傑作だ。　江利川侑介

Yemen Blues

平和と共存の時代の古詩を歌うイエメン系ユダヤ人歌手

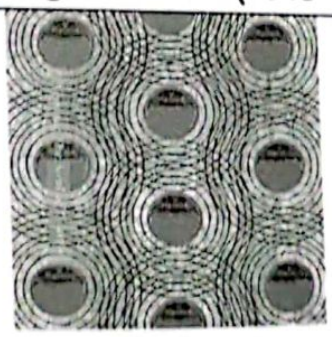
“Shabazi
- A Tribute To The Poet”
Yemen Blues [France]

World Music [Middle East]

世界に約20万人というイエメン系ユダヤ人として（現在、イエメンに残るユダヤ人は約20人）、イスラエルに育った歌い手、ラヴィッド・カハラーニーをリーダーとするユニット、イエメン・ブルースの3作目（17年には来日もあった）。金管コルネットのイタマール・ボロホフと、ベース（ウード兼任）のシャニール・エズラ・ブルメンクランツを軸に、トランペット、トロンボーン、打楽器&ドラムス、女性コーラスも加えた総勢9人の演奏。前作までは、カハラーニーのゲンブリ（モロッコの弦楽器）弾き語りが看板だったが、今作でのカハラーニーは歌に専念、ここでは、ムスリムもユダヤ人もキリスト教徒も永らく平和に共存していた時代の、イエメンにおける古いユダヤ詩人の作品を歌っているそう。そんな古い詩を歌うにふさわしいカハラーニーの独特の歌い口が、ジャジーかつアラビック、タイトかつグルーヴィーなファンク・サウンドに映える作。　原田尊志

v.a. “The Soul Of Congo - Treasures Of The Ngoma Label (1948-1963)”

ルーツ的アンサンブルも聞けるコンゴ音楽編集盤



by G. Edouard Na M. Oliveira Na Baninga Na Bango, Adou Elenga and others
Planet Ilunga [Belgium]
＊3CD、3LP

World Music [Africa]

コンゴ音楽の最大にして重要レーベル、ンゴマ録音の編集盤。48年から63年まで3枚組CDに全69曲、同時発売3枚組LPにはCDと重ならない16曲がボーナス収録されている。

52年オピカ・レーベルでアフリカン・ジャズにより「真のルンバ」は確立されたが、それ以前のパームワイン音楽に影響を受けたマニュエル・ドリヴェイラ、レオン・ブカサ、アドゥ・エレンガなどのルーツ的アンサンブルが聞けるのもンゴマ特徴のひとつ。もちろん52年以降の「真のルンバ期」での様々なラテン音楽の要素を取り入れた多彩な音源もたっぷり含まれ、50年代後半のティノ・パローザ（アフリカン・ジャズ）、ロワトレ（OKジャズ）、若きパパ・ノエル参加曲や新世代バンド達の録音も聞き逃せない。さらにピグミーと共通する民族的音楽、各地域のフォルクロールを生かした面白いナンバーと、豊かで幅広い内容は老舗ンゴマならでは。各曲目のアヴェレージも高い。　深沢美樹

CamScannerでスキャン

Azu Tiwaline

チュニジアのプロデューサーがルーツと向き合った1枚

"The Fifth Dream"
I.O.T. [France]

ヘッドフォンで聴いてみたら、あまりにも深いベース音に思わずたじろいた。サブスクで聴いても耳の奥を揺さぶられるかのような低音である。前作 "Draw Me A Silence" が素晴らしかったチュニジアのプロデューサー、アズ・ティワリンの新作。Bandcampに記された解説文によると「彼女のルーツを具体化し、彼女の多面的なアイデンティティーを表現した作品」とのこと。サハラ砂漠北部最大の塩湖であるジェリド湖周辺で録音したフィールド・レコーディング音源がちりばめられている点にそうしたテーマが表現されているのだろう。フランス系イラン人のパーカッショニスト、シナ・ペイガミーが全面参加しており、イランの伝統打楽器、トンバクが控えめに鳴り響いている。ダークな上物が揺らめくなか、BPM140前後のヘヴィーなビートがのたうち回る音世界には催眠的な力も。抽象的かつ得体の知れないところがあって、なんとも惹かれる作品である。 **大石始**

Ruth Mascelli

エロティックな空間の陶酔感を描く鍵盤奏者のソロ作品

"Non-Stop Healing Frequency"
Disciples [UK]

米ニューオーリンズのクィア・パンク・バンド、スペシャル・インタレストのキーボード奏者ルース・マセッリのソロ2作目。21年のソロ初作 "A Night At The Baths" は、ソロ・プロジェクト＝サイキック・ホットラインのサウンドに近い、サイケ&インダストリアル色濃厚なインスト作品だったが、今作では全11曲中4曲で本人のヴォーカル（1曲だけは語り）が入っており、何よりもサウンド全体のスタイルも感触もかなり変化している。アッパーなビートは一切なく、スロウ〜ミドル・テンポのチープな打ち込みリズムとシンセによる蒸気のようなレイヤーがぬめぬめとしたエロティックな空間を描いてゆく。作品全体を覆うゲイ・サウナでの陶酔感（多分）はカナダのルイス（Lewis）の奇盤 "L'Amour" を思い出させる。ピアノ弾き語りによるジュディ・シルのカヴァも秀逸だし、クィア・ヴィジュアリストのエリック・ロッツァーが手掛けたジャケットも強烈だ。 **松山晋也**

Aho Ssan

異質な秩序の中を流動的に横断する仏プロデューサー

"Rhizomes"
Other People [US]

先鋭的電子音楽レーベルのサブテキストからデビューしたフランス人プロデューサーのアホ・サンことニアムケ・デジレが、ニコラス・ジャー主宰のアザー・ピープルから新作を発表。ジャーに加え、ブラックヘイン、ムーア・マザー、エンジェル・バット・ダヴィド、ニョカビ・カリウキといったゲスト陣にも驚かされるが、そんな異文化コラボによって生成される音像が何よりも鮮烈だ。アンビエント、ラップ、ドリル、ポスト・インダストリアル、グリッチ、ドローン、フリー・ジャズ——サンはそんな異質な秩序がひしめく音楽群の中を流動的に横断しながら、撹乱的な音響スペクタクルを生み出す。一つの連続体のようなそのダイナミックなサウンドを聴けば、彼がタイトルに「リゾーム（哲学者ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが提示した概念）」という言葉を用いた理由がわかるはずだ。我々の心をざわつかせ、耳を拡張してくれる音楽がここにある。 **坂本哲哉**

CamScannerでスキャン

Lee Gamble

幻想的な映像力を感じさせる
ロンドンの実験電子音楽家

"Models"
Hyperdub [UK]

Barry Can't Swim

フロアでも家でも通用する
気持ちのいいダンス音楽

"When Will We Land?"
Ninja Tune [UK]

Pangaea

ヴォイス・サンプルが冴える
軽快でファニーな作品

"Changing Channels"
Hessle Audio [UK]